

17 世紀前半における明と朝鮮との文学
交流及び朝鮮漢詩の再発見

2009 年

盧 京 姫

論文目録

主論文

1. 題目 17世紀前半における明と朝鮮との文学交流及び朝鮮漢詩の再発見

2. 公表の方法・時期

・序論

・第一部：明と朝鮮の文人交遊及び文学交流の具体的様相

第一章 「文官出身明使接伴と文学交流活動」(17世紀初 文官出身 明使接伴과 韓中文学交流[17世紀初文官出身明使接伴と韓中文学交流])

2008年12月発行

『韓国漢文学研究(韓国漢文学会)』第42輯 223～254頁掲載

第二章 「朝鮮文人の明使行と文学交流活動」

・第二部：朝鮮文壇における明文学受容の様相

第一章 「明代詩論の批判的受容—許筠の漢詩批評作業を中心に」(「許筠의 中国文壇과의 接触과 詩選集編纂研究[許筠の中国文壇との接触と詩選集編纂研究]」の一部)

2006年10月発行

『韓国漢詩研究(韓国漢詩学会)』第14輯 267～302頁掲載

第二章 「明代唐詩選集の批判的受容—唐詩選集編纂方式を中心に」

・第三部：朝鮮漢詩の明伝播及び漢詩史的位相の再発見

第一章 「朝鮮漢詩の中国伝播と朝鮮文壇の態度」(「17世紀初 朝鮮詩의 中国 伝播에 대한 朝鮮文壇의 二重的 態度[17世紀初の朝鮮詩の中国伝播における朝鮮文壇の二重的態度]」の一部)

2008年6月発行

『震檀学報(震檀学会)』第105輯 207～230頁掲載

第二章 「朝鮮漢詩選集編纂と朝鮮漢詩の再発見」

* 他の部分の公表の方法・時期は未定

参考論文

なし

目 次

* 始めに	1
1. 研究史検討と問題提起	1
2. 研究範囲と敘述の展開	7
第一部. 明と朝鮮の文人交遊及び文学交流の具体的様相	12
第一章. 文官出身明使接待と文学交流活動	12
1. 接待を通じた文学交流の背景	14
2. 文官使臣接待と文学交流活動	18
1) 1602 年顧天峻・崔廷健接待	19
2) 1606 年朱之蕃・梁有年接待	25
3) 1609 年劉用・熊化接待	32
第二章. 朝鮮文人の明使行と文学交流活動	38
1. 明使行を通じた文学交流の背景	39
2. 文学交流の具体的様相	44
1) 16 世紀末—17 世前半における李廷龜の使行	44
2) 1614・1615 年における許筠の使行	51
第二部. 朝鮮文壇における明文学受容の様相	64
第一章. 明代詩論の批判的受容—許筠の漢詩批評作業を中心に . 64	
1. 中国書籍の熟読と詩文選集の再編纂	65
2. 詩文評価における独自基準の強調	69
3. 前後七子詩論の受容と変容	74
1) 復古的詩論と盛唐詩重視	74
2) 宋詩の価値認定	80

第二章. 明代唐詩選集の批判的受容—唐詩選集編纂方式を中心に	88
1. 16世紀明文壇：復古派詩論と盛唐詩中心の唐詩選集編纂	89
2. 17世紀前半期朝鮮文壇：批評の対象として認識、朝鮮式唐詩選集編纂	96
1) 李晬光の『唐詩彙選』編纂	97
2) 許筠の『唐詩選』編纂	102
3. 18世紀江戸文壇：学習の対象として認識、教科書用唐詩選集出版	108

第三部. 朝鮮漢詩の明伝播及び漢詩史的位相の再発見・・・118

第一章. 朝鮮漢詩の中国伝播と朝鮮文壇の態度	118
1. 明将・明使による朝鮮漢詩選集の編纂と伝承	119
2. 朝鮮漢詩伝播における朝鮮文壇の二重的態度	130
1) 許筠の朝鮮詩文紹介活動	130
2) 李廷龜の『朝天録』中国出版をめぐる軋轢	136

第二章. 朝鮮漢詩選集編纂と朝鮮漢詩の再発見	145
1. 政府の『海東詩賦選』編纂：東詩への自覚	145
2. 許筠の詩選集と詩話書編纂	153
1) 朝鮮漢詩の価値認識	153
2) 『国朝詩刪』と『惺叟詩話』編纂の意味	159

* 結論	170
------	-----

「引用文献目録」

「韓国文要約」

* 始めに

1. 研究史検討と問題提起

本論文は、17世紀前半における明と朝鮮の文学交流及び朝鮮文壇における明文学受容の方式、またそれによって行われた朝鮮漢詩への認識の変化について考察することを目的としている。特に本論文では、この三つが相互に連繫していることに注目し、その関係を明らかにすることに主眼をおく。そして、この時期の明と朝鮮との文学交流が一方的な文化の伝播と受容ではなく、互いの文学に対する関心に基づいて進行した「双方向的」交流であったことを確認する。また朝鮮文壇の明文学受容も無条件的な受容ではなく、既存の朝鮮文壇の伝統に合わせて批判的かつ独自の方式で行われたものであることを明らかにすることを目指している。

最終的には、以上の交流と受容によって朝鮮文人が朝鮮の漢詩を振り返り、その価値を改めて認識するようになったことを論じる。その具体的方法として、まず両国間の文学交流に関わった文人たちの交遊、交流の経路など、文学周辺部のことに注目し、当時の文化交流の具体的な様相を把握する。また明文学の受容に関連して、書籍の輸入と再編纂の過程を追跡し、朝鮮文壇が明文学を受容するにあたって、批判的観点に基づき、取捨選択しつつ取り入れていった様子を考察する。

本論文は壬辰倭乱(文禄・慶長の役)が勃発した1592年から光海君時代(1608-1623)に至る時期を主な検討の対象にしている。本論文でこの時期に注目した理由は、当時、明・朝鮮間の外交問題が大きく浮上し、それに伴って両国文人の接触機会の拡大、さらには文学方面の交流の活発化が生じていたからである。

「交流機会の拡大」に関わる歴史的事実として、まずこの時期に「明使行」が年例行事ではなく、政治的問題を解決するための特別使節としての役割を多く担うようになったことが挙げられる。1592年の壬辰倭乱勃発以降、明への軍事支援要請、光海君の王世子冊封、また日本・後金との関係について生じた誤解を弁明することなど、国内外の政治状況に関するさま

さまざまな問題を解決するために、明朝廷への特別使節団の派遣回数が増加した。こうした重要な問題で使節団を派遣する以上、朝鮮朝廷は使節団の選抜に慎重を期し、その結果当代最高の文人たちが使臣に選ばれるようになった。このように朝鮮の優れた文人たちが使臣として中国に派遣されたため、彼らは外交活動以外にも幅広く文化活動を行い、よってこの時期、明文壇と朝鮮文壇との文学交流が盛んになったのである。

次に、朝鮮を訪問した明文人に対する接伴活動を通じて交流機会が広がったことがある。「接伴」は朝鮮で中国文人らを接待することであり、使行と比べるとより自由な雰囲気での両国文人たちの交流が行われた。そのため、「文人交遊」の側面では使行よりもさらに大きな役割を果たしたのである。¹特にこの時期には、翰林院出身の文官使臣の訪問によって、優れた文章力を持ち、明文壇の事情にも詳しく文官使臣を迎えて、朝鮮文人は活発な文化交流活動を広げることができ、さらに進んでは朝鮮の文化を明文壇に伝える機会も得ることができた。

また他には、明将の接伴活動を通じた交流機会があった。これは明と朝鮮の交流史においてこの時期のみに見られる非常に特殊な事例である。壬辰倭乱が勃発した後、明は朝鮮を救援するために軍隊を派遣することになった。その際、朝鮮朝廷では遊撃以上の明将に朝鮮接伴官をつけて、彼らの朝鮮滞在生活に不便がないようにしたのである。何年にも及ぶ滞在によって、明将らはしだいに朝鮮の生活に慣れてゆき、接伴をきっかけとして、彼らの世話をする朝鮮文人たちと親交を深めることができた。²その中で本来文学に関心が高かった明将らは、朝鮮文人と詩文を取り交わしたり、歴代の朝鮮漢詩を集めたり、また戦争後も持続的に朝鮮文人と親交を維持するなど、活発な交遊活動をもつことになったのである。

以上のように、戦乱以後 17 世紀前半に至る時期は、明と朝鮮の間で文人たちの交流の機会が量的、質的に大きく拡大し、文化交流活動も他の時期と比べて活発に行われた時期であった。したがって、この時期の両国文壇の状況をより明確に理解するためには、両国間の文学交流について具体的

¹ 「金暻緑(2006)」(474～483 頁)参照。

² 「鄭珉(1999)」(101～137 頁)参照。

に考察することが不可欠だといえる。

ではここでまず、17世紀前半における明と朝鮮の交流と、この時期の朝鮮漢文学に関する先行研究を概観しておきたい。本論文に関係するこの時期の研究は、大きく「外交」と「文学」の方面に分けられる。「外交」の問題に関わる研究は、さらに大きく三つの方面に分けることができる。まず壬辰倭乱が明と朝鮮の関係に及ぼした影響に関して、政治・経済・社会的な変化を分析した研究がある。³この研究は特に朝鮮を支援するために明軍が派遣されたことが、以後両国の政治的関係にどのような影響を与えたのかについて歴史的に考察したものであり、明が滅亡して清が建国された後にも朝鮮が「対明義理」というものを持続的に主張するようになった背景を明らかにしている。

続いて光海君時代の政治・外交問題に関する研究がある。代表的なものは、光海君の世子冊封や光海君の生母の追崇など王位正統性に関わる問題と、また後金と明の間で中立的立場を取っていた外交政策に関する問題を扱ったものである。⁴このような研究から、壬辰倭乱が明と朝鮮の関係に及ぼした影響と、この時期に外交活動が両国間の文学交流にどのような役目を果たしたのかについて歴史的知識を得ることができる。

他に、この時期の文章家の性格について考察した研究がある。明との外交活動が増加してから、外交文書作成、明使との詩文酬唱などに優れた能力を持つ人物の役目が大きくなった。そこで外交活動に必要な文章力を持つ人物が活躍し、大挙して政界に登場したことに注目した研究がその一つである。⁵その他にこの時期の文章家たちの思想的性格と交遊関係を考察した研究もあって参考にできる。⁶

次に、「文学」に関する研究成果を見ておきたい。これは、文学の交流と受容に関する研究、17世紀前半における朝鮮漢文学の発達に関する研究

³ 「韓明基(1999)」の研究が代表的なものである。

⁴ 光海君の王世子冊封及び王位継承問題に関して詳しいことは「韓明基(1999)」(187～197頁)、「李迎春(1998)」(128～131頁)、「啓スンバン(2008)」参照。

⁵ 「李喜中(1996)」が代表的研究である。

⁶ 「高ヨンジン(1994)」参照。

の二つに分けられる。文学交流については、まず明使行と明使接伴に関する研究がある。これらの研究では特に、明への使行記録である『朝天録』（『燕行録』ともいう）と、⁷明使との詩文酬唱集である『皇華集』に関する研究が活発に行われた。⁸また戦時期に朝鮮に派遣された明将らが編纂した朝鮮漢詩選集に関する研究も参考になる。⁹さらに、この時期の明文学受容に関する研究も盛んであったが、これに関しては、特に前後七子文学論の受容に関するものが注目される。¹⁰その他にも、書籍の流入と流通、¹¹中国詩文選集編纂などに関連してさまざまな議論が行われている。¹²

しかし一方では、このような中国との関係を扱う研究とは異なり、朝鮮文壇の内在的伝統に基づいて 16 世紀後半以降の朝鮮漢詩の発達を論じる研究も蓄積されている。そこでは、当時の朝鮮詩壇における最大の特徴として、「唐風」と呼ばれる唐詩スタイルの流行が指摘される。¹³これは 16 世紀半ばまで「江西詩派」を中心にした宋詩スタイルが朝鮮詩壇を席卷していた状況と比較され、¹⁴さらにその意義が強調されている。朝鮮詩壇での唐風の流行は、初期には「三唐詩人(崔慶昌・白光勳・李達)」を中心に晩唐詩が流行し、17 世紀に入ってから盛唐詩が詩壇の中心になったとされる。

このような研究からは、当時の朝鮮漢文学の文壇に中国文壇とは別の流れを持つ内在的伝統があったことがうかがえる。その伝統は、朝鮮文壇

⁷ 「林基中(2002)」、「金暎緑(2006)」、「夫馬進(2008)」など参照。

⁸ 『皇華集』刊行に関わる全般的なことについては「申太永(2005)」を参照。

⁹ これについては、「朴現圭(1998)」、「祇慶富(2002)」、「李鍾默(2007)」、「李鍾默(2009)」を参照。

¹⁰ 16 世紀後半以降朝鮮文壇における前後七子の受容に関しては、「姜明官(1995)」、「姜明官(2002)」参照。

¹¹ 明使行で行われた書籍購入に関する概括は「李存熙(1980)」、「金栄真(2005)」などを参照。

¹² 朝鮮に於ける中国詩文選集輸入や編纂に関しては、「沈慶昊(1999)」、「金学主(2000)」などを参照。

¹³ 16 世紀後半以降の朝鮮文壇における唐風流行については「李鍾默(2002)」(467~495 頁)、「鄭珉(1999)」(27~62 頁)参照。

¹⁴ 朝鮮文壇における海東江西詩派の成立や流行、特徴については「李鍾默(1995)」参照。

が明文学を無条件的にではなく、取捨選択しながら受容してゆく一つの判別基準を提供する役目を果たすことになった。したがってこの時期の朝鮮漢文学の展開を考察するためには、必ず考慮しなければならないことである。

ところが、また一方でこの時期の朝鮮漢詩は、杜甫など盛唐詩人たちの詩句を模擬・剽竊したものに過ぎないという批判も受けている。このような評価は、彼らの次の世代にあたる 17 世紀後半の文人たちからもなされた。¹⁵その見解は今日の研究にも影響力を持っており、17 世紀前半朝鮮漢詩に関する評価は、相変らず盛唐詩の模擬と剽竊という批判的な見方から離れていない。このような状況は散文に対する評価でも同じであって、この時期の散文は秦漢古文を学ぼうとしたが、実際の創作においては『史記』や『左伝』など先秦兩漢の作品の模擬・剽竊にとどまっている、と批判されたのである。¹⁶

これに対して、17 世紀後半以降 18 世紀の朝鮮文壇の傾向は、「朝鮮風」・「真景文化」とも称えられ、文学・歴史・芸術の面で朝鮮独自の文化が本格的に展開した時期として高く評価されている。¹⁷それはとりわけ、上記のような 17 世紀前半の擬古傾向との対比において、最もその価値が認められるのである。要するに、17 世紀前半の文学は復古的傾向が強く、模擬

¹⁵ 代表的人物に、17 世紀後半以降に朝鮮文壇を導いた農巖金昌協(1651～1708)が挙げられる。彼は自身の主張を述べた文学批評「雜識」(『農巖集』巻 31～34)で、全編にわたって明文壇の前後七子と彼らに追従した 17 世紀前半朝鮮文人らについて、その模擬や剽竊の態度を厳しく批判している。次はその一例である。

：世稱本朝詩、莫盛於穆廟之世、余謂詩道之衰、實自此始。蓋穆廟以前、爲詩者、大抵皆學宋、故格調多不雅馴、音律或未諧適、而要亦疎鹵質實、沈厚老健、不爲塗澤艷冶、而各自成、其爲一家言。至穆廟之世、文士蔚興、學唐者寢多、中朝王・李之詩、又稍稍東來、人始希慕倣效、鍛鍊精工。自是以後、軌轍如一、音調相似、而天質不復存矣。是以讀穆廟以前詩、則其人猶可見、而讀穆廟以後詩、其人殆不可見、此詩道盛衰之辨也。

¹⁶ 17 世紀前半における朝鮮文壇の漢文散文については、「姜明官(1995)」、「姜明官(2002)」参照。

¹⁷ 「崔完秀外(1998)」によれば、文学・歴史・芸術方面のさまざまな分野で、17 世紀後半から 18 世紀にかけての時期が「真景時代」と呼ばれ、この時期に朝鮮固有の文化が発展したと高く評価されている。

と剽竊という限界があったが、18世紀には朝鮮固有の文化が本格的に発達したとして、そのことに肯定的な評価を下すのが一般的な研究傾向である。

18

このような先行研究の成果と限界を考慮した上で、この論文では先行研究で扱われなかった歴史的事実に新たに光を当て、また先行研究の限界を乗り越える観点に立って、17世紀前半期の朝鮮漢文学が持った文学史的意味にあらためて目を向けたい。

今までの研究は、17世紀前半において明と朝鮮の文化交流が活発だったことは共通認識としつつも、実質的にその文化交流がどのように成り立っていたのかについては具体的な論議をしてこなかった。文学方面での明代文学受容に関する研究も、文学理論の受容の面に集中し、理論の類似性を論じるに止まって、その受容の背景や経路及び交流の過程で見られる文人たちの認識の変化、書籍の輸入と編纂活動など、具体的な事項は本格的な検討の対象となることがなかった。このような限界を考慮して、本論文ではまず17世紀前半の明と朝鮮の文化交流に関連した文学周辺の出来事に注目し、両国の間に活発な交流が行われた実質的条件を考察し、当時の文化交流の状況を再現することを目指す。その具体的な方法としては、当時の政治的・社会的・文化的背景を考慮した上で、明と朝鮮の文人交遊活動と書籍の交流・編纂に関する基本資料を整理し、その特徴的な事項を考察する。

続いては17世紀前半朝鮮漢文学に関する先行研究の評価について見直しを試みる。独自の文風を開いたと評価される18世紀朝鮮の漢文学に対比して、17世紀前半の漢文学を明代文学論の受容による模倣と剽竊の文学だと批判する先行研究の見解が、一方的であることを指摘したい。すなわち、外来文化の影響を受けながらもそれを「自分なりの」方式で受容しようとした朝鮮文壇の試みに注目し、外国文学との接触をきっかけに自国文学が新しく認識されていった状況に意味を見出したいのである。これは、ある文化の発展とは外部の刺激を受け入れて変化しながらも、一方的にそ

¹⁸ 18世紀の朝鮮漢詩については、「安大衛(1999)」(13～55頁)参照。

れを受容するのではなく、それまでの自身の文化的伝統と融合させながら新しい方向に向かうものだという見方に基づくものである。

このような観点を基盤として、この論文では 16 世紀後半以来明から流入した新しい文化をきっかけに朝鮮文化に関する新しい認識が現れ、それを通じて 17 世紀後半以後朝鮮漢文学の個性が摸索されたということを証明したいと考えている。17 世紀と 18 世紀を別々の時代として捉えるのではなく、18 世紀は 17 世紀を背景にして登場したという、その「連続性」にもっと注目したい。つまり一つの文化現象に対して、個々の事件のみに目を向けるのではなく、それが現れてきた背景と原因、その後への影響をあわせて考察し、個別の文学的事件の背後に隠された多層的な意味を説明することを目指すのである。

2. 研究範囲と敘述の展開

本論文の研究対象は大きく三つの部分に分けられる。すなわち、第一に 17 世紀前半に行われた明・朝鮮間の文学交流の具体的様相について、第二に朝鮮文壇における明文学の批判的受容方式について、第三に、それに基づいて現れた朝鮮漢詩に関する認識の変化についてである。

第一部では明と朝鮮の文人交遊と文学交流活動を主な対象として、当時の両国の文学交流活動の実態を考察する。前に述べたように、両国文人の交遊活動に関して本論文で主に扱う時期は、日本との戦争が終結した 1598 年から光海君時代が終わる 1623 年までに限定する。本論文で特にこの時期に注目するのは、次のような歴史的背景からのことである。

1592 年、突然の日本の侵略にあって朝鮮政府は明朝廷に援軍派兵を要請することになり、その年 12 月には明から大規模な軍隊が朝鮮に派遣されることになった。明の援軍によって戦勢は逆転し、1593 年には日本との講和交渉に入り、戦争は休戦を迎えた。しかし 1597 年には日本による二度目の侵略が行われ、明朝廷も再び軍隊を派遣した。その後、1598 年に終戦となり、明軍は 1600 年までに順次に朝鮮から撤収することになったが、このように何年にもわたって朝鮮に滞留したり、二度にかけて朝鮮に派遣

されたりすることによって、明将らとその下の明兵らは朝鮮生活に適応しながら、朝鮮の社会と文化にも関心を持つようになったのである。特に戦争終結後の 1598 年から 1600 年の間は、最も集中して朝鮮のことを学べる時期であった。このようなことから、本論文では 1598 年からの交流活動に注目する。

それ以降は、光海君時代(1608～1623)が幕を閉じた 1623 年の仁祖反正を下限線として扱うことにする。結果的に言えば、本論文で最も注目する時期は宣祖末期と光海君時代である。歴史的に見ると、この時期は 200 年余りにわたって安定を保っていた朝鮮の社会秩序が戦乱をきっかけに崩壊し、政治・経済的には非常な困難を迎えた時代であったといえる。しかしその一方で、文化と思想の面では、長年の社会的安定による硬直した雰囲気から脱皮し、新たな変化を模索できる時期でもあった。特に明との活発な交流を通じて入って来た新しい文化と思想は、朝鮮知識人たちに、従来の固着した学問態度から脱して多様な学派の理論に接する機会を与えたのである。

外交の面でも、光海君時代は明と後金の間で中立維持の政策をとった時期であって、明との義理よりは現実的な状況に対応し、実利を取ろうとした時期であった。このような現実的で理念に偏らない時代的雰囲気の中で、朝鮮文人たちも学問的にも文化的にも、最も開放的な姿を見せることができた。それは仁祖反正以降の朝鮮の知識人社会が、明との義理を強調し、性理学的秩序を強化するなど保守化していったのに比べると、かなりの相違として見ることができる。また中国との交流においても、仁祖反正以後、新たに成立した清朝を「夷の国」と見下して文化交流を拒否したのに比べ、光海君時代の活発な中国との交流活動は非常に注目される。このような歴史的背景を考慮した上で、本論文では戦争が終わった 1598 年から仁祖反正が行われた 1623 年までの明と朝鮮の文学交流活動に着目することにする。

では、これから論文の具体的な進行について説明する。まず、戦乱以降から 17 世紀前半までに行われた明と朝鮮の文人の交遊と、文学交流の具体的な様相について考察する。既に言及したように、当時朝鮮文人が明

文人と交遊できるのは、明使行と明使・明将の接伴活動が唯一の機会であった。そこで第一部ではこの使行や接伴という外交活動を通じて行われた文学交流活動について考察する。

第一章では、明文人らの朝鮮訪問によって朝鮮文人が彼らとの交遊の機会を得た接伴活動について考察する。この時期の接伴活動は二つに分けることができる。一つは伝統的な接伴活動である明使接待活動、もう一つはこの時期の特別な事例である明将らへの接伴活動である。ただし、この章では明使接伴活動のみ考察し、明将への接伴に関しては第三部で扱うことにする。使臣接伴活動については、17 世紀に入ってから 1602・1606・1609 年の三回にわたって明の文官出身使臣が派遣された歴史的事実に注目し、彼らの接伴中に行われた両国文人の交遊と情報交換について考察する。

次に第二章では、17 世紀前半の朝鮮文人たちの明使行について考察し、中でも当代最高の文章家として認められていた李廷龜・許筠の明使行を扱うことにする。この二人は当時の明との外交活動において、使臣・接伴官として最も活躍した人物であった。この章では文学交流に関係した彼らの代表的な明使行を選び、それを具体的に見てゆくことにする。まず、当時明との外交活動で最もその能力が認められていた李廷龜の使行について考察する。彼の事例を通じて、文学活動と外交活動がどのように連動していたのかを考察する。続いて許筠の 1614・1615 年の二度にわたる使行を取り上げ、彼が数千巻に及ぶ明の新刊書籍を購入したことに注目し、それを通じて、書籍の輸入と明使行の関係について考察する。

引き続き第二部では、以上の交流活動を通じて朝鮮文壇に入って来た明文学がどのような方式で受容されたのかについて検討する。特にその受容方式において、朝鮮文壇の批判的かつ独自の態度に注目したい。具体的な方法としては、詩文選集の批判的理解と再編纂作業、文学論の受容に関わる事例を選んで、文学史の流れの中でその事例が持つ意味を探ることにする。また必要に応じて 18 世紀江戸文壇の状況と対比し、両国の明文学受容状況の差異を視野に入れる。それにより、各国の文壇状況に応じた明文学受容の特徴について、さらに明確に捉えられると期待する。

まず、許筠の漢詩批評作業を中心に、明代詩論、特に前後七子の詩論が朝鮮文人たちにどのように受容されたのかについて考察する。許筠は歴代の中国詩選集を検討し、それを改めて再編纂する作業を行っていた。ここではその作業の過程で示された彼の文学論に注目する。許筠は当時明文壇で流行していた前後七子の文学理論を涉獵する中で、ある程度はその影響を受けながらも、同時に朝鮮文壇の伝統を受け継いで明の文学理論から一定の距離を置いていた。このような許筠の事例を通じて、当時の朝鮮文人たちの明代文学論に対する批判的受容態度を窺いたい。

次に、17世紀前半の朝鮮文壇で中国の唐詩選集が流行し、ついには朝鮮文人による独自の唐詩選集まで編纂された状況に注目し、中国の詩文選集が朝鮮にどのように受容されたのかについて考察する。ここでは許筠と李睟光の唐詩選集編纂作業を中心に、朝鮮の唐詩評価基準が模索されていたことに注目する。彼らの受容態度は、同じく前後七子の影響圏にあった江戸文壇で行われた唐詩選集受容の様相と非常に対照的である。このような両国文壇における中国の唐詩選集受容、再編纂方式の相異点を分析し、同一の書籍が各国の文学的環境において持つ特殊な意義について考察する。

最後に第三部では、第一部、第二部で考察した明との文学交流と明文学の批判的受容が、結果的に朝鮮漢詩への認識にどのような影響を与えたのかについて考察する。それについては、まず朝鮮漢詩が明文壇に多数紹介されたこと、また朝鮮文壇で朝鮮漢詩整理作業が行われたことに注目する。

当時両国の活発な文学交流によって、明文壇に朝鮮漢詩が多数紹介された。特に1598年に戦争が終わってから、まだ朝鮮に滞在していた明将らの主導で歴代の朝鮮漢詩選集が何度も編纂された。この時期明文壇に紹介された朝鮮漢詩は、以後明清の詩選集編纂作業において「朝鮮」部分の重要な参考資料とされ、朝鮮漢詩を明文壇に知らしめる大きな役割を果たしたのである。また当時朝鮮文人も朝鮮の詩文を明側に伝えることに熱心であったが、ここでは特に許筠の朝鮮詩文紹介活動に注目して、両国間の文学伝播がどのように行われ、活発になっていたのかについて考察する。

一方で、急激な交流の拡大は朝鮮において歓迎されるばかりではなかった。朝鮮文人たちの積極的な詩文紹介活動は、その過程で明との外交的衝突が起きることを懸念した朝鮮政府により、制限を加えられることもあった。その一例として本論文では、1620年に李廷龜が北京に行き、当地で自分の詩集を出版したために、朝鮮の朝廷内で騒動が巻き起こった事件に注目する。このように明との交流の過程で起きた朝鮮政府との軋轢を通じて、当時の文化交流が順調に進んだだけではなかったという状況も見ておくことにする。

最後に、このような交流活動を通じて、17世紀前半の朝鮮文壇で漢詩評価に関する独自の基準が用意され、それに基づいて朝鮮漢詩を再評価しつつ、朝鮮漢詩選集と詩話集編纂作業が積極的に進められていった状況を考察する。それは明との文学交流が最終的に朝鮮漢詩の発達に与えた影響を論じることでもある。その具体的な事例として、戦乱後に政府事業として編纂された『海東詩賦選』、許筠が個人的に編纂した詩選集『国朝詩刪』と詩話集編纂の経緯について考察する。これらの作業の過程で、朝鮮漢詩に対する新しい自覚が生み出され、朝鮮漢詩の価値が再認識されていったことを検討する。

要約すると、本論文は16世紀末の戦争をきっかけに活発化した明と朝鮮の文学交流の実態を具体的に考察し、以降明文学が朝鮮文壇で批判的に受容された方式を分析し、そのような交流と受容を通じて朝鮮漢詩への認識が変化した過程を追跡することを目指している。それは一見個別の事件のように見える文化現象が、相互に緊密な関連をもっていることを明らかにするものであり、外来文化の受容と朝鮮独自の伝統がどのように影響しあって、以後の文壇に新しいものを生み出していったのかを検証するものである。また17世紀後半以降の朝鮮文壇に現れた個性追求の動きに、前時代の明文学受容、朝鮮漢詩の再発見が密接に関連していることを明らかにするものであり、17世紀前半と17世紀後半以後の詩壇を相反するものとして捉える先行研究の態度に対し、新しい観点を提示するものである。

第一部. 明と朝鮮の文人交遊及び文学交流の具体的様相

第一章. 文官出身明使接伴と文学交流活動

* 始めに

本章では17世紀初における文官出身明使の接伴活動を通じて行われた明と朝鮮の文学交流の具体的様相を考察し、その意味を分析することを目的にしたい。17世紀初に注目する理由は、この時期に戦争をきっかけとして明と朝鮮の間に直接の交流機会が増加し、両国文人の間でより「私的」な交流が行われたからである。

明は建国以来、「朝貢関係」を通じてのみ周辺国と交流する外交政策を取っていた。¹⁹したがって朝鮮の文人たちが明の文人たちと接触する通路は、特別な場合を除き、明使行と明使の接伴活動があるだけであった。このうち、使行に関しては使行記録である『燕行録』が多数残っており、その交流の様子が確認される。使行を通じて行われた18世紀以後の清文人たちとの活発な学術及び文化交流については、既にかんりの研究成果が蓄積されている。しかし17世紀以前における明との交流は、後の清朝との交流に比べて、活発だったとは言い難いところがある。特に文人交遊の側面ではとりわけそうであり、明朝廷は外交政策において閉鎖的な態度を見せ、朝貢使行団の滞留期間と場所を制限し、使行員の私的貿易や外出を禁じ、文書のみを通じて外交的懸案を処理するなどの原則を立てていた。したがって明代に使行で北京へ行った朝鮮文人たちは、制限された範囲でのみ中国文人たちと接触することができたのである。²⁰

ところが明使たちが朝鮮を訪問した場合は、状況が全く違っていた。明の使節団が朝鮮に派遣されると、朝鮮朝廷では遠接使を中心に使臣団を接待する接待団を組織し、明使たちが朝鮮に入ってから明に帰国するまでの何ヶ月もの間、彼らを十分にもてなすことができるよう万般の準備をし

¹⁹ 「全海宗(1970)」(2～8頁)

²⁰ 「金暲緑(2006)」(465～474頁)

ていたのである。²¹このように両国文人たちが相当の期間を一緒に過ごした状況を考えると、明使接伴活動を通じて両国文人たちの間にいかに深い交遊が成り立ったか、容易に想像できる。

明が朝鮮に使臣を派遣したのは、朝鮮初期から仁祖朝(1623～1649)に至るまで、242年間186回に及ぶものであった。²²そのうち、大半の使節団では朝鮮出身の宦官が使臣になっていたが、重要な事案に関しては学識のすぐれた文官たちが派遣されることもあった。²³明が朝鮮に「文官出身使臣(以下「文官使臣」と呼ぶ)」を派遣したのは計25回にわたり、人数は副使を含めて40人余りにのぼる。186回の派遣のうち25回というのは多いと言えないが、当時明と朝貢関係を結んだ近隣国家の中で文官使臣が派遣されたのは非常に例外的なことであり、朝鮮を特別扱いしていたともいえる。このことから朝鮮政府も、彼ら文官使臣たちを特に優待する政策を取ったのである。²⁴

文官使臣の派遣は両国間の文化交流において、非常に重要な役目を果たした。文官使臣団の接待の主な活動の一つは「詩文酬唱」であり、そのために両国政府は文章のすぐれた文人たちを選んで使臣団を構成したのである。朝鮮は本来、漢文学において中国に劣らない水準を誇っていた。そこで明朝廷は正使として、翰林院所属の文才にすぐれた人物を送り出すことが多かったのである。朝鮮政府も明の名望高い文人たちを迎え、詩才のすぐれた人々を厳選し接待団を構成したのは言うまでもない。そのように両国のすぐれた文人たちが数ヶ月にもわたって自由に交流できる機会であったため、彼らはそれを逃さず、相互の文壇の情報などを積極的に得

²¹ 「金暎録(2006)」(474～483頁)

²² この中で太宗(1400～1418)と世宗の時代(1418～1450)にその半数に及ぶ94回の使節団が派遣された。その時代は、明が建国され周辺国との外交関係を定立した時期であったので、しばしば使節団が派遣されたのである。(「金暎録(2004)」、76～78頁参照)

²³ 朝鮮出身宦官使臣の場合、朝鮮に入って自分の出身地を昇格させてくれとか、自分の親戚に官職を与えてくれ、などの無理な要求を朝鮮政府に行い、外交的摩擦を起こすことがたびたびあった。それを防ぐため明朝廷では事案により文官使臣を派遣したのである。(「曹永録(1990)」、108～111頁)

²⁴ 「李サンベ(2006)」(413～428頁)参照。

ようとしたのであった。

以上の背景に基づいて、本章では 17 世紀初において「接伴」という外交活動を通じて行われた両国文人の交遊と文学交流活動の具体的様相を把握しようとした。その中でも、文官使臣団が派遣された 1602 年・1606 年・1609 年の接伴活動を中心に扱うことにした。特に、今までの研究が朝鮮文人たちの活動を中心に置いて進められてきた点を考慮し、ここでは明使たちの活動に主に注目することにする。

1. 接伴を通じた文学交流の背景

ここではまず、17 世紀初において両国文人たちの交流が活発になった背景を考察する。明と朝鮮は従来、公式的な外交通路であった使行と接伴のみを通じて接触してきたが、特に 17 世紀初には、様々な歴史的要因によって両国の文人たちが互いの文化に関心を持つようになり、積極的に交遊しようとする状況が開かれた。まず明文人側の事情について考察すると、この時期、戦乱によって直接朝鮮へ行く機会が増加し、朝鮮に関して情報を得る通路が準備されたことがある。その具体的契機としては、まず文官使臣団が以前より頻繁に派遣されるようになったことが挙げられる。1598 年に戦争が終わると、17 世紀初の 10 年間、明からの文官使臣団は 1602・1606・1609 年と三回派遣された。

文官使臣団は、1450(世宗 32)年に翰林院侍講の倪謙と刑科給事中の司馬恂が朝鮮を訪問したのを最初として、1633(仁祖 11)年の程龍の訪問に至るまで、計 25 回にわたって朝鮮に派遣された。²⁵しかし 10 年以内に連続して三回も派遣されたのは、明初に周辺国家との外交関係を定立するため頻繁に派遣された時期を除けば、非常に珍しいことであった。²⁶特に

²⁵ 奉安島衆連属国勅使として朝鮮を訪問した程龍は、当時副総兵の身分であり、厳密に言えば文官ではなく武官出身の使臣であった。しかし彼は朝鮮文人たちと詩文酬唱を行い、『皇華集』に作品を残すなど活発な文学交流活動を行ったので、ここでは文官使臣たちと同列に扱うことにする。

²⁶ 「申太永(2005)」、31 頁の「接伴・名詞・撰序者一覧表」による文官使臣の朝鮮訪問年度は次の通りである。1450、1457、1459、1460、1464、1476、1488、

1602(宣祖 35)年の訪問は、前回の 1582(宣祖 15)年の訪問以来およそ 20 年ぶりのことである。また 1609(宣祖 39)年以降、文官使臣は 12 年後の 1621 年(光海 13)まで朝鮮を訪ねることはなかったのである。これを見ても、17 世紀初の 10 年の間に三回も文官使臣が派遣されたことは両国の文人交遊に大きな影響を与えたと考えられる。

明の文人たちは使行以外に朝鮮に来る機会がほとんどなかったので、何ヶ月間も朝鮮に滞在し、現地の文人たちと過ごすことができた使行は、朝鮮について知る非常に重要な機会だったのである。それだけに、この時期に 3、4 年の間隔を置いて次々と文官使臣が朝鮮に派遣されたことは、明文人たちの朝鮮に関する情報蓄積に大きな役目を果たしたといえる。特に、先に朝鮮を訪れた使臣たちがもたらす新鮮な情報は、続いて朝鮮に向かう使臣たちにとって最も有用な情報だったのである。実際、この時期の明使たち間でたびたび情報交換が行われていたことが史料からも確認できる。

次に、朝鮮初期から順次編纂された『皇華集』によって、明文人たちが北京で朝鮮文人の漢詩に接することができたことが挙げられる。朝鮮政府は明の文官使臣が派遣された際に、朝鮮滞在中に両国文人たちが取り交わした漢詩を集めて『皇華集』という詩集を編纂した。²⁷『皇華集』は明の滅亡まで計 24 回にわたって編纂されたが、1600 年以前に既に第 19 回まで刊行されており、相当の分量が蓄積されていた。そして 17 世紀初めに朝鮮を訪問する使臣たちにとって、朝鮮の漢詩について分かる良い参考書になったのである。『皇華集』に載せられた詩文の文学性については、当時からその水準を疑う意見も提起されていたが、²⁸文学的成果をひとまず措くと、この詩集が朝鮮詩文の明への紹介に一定の役割を果たしたことは

1492、1506、1521、1537、1539、1545、1556、1567、1568(2 回)、1573、1582、1602、1606、1609、1621、1626、1633。

²⁷ 『皇華集』刊行に関わる全般的なことについては「申太永(2005)」を参照。

²⁸ 明の錢謙益と朝鮮の柳夢寅は『皇華集』に収録された詩文の水準が非常に低く、後世に伝える価値はないとして酷評したことがある。その他『皇華集』に関する批判の声が度々あったが、それについては「申太永(2005)」(266～270 頁)参照。

否定できない。1606年に朝鮮を訪問した朱之蕃が、北京にいた時『皇華集』を通じて知った李荇・鄭士竜・李珥の詩集を自分の接待官であった許筠に求めたことは、²⁹『皇華集』を通じて明文人が朝鮮詩文の情報を得ていた様子を窺い知ることができる例である。

それに加えて17世紀初に特徴的なのは、戦乱の中で朝鮮に派遣された明将たちが歴代朝鮮の漢詩を収集して詩選集を編纂したことである。代表的なものに、遊撃將軍藍芳威と吳明濟による朝鮮詩選集の編纂がある。彼らはどちらも1598年丁酉再乱の際に朝鮮に派遣され、滞在中に朝鮮漢詩を集め、それぞれ『朝鮮詩選』（藍芳威の詩選集は『朝鮮古詩』ともいう）という詩選集を編纂した。³⁰このように戦乱をきっかけとして明将たちが朝鮮の詩文に接し、彼らによって明文壇に朝鮮漢詩が紹介されるということがあったのである。彼らの詩選集については第三部でさらに詳しく扱うので、ここではそうした状況によって当時の明文人が朝鮮の詩文に興味を持つようになったということを指摘するにとどめる。

以上の様々な要因によって、戦乱直後に朝鮮を訪問した明使たちは、北京にいる時から既に朝鮮文化に関してかなりの情報を得ることができていた。そして朝鮮に入るとその関心に基づいて、自分たちの接待を担当する朝鮮文人から朝鮮の文化と詩文に関する話をいろいろと聞き出そうとした。その過程で両国文人の活発な文化交流が行なわれたのである。

しかしこのように相手の文化を知ろうと積極的な態度を見せたのは明の使臣団の側だけではなかった。もともと朝鮮文人たちは漢文学の本場である明文壇の動きに常に関心を持っていた。したがって翰林院出身の正使を含む文官使臣団の朝鮮訪問は、朝鮮文人たちが明の優れた文人と自由に交流できる貴重な機会だったのである。文官使臣たちの接待では、彼らと

²⁹ 許筠『惺所覆瓿稿』、卷18「丙午紀行」：四月初一日…(中略)…夕、上使招余話良久、問曰在北京見皇華舊刻、如李荇・鄭士龍・李珥、俱有集乎。余以亂日板本俱燹失之、上使嗟悼。因曰近觀柳老之作、圓轉婉亮、有勝於前人也。貴国人詩、可速繕写以示。

³⁰ 藍芳威の『朝鮮詩選』については「朴現圭(1998)」と「李鍾默(2007)」を参照。また吳明濟の『朝鮮詩選』は祁慶富校註の『朝鮮詩選校註』(1999)を参照。

の詩文酬唱が重要な要素となったため、朝鮮側でもそれに対応できる文人たちを選抜し、接待団を構成する必要があった。

実際に朝鮮では使臣接待の責任者である遠接使を選抜する時、漢詩酬唱の能力を最も重視したのである。また遠接使一人で明使たちの詩に次韻することは困難なので、遠接使を補佐する従事官も何人か派遣し、代わりに詩を作らせることもあった。そこで従事官は何より「詩才」を基準にして選抜されることになった。³¹特に宣祖年間「穆陵盛世」とも言われ、朝鮮漢詩史においてとりわけ優れた詩人たちが多数活躍した時代であった。それだけに、朝鮮文人たちは詩文酬唱で自分の詩才を示そうと積極的であったし、また明使接待の機会を通じて明文壇の新しい情報を得るのに熱心であったのである。

その上、この時期に明使接待を担当した人々は、ほとんどが明使行の経験があった人物であった。壬乱時期の援軍派遣問題や光海君朝の王位継承問題などで、16世紀後半以降、朝鮮政府は頻繁に明へ使臣団を送った。したがって当時は外交方面で活動する文章家たちが多く選抜され、使行や接伴を担当するようになった。それによって当時使臣として活動した朝鮮文人たちは、以前に比べて明文壇の情報にかなり詳しくしたのである。この時期に外交方面で活躍した文章家としては、尹根寿・柳根・李廷龜・許筠などが挙げられる。³²彼らは文章家出身である以上、当然のこととして明文壇の動きに大きな関心を持ち、使行を通じて明文壇に関する情報を収集していた。このことを考えると、当時接待団に参加した朝鮮文人たちが明の使臣を迎えて交遊する際、いかに熱心に明文壇の情報を得ようとしたかは、言うまでもないことである。

ここまで、17世紀初めに明と朝鮮の使臣団が活発に交流していた当時の背景を概観してみた。この時期は戦乱をきっかけに両国が直接交流する機会が増し、相互の情報が得やすくなり、相手の文化への関心が高まった時期であった。このような背景に基づいて、両国の使臣団に参加した文人

³¹ 遠接使と従事官の選抜については「申太永(2005)」(30～42頁)を参照。

³² この時期に文章家たちが文章力によって政界に参入し、外交舞台で活躍したことについては「李喜中(1996)」を参照。

たちは、公的な出会いの場である「使行/接伴」の機会を利用し、相手の文化をさらに知りたいという欲求を持つようになったのである。そこで次節では、17世紀初頭に明の文官使臣への接伴活動を通じて行われた文人交遊と文学交流活動について、その具体的な様相を考察することにする。

2. 文官使臣接伴と文学交流活動

ここで注目する明の使臣団は、壬乱直後、17世紀初頭に朝鮮に入った1602年・1606年・1609年の文官使臣団である。本論に入る前に、各時期の明使臣団と朝鮮接待団の構成について簡単に整理しておく。

年度	朝鮮滞留期間 ³³	明使(正使・副使)	遠接使	従事官
1602年	閏2月～4月	翰林院侍講顧天峻 行人司行人崔廷健	李廷龜(前) 李好閔(後)	朴東説 李安訥 洪瑞鳳
1606年	2月～5月	翰林院修撰朱之蕃 刑科都給事梁有年	柳根	許筠 趙希逸 李志完
1609年	4月～7月	太監劉用 ³⁴	李商毅	許筠
	4月～7月	行人熊化	柳根	柳瀟

1) 1602年顧天峻・崔廷健接伴

1602年に皇太子冊封を知らせる詔使で翰林院侍講顧天峻が正使に、行

³³ 明使臣たちの朝鮮滞留期間については、その接伴活動に関する許筠の日記が残っており、それを参照した。『惺所覆瓿稿』巻18の「西行記」(顧天峻・崔廷健接伴)、「丙午紀行」(朱之蕃・梁有年接伴)、巻19の「己酉紀行」(劉用・熊化接伴)がそれである。

³⁴ ただし、太監劉用は文官出身ではなく宦官出身の使臣である。当時劉用と熊化はそれぞれ光海君冊封詔書と宣祖の諡号詔書を携えて来た。明朝廷では一般的に、冊封詔書では宦官を、諡号詔書では文官を派遣したのである。

人崔廷健が副使になって朝鮮を訪れた。1602年の使臣団は戦争以後初めて朝鮮を訪問した文官使臣団であり、朝鮮政府にとって彼らの接待はかなりの負担であった。戦争によって資源が枯渇し、国民の生活も困窮していた上、文官使臣を迎えるのが20年ぶりということもあって、彼らを迎える準備もまともにできない状況だったのである。そのため朝廷の大臣たちは明使の接待にかなりの憂慮を示していた。³⁵当時の使臣接待の責任者であった李廷龜は次のように接待の難しさを吐露している。

＊『宣祖実録』143巻、「34年(1601)11月5日」

在昔昇平、我國之接待詔使、極其尊崇、詔使之禮遇我國、不甚衰薄。時則物力豊亨、事事稱情、儀式璨備、禮貌無缺、彼此交懽、未有虧損。今則天朝之責望於我國者甚隆、我國之所以接應者甚懈…(中略)…今之詔使雖非前日之將官、所帶之人、必皆舊來之家丁、詔使之自處、冗於將官、軍丁之使氣、甚於前時。而西路之人、慣於例待、凋殘玩愒、心事解弛、則臣雖竭誠焦思、終難濟事。今日之待詔使、不甚難乎。

昔の平和な時には、我が国は詔使を接待するのに敬意を尽くし、詔使も我が国を手厚く礼遇してくれました。当時は財力が豊かで何事も思い通りにでき、儀式はきらびやかに整い、礼儀に欠けたところもなく、お互いに楽しんで何の不備不足もなかったのです。ところが今は明朝の我が国への要望はきわめて多いのに、我が国の対応はきわめて怠慢であります…(中略)…今日の詔使は先日の将官らでないとはいえ、連れて来る人は、皆昔に来た家丁であるし、詔使が自任するところも、将帥より高く、軍丁らの意気も、以前よりさかんでありましょう。しかし西路(辺境の地域)の人々が、いつも通りに接待し、いいかげんにして、心を緩めていれば、私がたとえ誠を尽くし心を砕いても、結局仕事を果たすことはできないのです。今

³⁵ 『宣祖実録』142巻、「34年(1601)10月30日」：領議政李恒福・左議政金命元啓曰、伏承上教、臣等與戶禮曹官相議、則人心頑慢、莫此時爲甚、而財力蕩敗、又未有甚於此時。

の時代において詔使の接待をするのは、実に難しいことであります。

この時の記録を参照すると、朝鮮政府は戦乱後の困難な状況にあっても、20年ぶりの文官使臣団を接待するために万般の準備をしようとしたことがわかる。中でも文学交流に関しては、使臣との詩文酬唱に備えた様子が窺える。宣祖は初め、明使たちとの詩文酬唱が詩文の争いにならないようにと考えていた。³⁶しかし当時遠接使であった李廷龜は明使たちが先に酬唱を求めてくる場合、それを断ることはできないと言い、詩文酬唱の必要性を申し立てたのである。³⁷さらに、自分を補佐して酬唱に参加する幕僚を自ら厳選するなど、その準備に積極的な態度を見せた。³⁸その選抜の基準では何よりも文章能力が優先された。官職もない権鞮と外職にあった許筠・金玄成を選ぶのに、作詩能力の優秀さを挙げた事がその一例である。³⁹このような努力によって、当時の接待団の構成は「文星が関西に集まっ

³⁶ 『宣祖実録』143巻、「34年(1601)11月5日」：遠接使李廷龜啓曰、受命擯接、貴在誠敬、文章酬唱、特是繁華盛時之故事、求之以致敬盡禮之道、則誠爲謬習。聖諭所及、實出於常情之所未料。臣惟當祇奉嚴命、奔走登程、竭盡誠意、檢飭一路、接待諸事而已。

³⁷ 『宣祖実録』143巻、「34年(1601)11月17日」：廷龜曰、小臣疎漏、應接一事、尤不能周詳、以此人常笑之。不可當之事非一、而此尤可悶。且酬唱勿爲事、前有傳教、極爲允當矣、彼若強之、則將如何。上曰、若強之則爲之可矣、然必辭不獲已、而後應之。但不可與爭勝也。前日徐居正爲遠接使、沈彦光爲館伴時、皆製詩先呈、甚不可也。同副承旨申滌曰、外議以爲、全不酬唱亦似未安云。大概尊者、使爲卑者、豈可不答乎。且文字之間、或有得其權心者。詔使東遊、不無誇張之意、而此等事、索莫專廢、則恐不可也。

³⁸ 李廷龜『月沙集』卷39「東槎集序」：即選僉接之臣迓于境、不佞適添文衡。遂膺是命、幕中僚佐、咸聽自舉、南郭朴說之・東嶽李子敏・鶴谷洪輝世以從事偕行、南窓金餘慶・五山車復元・石洲權汝章以製述官、先後隨來、石峯韓景洪、以名筆啓通加平郡守而行。

³⁹ 『宣祖実録』143巻「34年11月8日」：遠接使李廷龜啓曰、酬唱則勿爲之命、而亦不可全然不爲之致念。臣本不解詩、幼學權鞮[鞮、故參議壁之子。文辭艷逸、有長於詩才]、長於詩才、竝爲帶去。

「11月17日」：廷龜曰、前例、雖任外官、如或能文、則啓請上來、而似爲煩瀆、故未敢啓達矣。以製述官、請隨後入送如何。上曰、誰人乎、固無妨。廷龜曰、年少人中、海運判官許筠、非徒能詩、性且聰敏、多識典故及中朝事。楊州牧使金玄成、年雖衰、亦有詩才、且善書、欲令隨後入來矣。上曰、唯卿所欲。

た」と言われるほど、朝鮮最高の文人たちが名を連ねる見事なものとなった。⁴⁰

この接待団の構成を見ると、李廷龜と李好閔が前後責任者であり、⁴¹朴東説・李安訥・洪瑞鳳が従事官、車天輅・権鞮・梁慶遇・金玄成が製述官、また当代屈指の名筆といわれた韓濩が写字官として参加した。そして途中で落馬、負傷したため辞任することになったが、李晬光が都事迎慰使として参加していた。⁴²この他にも従事官の朴東説が病気で辞任した後、李廷龜の推薦で当時最高の文才と称えられた許筠が加わった。⁴³彼らは接待団が組織された1601年11月から5ヶ月間一緒に暮らし、互いに詩文を取り交わした。また12年後の1613年には李安訥の取り持ちで、この時作った160余篇の詩を集めて『東槎集』という題名の詩集を出版した。⁴⁴その経緯は、遠接使李廷龜が作った『東槎集』の序文に次のように述べられている。

* 李廷龜『月沙集』卷39「東槎集序」

噫、士夫平居最樂、與佳朋親友會。然而人世苦多事、能得一場團

若欲率去、則何難之有。

⁴⁰ 南龍翼『壺谷詩話』：壬寅顧天俊時、李月沙廷龜為使、李東岳安訥・朴南郭東説・洪鶴谷瑞鳳為従事、権石洲以白衣、車五山天輅・梁霽湖慶遇以製述、金南窓玄成・韓石峰濩以筆従、各藝之盛、此行反復勝矣。李五峯好閔・柳西峒根為迎慰、崔簡易適僑居于箕城、時人謂之文星聚閔西云。

⁴¹ 李廷龜が遠接使を辞職した理由は、実際には健康上の理由より政治的要因が大きかったとも言われる。『月沙集』卷9「東槎録」序文に添付された註を参考すると、この時反対党の鄭仁弘が李廷龜の党派であった成渾を排斥するという事件が起こり、李廷龜は自らの境遇が心細くて遠接使を辞任したと言っている[至壬寅春、仁弘使其徒文景虎成牛溪、在朝諸臣遣罷相繼、公亦不自安、連上章引疾乞解]。そのことについては、『宣祖修正実録』「35年3月1日」の記事によっても裏付けられる[大提學李廷龜辭遞。前冬、廷龜以遠接使、迎詔使於灣上。未幾、時事大變、士類皆被擯斥、以此不自安、連章力辭儻接之任。及還朝、又辭文衡]

⁴² 李晬光、『芝峯集』卷11「半槎録跋」参照。

⁴³ 前掲の『宣祖実録』「34年11月17日」の記録と許筠の文集『惺所覆瓿稿』卷18「西行紀」参照。

⁴⁴ 本稿で参照した『東槎集』は奎章閣所蔵版本(請求記号「古 3441-25 v. 1-2」)の2巻2冊の資料である。その他『東槎集』の編纂については、李廷龜の『月沙集』卷9「東槎録」上の序文と卷39「東槎集序」を参照。

圓者罕矣、縦或會合、亦暫時而止耳。今茲之役、實儒林榮選、不佞
謬蒙恩遇、得與七八諸賢相從於翰墨之場、磨礪浸灌、婆娑戲游。填
箎迭唱、稗鼓同聲、乃至於窮日夜而不知疲、閱寒暑而不知久。此實
古今難得之會、而斯文之盛事也。子敏詩曰參佐交權古亦稀、此實語
也。

ああ、士大夫の日常生活で最も楽しいのは、良い友人たちと顔を
合わせることである。しかし人の世には多くの事情があり、皆が集
まる機会を持つことのできる人はほとんどなく、たとえ会うことが
できて、しばらくの間にすぎない。ところで、今回このお役目に
選ばれたのは、実に儒林の榮譽であり、私も過分な恩恵にあずかっ
て、七八人の諸賢と翰墨を通じて交わり、お互いに詩文を切磋琢磨
し、のんびりと遊ぶことができた。仲間たちは趣向がお互いによく
合って、日夜を過ごしても疲れることを知らずに、寒暑を経ても長
いとは思わないほどであった。これは実に今も昔も得難い集まりで
あり、斯文の盛事である。子敏[李安訥]の詩に「役人どうしの交歓
の機会は昔からめったにない[參佐交權古亦稀]」とあるのは、真実
を言った言葉である。

ここで際立つのは、当時この集まりに参加した人々が、自分たちの会
合と詩文に相当な自負心を持っていたことである。この時期は戦乱で多く
のものが破壊され、物質的にも精神的にも朝鮮文人たちには苦しい時期で
あった。そのような状況で明の文官使臣を迎え、朝鮮文人たちが前面にお
しだすことのできるものは、朝鮮初期から培ってきた漢詩酬唱の力しかな
かったのである。そのため李廷龜はいつにもまして高い文章能力を持つ接
待団を構成し、ついにこの接待団は後代にも語り伝えられるほど優れた文
章を誇る接待団になった。そしてこれに参加した人々も、参加できたこと
を大きな榮譽と感じ、十数年後にそれを称えて詩集の編纂さえ行ったので
ある。

しかしこのような朝鮮政府の準備と裏腹に、1602年に朝鮮を訪問した
明使顧天峻・崔廷健らは、とりわけ貪欲で私利私欲の先に立った使臣たち

であった。戦争以後朝鮮を訪ねた明使たちはほとんどが朝鮮政府への銀の要求に熱を上げたが、その始まりが顧天峻たちだと言われている。⁴⁵当時顧天峻たちの収奪によって、朝鮮民衆と政府は深刻な財政的困難に陥った。一方、顧天峻と崔廷健の詩才については特に言及されたものがない。⁴⁶この時に編纂された『皇華集』を見ても一冊分に過ぎず、そこに載せられた詩文も顧天峻 10 篇、崔廷健 18 篇の計 28 篇と、非常に少ない分量である。⁴⁷このような状況を見ると、この時の明使たちとは期待したような文学交流をほとんど行えなかったと考えられる。

しかしこの時の明使臣団に文学に関心のある人物が随行員として参加しており、彼らとの間に文学交流活動が行なわれたことがあった。使臣団の護衛将帥として朝鮮に來た遊撃丘坦(字長孺、麻城人)がその代表的な人物である。彼は武官の身分であるが文学に関心が深く、書道でも名高かったと言われる。丘坦については遠接使李廷龜の次のような記録がある。

* 李廷龜『月沙集』卷 41「八憶詩跋」

記壬寅春、顧侍講頒詔東韓也。有以詞華墨妙、延譽於行中者曰、麻城丘公、楚之良也。詩出而鏗然有聲、酒間揮灑、龍蛇滿座。東韓之人爭奔走焉、紙爲貴…(中略)…觀公詩、泱泱乎騷・雅之餘、讀公文、颯颯乎秦漢之遺、觀公筆、豐豐逼鍾・王。其所謂扶輿清淑之氣鍾而爲魁奇挺特之才者、捨我公其誰。

記憶では壬寅の年(1602)の春、顧天峻が詔勅を頒布しに東韓に來た。その一行の中に文章と書道で名声をふるう人がいた。麻城の丘

⁴⁵ 「韓明基(1997)」(33～55 頁)参照。

⁴⁶ ただし、当時館伴として顧天峻を接待した沈喜寿は、顧天峻の人格には問題があるが詩文だけは立派だと肯定的な評価を下している。顧天峻も翰林院所属文官であり、相当な水準の詩才を持っていたようである。それについては『宣祖実録』163 卷「36 年 6 月 2 日」を参照。[上曰、天使能文章乎。喜壽曰、雖不多作、必能手也。不可以其人、而廢其所長。上曰、副使文字何如。喜壽曰、不及上使遠甚。渠雖無狀、庸奴副使。稷曰、顧云不須賂副使。其無忌憚、甚矣]

⁴⁷ 本稿では 奎章閣に所蔵されている『皇華集』を参照した。奎章閣にはこの時期に編纂された『皇華集』が 3 種(請求記号「奎 1987」・「奎 2001」・「奎 3672」)所蔵されている。3 種とも 1 冊(43 葉)で、序文は沈喜寿が作成したものである。

公という人で、楚の賢良だという。詩を詠ずると金石の音が響くように、酒席で筆を振ると、竜蛇が一座に満ちるようであった。東韓の人々は争って筆跡を求め、そのために紙が値上りするほどであった…(中略)…公の詩を見ると、その深く広いさまは『楚辞』や『詩経』の余韻を引き、公の文を読めば、その美しいさまは秦漢の遺風を残し、公の筆跡を見れば、鍾繇・王羲之に匹敵している。山河の清い気運が集まって魁奇挺特な才になると言われるが、それは我公[丘坦]でないとしたら誰なのか。

明将に書いて与えたものだったので実際より誇張されたところがあるが、それにしても丘坦が相当な詩才を持っていたことと、朝鮮文人たちと詩文と書道作品を取り交わしたということは確認できる。丘坦は本来文学に関心を持っていた人物で、朝鮮を訪問した機会に、朝鮮文人たちと交流しながら熱心に朝鮮の漢詩文を収集したと言われている。⁴⁸

丘坦は特に李廷龜と深い親交関係を結んだ。李廷龜は病気で遠接使を辞任したが、すぐ平壤迎慰使に任命され、平壤で明使臣団を迎えることになった。その時初めて丘坦と出会い、筆跡と詩文を贈られるなど、親交を結ぶようになったのである。この時の出会いが縁となり、十数年後の1616年に李廷龜が明に使行した時は、丘坦に手厚いもてなしを受けることになった。その時丘坦は遼東鎮江の遊撃であったので、李廷龜は遼東を通過する度に丘坦に会えたのである。

丘坦は李廷龜に詩文を見せてほしいと頼み、それに応じて李廷龜は使行中に作った詩文を集めた『朝天録』を見せた。それを読んで丘坦は、「月沙の詩の前に、風雲月露はその変を隠すことができず、水石花鳥はその情を隠すことができない。経史の素養は文辞の發揮を助け、典雅な規範はおのずから機軸となり、人口に膾炙して一家を成している。これより美しい言葉がどこにあるのか」と李廷龜の作品をほめたたえる序文を書いてくれ

⁴⁸ 「金城南(2002)」(67～8頁)にある、潘之恆(明)の「朝鮮慧女許景樊詩集序」(『聚沙元倡』)引用文参照。「丘長孺充使朝鮮、見其君臣日耽遊詠、按節淒楚、多亡国之音。」

たのである。⁴⁹当時丘坦がこのように熱心に李廷龜と交流したのは、「中江開市」と「人蔘交易」の許可を朝鮮政府に求めるためでもあった。⁵⁰このように政治的問題を解決するために文学交流が利用されたことも、この時期の文学交流活動が持つ重要な特徴だといえる。

以上で、壬乱以後初めて朝鮮を訪問した文官使臣顧天峻たちの接待活動について見てきた。この時の明使たちとは文化交流の方面で大きい成果が得られなかったとしても、朝鮮政府は 20 年ぶりの文官使臣を迎え、最高の文人たちを厳選して接待団を編成したことが確認できた。また使臣以外にも、使節団の中で文学に関心がある人々がいて、彼らとの交遊を通じて両国の間に文学交流が成り立ったことが考察できた。

2) 1606 年朱之蕃・梁有年接待

1605 年に明皇帝の元孫が誕生すると、明朝廷は周辺国にそのことを知らせる使臣を派遣した。その時朝鮮に派遣されたのは、正使翰林院修撰朱之蕃・副使刑科都給事梁有年であり、皆文官であった。朱之蕃は 1595 年科挙に状元で合格し、当時焦竑・黄輝とともに明文壇で高い文名を誇っていた人物である。朝鮮政府では、朱之蕃が来る前から明を訪れたことのある人々に尋ねて、朱之蕃の人物とその詩才・学識などについて把握していた。

* 『宣祖実録』195 卷「39 年(1606)1 月 23 日」

上曰、今此天使、有名之人乎。未知何如人也。李好閔曰、朱之蕃乃乙未年壯元也。天朝科舉、不如我國、壯元必擇而爲之、非有名則

⁴⁹ 丘坦に序文を書いてもらった状況については、『月沙集』巻 34 の丘坦と取り交わした書簡等及び「附丘遊撃序稿」を参照。「風雲月露、莫或匿其變也、泉石花鳥、莫或藏其情也。經史佐其發揮、典雅自爲機軸、膾炙人口、成一家言、言孰美焉。」

⁵⁰ これについては『月沙集』巻 34 の丘坦と取り交わした書簡等を参照。また光海君朝の遼東地方衙門らの「中江開市」再開要請問題に関しては「韓明基(1999)」(205～214 頁)参照。

不得爲之。以此見之、亦知其非尋常之人也。且中朝之人有新作書冊者、使此人爲之序云。臣頃見李德馨、則德馨云、中原之人數學士文章、只稱焦竑・黃輝・朱之蕃三人。蓋有名之人也。

国王が言った。「今回の明の使者は有名な人物なのか？どんな人物かまだ知らないのだ。」李好閔が申し上げた。「朱之蕃は乙未の年の科挙の首席であります。中国の科挙は我が国と違って、首席は必ず先に決めて選ばれるものですから、有名でなければなることはできません。このことから、彼が世の常の人ではないことがわかります。また中国で新しく書物を作った人がいると、朱之蕃に序文を作らせると言います。私が最近李德馨に会って聞いたら、彼が言うには、中国の人が学者と文章家を数え上げる時は、焦竑・黃輝・朱之蕃、この三人のみ名を挙げるのだそうです。きっと有名な人物なのでしょう。」

当時明文壇では科挙の首席を決める時、既に知られていた文人から選ぶのが慣例であった。朱之蕃は科挙の状元になるほど明文壇で有名な人物であり、その他書画にもかなりの才能を持つと言われていた。⁵¹そのように詩文と芸術方面で優れた才能を持つ文人が朝鮮を訪れるということは、文化交流を重視した朝鮮文壇にとって大きな喜びだったのである。そうした朝鮮文人たちの期待に応え、朱之蕃は朝鮮に入ってから朝鮮文人と気さくに付き合い、活発な交流活動を展開した。

* 尹國馨、「甲辰漫録」（『大東野乘』）

乙巳冬、皇元孫誕生、播告天下。朱之蕃爲正使、梁有年爲副使。丙午四月、始至我國、朱嗜飲喜詩、且能額字。與我國宰樞遊宴、有同儕輩、至如戲拏。人有請額、則無論貴賤、便卽揮灑。筆

⁵¹ 『宣祖実録』202 卷「39 年(1606)8 月 6 日」：上曰、文章可比何人歟。根曰、勝於龔用卿矣。此翰林中能文者也。名過於才、故天朝之人問能文者、則言必稱朱翰林。上曰、書法亦何如。根曰、若致意書之、則好矣。至義州、寫壽福康寧四字、送于臣行、大概有才者也。上曰、亦知畫格云然耶。根曰、畫格、無不知之矣。觀其所畫、則未必好矣。

迹幾遍於中外人家窓壁、至有以碑碣請者、無不應之。

乙巳の年(1605)の冬に、皇帝の元孫が誕生し、天下にそのことを広く知らせることになった。朱之蕃が正使に、梁有年が副使となった。丙午の年4月に、我が国にやって来た。朱之蕃は酒が好きで詩を楽しみ、また扁額の字もうまく書いた。我が国の宰相たちと宴会した際、同輩の者がいれば、つかみあって遊ぶほどだった。額の字を請う人がいると、貴賤を問わず、すぐに筆を振って書いた。彼の筆跡は国内外の人家の窓や壁のほとんどすべてに広がり、その上碑碣を請う人がいれば、応じないことはなかったのである。

書や絵画の高い実力を持っていた朱之蕃は、使行期間中に多くの書画作品を残し、朝鮮国王だけではなく自分と交流した文人たちにもしばしば贈った。また彼の名声を聞いて書を求める朝鮮文人たちにも喜んで書いて与えた。⁵²

朱之蕃が朝鮮に贈った絵画作品としては、代表的なものに『千古最盛帖』がある。『千古最盛帖』は歴代中国名家らの詩文の内容を描き、また原文を筆写して帖としたものである。⁵³朱之蕃はこの作品の初本を国王宣祖に捧げ、副本を朱之蕃の接待責任者であった遠接使柳根に贈った。以降この画帖は朝鮮画壇で大いに人気を得て、許篈(1548～1612)が李澄に作らせた模本など、朝鮮後期に至るまで何度も模本が作成されたといわれる。他にも朱之蕃は文徵明の『衡山石刻帖』を許筠に贈り、明の画風を朝鮮に伝えるのに大きな役割を果たした。文徵明と朱之蕃は明代江南地方の「呉派画風」の影響下にあった人物で、⁵⁴これらの作品がきっかけとなり、朝

⁵² 書画に関する朱之蕃の行績については、「金弘大(2004)」(272～282頁)参照。

⁵³ 『千古最盛帖』の編纂経緯については、柳根の「千古最盛跋」(『西垞集』巻6)と許筠の「千古最盛後」(『惺所覆瓿藁』巻13)、許穆の「模朱太史十二畫貼図書序」(『記言』巻29)などを参照。

⁵⁴ 許筠『惺所覆瓿藁』巻13「題石刻諸経後」：衡山文先生徵明、書法爲国朝第一、與右軍大令、趙吳興相埒。王元美稱古今四大家者、良不誣也。

鮮画壇にも呉派の画風が本格的に伝わったと言われている。⁵⁵

朱之蕃は文学方面においても、朝鮮文壇に明文学を積極的に紹介した。朱之蕃を接待した朝鮮文人たちは朱之蕃を通じて、明文壇についての生き生きとした話を聞くことができた。特に従事官として朱之蕃を接待した許筠は、朱之蕃の朝鮮滞留期間中一緒に暮らしながら、朱之蕃から当時の明文壇の様々な事情を聞くことができたのである。

* 許筠「丙午紀行」（『惺所覆瓿稿』卷十八）

九日、留受宴。招余入話良久、余因問曾見弇州否。上使曰、癸巳春、⁵⁶往太倉請益於弇州公。時以南大司寇致仕、貌不中人、眼炯如花。園築考古、博古等堂、聚詩社友門徒賦詩、飲酒終日、日飲五六斗不醉。人有求詩文、令侍婢吹彈而謳、伸紙輒成。問學問文章功程、則曰、吾輩少日妄喜王・陸之新音、到老看之、考亭訓四子爲第一義、可自求於此矣。文章則人人不可爲李于鱗。先秦西京文・漢魏古詩・盛唐近體、雖不可不讀、而蘇長公詩文、最切近易學也。吾亦以白傅蘇詩爲法矣。余問方今翰閣能詩者孰誰、曰、南師仲・區大相・顧起元俱善矣。有兵部郎謝肇淛詩、酷造大復之域矣。

9日、そこに泊まって饗応を受けた。私を招いてしばらく話をなさっていたので、私が弇州[王世貞]に会ったことがあるかと尋ねた。上使は言うに、癸巳年(1593)の春に、太倉に行って弇州に教えを請うたことがある。当時は南大司寇の職を退かれ、そのすがたは常人ではなく、眼は輝き花のようであった。庭園には考古堂や博古堂などを建て、詩社の友人や門徒を集めて詩を作り、終日酒を飲み、日に五、六斗を飲んでも酔わなかった。詩文を求める人がいると、侍女に笛を吹き琴を弾いて歌わせ、紙を広げればたちまち完成した。

⁵⁵ 朱之蕃の朝鮮訪問以降、朝鮮画壇に呉派画風が伝わった状況については、「柳ミナ(2005)」(73～116頁)参照。

⁵⁶ 実際の王世貞の没年は「1590年」であり、この記録は誤りである。

学問や文章の上達方法について問うと、言うに、私たちが若かった時には王守仁・陸九淵の新しい学説をやたらに好んだが、年をとって見たら、朱子の四書を最も根本におくと、そこから自ずと得られるのだ。文章は誰もが李于鱗[李攀龍]になることはできない。先秦・西京の文章と漢・魏の古詩、盛唐の近体詩なども、読まないわけにはいかないが、蘇長公[蘇軾]の詩文が、最も近くて学びやすい。私も『白伝蘇詩』を規範にしている。

また私が現在翰林で詩が上手なのは誰かと尋ねると、言うに、南師仲・區大相・顧起元などは皆上手だ。兵部郎の謝肇淪の詩は、何大復[何景明]の境地に至っている。

引用文のように、許筠は朱之蕃に16世紀後半の明文壇の大物であった王世貞に関する事、明の学問や文章の学び方、当時の明文壇で注目されていた文人たちのことなどを尋ねている。

また朱之蕃は許筠に、当時明文壇で流通していた書物を贈った。当時許筠が受けたものには、先の『衡山石刻帖』(明、文徵明)と『世説刪補』・『古尺牘』・『詩雋』などがある。文徵明は王世貞が高く評価した書画家であり、また『世説刪補』は王世貞が自ら編纂した書物であった。⁵⁷このような書籍を紹介したことや、引用文で王世貞について好意的に言及していることなどを考えると、朱之蕃は王世貞にかなり傾倒していたことが窺える。朱之蕃との出会い以後、許筠は王世貞を中心とする前後七子の文学論を本格的に耽読するようになるが、それもこの朱之蕃との交流に関係していたと考えられる。

朝鮮滞留中、文学交流として朱之蕃が最も活発に行ったことに、詩文酬唱がある。朱之蕃は詩を作ることが好きで、朝鮮に入ると旅程中に作った詩を遠接使に見せて応答詩を求め、その後も行く先々で多くの詩を残したのである。朱之蕃の直前に朝鮮を訪問した文官使臣の顧天峻・崔廷健が

⁵⁷ 『世説刪補』は『世説新語補』のことであり、1556年王世貞が劉義慶(南朝)の『世説新語』と何良俊(明)の『語林』を刪定し、改めて編纂したものである。詳しくは王世貞の『弁州四部稿』巻71「世説新語補小序」参照。

銀の収集に熱中していた様子と比べて、「五峯（李好閔：顧天峻の接待使）は身を勞し、西垞（柳根：朱之蕃の接待使）は心を勞した」と評されるほどであった。⁵⁸この時期に編纂された『皇華集』を見ても、⁵⁹正使朱之蕃は259篇を残し、歴代の明使たちの中で最も多い作品を残している。また副使梁有年も99篇にのぼる作品を残し、この時の明使による作品数は計358編となっている。それは1537(中宗32)年に訪問した龔用卿らの453篇(正使龔用卿:241篇、副使吳希孟:212篇)以降では、最多の作品数であった。

60

また、朱之蕃は朝鮮の漢詩に対しても大きな関心を示した。彼は朝鮮へ来る前から既に北京で『皇華集』を手に入れており、朝鮮に入ると許筠に李荇・鄭士龍・李珥の詩集を求めた。また他にも、許筠と朝鮮政府に対し、歴代朝鮮詩選集の編纂を頼んだりしている。その要請にこたえて、許筠は新羅の崔致遠以下124人の詩840篇を集め、4冊の詩選集を作って贈呈した。⁶¹また遠接使柳根も急いで著名な朝鮮詩人を中心に歴代朝鮮詩選集を編纂し、朱之蕃に贈った。この時朱之蕃は朝鮮の詩文を収集したばかりでなく、それを読んで中国の詩と比べ、朝鮮漢詩の優秀さを評価し、各詩人の長所短所を適切に分析したりもした。⁶²

その上、朱之蕃は朝鮮の詩文集を中国に持ち帰り、明文壇に紹介した。

⁵⁸ 許筠『惺所覆瓿藁』卷24、「惺翁識小録」下：李五峯僕顧・崔、苦於需求、柳西垞接朱・梁、困於酬唱。汝章曰、五峯勞力、西垞勞心、人皆謂然。

⁵⁹ 奎章閣にはこの時期編纂された『皇華集』が6種(請求記号「奎1976 v.1-6」・「奎2878v.1-6」・「奎3565 v.1-6」・「奎3567」・「奎11537」)所蔵されている。6種とも6冊から成り、序文は申欽が作成したものである。

⁶⁰ 「申太永(2005)」25頁の「皇華集詩文数一覧表」を参照。

⁶¹ 許筠『惺所覆瓿稿』卷18「丙午紀行」：初五日…夕。書本國人詩自孤雲[崔致遠]以下百二十四人詩八百三十篇爲四卷、粧廣作兩件、呈于兩使。上使給綠花段一疋、息香千枝、副使給藍花紗一端、太平廣記一部。

⁶² 許筠『惺所覆瓿稿』卷18「丙午紀行」：初六日、留開城。宴散、上使招余評本國人詩曰、孤雲詩似粗弱、李仁老・洪侃最好矣。李崇仁嗚呼島、金宗直金剛日出、魚無跡流民歎最好。李達詩諸體、酷似大復[何景明]、而家數不大也。盧守慎強力宏蕃、比峇州[王世貞]稍固執、而五律深得杜法。李穡諸詩、皆不逮浮碧樓作也。吾達夜燃燭看之、貴國詩、大概響亮可貴矣。因高詠李達漫浪歌、擊節以賞。

許筠の姉であり朝鮮最高の女性詩人と呼ばれていた許蘭雪軒の作品に大きな関心を持ち、明文壇で紹介したこと、⁶³崔慶昌・白光勳の詩集を見て、それを江南で印刷し優れた朝鮮詩文を中国に伝えようと言ったことなどがその例である。⁶⁴その結果、朱之蕃以後朝鮮を訪問した明使たちが、朱之蕃から聞いたと言って『蘭雪軒集』を求めることもたびたび見られた。朱之蕃が明文壇に朝鮮漢詩を紹介し、朝鮮文化を伝えたことについては、第三部でさらに詳しく扱うことにする。

文学交流に関する朱之蕃の活躍はこれにとどまらず、北京に帰ると、彼は使行期間中に自分が作った詩文及び朝鮮文人たちと酬唱した詩を集めて『奉使朝鮮稿』という詩文選集を刊行した。⁶⁵『奉使朝鮮稿』には朱之蕃の詩文以外に「東方和音」という部分があり、そこに朱之蕃と詩を取り交わした朝鮮文人たちの作品が記載されていた。ここを見ると、遠接使柳根を含めて柳永慶・李光庭・徐涪・許箴・韓浚謙・申欽・尹昉・李志完・趙希逸・許筠・宋言慎・鄭昌衍・洪履祥などの作品が載せられている。

この時、朝鮮文人たちと交わした詩文を集めて書物を編んだのは朱之蕃だけではなかった。副使である梁有年も明に帰ると、使行日程を書いた記録とやりとりした漢詩を集めて『使東方録』という詩文集を編纂したのである。⁶⁶朝鮮を訪問した明使たちの朝鮮紀行録は以前にも何度か編纂されたことがあったが、このように正使と副使がそれぞれ記録を残すのは非常に珍しいことだった。このような点からも、この時の彼らの朝鮮訪問が朝鮮文人たちにとってのみ大きな出来事だったのではなく、明使たちにとっても文化的に深い印象を残したものだということがわかる。

以上でわかるように、朱之蕃・梁有年たちは朝鮮を訪問した歴代の明使たちの中で、文化交流の方面に最も顕著な成果を挙げた人々であった。

⁶³ 『惺所覆瓿稿』卷18「丙午紀行」：初五日…夕。書本國人詩自孤雲[崔致遠]以下百二十四人詩八百三十篇爲四卷、粧廣作兩件、呈于兩使。

⁶⁴ 李裕元『林下筆記』卷17「東人詩集之盛」：又朱天使之蕃、見崔慶昌・白光勳詩集、歎賞曰、當歸梓江南、而誇貴邦文物之盛云。

⁶⁵ 殷夢霞・于浩選編『使朝鮮録』（2003）下冊にその影印本が収録されている。

⁶⁶ 許筠、『惺所覆瓿藁』卷13「使東方録跋」：黃門還朝、編其奉使所作、附以東人和章、題曰使東方録。因節使回致于弊邑、不佞亦得其一焉。

ここで注目される点は、この時の交流が朝鮮文人たちの一方的な中国文化受容ではなく、明文人たちも朝鮮の文化に深い関心を示した「双方向の交流」であったということである。朝鮮の文人たちは朱之蕃たちを通じて、明文壇の状況をほとんどリアルタイムに伝え聞くことができた。一方で朱之蕃たちも自分を接待した朝鮮文人たちの助力によって、朝鮮の詩文と芸術作品を収集することができたのである。また明に帰ってからも、彼らは明文壇に朝鮮の文化を紹介し、それに関する記録を残して、以降の明使たちに朝鮮についての情報を提供した。このように朱之蕃の訪問は持続的かつ双方間の交流をもたらしたという点で重要な意味があったといえる。

3) 1609年劉用・熊化接伴

1608年に宣祖が崩御し光海君が即位すると、明朝廷では1609年に二回にわたって使臣団を派遣した。宣祖の諡号を授ける使臣団と、光海君を王として冊封する使臣団の二回である。宣祖の祭文と諡号及び賻儀を持って来た使臣は、文官出身である行人熊化であった。また光海君を冊封する詔書を持って来たのは宦官出身の太監劉用であった。彼らは二人とも4月に朝鮮に入ったが、熊化が先に入り、続いておよそ二十日後に劉用が入ったのである。⁶⁷このように同じ時期に二つの別の使臣団が派遣されてきたため、朝鮮朝廷もそれに合わせて入念に接待の準備を行った。

当時それぞれの使臣団接待を担当した人々を見ると、副使熊化の遠接使には柳根、正使劉用の遠接使には李商毅が任命されている。また従事官として柳瀟と許筠が選ばれ、他にも平壤迎慰使に申欽が、館伴使に李廷龜が選出された。彼らは皆以前の使臣団接待にも活躍した人物たちであり、当時文章で名を上げ、対明外交の第一線に立って活躍した人物たちであった。

⁶⁷ 彼らの朝鮮滞留期間中の行跡については、当時従事官として接伴に参加した許筠の記録(『惺所覆瓿藁』巻19「己酉紀行」)を参照。それによると、熊化は鴨緑江を4月7日に渡り、劉用は4月24日に渡って朝鮮に入って来たのである。

前節の顧天峻の事例でも触れたように、17世紀の明使たちは朝鮮でしばしば銀の収集に没頭し、朝鮮政府から多くの銀子を持ち帰った。この時も正使劉用は、朝鮮で10万両の銀子を集めると壮語して朝鮮に入り、結局6万両に至る銀を手に入れて帰った。⁶⁸それに反して熊化は文士としての態度を崩さず、朝鮮文人たちにはるかに良好な印象を与えたようである。⁶⁹したがって当然のように、この時の文学交流は熊化を通じて行われた。当時の『皇華集』を見ると、熊化は51篇の詩と11編の文、総計62篇の作品を残している。⁷⁰前節の朱之蕃と梁有年に比べると、それほど量が多いとは言えないが、平均以上の作品を残したと考えられる。

熊化も朝鮮文人たちの詩を読んで非常に感心し、中国の作品と比較しながら高く評価した。尹根寿の詩について、明代前後七子の水準まで行ったと言い、「規範にかなって温雅であり、高ぶり叫ぶような習癖を一度に洗い流してしまう」とか、「文章も内容も正確であり、昔の優れた史官の気風がある」などと称賛したのがその例である。⁷¹熊化は朝鮮に滞在中、朝鮮文人たちと形式的な交流以上の深い親交を結んだ。その代表として、当時館伴であった李廷龜との交遊が挙げられる。

* 李植『澤堂集』別集卷6「月沙李相國墓誌銘并序」

熊天使之来、公爲館伴。熊使敬重公言、必称先生。評其詩云、字字唐人魄。臨別出涕、請序皇華集、以爲寶玩。

明使の熊化が来ると、公が館伴になった。熊化は公の言葉を尊重

⁶⁸ 17世紀明使たちの銀収集の状況については、「韓明基(1999)」(214~223頁)参照。

⁶⁹ 尹国馨、「甲辰漫録」：熊化則以文士自處、雖持己不能如冰蘖、大概無混雜不謹事、比於壬寅之顧・崔、不啻霄壤、亦勝於丙午之朱・梁也。

⁷⁰ 奎章閣にはこの時期編纂された『皇華集』が多く所蔵されている(請求記号「奎1996」・「奎2004」・「古貴811.5-H992g」・「奎3675」など)。全てが1冊(62張)で成り、序文は李廷龜が作成したものである。

⁷¹ 金尚憲『清陰集』卷15「祭月汀先生文」：皇明勅使極峯熊公、文雅正士、見先生文稿極稱之曰、典則温雅、一洗激詭叫咷之習、曰文核事該、有古良史氏之風、曰詩澹雅沈鬱、得作者之體、曰與北地・琅琊・濟南・新安諸名家竝列。識者皆謂非誣、是豈盡私於先生歟。

し、いつも公を先生と称していた。公の詩について評するに、一字一字に唐詩人の魂がこもっているといった。別れに臨んでは涙を流して、『皇華集』の序文を公に頼み、それを宝物のように扱った。

文学交流に注目して李廷龜と熊化の交遊を見ると、熊化は李廷龜の詩を「一字一字に唐詩人の魂がこもっている」と高く評価し、自分の『皇華集』の序文を依頼している。また熊化が李廷龜の頼みを受けて、『淮陽詩帖』の序文を書いたこともあった。『淮陽詩帖』は李廷龜と淮陽の詩板にまつわる奇縁を記念して、李廷龜の親友たちが作った詩を集めた詩帖である。李廷龜はこのことに深い思い入れを抱き、美談として後世に伝わるよう願っていた。そうした意図のもと、李廷龜は明使熊化に序文を請い、熊化は彼の頼みを受けて喜んで序文を書いたのである。⁷²

熊化と李廷龜の交流はこれだけにとどまらず、数年後 1616 年に李廷龜が明に使用した時も北京で再会するなど、長年にわたって持続的に行われたのである。明に行く前から李廷龜は熊化に手紙を送って自分の近況を知らせ、北京へ着いても連絡を取り交わし詩文を交換していた。⁷³熊化との交流は文学方面のみにはとどまらず、李廷龜は熊化との親交を通じて、使行の目的であった朝鮮政府の要求を明朝廷にうまく伝え、その問題を解決することもできた。このように李廷龜と熊化の交遊は、李廷龜の弟子崔有海が「中国人たちが心を開いて誠意を見せ、文学によって義を結んだということでは、李廷龜と熊化の交際のようなものはいまだかつてなかった」と言うほど、⁷⁴明と朝鮮の文人交遊において最も深い友情を誇るものだった。そのように両国文人の間に「私的」な交流が成り立ったことも、使者接伴活動がもたらした重要な成果の一つといえるだろう。

この時期に明使接伴活動を通じて生じた文学交流でもう一つ注目すべきものに、正使劉用の随行員であった徐明・田康・楊有土と、遠接使李商

⁷² 『淮陽詩帖』に関することは、『月沙集』巻 34 の熊化とやりとりした書簡等と、巻 39 の「淮陽詩板重懸序」を参照。

⁷³ 『月沙集』巻 34 の熊化と取り交わした手紙文などを参照。

⁷⁴ 李廷龜『月沙集』「別集」巻 7「附録遺事」(門人崔有海述): 華人開心見誠、以文字結義者、未有如月沙・熊公之交際云。

毅の随行員であった許筠の間の交流がある。この事例によって当時の両国文人たちの交遊が、使臣と遠接使という責任者の間に成り立っただけではなく、その下で実務を担当した人々の間にも活発に成り立っていたことが確認できる。中でも徐明は、正使劉用が特別に推挙して連れて来た人物であり、明使臣団で文書と礼儀に関する事務を統括した人物であった。⁷⁵許筠もその文才が認められて遠接使李商毅の推薦を受け、従事官に抜擢されて接待団の文書に関する事務を担当していた。⁷⁶これらを考えると、彼らの交流には文学が大きな役割を果たしていたと容易に想像できるのである。実際、徐明は当時の明文壇の事情に詳しく、また朝鮮の詩文にも深い関心を示していた。

許筠と徐明たちは使臣劉用が朝鮮に滞留した数ヶ月間、生活を共にしつつ交流する機会を持った。特に許筠は明文人と直接接触できる貴重な機会として、彼らを酒席に招待したりしながら、明文壇についての新鮮な情報を手に入れようとしたのである。また明文人の方も朝鮮と中国の文学に広い知識を持つ許筠との交遊を喜び、中国の消息だけでなく自分たちが使行で訪れた安南や西域国の事情も許筠に話して聞かせた。また彼らは互いに書物や土産品などを贈りあって、その友情を深めたのである。

* 許筠『惺所覆瓿藁』卷19「己西西行紀」

十二日、発順安。熊使與劉使相見於路左而行、至平壤。夕、徐・田・楊致禮物俱優。余乞於方伯、以蓼紙弧刀報之…(中略)…廿八日、至黃州受宴。徐・田・楊三公小酌于鄙寓…(中略)…余又問文章孰為第一。徐曰、自太倉・新安之仙去、海内部署文章者無人焉。屠赤水隆・黃葵陽洪憲有盛名於東南、此外謝郎中肇・區洗馬大相・顧編修起元、為後来之秀。徐又言、曾從黃太史輝使安南、其國亦解文、為詩者甚多。率佻淺不及貴國詩之敦厚典麗。

⁷⁵ 許筠『惺所覆瓿藁』卷19「己西西行記」：使看訖、即招帶來監生徐明、出謝于使。明乃舉人、而居于紹興府山陰縣、聽選在京、劉使奏帶以來、凡文書禮貌間事皆主之。

⁷⁶ 許筠『惺所覆瓿藁』卷19「己西西行記」：二月初吉日、劉太監遠接使李公尚毅舉余為従事官、上命改書狀而令從李公行。

12日、順按を出発した。明使の熊化と劉用が道で行き逢って、平壤に到着した。夕方に、徐明・田康・楊有土が礼物を贈ったが、全て良いものであった。私は方伯に頼んで、高麗人参・紙・弓・刀を以て応えたのである…(中略)…28日、黄州に至って饗応を受けた。徐・田・楊三公と私の宿所でささやかな酒席を持った…(中略)…私はまた文章は誰が一番なのかと問うた。徐明が言うに、太倉王世貞と新安李攀龍が死んでからは、国中に文章を引き受ける者がいないのです。赤水屠隆と葵陽黃洪憲が東南の方で名をあげて、この他では郎中の謝肇と洗馬の区大相、編修の顧起元がその後の秀才といえます、と言った。徐はまた言うに、前に太史黃輝に付いて安南に使行したことがあり、その国にも文章を解し詩を作る人は、非常に多かったのです。しかしほとんどが浅薄で、貴国の詩の敦厚典麗には及びませんでした。

このように許筠は徐明を通じて明文壇の状況だけではなく、朝鮮文人が行けない安南や西域国などの異国の話も聞いて知識を広げることができた。また徐明も許筠を通じて朝鮮漢詩に関する様々な情報を得たり、朝鮮文人たちの詩文を手に入れたりしたのである。このように許筠と徐明は使行の期間中互いに情報を取り交わし、相手の文壇事情を間接的にでも把握しようと熱心であったのである。

彼らの交流でまた注目されることは、徐明が朝鮮に来る前、北京で陶望令という人から許筠と許蘭雪軒に関する情報を得ていたということである。陶望令は朱之蕃から、許蘭雪軒の詩は天下絶品であり、朝鮮に行ったら必ずその詩集を手に入れて来なければならない、と言われていた。それをまた陶望令から聞いた徐明は、朝鮮に入って許筠に会うと喜んで『蘭雪軒集』を求めたのである。⁷⁷ここでも1606年の朱之蕃の朝鮮訪問が一回

⁷⁷ 許筠『惺所覆瓿藁』卷19「己酉西行紀」：初十日。朝、劉使致礼、於使物及余二人。紵糸・香扇・書冊等物甚優。夕抵肅寧。徐明来言、在北京見陶庶子望齡、言曾見朱官諭之蕃、道東国有許某者、其姊氏詩、冠絶天下。你之彼、須求其集以来。都監乃斯人也。有集在否。余即出藁中一部以給。

限りの交流に終わらず、彼を通じて明文壇に朝鮮文壇の消息が伝えられ、それがまた次の明使臣団の人々に朝鮮に関する情報として提供されていた様子が確認できる。

以上で、この時期の明使接待活動を通じて両国文人が形式的な交流を越えた友情を結び、両国使節団の随行員らの間にも活発な交流が成り立っていたことについて考察した。それはまた明使臣団の朝鮮訪問がその時だけの事件ではなく、次の使行と朝鮮文人の明使行にまで持続的な影響を与えていたことを意味している。

* 結びに

本章では壬乱直後 1601・1606・1609 年の三回にわたって派遣された文官出身の明使の朝鮮訪問に注目し、その意義の考察を試みた。当時の明使と朝鮮接待使の文学交流を見ると、彼らの交流は一国から一国への一方的な文化伝播ではなく、両国文人がそれぞれ相手の文化に関心を持つ「双方向の交流」であったことが特徴である。朝鮮文人たちは明使臣を接待する過程で、明文壇に関する情報をリアルタイムで聞くことができ、明文壇で流行する書物も手に入れることができた。明使たちは接待を担当する朝鮮文人たちを通じて、歴代の朝鮮詩文を集めたり、朝鮮の書画作品を手に入れたりすることができた。

この時の交流の最も意義深い点は、彼らの交流が一時的なものにとどまらず、明使臣の帰国後も続く「持続的交流」であったことである。許筠と朱之蕃、李廷龜と丘坦・熊化の交遊はその良い例である。彼らは接待をきっかけにして、長年にわたり形式的な交際を超えた親交を重ねることができた。そしてそれはさらに両国の文化交流において持続的な影響を与えたのである。

17 世紀以降、明文学は朝鮮文壇においてかなりの影響力を持ったが、その背後にはこのような 17 世紀初頭の両国文人たちによる交流活動があり、重要な契機の一つとなっていた。ここに、17 世紀初頭の文官使臣接待が文学交流の歴史の中で果たした大きな意義があるといえるだろう。

第二章. 朝鮮文人の明使行と文学交流活動

* 始めに

「朝貢関係」を結んでいた明と朝鮮において、外交活動は使節団の交換を通じてのみ行われた。⁷⁸したがって、使行と使臣接伴は両国文人が交流できる唯一の機会であった。ところが、使節団派遣の回数には両国の間に大きな差があり、朝鮮の場合1年に3、4回の派遣が慣例であったのに、明は3年に1回の派遣を原則にしていた。つまり同じ期間内に、朝鮮からの派遣回数は明からのほぼ3倍を超えるのである。すなわち、朝鮮は国初から宣祖年間(1567～1608)までの約200年間に、569回にのぼる使臣団を派遣したが、明は186回の使臣団を派遣するにとどまったのである。⁷⁹また前章で考察したように、明は大部分が宦官の使臣を派遣したが、朝鮮では当時最高の文章家を厳選して派遣した。このような点から、使行を通じての交流は明よりも朝鮮にとって大きな意味を持っていたと言えるだろう。

中でも本稿で注目する17世紀前半においては、日本の朝鮮侵略、後金の登場など国際秩序の変化によって、明と朝鮮の間にさまざまな外交問題が重大な事案として浮上してきた。そこで両国は頻繁な外交使節のやりとりを行い、相互の交流が活発化した。当時明使行は朝鮮文人にとって明文壇の状況に触れ、また書籍を入手する唯一の通路であったため、この時期の頻繁な使節団派遣は文化面においても、交流を促進する役割を果たしたのである。

以上のことから、本稿では1592年の日本との戦争開始以降、後金の登場で明との外交関係が複雑になった宣祖末期、そして光海君時代に至る17世紀前半を中心に、明使行を通じた両国間の文学交流活動について考察することにする。

⁷⁸ 「全海宗(1970)」(2～8頁)参照。

⁷⁹ 「申太永(2005)」(21～22頁)参照。

1. 明使行を通じた文学交流の背景

まず朝鮮時代の「対明使行」について、基本的なことがらを簡単に整理しておく。⁸⁰対明使行は、北京に使臣を送る「赴京使行」と遼東に使臣を送る「遼東使行」の二つに大きく分けられる。それはまた「節行」と「別行」に分けられ、節行は1年に3回公式に送る使節団であり、元旦に送る正朝使、皇帝の誕生日に送る聖節使、皇太子の誕生日に送る千秋使、また後に元旦の代りに冬至に送った冬至使がそれである。別行は、謝恩使・奏請使・進賀使・弁証使などのように、特別な事案がある時送る使節である。使臣団は正使・副使・書状官のように三人の使者と、その下に訳官を含め数十人の使行員たちで構成されていた。

使臣団の最も重要な任務は、外交文書の伝達と収納であった。明は国初から「人臣無外交」といい、使臣は外交活動に参加せず、外交文書の伝達とその答書を受領する役割のみ担当し、全ての外交活動が文書を通じて行われるような外交政策をとっていた。⁸¹したがって使行に携えて行く外交文書の作成が非常に重要であったし、朝鮮使臣たちの最も重要な任務も、朝鮮政府にとって望ましい内容の答書を受け取るために、外交文書作成を担当する明の礼部に諮問を送ることであった。このようにすべての手続きが文書で行われる外交手順の性格により、使臣に選抜されるための最大の条件は、優れた文章力をもつことだったのである。そのため朝鮮政府では、正使には宗親や高い官職の人物を、副使や書状官には優れた文章力を持ち、また対明関係に精通する人物を選抜するのが慣例であった。⁸²

特に16世紀末から、定期的使節団以外にもさまざまな外交問題を解決するための使臣団が頻繁に派遣されるようになった。この時期、こうした目的のために派遣された朝鮮使臣団を事案別に整理すると、次のようになる。⁸³

⁸⁰ 赴京使行に関する概括は「金暲緑(2006)」参照。

⁸¹ 「全海宗(1970)」(28～29頁)、「金暲緑(2000)」参照。

⁸² 「金暲緑(2006)」(199～200頁)参照。

⁸³ これは「林基中(2002)」(12～29頁)の「歴代燕行使一覧表」と「張徳信(2002)」

- * 日本との開戦を知らせて救援兵を要請する告急使、奏請使
 - ・ 1592年 請兵陳奏使：鄭崑壽・李德馨
 - ・ 1597年 告急使：權挾・程惟美
 - ・ 1597年 告急奏文使：鄭期遠・鄭協
- * 朝鮮が日本と内通したという誣告を弁明するための弁誣使
 - ・ 1598年 陳奏弁誣使：李恒福・李廷龜・黃汝一
- * 光海君の王位継承に関わる奏請使
 - ・ 1594年 世子冊封奏請使：尹根壽・崔岄・申欽
 - ・ 1595年 世子冊封奏請使：韓応寅・南以信
 - ・ 1604年 世子冊封奏請使：李廷龜・閔仁伯・李垞
 - ・ 1609年 告訃請諡承襲使：李好閔・李德馨・吳億齡
 - ・ 1616年 冠服奏請使：李廷龜・柳澗・張自好
- * 後金と内通したという疑心を弁明するための弁誣使
 - ・ 1620年 弁誣陳奏使：李廷龜・尹暉・柳汝恪

このように、当時は援軍派遣の要請、光海君の王位継承に関わる問題、朝鮮と日本・後金の関係における明の疑惑の解明など、複雑な外交問題に対応するために、特別使臣団が頻繁に派遣されたことが確認できる。朝鮮政府はこのような外交問題を無事に解決できるよう、当代最高の文士たちを厳選し、文書作成を含めた外交分野で活動させるようにした。

* 『宣祖実録』卷44「26年(1593)11月2日」

承文院啓曰、近日辞命之重、倍於平時、咨文掲帖、逐日填委。至於奏本、則上達天聰、解紛達情、專在於此、其重尤甚。能文之人、同議抄啓、俾專述作、以重辞命。

(171～308頁)の「朝天録史証」の資料を基本にし、また『朝鮮王朝実録』を参照して作ったものである。この他にもこの時期多様な外交的事案による使節団がしばしば派遣されたので、それについては今度さらに詳しい状況を確認することが必要である。

上従之。抄啓製述文官、申光弼・李魯・鄭經世・申欽・黃愼・李廷龜・李埈・安大進・李春英・柳夢寅。

承文院が申し上げた。「このごろは辞命の重要さが、平時の倍にもなり、咨文や掲帖が日々山積みになっています。奏本に至っては、上は天子の耳にも届き、紛争を解決するのも、事情を説明するのも、すべてこれにかかっており、最も重要であります。文章に優れた人々が、ともに議論して起草し、作成に専念するようにさせて、辞命を重んじてください。」

国王はそれに従った。文書作成を担当する文官は、申光弼・李魯・鄭經世・申欽・黃愼・李廷龜・李埈・安大進・李春英・柳夢寅であった。

この時期外交方面で活躍した文章家には、引用文で挙げられた人物以外に、尹根寿・柳根・申欽・李廷龜・李晬光・許筠 などがある。彼らは「文章で宰相の位にまで昇った」といわれるように、⁸⁴その優れた文章力によって政界の高い地位を獲得した文人たちであった。⁸⁵彼らは使行や接伴という外交舞台で活躍し、それに伴って明文人と親交を結ぶ機会をもつことができた。そしてこのような親交は、文学交流活動の基盤ともなったのである。そうした活動の具体的な例として、次節では李廷龜の外交活動を中心に、文章力が外交活動と文学交流においてどのような役目を果たしたのかを考察する。

文化交流に関わって明使行がもったもう一つの役目は、「中国文物の受容」ということである。当時朝鮮は明使行を通じて中国文化や中国に流入した西洋文化を受容し、また東アジアの情勢に関する情報を入手できた。⁸⁶当時の文物受容として最も重要だったのは、中国書籍の購入であった。

⁸⁴ 李廷龜『月沙集』巻44「領議政贈諡文貞申公神道碑銘-并序」：昔公[申欽]来自金陵、一日謂余曰、我輩以文章致位宰相、今俱老矣。俯仰人世、誰知己者、吾詩子選、子稿吾序。

⁸⁵ この時期に文章家たちが文章力を以て政界に登場し、外交舞台で活躍したことについては「李喜中(1996)」(71～132面)参照。

⁸⁶ 「李元淳(1983)」参照。

本来文献国として名高かった朝鮮は、中国書籍の輸入にも積極的であり、国初から多数の書籍を輸入し、それをまた朝鮮で印刊し全国に頒布する事業を活発に行っていたのである。⁸⁷

特に17世紀には戦争によって大部分の書籍が掠奪されたり焼失したりし、国家的にも蔵書を補充する作業が急務となった。そのため政府は国内外に広く書籍を求め、書物を政府に捧げれば褒賞を与えるなど、積極的な書籍拡充の政策をとった。⁸⁸当時外国の書籍を入手するには明使行が唯一の機会であったので、書籍購入は使臣らの役目の一つとなった。このような政府の政策を背景として、この時期の使臣たちも使行中、書籍購入に熱意を傾けたのである。

* 『宣祖実録』「33年(1600)6月7日」

知中樞府事李好閔上筭。略曰、臣先侍經幄、伏見經筵進講書冊、皆經賊手、卷帙不全、不合清燕之覽。在玉河館日、広求要緊書若干帙、而官本之書、市肆間罕存。適有以四書・四經・君臣図鑑等冊来示者、臣與書狀官安宗祿相議、收拾盤纏剩數而換之。詩・書・易・礼・論・孟・庸・学・庸学或問・君臣図鑑、総七十五本、謹昧死投進。答曰、經書未得好本、嚮於赴京之行、命有司購求、有司惜費、強而後行、第未知果能得来否也。卿忽進予所求而未得者。此蓋雖聞関萬里之行、道途旅館之間、心未嘗不在於君、故其忠愛之誠、有以感通、而能獲我心如此。予甚嘉悦。

知中樞府事李好閔が文書で上申した。その大略にいう。「私が先日御進講の席に侍り、講義のための書物を拝見しましたら、みな一度は賊の手に渡ったもので、卷帙が揃わず、ご覧になるのにふさわしくありませんでした。私が北京の玉河館[使者の宿舎]にいた時、

⁸⁷ 朝鮮前期における中国書籍輸入については「李存熙(1980)」参照。

⁸⁸ 『宣祖実録』「32年(1599)8月11日」：備忘記曰、古者兵乱之後、購求遺書、其意有在。我国以文献之邦、不幸為兇賊殘破、中外書籍、蕩然無存。前者曾為下書求之、而不為広求上送、至為不當。士民之家、豈無藏置可觀之書乎。卿其更為多般広求、其中凡于東国書籍、則尤當極力求之、如書法等冊、亦竝求上送。所献之人、當為論賞事、下諭于各道。

必要な書物若干を広く求めましたが、官本の書物は、街の店にはほとんどないこともありました。ちょうど四書・四経・『君臣図鑑』などの本を持って見せる人がいたので、私は書状官安宗禄と相談し、旅費の残りをかき集めてそれを買いました。『詩経』・『書経』・『易経』・『礼記』・『論語』・『孟子』・『中庸』・『大学』・『中庸或問』・『大学或問』・『君臣図鑑』など計75冊を謹んで献上いたします。」

その答えにいう。「経書はまだ良い本が得られず、この前北京に使行があった際に、役人を買って来るように命じたが、役人は出費を惜しんで、強制しなければやらないものなので、はたして手に入れられるかどうかわからなかった。そこに君が突然、私が求めて得られなかったものを捧げてくれた。これはおそらく、たとえ異国の万里の旅にあり、路上や旅館の中にあっても、心は君王を忘れることなく、ゆえにその忠愛の真心によって暗に通じるものがあり、このように私の心がわかったのである。私は実に嬉しい。」

この時期書冊を捧げると政府から褒賞が与えられる政策により、使臣らだけではなく使行の随行員である訳官たちまでも、北京で書物を購入して政府に捧げることがしばしばあった。その一例として、1611年には訳官金義仁が個人的に『大明会典』を購入して弘文官に捧げ、国王光海君が彼の官職を上げるように命じたが、それに対して政府が、訳官が私的に品物を購入したのは法律違反であり、褒賞を求めてしたことであるので、官職を上げるのは不当だと拒否したこともあった。⁸⁹このような例からも、この時期、戦争で失われた書籍を補充する事業に、政府から個人に至るまで積極的に参加していたことが窺える。

以上のことを考えると、使節団に参加した当代最高の文章家たちが、書籍購入にいかにか熱をあげたか容易に想像できる。彼らは文章力を認めら

⁸⁹ 『光海君日記』巻40冊「3年(1611)4月8日」：伝曰、聖節使訳官金義仁、私買大明会典、納于弘文館、其誠可嘉、加資。政院啓曰、書籍、雖與他物不同、渠安敢公然私納於内閣乎。其希望汎濫之状、極為可惡。請命玉堂還給其書、金義仁推考、賞命還収。答曰、啓意具悉、但所進者書籍、而既納于玉堂、則仍施酬賞之典、有何不可。賞加承伝、速為奉行。

れて使臣に選ばれた人々で、本来文学に強い関心を持っていた。したがって個人的な関心からも、中国書籍、特に文学関係の書物を求めることに熱心だったのである。それについては後に、許筠の使行を通じてさらに具体的に考察する。

以上で、16世紀後半から17世紀前半において行われた明使行を通じての文学交流の背景について、簡単に考察してみた。この時期は定期的使節団以外にも、外交問題を解決するための特別使節団が頻繁に派遣され、そのため高い文章力を持った人物が多く使臣として活躍するようになった。彼らは使者や接伴使として活動しながら、文化交流活動も活発に展開した。また当時明使行を通じて中国書籍購入が行われたが、その過程で文学関係書籍も多数輸入された。次節からは、このような活動の代表的人物である李廷龜と許筠の例を通して、彼らの明使行と文学交流活動の様相をより具体的に考察することにする。

2. 文学交流の具体的様相

1) 16世紀末—17世紀前半における李廷龜の使行

本節では16世紀後半以降、文章力を認められ、最高の外交官として活躍した李廷龜(1564～1635)を中心に、この時期の文章家が使行を通じて行った文学交流活動の一面を考察する。李廷龜は当時屈指の文章家として名高かった人物で、宣祖・光海君年間の「漢文四大家」の一人であり、二度の大提学を歴任した人物であった。その一方で、彼は一流の外交官としても活躍し、4回にわたる明使行と7回にわたる明使接伴を果たし、明との外交において誰よりも重要な人物となった。特に彼は、当時の士大夫文人には珍しく優れた中国語の会話能力を持ち、そのため明文人との交遊により有利であったのである。⁹⁰

⁹⁰ 張維『谿谷集』卷16「左議政月沙李公行状」：公嘗直春坊、梁按察猝至闕下。宣廟蒼黃出接、御前通官未及到、政院請召公入侍、應對甚稱旨。按察亦喜曰、春坊學士、乃能解華語耶。宣廟謂承旨曰、不料李廷龜多才至此也。

では、ここで使行と接伴に関わった李廷龜の外交活動を整理すると次のようになる。⁹¹

- ・ 1593年：明将宋応昌接伴。彼の幕下で『大学』に関する朱子学と陽明学の解釈論争(『月沙集(以下省略)』巻1「三槎酬唱録」、巻19-20「大学講語」)
- ・ 1598年：朝鮮が日本と内通しているという明将丁応泰の誣告を弁明するため、使節団の副使として明使行(巻2-3「戊戌朝天録」、巻21「戊戌辨誣奏」)
- ・ 1601年：明使顧天峻と崔廷健接待(巻9-10「東槎録」、巻39「東槎集序」)
- ・ 1604年：光海君の王世子冊封を奏請する使節団の正使として明使行(巻4-5「甲辰朝天録」)
- ・ 1606年：明使朱之蕃と梁有年の接待(巻11「僊接録上」)
- ・ 1609年：明使熊化の接待(巻11「僊接録上」)
- ・ 1616年：光海君の生母である恭嬪金氏の追崇と冠服下賜を奏請する使節団の正使として明使行(巻6「丙辰朝天録」)
- ・ 1620年：朝鮮が後金と内通しているという徐光啓の誣告を弁明するため、使節団の正使として明使行(巻7-8「庚申朝天録」、巻39「朝天紀行録序」、巻63「庚申燕行録」、「別集」巻3「庚申燕行録」)
- ・ 1621年：明使劉鴻訓接待(巻11「僊接録上」)
- ・ 1622年：明使梁之垣接待(巻12「僊接録中」)
- ・ 1626年：明使姜曰広接待(巻13「僊接録下」)

李廷龜の外交能力が認められた最も大きなきっかけは、1598年の使行に際して「戊戌弁誣奏」を作成し、朝鮮が倭兵を引き入れて遼東を侵犯したと誣告した丁応泰の誣奏事件を無事に解決したことである。この時李廷龜はまだ官職が低く、本来は使臣に選ばれるはずはなかったが、国王宣祖

⁹¹ 李廷龜の生涯については「月沙先生年譜」(『月沙集』(景文社、1982))と趙翼の「行状」、張維の「諡状」、李植の「墓誌銘」などを参照。

は事案の重大さを理由に李廷龜の職級を上げ、使者に任命した。⁹²当時李廷龜が作成した「戊戌弁誣奏」は、朝鮮ではもちろん明文壇でも人口に膾炙するほどの名文だったと言われる。⁹³これ以降、李廷龜は宣祖と光海君の厚い信任を受け、⁹⁴明との外交問題が発生すると、いつも派遣されるようになった。つまり、李廷龜はその外交文書作成能力が認められて高位に昇った 17 世紀前半の典型的文人官僚であったのである。

ここで明使行に限って李廷龜の活動を見ると、李廷龜は計 4 回の使行に参加した。まずは先に述べた 1598 年の丁応泰誣告事件の時であり、それ以外には、1604 年の光海君の王世子冊封奏請、1616 年の光海君の生母である恭嬪金氏の追崇及び冠服下賜奏請、そして 1620 年には、朝鮮が後金と内通しているという徐光啓の誣告を弁解するための使行に参加した。これらを見ると、李廷龜の使行は定期使節団ではなく、外交的問題を解決するための特別使節であったことがわかる。1620 年の使行では、反対党派の弾劾を受け官職から退いていた状況であったにもかかわらず、光海君の支持を得て使臣に選ばれた。ここからも、李廷龜が当時外交官としていかに高く評価されていたのが窺える。

外交方面で李廷龜の能力が大きく認められたのは、明使臣が朝鮮を訪れた時も同様であった。1622 年、軍監御使梁之垣が朝鮮を訪問した時のことがその一例である。この時明は明と後金の間に遼東戦争が行われており、明は朝鮮に軍糧と軍隊派遣を要請したが、当時明と後金の間で中立政策を進めていた光海君は軍糧だけ支給して軍隊派遣は先延ばしにしていた。そ

⁹² 張維『谿谷集』卷 16「左議政月沙李公行状」：於是群議乃定、李相恒福為陳奏上使、請以申公欽為書狀。上曰、今之善為詞命者、莫如李某。其文章写出肺肝、醜籍典重、為人亦有計算、陞品為副使可也。明日、拜嘉善大夫工曹參判、充陳奏副使、公上疏辭、不許。

⁹³ 張維『谿谷集』卷 16「左議政月沙李公行状」：初以辨誣奏見稱於中朝、東征諸將見其奏者、每对上必稱好文章。

⁹⁴ 張維『谿谷集』卷 16「左議政月沙李公行状」：上[宣祖]曰、予固知卿有才、而不謂料敵勝負、其智若是、又能描写時勢、極陳人所惡聞之言、亦人所難能也、予自有人矣。

趙翼『月沙集』「附錄」卷 2「行状」：至於光海之世、守義不撓、為群凶所深疾、陷害百端、光海知公之才、解難天朝、非他人所能、公出輒使天朝、疑問銷積、信待如故、終始沮抑而保全之。

ここで明は梁之垣を派遣し、朝鮮に派兵を強く要請しようとしたのである。このような複雑な外交状況の下で、当時の明使接伴は「若於周旋応対之際、少有失誤之事、則国家之成敗存亡係焉」といわれるほど難しいものであった。そこで、このように大切な接伴には李廷龜が最も適任であると評価され、政治的に弾劾を受けていたにも関わらず、接伴責任者に抜擢されることになったのである。そして李廷龜は期待に応じてその仕事をうまく処理し、再び外交官としての名声を誇ることもなった。⁹⁵

一方で李廷龜は優れた詩文の実力を持ち、明文人と文学的な交遊を広げた。先に述べたように、李廷龜は中国語が上手で、明文人との交遊にはとりわけ有利だったのである。特に「戊戌弁誣奏」によって明文壇でも広く名を知られたので、李廷龜と詩文を取り交わす明文人が多くなり、交流の機会はますます増えた。次の引用文を見ると、李廷龜が明文人といかに親密な交遊関係を結んでいたのかよく窺える。

* 張維『谿谷集』卷 16「左議政月沙李公行状」

初以辨誣奏見称於中朝、東征諸將見其奏者、每对上必称好文章。
魯訥者我也、漂到江浙還、亦言南方士子多伝誦者。今歳賀節使臣
還自燕京、亦言玉田有儒生、出示公奏本、寧遠寺僧亦誦公所贈詩、
問月沙亡恙否。嘗撰楊御史碑、楊得墨本大喜、衆中誇示曰、朝鮮李
尚書文也。汪学士輝、既得公詩録行、署丞葉世賢、当奉使滇南、以
其板本自隨曰、當廣布江南、以為郷里榮耀。公嘗赴燕、鎮江守将丘
坦聞公至、出候道左、設綵棚供張以迎。熊御史化、請公宴于其第、
執礼甚恭。其為華人所敬慕如此。

⁹⁵ この時期について詳しいことは、李廷龜の『月沙集』卷 12「僨接録中」の序文に付いた註を参照：備局啓曰、大臣之職、當以人事君、先王朝李德馨等、皆極一代之選、能贊中興之業。今此梁監軍僨接之難、更加一層。若於周旋応対之際、少有失誤之事、則国家之成敗存亡係焉。優於才器、富於文翰、無過於李某。屢次奉使天朝、搢紳之間知名者多、監軍亦必聞之。今以此人為僨相之任、則必能光国、而只縁重被臺評、方在待命之中、非不知率爾啓請之為未安、而此時此任、決非人人所可承當、不得已敢稟。答曰、今日接伴之任、非此人不可、予意亦然。

初めに弁誣の奏文によって中国で称賛され、東征した明將軍らはその奏文を見ると、朝鮮国王に対して必ずその文章の見事さを褒めた。魯訥という者は我が国の人で、江浙に漂着してから帰って来たが、彼もまた南方の文人たちの多くが公の文を伝誦していたと言った。今年の賀節使臣も北京から帰って来ると、玉田の儒生が公の奏本を出して見せ、寧遠寺の僧侶も公の贈った詩を誦して、月沙の安否を尋ねた、と話していた。かつて楊御史[楊鎬]の碑文を作ったことがあったが、楊御史は公の墨本を得て非常に喜び、人々に「朝鮮の李尚書の文だ」と見せびらかした。また学士汪輝が、公の詩を手に入れて刊行すると、署丞葉世賢は使者として滇南に行く時に、その版本を自ら携え、「これを江南に広めて、郷里の榮譽にしななければならない」と言った。かつて公が北京に行くと、鎮江の守将丘坦は公の到着を聞き、道端に出て待ちかまえ、色絹を張りめぐらせて迎えたのである。御使熊化は自分の家で開いた宴会に公を招待し、非常に恭しく礼遇した。公が中国の人に敬慕されていたさまは、このようであった。

李廷龜は4回にわたる使行について、それぞれの記録を残している。「戊戌朝天録」（『月沙集』巻2、3）、「甲辰朝天録」（巻4、5）、「丙辰朝天録」（巻6）、「庚申朝天録」（巻7、8）、「庚申朝天記事」（巻63）、「庚申燕行録」（「別集」巻3）がそれらである。中でも四つの「朝天録」は使行期間中に作った詩と明文人と取り交わした詩を集めたものであり、李廷龜と明文人の交遊の様相がよく表れている。それをみると、当時李廷龜が詩を取り交わしたのは、明朝廷の官吏以外にも在野の文人たち、旅程中に泊った旅館の主人、旅館に同泊した客たち、見物に行った寺院の僧侶、北京の宿舍の使用人などに及んでおり、多様な階層の人物と交流していたことがわかる。

96

前章でも考察したように、李廷龜は特に、1609年に朝鮮を訪問した明

⁹⁶ 使行を通じた李廷龜の明文人との交遊及び詩文交換について詳しいことは「安ナミ(2007)」(367~375頁)参照。

使熊化と深い親交を結んでいた。それは李廷龜が 1616 年に明に行った時まで長年にわたった交遊であった。当時李廷龜と熊化の交遊は李廷龜の弟子崔有海が「華人開心見誠、以文字結義者、未有如月沙熊公之交際云(崔有海『月沙集』「別集」卷 7「遺事」)」と言うほど、中朝文人の交遊の中でもその友情の深さにおいて際立ったものであった。

そしてこの親交は 1616 年の使行で外交問題を解決する際に、大きな役目を果たすことになる。1616 年の使行は光海君の生母である恭嬪金氏の追崇と冠服下賜を奏請するためのものであった。⁹⁷元来光海君は後宮の息子であり、それも次子であったので、王世子冊封をめぐる明と葛藤があり、王位正統性を疑われるという困難な状況にあったのである。⁹⁸そこで光海君はこの問題を解決するため、後宮であった自分の生母を王后に追崇しようとした。そして当時最高の外交官であった李廷龜を正使として送り、奏請の成功を期待したのである。

この時李廷龜は熊化との親交を用いてこの問題を解決しようとした。『月沙集』卷 34 にはこのことに関して李廷龜が熊化に送った手紙が残っており、当時の状況がよく窺える。李廷龜は自分が北京に着いたことを知らせる手紙に続いて、誥命と冠服を奏請する呈文を写して送り、それがうまく書かれているか確認してほしいと頼んでいる。⁹⁹また、この問題の解決に力を貸してほしいと求める手紙を何度も送っている。

* 李廷龜『月沙集』卷 34「寄熊御史」

(前略)…部意業已許之、拋例題准、唯在老爺一言勸成耳。似聞今明當議覆云。伏乞急通於方閣老・何老爺・林郎中前、快許准請。如

⁹⁷ 恭嬪金氏の追崇と冠服下賜の奏請が持つ歴史的意味については「啓スンバン(2008)」参照。

⁹⁸ 光海君の王世子冊封及び王位継勝問題に関して詳しいことは「韓明基(1999)」(187～197 頁)、「李迎春(1998)」(128～131 頁)、「啓スンバン(2008)」参照。

⁹⁹ 李廷龜『月沙集』卷 34「寄熊御史-別紙」：小邦奏請事情、詳在呈文、謄抄一紙、伏乞台賜電覽…(中略)…竊惟老爺一言重於山岳、倘念寡君罔極之情、俯憐賤生陪從之舊、暫爲調停於禮部大堂及儀制林郎中、則隕結之感、如何如何。

以准請為難、題覆之辭、引例歸重、則事必諧矣。為天下勸孝、固是聖朝錫類之化、雖無舊例、猶當曲循。況明有成化兩年之例乎。老爺之一言勸成、實係公議、其誰曰私一敝邦乎。

礼部の意向としてはもう許可しているので、前例に照らしての奉請の承認は、あなたが一言後押ししてくれるかどうかにかかっています。小耳に挟んだところでは、今日明日にも反対意見が提起されるようです。どうかお願いします。急いで方閣老・何老爺・林郎中に連絡して、すみやかに承認されるようにしてください。もし承認ということが難しいなら、反対意見について、事例を引いて抑制すれば、結果として同じことになります。天下に孝を勧めるのは、もとより聖朝が広くもたらす教化なので、たとえ旧例がなくても、曲げて従ってくださるべきです。まして成化二年(1466)の前例が確かにあるではないですか。あなたの一言の後押しは、実に公議にかかわること、誰が「一小国に肩入れした」などと言うでしょうか。

引用文に表れている李廷龜の切実な願いを受け、熊化は明朝廷の大臣たちと李廷龜の間で意見を調整する役目を果たし、朝鮮の事情を代わりに明朝廷に伝えてくれた。それによって、李廷龜は無事に誥命と冠服を受け取って朝鮮に帰ることができた。

李廷龜は使行と接伴を通じて、自分の詩文を明文人らに積極的に紹介し、明文人から計5篇の序文を受けている。¹⁰⁰そのように中国の文人からたくさん序文を書いてもらうことは、当時の朝鮮文壇では珍しいことであった。中でも1620年の使行では、翰林院修撰汪輝に「朝天録」に付ける序文を書いてもらい、その上明文壇で自分の詩集を出版することも行っ

¹⁰⁰ 1609年に明使熊化に書いてもらった「淮陽詩帖」の序文(『月沙集(以下省略)』巻39「淮陽詩板重懸序」)、1616年の明使行に遊撃丘坦から受け取った「朝天録序文」(巻34「附丘遊撃序稿」)、1620年の明使行に翰林院修撰汪輝から受け取った「朝天録序文」(「月沙集序文」)、1622年に明使梁之垣から受け取った序文(「月沙集序文」)、1626年に明使姜曰広から受け取った序文(「月沙集序文」)がその5篇である。

た。朝鮮の使者が明に行って私的に自分の詩集を出版したのは、これが最初である。それは文人としての李廷龜にはこの上ない榮譽であったが、一方で朝鮮朝廷に大騒動を引き起こすことでもあった。李廷龜の「朝天録」の中国出版をめぐる事件については、第三部で改めて考察することにし、ここでは当時使行が朝鮮文人の詩文を明文壇に紹介する一つの通路であったことを確認するにとどめておく。

以上で、16世紀後半以降李廷龜の明使行について考察した。李廷龜は自分の文章力に基づいて、一方では複雑な外交問題を解決しながら、もう一方では明文人と詩文を取り交わしたり、明文壇で自分の詩文集を出版したりするなど、積極的な文学活動も行った人物であった。ここで、文章力と外交活動、文人交遊が互いにどのように作用していたのかについて、その一面を窺うことができた。では、次節からは明使行を通じた文化受容の一面を考察することにするが、そのために、1614・1615年の二回にわたる許筠の使行について具体的に見ていきたい。

2) 1614・1615年における許筠の使行

この節では、当時の朝鮮で最も中国の事情に詳しく人物、許筠を中心に、彼の使行を通じて行われた文学交流について考察する。中でも、読書家であり蔵書家であった彼の性格に注目し、使行中の書籍購入活動を集中的に扱うことにする。まずここで、明との交流に関わる許筠の活動について整理しておく。¹⁰¹

¹⁰¹ 許筠の自編文集である『惺所覆瓿藁』は、朝鮮時代に正式な刊本が出版できず、外孫家に伝えられてきた、許筠が直接整理したといわれる正稿本に基づいて転写された筆写本が、現在国内のソウル大学の奎章閣、国立中央図書館及び各大学図書館、また日本京都大学の河合文庫などに所蔵されている。その中で「中央図書館本」は民族文化推進会が刊行した『韓国文集叢刊』74巻に影印され、また成均館大学の大東文化研究院では、「奎章閣本」を影印した『惺所覆瓿藁』(1961)を刊行したことがある。本稿ではこの二つのものを基本資料として使っている。

- ・ 1594 年：遼東使行（『惺所覆瓿藁（以下省略）』巻 1「丁酉朝天録」「登箭門嶺」の注釈¹⁰²⁾
- ・ 1597 年：明使行（巻 1「丁酉朝天録」）
- ・ 1598～1600 年：明將吳明濟と交遊。吳明濟が編纂した『朝鮮詩選』のために基本資料を提供（「朝鮮詩選後序」）
- ・ 1602 年：明使顧天峻と崔廷健接伴（巻 18「西行記」）
- ・ 1606 年：明使朱之蕃と梁有年接伴（巻 18「丙午紀行」）
- ・ 1609 年：明使熊化と劉用接伴（巻 19「己酉西行記」）
- ・ 1614 年：千秋使になり明使行（『光海君日記』「6 年 10 月 8 日」、「10 月 10 日」、「7 年 1 月 21 日」「2 月 4 日」「2 月 6 日」「6 月 5 日」記事参照）
- ・ 1615 年：冬至兼陳奏副使になり明使行（「乙丙朝天録」、『光海君日記』「7 年閏 8 月 8 日」、「閏 8 月 10 日」、「8 年 1 月 6 日」記事参照）

以上の活動をみると、許筠も前節の李廷龜と同じく、使行と接伴の第一線に立って活躍した外交官であったことがわかる。許筠はその優れた才能と実力が認められ、何回も使臣に推薦された。例えば 1602 年に顧天峻の接待責任者であった李廷龜は「年少人中、海運判官許筠、非徒能詩、性且聰敏、多識典故及中朝事」と発言し、1606 年に朱之蕃の接待責任者だった柳根は「許筠詩、格不高。然聰敏博覽、待華使、無愈此人」と彼を評価している。¹⁰³⁾

許筠がこのように中国の事情に精通したのは、何よりも幅広い読書によってであった。許筠の文集をみると、彼は分野を問わず多くの中国及び朝鮮の書籍を読み、それに対する自分の感想を残したり、詩文選集を編纂したりするなど、熱心に読書と著述を行っていたことがわかる。読書好きであったため、許筠は書籍の購入にも積極的であった。その結果、数千巻

¹⁰²⁾ 許筠『惺所覆瓿藁』巻 1「丁酉朝天録」「登箭門嶺」：僕甲午年、以咨文齋進官赴遼回、為許給事接伴使尹公國馨從事官。留義州凡四朔、故詩中及之云。

¹⁰³⁾ 『宣祖実録』「34 年 11 月 17 日」、「39 年 8 月 6 日」の記事参照。

に至る書物を持つ、当時の朝鮮で屈指の蔵書家にもなったのである。

では、許筠はどうやってさまざまな書籍を手に入れることができたのか。まずは、接待の際に明使からもらったものがある。前章で考察したように、1606年の正使朱之蕃から『衡山石刻帖』・『世説刪補』・『詩雋』・『古尺牘』・『玉壺氷』・『臥游録』などを、副使梁有年から『太平広記』を、1609年の明使に随行して来た監生徐明から『白楽天集』をもらったのがその例である。その他に彼の文集から国内で中国書籍を入手した方法に関わる記録を探すと、次のようなものがある。

* 知人に借りること

許筠『惺所覆瓿藁』卷20「奉黄思叔(1609)」

聞公得耳譚於上国、中有一款載家姊事云、信否。頃觀此書幸州相許、則毋有此事。豈統撰添之否。以此再造門下不利、幸借示為祝。不悉。

聞くところでは、公は中国で『耳譚』を入手して、その中の一項目に私の姉の事が載せられてあったとのことですが、本当でしょうか。先日、幸州相[奇自献]のところでのこの本を見ましたが、そういうことはありませんでした。もしや続編が加えられたりしたのでしょうか。このためにまたお宅に伺うのもよろしくないでしょうから、貸していただけるとありがたく存じます。不悉。

* 使臣に行く人に頼むこと

許筠『惺所覆瓿藁』卷13「四友叢説跋(1607年以前)」¹⁰⁴

余少日讀何氏語林、即知中国有何元郎氏、欲觀其全集而不可得。嘗於顧氏詩餘、見元郎之序文、詳縟古雅、信是名家。又於諸尺牘中、略觀其一二小文、心竊艷之不置。頃因朝謁、求所謂東海集則不能購、購其四友叢説者八卷而來。

¹⁰⁴ 1607年尹根寿に送った手紙には、『四友叢説』を読んだという記録がある。「上尹月汀-丁未八月」(卷20)：王瓊尚書逸事四條、乃見於何良俊四友叢説。今録上、幸賜覽如何。

私は若かった時に何氏[何良俊]の『語林』を読み、中国に何元郎という人がいることを知り、彼の全集を読みたいと思ったが手に入らなかった。かつて顧氏の『詩餘』の中で、元郎の序文を読んだが、緻密にして古雅、まことに名家であった。また諸々の尺牘で、一二の小文を見たが、内心ひそかにそれを羨んでやまなかったのである。先日訳官に頼んで、『東海集』というものを求めさせたが買えず、『四友叢説』という書物八巻を買って来た。

当時最も一般的な中国書籍の入手方法は、一番目の例文のように知人に借りる方法であった。特にこの時期は明との交流が活発で、中国の書籍が朝鮮にかなり輸入されていた。¹⁰⁵許筠の場合、明と朝鮮の文壇状況に非常によく通じていたので、明文壇で新しく出版された書物の情報をすぐ入手し、また朝鮮文壇で誰がどの書物を持っているのかもすぐ把握できた。そこで、自分の求める書物が輸入されたと聞くと、どんな手を使ってでもそれを読もうと試みた。よって昔の書物だけではなく、同時代の明文人の著作もかなり借りて読むことができたのである。

二つ目は、明に行く使節団の使者や訳官に、書籍の購入を頼むことである。二番目の例文がそれであるが、実際のところ、当時の朝鮮で中国の書物を入手する唯一の方法は使臣団を通じて求めることであった。多くの文人が使臣になった人に自分の読みたい書物の購入を頼んでおり、許筠の文集にもしばしばそのような記事が見られる。

以上で確認できることは、中国書籍の入手がやはり明使行と深く関わっていたことである。その点で、当時最高の文名を誇っていた許筠の家柄は有利なものであった。すなわち、彼の父許曄が1568年に進賀使として、兄許篈が1574年に聖節使の書状官として使行に参加し、許筠は幼い時から中国の書籍や情報に接しやすい環境にあったのである。このようにして中国の書物への関心を培われた許筠が、自ら使行に参加することになれば、いかに書籍購入に熱を上げたか言うまでもないことである。

¹⁰⁵ 16～7世紀に明使行に伴って行われた書籍購入に関する概括は「金榮真(2005)」(242～245頁)、「朴徹庠(2002)」(41～52頁)参照。

許筠が使行を通じて書籍を購入した記録は、彼の文集だけでなく『実録』にもよく見られる。¹⁰⁶中でも1614、5年の二度にわたる使行は、彼の書籍購入において非常に重要なものであった。許筠はこの時、家の財産を費やして四千余巻に至る書籍を購入して来たという。

＊ 許筠『閑情録』「凡例」

余在庚戌夏、抱疴謝事、杜門摛客、無以消長日。巾衍中適披得數帙、乃朱蘭岫太史所贈、栖逸傳・玉壺氷・臥遊録三種。反覆披覽、仍取三書爲四門類、彙名曰閑情録…(中略)…余嘗恨家乏史籍、所載甚簡略、切欲添入遺事、勒爲全書、爲計久矣。倥偬未暇、甲寅乙卯年、因事再赴帝都、斥家貨購得書籍幾四千余卷。

私は庚戌(1610)の夏、病気になって世事を謝絶し、門を閉じて客に会わず、日の長さを持て余していた。書籍の中からたまたま数冊の書物を開いてみたら、それは朱之蕃太史に贈られた『棲逸伝』・『玉壺氷』・『臥遊録』三種であった。これらを繰り返し開いて読み、とうとうこの三書を四門に分類して、『閑情録』と名づけた…(中略)…私はかつて家に史籍が少なく、その記載が簡略にすぎること残念に思い、遺事を付け加え、全書として刊行したいと切に願ひ、長い間計画していた。しかし忙しくて暇が取れず、甲寅(1614)・乙卯(1615)両年に、事情により二度も北京に行ったので、家の財産をはたいて約四千余巻の書物を購入したのである。

まず許筠が正使となった1614年の使行について考察する。¹⁰⁷残念ながらこの使行に関する許筠自身の記録はないが、幸いに当時書状官であった金中清の使行記録「朝天録」が残っており、それを通じて許筠の行跡を知

¹⁰⁶ 『光海君日記』「7年1月21日」、「7年2月6日」、「7年6月5日」、「7年閏8月8日」「8年10月26日」などの記事を参照。

¹⁰⁷ 1614年の明使行で行われた文献に関する許筠の活動については「朴現圭(2006)」参照。

ることができる。¹⁰⁸ここには、許筠が北京で個人的に購入した書籍と朝廷に捧げるために購入した書籍の数量が書かれている。それによると、許筠の個人荷物は12駄の中で書物が8駄であり、公務で買った荷物も12駄の中で書物が6駄であった。¹⁰⁹許筠がいかに熱心に書物を買集めたか、よく窺えるところである。

この時に許筠が購入した書物の中で注目されるものには、明末の思想的異端者である李贄(1527～1602)の『蔵書』がある。それは現在、朝鮮に李贄の著書が入った最初の記録だとも言われている。¹¹⁰『蔵書』は16世紀後半に出版されてから、1602年に思想の不敬を主張した張問達の上疏によって禁書となり、1625年に再び王雅量の上疏によって禁止の措置が取られた。しかし当時の士大夫の間では、この書物は常に非公式に流通しており、1614年、許筠が北京へ行った時にも、公式にはまだ禁書であったにもかかわらず、許筠はその本を入手できたのである。またここからも、許筠の書籍購入の範囲が禁書に及ぶほど広がったことが確認できる。

当時許筠は『蔵書』を読んで「奇妙だ」と評価し、金中清にも勧めているが、典型的儒者であった金中清は「此等書寧火之、不可近」と言って厳しく非難した。¹¹¹『蔵書』に関する許筠の考えについてはそれ以上の記

¹⁰⁸ 金中清の「朝天録」は林基中編『燕行録全集』巻11に載せられた影印本を使っている。

¹⁰⁹ 金中清「朝天録」：(12月18日) 県監尹珙待昏来見曰、上道私ト十二駄、問之、使曰、書冊八駄、硝黄兩駄、使書状二駄、然耶。余曰、硝黄非吾行所有、書状奴北京奴外、無馬。

(10月27日) 宋孝男表示移義州一関、請署責送回馬也。列書進上書冊六駄、賜物四駄、補蓼補布二駄、並十二駄。

¹¹⁰ 許筠の李贄著作入手と朝鮮の陽明左派受容に関することは、「朴現圭(2005)」と「姜明官(1998)」、「姜明官(2007)」(266～270頁)参照。

¹¹¹ 「朴現圭(2005)」(306～7)から再引用。

金中清『苟全集』巻1「上使得李氏莊書(蔵書の誤記：筆者註)一部以示余感題二律」序文：上使得李氏蔵書一部以為奇、示余其書。自做題目、勒諸前代君臣其是非予奪、無不徇己偏見、以苟卿為德業儒臣之首、屈我孟聖於樂克・馬融・鄭玄之列、明道先生僅參其末、與陸九淵並肩、若伊川・晦庵兩夫子則又下於中屠嘉、蕭望之稱之以行業、肆加升黜、少無忌憚。余見而太駭曰、此等書寧火之、不可近。居數日、偶閱經書實用編馮琦正學疏、有曰皇上頃納張給事言、正李贄誣世之罪、悉焚其書云。所謂贄乃作蔵書者、倡為異學、率其徒數千、日以攻朱

録がないが、少なくとも金中清とは違う感想を抱いていたことは窺える。その翌年にまた使行に加わることになり、許筠は李贄の他の著書である『焚書』も入手して読み、それに関する感想を残した。¹¹²そこでは、「彼積此儒同一悟、世間横議自紛紛」と言い、¹¹³李贄の思想に同調する態度も見せている。¹¹⁴

1614年使行で許筠が購入した書物の中には、朝鮮王朝の正統性を否認する書籍が11種含まれている。国初以来朝鮮政府は、中国の文献に朝鮮王室の正統性を否認する記録があると、それを明朝廷に知らせて書き直しを求めることに非常な努力を傾けてきた。¹¹⁵そして1588年には、ついに明朝廷が朝鮮政府の要請を受け入れ、萬歴改修本『大明会典』の編纂にそれを反映させて一段落となったのである。

しかし1614年の使行で許筠は『続文献通考』・鄭曉の『吾学編』・雷礼

為事、而卒為公論所彈、伏罪於聖明之下。至以妖談怪筆多少、梓板一炬而盡燒。猗歟、大朝之有君有臣也。感題二律、既傷之、又快之。快之之中、又有傷焉。傷哉傷哉。其誰知之。

¹¹² 「読李氏焚書」の二番目の作品では、丘坦に関して言及しているのが注目される[丘侯待我礼如賓、麟鳳高標快都親。晚読卓吾人物論、始知先作卷中人]。丘坦は当時遼東遊撃として朝鮮をよく訪問し、朝鮮文人たちと幅広い親交を結んでいた中国の朝鮮通であった。彼は許筠とも深い親交を結び、1614年許筠の使行には鴨緑江の船で宴会を催したこともあった。ところが丘坦は李贄とも親しい関係であり、『焚書』の「人物論」(巻4)では丘坦を「若丘長孺、雖無益於世、然不可不謂之麒麟鳳凰瑞蘭芝草也」と褒めてもいる。このような状況から見ると、当時許筠は丘坦を通じて李贄に関する情報や彼の書籍を入手した可能性も高い。これについてもっと詳しいことは「朴現圭(2005)」(310~320頁)参照。

¹¹³ 許筠『乙丙朝天録』「読李氏焚書」：清朝焚却禿翁父、其道猶存不盡焚。彼積此儒同一悟、世間横議自紛紛 / 丘侯待我礼如賓、麟鳳高標快都親。晚読卓吾人物論、始知先作卷中人 / 老子先知卓老名、欲將禪悦了平生。書成縱未遭秦火、三得臺抔亦快情。

¹¹⁴ 実際、許筠の思想については陽明左派との関連性を論じる研究があるほど、李贄の考え方と似ているところが多い。ただし、そうした許筠の思想を現実に李贄の影響を受けたものと見なすことは、現在残された許筠の著作のほとんどが李贄の著書を読む前のものであり、無理があるといえる。許筠は李贄の著作を読む前から類似の考えをもっており、本来この二人の気質が似ていたと考える方が妥当であろう。

¹¹⁵ 中国文献の曲筆への弁誣に関しては、「朴現圭(2006)」(276~282頁)参照。

の『皇明大政記』・馮応京の『皇明経世实用編』・饒伸の『学海危言』・王世貞の『弇山堂別集』・黄光昇の『昭代典則』・萬表の『艾集』・李黙の『孤樹哀談』など9種の書物で朝鮮王朝に対する曲筆記録があることを見つけた。その上、伍員萃の『林居漫録』には、光海君の王位正統性を否定する記事まで書かれていると主張し、朝鮮政府に大きな波瀾をもたらしたのである。しかしこれらの書物は民間で出版された野史や個人文集が大部分であり、以前から明と朝鮮政府の間でも、個人文集や小説・外史の記載にまで政府が関与することはできないという見解が取られていた。そこでこの許筠の行動については、朝鮮政府の内部で非難の声も高かったのである。

116

しかし、伍袁萃の『林居漫録』に光海君の正統性を否定する記述があるというのは、この問題に非常に敏感であった光海君には聞き捨てならない問題であった。ところが、この時許筠が持って来た『林居漫録』は筆写本であり、現存する1627年の木版本『林居漫録』¹¹⁷には許筠が主張した光海君の王位継承に関する内容は見られない。そこで、当時からこの筆写本には偽作の疑いも提起されていた。許筠が功を立てるためにわざと『林居漫録』を再編したのではないかということである。¹¹⁸しかし光海君は自分の正統性を否定する記録を無視することはできず、1615年、明政府に『林居漫録』の校正を求める使節団として、許筠を副使に、閔馨男を正使に任命して派遣することになった。

このように、1615年の使行は事案自体が書籍と関わったものであり、

¹¹⁶ 『光海君日記』巻83「6年(1614)10月10日」：政院啓曰、許筠於中朝書籍、得我国被誣事、固當駭痛、有所陳辨。然宗系改正、昭揭於會典、壬辰辨誣、快雪於中国、明辨洞积、皎若白日。諸家文集不經小説、雖未盡滅、豈必取信。徐徐辨奏、亦無不可、啓達之前、徑先呈文、摘抉幽隱、惹人視聽、其中處事、未免顛遽。

¹¹⁷ 『続修四庫全書』1172冊(上海古籍出版社、1995)の版本参照。

¹¹⁸ 『光海君日記』巻83「6年(1614)10月10日」：許筠以無行見廢。雖附爾瞻、得通清望、其党多沮之、不得大用、恒鬱鬱不得志。遂為節使、又與書吏玄応旻偕行、応旻姦巧多才、筠蓄為死客。遂與潜謀、實作中朝人伍員萃林居漫録一冊、其中言宣廟失德及交通倭奴等事、與丁応泰所誣略同。又言光海伝授不明事、其辞極巧慘。然不能鉞板、以草本鬻之於燕市、而隨即質出、人皆知其偽矣。

許筠は政府から銀子数万両に至る援助金を与えられ、中国の市場に流通していた書物をたくさん購入することができた。そして許筠は公金を横領したという疑惑まで受けながら、¹¹⁹明文壇に新しく出版された書物を存分に買い集めたのである。その書籍購入に関する記録は、許筠のこの時期の使行詩集である『乙丙朝天録』に次のように見られる。¹²⁰

偶閱陸儼山深集有人持元史至用二十陌得之詩云囊中恰減三旬用
架上新添一束書但使典墳常在手未嫌茅舍食無魚讀之深協鄙願古人実
獲我心遂步韻和之云

連歳赴朝雖太苦	連年中国へ赴くのはたいへんな苦勞だが、
只輸多得古人書	古人の書物を多く得られるのだけはいい。
傾囊罄篋人休笑	囊を傾け篋を空にして散財するのを、どうか笑わないでくれ。
端欲將身作蠹魚	私(端甫：許筠の字)はこの身を蠹魚に変えた いほどなのだ。

家山兵後無墳籍	郷里には倭乱後典籍がなくなり、
欲得人間未見書	世間で見られない書物を欲しいと願っていた。
到此購藏幾萬卷	ここによくやく数万巻の書物を買集め、
不妨燈下辨蠹魚	気のすむまで燈下で蠹魚の検分ができる。

¹¹⁹ 『光海君日記』卷94「7年(1615)閏8月8日」：是行王與銀一萬数千兩、閔馨男議以重貨不可付訳官、分置于兩使及書狀官三房。一夜筠言銀適被偷、以空示人、一行痛駭。

『光海君日記』卷109「8年(1616)11月4日」：閔馨男之行、齎銀万余兩、兼請誥冕、許筠盜用其半。

¹²⁰ 最近国立中央図書館に所蔵された許筠(許筠の兄)の「朝天録」(図書番号：韓古朝 63-38)第2冊が、実際許筠の1615年使行詩集である「乙丙朝天録」であることがわかったのである。ここでは「国訳乙丙朝天録」(2005)に載せられた影印本を使っている。

引用詩では、当時の朝鮮は戦争で多くの典籍が失われた状況であったが、許筠は明使行を通じて数万巻に及ぶ本を購入することができ、それを喜んでいた様子がよく窺える。ただし、この詩の「数万巻」は誇張であり、この使行で実際に購入したのは数千巻の書物だったようである。それは前の『閑情録』「凡例」の例文と、『乙丙朝天録』の「束装将発戯吟」に「行装只有書千卷、且可持還教後生」という句節からもわかる。¹²¹もちろんその「数千巻」も、当時の朝鮮文壇の状況を考えると類のない多さであった。この他にも『乙丙朝天録』には許筠が使行中に読んでいた多様な書籍に関する感想があり、許筠の読書への愛好、書籍の購入に夢中であった姿がよく伝わってくる。

1614、5年二度にわたる使行を通じて許筠が買って来た書物に関する情報は、1614年の使行記録である金中清の『朝天録』と1615年の許筠の使行詩集『乙丙朝天録』、そしてこの時に買って来た書物を参照して編纂されたという『閑情録』の引用から考察できる。以上の資料を参照し、当時許筠が個人的関心から購入したと思われる書物を整理すると次のようになる。

* 1614年使行¹²²：蔵書(明、李贄)、歴代名臣奏議、韻府群玉、秘笈新書

* 1615年使行：焚書(明、李贄)、行吟卷(白灤)、挙業卮言(明、武之望)、酒評(明、袁宏道)、無双伝(薛調)、劍侠伝(王司寇)、聖学啓関臆説(明、龍遇奇)、心性説(明、章潢)、金曇子(明、陳絳)、儼山集(明、陸深)

* 『閑情録』の引用書籍：高士傳、遵生八牋、吳越春秋、列仙傳、事文類聚、後漢書、魏志、晉書、太平廣記、劉昫唐書、歴代眞仙體道通鑑、仙傳拾遺、夢溪筆談、李翰林集、容齋隨筆、臥遊録、

¹²¹ 許筠『乙丙朝天録』「束装将発戯吟」：放鶴抛龜本不情、山資已足亦經營。行装只有書千卷、且可持還教後生 / 三趨天階里里、費盡羸金購簡青。肯把明珠累歸橐、欲將文字送余。

¹²² 「朴現圭(2006)」(271～276頁)参照。

鶴林玉露、白氏長慶集、名臣言行録、澄懷録、經鋤堂雜誌、癸辛雜識、戰國策、史記、漢書、自警編、蘇文忠公集、艷異編、文山集、勸誡叢書、山家清事、避暑録話、近思録、朱子全書、四子粹言、文選、參同契、張子全書、顏氏家訓、睽車志、海嶽集、詩人玉屑、宣和學古論、道書全集、金丹正理大全、玄關雜記、張紫陽集、修真祕録、河南師説、法藏碎金録、壽養叢書、厚生訓纂、耳談類林、

明代の書物：弇山堂別集(明、王世貞)、弇州四部藁(明、王世貞)、世説新語補(明、王世貞)、長公外記(明、王世貞)、明野史彙(明、王世貞)、讀書十六觀(明、陳繼儒)、眉公祕笈(明、陳繼儒)、太平清話(明、陳繼儒)、眉公十部集(明、陳繼儒)、書畫金湯(明、陳繼儒)、巖棲幽事(明、陳繼儒)、讀書鏡(明、陳繼儒)、友齋叢説(明、何良俊)、何氏語林(明、何良俊)、瓶花史(明、袁宏道)、觴政(明、袁宏道)、小窓清記(明、吳從先)、陸文裕公集(明、陸深)、李氏焚書(明、李贄)、林居漫録(明、伍袁萃)、輟耕録(明、陶宗儀)、説郛(明、陶宗儀)、金壘子(明、陳絳)、明世説新語(明、李紹文)、貧士傳(明、黃姬水)、問奇類林(明、郭良翰)、灼艾集(明、萬表)、玉壺氷(明、都穆)、丹鉛録(明、楊慎)、正學集(明、方孝孺)、稗史彙編(明、王圻)、劉氏鴻書(明、劉仲達)、公餘日録(明、湯沐)、婆羅館集(明、署隆)、見聞搜玉(明、高鶴)、聖學啓關臆説(明、龍遇奇)、百川學海(明、左圭)、夷門廣牘(明)、西湖游覽志(明、田汝成)、稗海(明)、知非録(明)、長説小萃(明)、楮記室(明)

以上の目録を見ると、明の書物が半分以上であることがわかる。それも王世貞、陳繼儒、袁宏道、吳從先、何良俊など許筠と同時代の晚明文人の著作が過半数を占めている。ただし、この時許筠が袁宏道などの書籍を直接入手して読んだのかについては疑問がある。『閑情録』に引用された袁宏道の著作は、吳從先の『小窓清記』から再引用されたものであり、許筠が実際には袁宏道の著作を入手できなかった可能性も高い。¹²³他の書籍

¹²³ 「ブユソブ(2004a)」(246～247頁)参照。

もそういう可能性があるので、その点についてはさらに詳しい研究が必要である。

また上の著作で多くのものは、許筠が購入した時期と明で出版された時期にあまり差がないことから、当時許筠が明文壇の最新情報にいかによびやく反応していたかわかる。残念ながら、このような晩明文人らの作品が許筠の文学観にどのような影響を与えたのかについては、現在、1611年に編纂された『惺所覆瓿藁』以後の記録が『乙丙朝天録』以外には伝わらないため、その具体的変化を追跡できない。¹²⁴以上の資料を通じて一つ確認できるのは、許筠が明文壇の状況に常に関心を持ち、新たに出版された書籍があると聞けば積極的に購入しようとしていたということである。

以上で許筠の事例を通じて、当時明使行が中国書籍の購入に大きな役目を果たしたことを確認してきた。17世紀前半は複雑な国際情勢によって、外交使節団派遣が頻繁になり、また戦争で失われた蔵書の補充のため政策的に書籍購入が勧められた時期であった。その上許筠の例のように、中国書籍の記録を問題にして、書き直しを求めたりする動きも活発な時期だった。このような背景の下で、許筠のように読書を好み書籍の収集に情熱をもつ人物は、使行を機会に数千巻に及ぶ書物を購入することができたのである。

* 結びに

以上で李廷龜と許筠の明使行を通じて、当時使行が文学交流活動に及ぼした影響について考察してみた。17世紀前半は複雑な外交問題がしばしば起こり、よって明との外交が重要な事案として浮上し、故に有能な文章家たちが多数外交官として抜擢され、使行や接伴という外交場で活躍するようになった時期であった。彼らは文章家としての立場から、外交活動中にも多様な文学交流活動を展開した。本稿では李廷龜が自分の文章力を生かして外交問題を解決し、また中国文人と活発に交遊した様子を確認し

¹²⁴ その外で詩文選集である『閑情録』と『荊公二体詩(1617)』があつて参照できる。

た。すなわち、使行をきっかけにして外交活動と文学活動、明文人との交遊が互いに連動していく、その具体例を見ることができたのである。次に許筠の事例を通じては、使行が中国文化受容の唯一の通路であった状況で、明使行を通じて多くの書籍が朝鮮にもたらされた様子を考察した。以上から、当時使行が明との文学交流において果たしていた重要な役割を確認できたのである。

第二部. 朝鮮文壇における明文学受容の様相

第一章. 明代詩論の批判的受容：許筠の漢詩選集編纂を中心に

* 始めに

許筠は生涯明との外交活動の第一線に立って明文人らと交遊しながら、常に明文壇の動きに関心を持っていた人物であった。前章でも考察したが、彼は使行を通じて数千卷に至る中国の書籍を購入・熟読し、当時朝鮮文壇で誰よりも中国文学、明文壇の事情を把握していた。彼の活動で最も注目されることは、彼は中国の書籍を手に入れて読んだだけではなく、それを新たに整理する作業も活発に行ったことである。中国の詩文選集を読んで補充、注釈を付けたり、刪定や整理を行ったりした作業がそれである。

特に、許筠は古代から明代に至る歴代中国の詩選集を新たに編纂する作業を懸命に行った。その過程で漢詩評価の基準について悩み結果、ついに自分なりの基準を確立することになったのである。そのことに関して当時の朝鮮文壇の状況を見ると、朝鮮文壇では前後七子の文学論が16世紀後半に入り、17世紀前半にかけて最も注目を浴びていた。¹²⁵許筠も若い時から彼らの文学に傾倒しており、¹²⁶特に後七子の一人である王世貞は許筠に最も多く影響を与えた人物とも言われている。¹²⁷このことから、許筠の漢詩文に対する評価基準は前後七子の詩文論の影響をかなり受けていた

¹²⁵ 16世紀後半以降朝鮮文壇における前後七子の受容に関しては、「姜明官(1995)」、「姜明官(2002)」が代表的研究である。

¹²⁶ 許筠の前後七子受容に関しては、「姜明官(1998)」を参照。しかしここでは許筠の前後七子受容の側面のみ強調し、彼の独自の性格を認めないという立場に立つ。本論文ではそれと異なり、許筠の外来文化の受容と伝統文化の継承が互いに作用していることを論じようとしている。

¹²⁷ 許筠が王世貞から影響を受けたことは、彼の文集によく表れている。まず、文集の体制を王世貞の『弇州四部稿』にならって「四部」の体制にしたこと、また王世貞の作品を模擬するか(「統静姫賦」(巻3)など)、王世貞が編纂した書物を補充したことなど(「世刪補注解序」(巻4))がその具体的事例である。また文集の序文で朱之蕃が許筠の文を評して、王世貞と似ていると述べたことも、その影響関係をよく窺わせる。

と考えられる。しかしその一方で、許筠は前代朝鮮詩壇の伝統を継承する側面も持ち、両方の性格をうまく調和させようとしたのがその特徴である。

以上から本章では、許筠が当時最新の明代詩論、特に前後七子の詩論を受容しつつ、それをどのように自分なりの方式で消化しているか、この過程で朝鮮の文学的伝統はどのような役割を果たしているのかについて検討しようとした。その具体的な方法として、許筠による中国歴代詩文選集の編纂作業に着目し、それを通じて彼の漢詩評価基準を検討することにした。

1. 中国書籍の熟読と詩文選集の再編纂

第一部で、許筠が使臣や接伴使として活動する中で、中国書籍の入手にかなり力を入れたことを確認してきた。そこで、以下には当時許筠が関心を持っていた中国の書籍、中でも同時代の明文壇の書籍はどのようなものであったのかについて考察する。1611年に編纂された許筠の文集『惺所覆瓿藁』に基づいて、1611年以前までに許筠が入手し、その感想を残すほどに熟読した明文壇の書籍を整理すると次のようである。

- ・ 1606年：『空同集(李夢陽)』、『大復集(何景明)』(許筠『惺所覆瓿藁』(以下許筠の文集は著者・文集省略)巻2「光祿藁」)
- ・ 1607年：『徐迪功集(徐禎卿)』、『滄溟集(李攀龍)』、『弇州四部藁(王世貞)』(巻2「太官藁」)
- ・ 1609年：『邊華泉集(邊貢)』、『謝山人集(謝秦)』、『王奉常集(王世懋)』、『徐天目集(徐中行)』、『吳(詹+瓦)(垂+瓦)集』(吳倫)(巻2「病閑雜述」)
- ・ 『西遊録』外小説数十種(巻13、「西遊録跋」)¹²⁸
- ・ 『列仙伝(王世貞編)』(巻14「列仙贊」)

¹²⁸ 巻13「西遊録跋」：余得戲家説数十種。除三国隋唐外、兩漢語、齊魏拙、五代殘唐率、北宋略、水許則姦騙機巧、皆不足訓。

以上で注目されることは、許筠が 1606～9 年に明代前後七子の書籍を集中的に読んでいることである。前章で見たように、1606 年は許筠が明使朱之蕃に出会って交遊した、彼にとって特別な年であった。朱之蕃は前後七子に傾倒していた人物で、当時許筠に王世貞について話したり、王世貞が編纂した『世説刪補』、王世貞が称賛した画家である文徵明の『衡山石刻帖』などを贈ったりした。許筠が朱之蕃との交流の直後から前後七子の文集を熟読するようになったのは、その彼の影響をかなり受けたためと思われる。特に興味深いことは、1593 年に詩話『鶴山樵談』を編纂する時まで、許筠は前後七子を始め明文学に対して非常に批判的な態度を取っていたにもかかわらず、¹²⁹朱之蕃との出会い以後一転して彼らに関心を持ち、肯定的な評価を下すようになったことである。ここからも、朱之蕃との出会いをきっかけに許筠の文学観にかなりの変化があったことが窺える。

続いて、『惺所覆瓿藁』編纂以降（1611 年以後）に許筠が入手した中国書籍について考察する。それらは一部で考察したように、1614、5 年にそれぞれの使行を通じて購入したものが主であって、呉從先の『小窓清記』を含めて袁宏道の『瓶花史』・『觴政』、李贄の『焚書』・『藏書』、陳繼儒の『書画金湯』など晚明文人の作品が多数を占めている。許筠が以上の書物を購入して読んだ時期は、実際に明文壇でその書物が出版された時期とあまり差がない。このことを考えると、許筠が明文壇の状況に常に関心を持ち、新しく刊行された書物があれば熱心に買い集めていたことが理解される。残念ながら、このような晚明文人たちの作品が許筠の文学観にどのような影響を与えたのかに関しては、1611 年の『惺所覆瓿藁』編纂以後の作品があまり残っていないため、具体的に把握するのが難しい。¹³⁰ 本章では

¹²⁹ 許筠『鶴山樵談』：明人以文鳴者十大家、李崆峒猷吉・王陽明伯安・唐荆川應徳・王祭酒允寧・王按察慎中・董潯陽玠・茅鹿門坤・李滄溟攀龍・王鳳洲世貞・汪南溟道昆。而崆峒傳學西漢、王・李則鉤章棘句欲軼先秦、南溟華健、董茅則平熟、王慎中則富贍、明人皆厭之、以為腐俗、余所見略同。伯安不傳功文而以學發之、故未駁駁雜、荆川則典實、然皆可大家。王元美輩以明人文章比西漢、以猷吉比太史公、于鱗則比子雲、自托於相如、其自誇太甚。

¹³⁰ それに関して最近『乙丙朝天録』(1616)と『荊公二体詩鈔』(1617)が発見されたことは、許筠の晩年文学研究に大きな役割を果たしている。

許筠の文集を中心に、1611年以前の許筠の文学論について考察することにする。

ではここで、許筠が入手した中国書籍を基に、独自に行った中国詩文選集の編纂作業について考察する。まずその目録を整理すると、次の通りである。

* 文選集

・『世説刪補注解書』: 王世貞(明)が『世説新語』(南朝、劉義慶)と『河氏語林』(明、何良俊)を刪補し編集した『世説刪補』(1556)に、注釋と自分の解釈を付け加えたもの。(「世説刪補注解序」(卷4))

・『明尺牘』: 4巻。尺牘選集である楊用修(明、楊慎)の『赤牘清裁』、王世貞の『尺牘清裁増廣』(1571)、張潤の『古尺牘』を整理し、またそれらの書籍以降に刊行された尺牘選集から自ら選んだ尺牘を追加し編集したもの。(「明尺牘跋」(卷13))

・『歐蘇文略』: 8巻。歐陽脩と蘇軾の散文作品からそれぞれ68篇、72篇を選んだもの。(「歐蘇文略跋」(卷13))

・『閑情録』: 『世説新語』、『河氏語林』、『玉壺氷』、『臥遊録』などの書籍から「閑情」に関する記事を選んで編集したもの。(「閑情録序」(卷5)、「閑情録凡例」)

・『蘇文抄』: 失伝。奎章閣に甥許実が許筠の進めから編纂した『蘇文抄』がある。その跋に許筠が編纂した『蘇文抄』を参考にして編纂し直したという。

* 詩選集

・『古詩選』: 漢、魏、晉、宋、梁、陳の古詩の中、300篇を選集したもの。(「古詩選序」(卷4))

・『唐詩選』: 60巻。楊士弘(元)の『唐音』、高棟(明)の『唐詩品彙』、李攀龍(明)の『唐詩刪』を参考し、唐詩2600篇を選集したも

の。(「唐詩選序」(巻4))

・『四體盛唐』: 盛唐の詩中、七言歌・行、五・七言律詩を選集したもの。(「四體盛唐序」(巻5))

・『唐絶選刪』: 10巻。李攀龍の『古今詩刪』、徐子充の『百家選』、楊士弘の『唐音』、高棟の『唐詩品彙』などの書籍から、唐代の絶句を自ら改めて選集したもの。(「唐絶選刪序」(巻5))

・『宋五家詩鈔』: 宋代文人である王安石・蘇軾・黄庭堅・陳師道・陳與義の作品中、小篇及び近体詩を選集したもの。(「宋五家詩鈔序」(巻4))

・『明詩刪補』: 李攀龍の『古詩刪』を刪削し、それに王廷相の『風雅』、顧起淹の『国雅』からの詩を選抜し付け加えたもの。総624篇である。(「明詩刪補跋」(巻13))

・『明四家詩選』: 26巻。明代の文人である李夢陽・何景明・李攀龍・王世貞の詩から1300篇を選集したもの。(「明四家詩選」(巻4))

・『温李艶體』: 温庭筠(唐)と李煜(南唐)の詞曲の中、39篇を選び、朝鮮の名書家である韓濩に書かせて作ったもの。(「題温李艶體後」(巻13))

・『荊公二體詩鈔』: 6巻。王安石(宋)の七言律詩と七言絶句を選集したもの。(「荊公二體詩鈔序」)

残念ながら、以上の書物は『閑情録』・『唐絶選刪』・『荊公二體詩鈔』を除きほとんどが現在まで伝わらず、その具体的な内容はわからない。しかし文集にその序文が残っており、彼の詩文選集編纂に関する意識と詩文の選抜基準などは窺うことができる。

2. 詩文評価における独自基準の強調

上の目録に窺えるように、許筠は古代から明代に至るまでの中国の歴代詩選集を、自分なりの基準によって新たに編纂していた。それは時代・作家・詩体など多様な分類にそって作られたものである。許筠の編纂作業において最も目立つのは、詩の選抜にあたって編纂者が確固とした基準を持つよう強調することである。

ここでまず、「選集」を編纂することに関する許筠の意識を見てみたい。許筠の編纂作業の基盤には、「詩之旨者、不必在多」という考えがある。

* 卷4「古詩選序」

一日、忽醒然曰、詩之旨者、不必在多。蓋作者代不数人、人亦不数篇、則後之誦法者、奚用多為。自虞夏以降、為詩者非不少、而晝・記所在、孔氏所刪、若是其尠、則後之務為切響鬪麗者、其不足多取也較矣。

ある日、突然悟った。詩の本旨は、必ずしも多作にあるのではないと。およそすぐれた作者は一代に数人もいないし、その人にもすぐれた作品は数篇もない。そうであれば、それらを後世に手本とする場合、多くの作品を用いる必要はないはずだ。虞夏以降、詩を作る者は少なくなかったが、『書経』と『礼記』に載せられたもの、孔子が刪定した『詩経』の詩が、これほど少ないのだから、後世の声律にこだわり華麗さを競うばかりのものを、多く取る必要がないのは明らかなことである。

引用文によると、許筠は古代から今日に至るまで詩は少なくないが、規範とするものは多くは必要ないと言っている。即ち、後代の「切響鬪麗者」は多く取る必要がないと言う。このように、「多さ」ではなく、「規範になるもの」を重視して追求しようとするのが、許筠の詩選集編纂で最も基本となる意識である。

それに関して、許筠が「選」と「刪」という語を区別し、自分の作業

を「刪」として意味付けていることに注目する必要がある。それは彼が後に朝鮮の歴代詩選集を編纂した時、『国朝詩刪』と名付けたことにもよく表れている。辞書的に説明すれば、「選」は「えらぶ」という意味であり、「刪」は「けずる」という意味である。たくさんの作品から少数を残すという意味では、「刪」も大きい意味での「選」に属するだろう。しかし「刪」と言えば、その選ばれたものからさらに「けずる」ということになり、「選」よりずっと厳格な選抜を意味している。

では、許筠において「選」と「刪」が持つ意味の根本的な相異点は何であるのか。伝統的中国文学史には「詩刪」の典型として孔子の『詩経』編纂作業が挙げられている。孔子は昔から伝えられてきた三千篇の詩から、「可施於礼義者」に属するもの三百篇を取って『詩経』を作ったと言われている。¹³¹上の引用文でも窺えるのであるが、許筠が「詩刪」に言及する時は、明らかにこの孔子の作業が想起されている。ここで注目すべきことは、孔子が詩三百篇を刪定した際に、「可施於礼義者」を取るという一つの基準が提示されていたことである。このように明確な基準を示すこと、それが「刪」という行為に特徴的なことだと言える。それは許筠の作業にもはっきりと表れている。許筠は「詩を刪する」という仕事について、自分なりの明確な意識を持っていたのである。

* 卷 13 「題詩刪後」

詩刪者、非敢選也、乃刪諸家選也。許子任刪者、非主選者也。選者之功甚鉅而顧易、刪者則心甚勞焉。蓋採取諸家、不問尺度之長短、悉掇其華者、選者之易也。合諸選而校其長短厚薄、不問其華色、必令粹然合乎度、然後乃登諸策者、刪者之勞也。

「詩刪」というのは、敢えて詩を選んだということではなく、諸家の選集を削ったということである。私は刪定に従事した者であり、選定を主宰した者ではない。詩を選ぶ者の功は非常に大きい仕事は易しく、詩を削る者は非常に心を労するものである。おそらく諸

¹³¹ 『史記』「孔子世家」：古者詩三千余篇、及至孔子、去其重、取可施於礼義者凡三百篇。孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。

家の作品を取るのに、尺度の長短を問わず、その華やかなものを全て拾えば、選定者の仕事は易しい。諸家の選集を集めて、尺度の長短と厚薄を比較し、その華やかさを問わず、必ず純粹に法度に合わせて、それから書物に載せるということになれば、それは刪定者の苦勞するところである。

引用文によると、許筠において「選」と「刪」の判別基準は、「尺度之長短」の有無であった。彼において「刪」というのは、良し悪しを問うことではなく、法度に合うかどうか考えることであった。すなわち、許筠の目的は多くの作品を集めることではなく、既に良いと評価されている作品の中で「法度」に合うものを改めて選ぶことだったのである。その時最も重要なのは、「一つの基準」によって作品を評価することである。詩文を評価するにあたって「自分の基準」を強調する態度は、許筠の詩文選集編纂に一貫して表れているものである。

では、このような「編者の観点・基準を持つこと」の強調が、当時の文壇において持った意味は何だろうか。それは選詩者の役割の変化だと考えられる。このことで、選詩者が単に良い作品を集める者ではなく、確かな自分の基準をもって作品を評価する者を意味するようになったのである。許筠は自分なりの基準で作品を「選択」することによって、文学作品を「評価」しようとした。このような態度は今まで中国の詩文をただ漢詩文の典範と見なし、歴代中国詩選集をそのまま受け取ってきた朝鮮文人たちの態度とかなり異なっていた。ここに許筠を始めとして、朝鮮文壇で本格的な「漢詩文の批評」が成り立ったとも言えるのである。

ただし一方では、このように「選」ではなく「刪」を主張する態度には、李攀龍の『古今詩刪』の影響もあることを忘れてはならない。実際に許筠は歴代中国の詩選集を編纂するにあたって、李攀龍の『古今詩刪』を最も参考にしていた。前の目録を見ても、『唐詩選』・『唐絶選刪』・『明詩刪補』を編纂するのに、李攀龍の『古今詩刪』を重要な参考書として利用している。しかし、このように『古今詩刪』から影響を受けた面がありながら、結局許筠はこの『古今詩刪』の選詩基準に対しては批判的な態度を

見せている。

＊ 卷13「明詩刪補跋」

李于鱗刪明詩若干首、附古詩刪後、其去就有不可測者。元美所謂英雄欺人、不可盡信者耶。明人號爲開天者、不必皆開天也。若以伯謙氏例去就之、吾恐其不入穀者多矣。

李攀龍が明詩若干首を刪定し、『古詩刪』の後に付けたが、その取捨の基準には理解できないところがある。王世貞のいわゆる「英雄は人を騙すので、何もかも信じてはいけない」ということであろうか。明人が「盛唐詩のようなもの」と呼んでも、必ずしも全てが盛唐詩のようなものではない。もし楊士弘の基準によってそれを取捨選択したら、おそらく選ばれないものが増えるだろうと思う。

引用文に見られるように、許筠は李攀龍の選詩基準に問題があると言い、それをそのまま受容していない。許筠は歴代の中国詩選集を編纂するのに、各詩選集の選詩基準についてその長短を論じながら自分の基準を立てている。それは彼が『唐詩選』を編纂する時、『唐音』（楊士弘）・『唐詩品彙』（高棟）・『唐詩刪』（李攀龍）を参考にしながらも各集の長短を分析し、自分の基準によって新しい『唐詩選』を作ったことから確認できる。¹³²このように自分の基準を強調した態度は、次の引用文からもさらに窺うことができる。

＊ 卷4「古詩選序」

其或古而涉近者不必取、近而銓古者不敢遺、唯其合於古而已。凡

¹³² 卷4「古詩選序」：余嘗取三氏所選而讀之、可異焉。楊氏雖務精、而正音・遺響之分、無甚蹊逕。其聲俊古魯之音、亦或不採、使知者有遺珠之慨焉。廷禮所裒、雖極其富、而以代累人、以人累篇、俾妍蚩竝進、韶濩畢御、識者以魚目混璣誚之、似或近焉。至於于鱗氏所揀、只擇勁悍奇傑者、合於己度則登之、否則尺璧經寸之珠、棄擲之不惜、英雄欺人、不可盡信也。其遺篇逸韻、埋於衆作之間、歷千古不見賞者、于鱗氏能拔置上列、是固言外獨解、有非俗見所可測度也。余諷而研求、閱有年紀、恍然如有所悟。

為編者六、而所選只三百。間以陋見、商榷其一二、非欲以傳世、聊表余所獨得、而時誦以取法焉。

古詩であつても近体に近ければ必ずしも採録せず、近体であつても古を論じたものは敢えて捨てたりしなかつた。ただ「古」に合致していることのみを求めたのである。参照した詩選集は六つもあつたが、選んだ作品は三百編だけである。時に卑見を以てその一二篇を論評したが、後世に伝えようとしたのではなく、いくら私の独自に理解したところを示し、時々読み上げて手本にしようとしただけである。

ここで許筠は、時代を基準にして「古今」を分けたのではなく、「古の精神」を基準にして作品を選抜したと言っている。そのため既存の選集から多くの作品を捨て、新しく自らの基準で選集を編纂したのだという。「古」というものに対し、自分の確固とした基準があると強調しているのである。

このような態度は詩作の時にもそのまま表れている。許筠は当時朝鮮文人たちがそれぞれ漢魏・六朝、盛唐、江西詩派(宋代)の作品を追崇し、模倣することに対して、「彼らはその語意を拾い集め、踏襲・剽窃して自ら誇る者に過ぎない」と批判し、¹³³自ら一家を成すことを主張したのである。

* 卷12 「詩辨」

三百篇自謂三百篇、漢自漢、魏晉六朝自魏晉六朝、唐自為唐、蘇與陳亦自為蘇與陳、豈相倣倣而出一律耶。蓋各自成一家、而後方可謂至矣。間或有擬作、亦試為之、以備一體、非恒然也。其於人脚跟下為生活者、非豪傑也。

『詩經』は自ら『詩經』であり、漢は自ら漢であり、魏晉・六朝

¹³³ 許筠『惺所覆瓿藁』卷12「詩辨」：今之詩者、高則漢魏六朝、次則開天大曆、最下者乃稱蘇・陳、咸自謂可奪其位也。斯妄也已。是不過掇拾其語意、蹈襲剽盜以自衒者、烏足語詩道也哉。

は自ら魏秦・六朝であり、唐は自ら唐であり、宋代の蘇軾と陳師道も自ら蘇軾・陳師道である。どうして模倣して同じものを作ったりしようか。それぞれが一家を成して、その後こそ詩作を極めたと言えるのだろう。たまたに模倣して作ることがあっても、試みにやることであり、一つの作風を手に入れようとしたのであって、常にそうしていたのではない。他人の足の下で生活する者は、豪傑ではないのである。

引用文に窺えるように、許筠は詩作において他人の作品を盲目的に追いかけてはいけないと主張している。学ぶのは昔の人の作品ではなく、彼らがそれぞれ独自の境地に至ったその精神であると言う。無論、この時許筠が主張した詩についての基準がどの程度の妥当性を持っているのか、実際の彼の漢詩作品が、彼が主張したような独自の境地に至っていたのかはまた別の問題である。彼はあるいは自分が主張した境地にまで到達しなかったかも知れない。けれども、そのように自分なりの基準を持つことを強調する態度だけを取っても、当時の朝鮮文壇の状況を考えれば十分に意味があったといえる。このことから本章では、このような態度自体が持つ意味に注目しようとしたのである。

以上で見てきたように、選詩作業において許筠が最も重視したのは「自分の基準を持つこと」であり、それは詩作においても適用されて、「自分の詩」を作ることを主張するようになったと考えられる。では次節からは、実際の批評の中に見られる許筠の詩論の特徴について考察することにする。

3. 前後七子詩論の受容と変容

1) 復古的詩論と盛唐詩重視

許筠は歴代詩選集を編纂する際、その作業について自分の考えを述べた序文を残しており、そこから許筠の漢詩に関する認識を知ることができ

る。ここでまず注目されることは、基本的に許筠は『詩経』を最高とし、時代の経過にしたがって「詩道」が衰えてゆくという所謂「復古的」詩論を展開していることである。

＊ 卷5 「題唐絶選刪序」

嘗謂詩道大備於三百篇。而其優游敦厚足以感發懲創者、¹³⁴国風為最盛。雅頌則涉於理路、去性情為稍遠矣。漢魏以下為詩者、非不盛且美矣、失之於詳至宛繹。¹³⁵是特雅頌之流濫耳、何足與於情性之道歟。唐之以詩名者殆數千、而大要不出於此、甚至綺麗風花、傷其正氣流、而貽教化主之誚、此豈非詩道之陽九耶。

「詩道は『詩経』の中に見事に備わっている」と言われている。そのゆったりと落ち着いて真心が厚く、善を感発し悪を懲戒するに足るということでは、「国風」が最高である。「雅」と「頌」は理屈に踏み込み、性情からやや遠くなっている。漢魏以後の詩というものは、立派で美しくはあるが、あまりにも詳細で煩瑣な作風に陥ってしまった。これは「雅」・「頌」の末流にすぎず、性情の道からはかけはなれたものである。唐代には詩で名をあげた者が数千人にもものぼるが、大体はこうした作風を出ず、甚だしくは華美なばかりの軽薄な詩が、正しい気の流れを損なっており、教化主のそしりを受けるようになったのである。これは詩道の災いではないだろうか。

引用文によると、許筠は『詩経』の「国風」を最も詩道が盛んだったものと高く評価している。ここで許筠は「詩道」を評価する基準として、「性情」にいかにか近いかということを示している。「詩は性情の発現」というのは、許筠の漢詩に関する基本的な考えである。そして、その性情が最もよく発現されたものは『詩経』の「国風」であり、その後の詩は美

¹³⁴ 『禮記』「經解」：孔子曰、入其國其教可知也、注觀其風俗、則知其所以教其為人也。溫柔敦厚詩教也。

¹³⁵ 王世貞『弇州四部稿』卷146「藝苑卮言」卷3：孟堅敘事、如霍氏上官之、邳廢昌邑王奏事、趙韓吏跡、京房術數、雖不得如化工肖物、猶是顧凱之。陸探微寫生。東京以還、重可得乎。陳壽簡質、差勝范曄、然宛繹詳至、大不及也。

しくはあるが性情からは遠ざかり、詩道が損なわれていると考えるのが、許筠の基本的な立場である。このような立場は彼の『古詩選』編纂に関する態度にもよく表れている。¹³⁶ここでも許筠は『詩経』を漢詩評価の標準に据え置き、漢代以後の詩は美しいけれども、古代の詩の伝統からは離れているといったのである。

次に注目する点は、唐詩と宋詩に関する評価である。明以降の詩壇では、唐詩を重視するか宋詩を重視するかということは、重要な評価の分かれ目になっていたのである。それは朝鮮文壇でも同じ状況であって、朝鮮初期以来、詩壇では唐風を追うのか宋風を追うのかという問題で対立し、それに基づいて文人たちが各自の詩論を展開し、激しく議論を続けた。¹³⁷許筠の場合、唐詩、特に盛唐詩を最も高く評価し、宋詩は唐詩に及ばないとして盛唐詩尊重の詩論を述べていた。¹³⁸それは先に考察したように、詩道は後代になるほど衰えてきたという彼の復古的詩論から見ても当然のことであろう。このような唐詩を中心にする詩論によって、彼は「有唐三百年、作者千余家、詩道之盛、前後無兩」と言い、『唐詩選』・『四体盛唐』・『唐絶選刪』と三種もの唐詩選集を編纂している。そしてこのように盛唐詩を高く評価する一方で、宋代に至って詩道が滅びたといい、宋詩を唐詩より劣ると見ていたのである。

* 卷4「宋五家詩序」

¹³⁶ 許筠 『惺所覆瓿藁』卷4、「古詩選序」：自虞夏以降、為詩者非不少、而畫・記所在、孔氏所刪、若是其尠、則後之務為切響闢麗者、其不足多取也較矣。漢氏之最稱者、唯十九首、及蘇李贈別之作、元聲未漓、於三百篇為近。卓女班妃及古樂府所紀蔡邕・宋子侯以下數十首、稍為典麗、其餘或朴或靡、或不可句。要之、俱非正音、魏晉以後、典則雖備、而俳以傷其氣、六朝則加以妍侈、去古為愈遠矣。至於唐則自為具詩、非古詩也。今余所揀拔者、蓋詳於漢魏而略於晉宋、以至梁陳、則所採尤少。

¹³⁷ 「李鍾默(2002)」(432~466頁)：この論文に基づいて、朝鮮時代の宋風と唐風の特徴を簡単に整理すると、宋風は議論を主として、奇抜な発想と具体的な描写が特徴であるが、唐風は詩人の興趣と情感を描くのが特徴であるという。

¹³⁸ 卷5「題四体盛唐序」：是編成、客問於余曰、何謂四體。余曰、七言歌行及五七言律、至盛唐大備、故余所取止是。曰、何只取盛唐。曰、詩學之盛、莫唐若也、而尤盛於景龍開元之際。大歷以下、固不足論已。

詩至於宋、可謂亡矣。所謂亡者、非其言之亡也、其理之亡也。詩之理、不在於詳盡婉曲、而在於辭絕意統、指近趣遠、不涉理路、不樂言筌、為最上乘。唐人之詩、往往近之矣。宋代作者、不為不少、俱好盡意而務引事、且以險韻窘押、自傷其格、殊不知。千篇万首、都是牌坊臭腐語、其去詩道、數万由旬、豈不可悲也。

詩は宋代に至って、滅びたといえる。滅びたというのは、その言葉が滅びたのではなく、その理が滅びたということである。詩の理とは、詳細で婉曲なことにあるのではなく、言葉が切れても意味はつながり、近いものを示しながら遠くに趣があり、理屈に陥らず、修辞を弄ばないのが、最上のものである。唐人の詩が、しばしばこれに近い。宋代の作者は少なくないが、皆意味を述べ尽くすことを好み、引用に力を入れ、かつ難しい韻を苦勞して踏み、自らその格調を損なって、少しも気づいていない。千篇万首、どれも看板のように陳腐な言葉ばかりで、詩道から隔たること數万由旬、どうして悲しまずにいられようか。

引用文によると、許筠は宋代に至って詩の「理」が滅びたと言い、その根拠として宋詩が「詳盡婉曲」であること、宋代の作者たちが「好盡意而務引事、且以險韻窘押、自傷其格」であることを挙げている。即ち、宋詩が自分の思想を細かく説明することに集中し、難しい押韻を使い、格調が落ちていることを指摘している。また詩の「理」は「辭絕意統、指近趣遠、不涉理路、不樂言筌」にあると言い、唐詩がこれに最も近いとして、宋詩に対する優位を述べている。このような主張は、唐詩を尊重し宋詩に批判的な人々の一般的な見解でもあった。

特にそれは、明の前後七子を中心とする復古派詩人たちにおいて明らかに表れていた。¹³⁹前後七子の詩論は、要約すると「詩必盛唐」であり、彼らは盛唐詩を最も優位に置いて宋詩には極端に批判的な態度を見せて

¹³⁹ 前後七子を中心とする復古派の「格調説」については、「郭紹虞(1988)」(611～671頁)、「袁震宇・劉明今(1991)」(1～320頁)、「松下忠(1969)」(847～901頁)、「廖可斌(1994)」参照。

いた流派であった。¹⁴⁰前後七子の筆頭である李夢陽の「缶音序」に次のようにある。

＊ 李夢陽『空同集』卷 51「缶音序」

詩之唐、古調亡矣。然自有唐調可歌詠、高者猶足被管弦。宋人主理不主調、於是唐調亦亡…(中略)…夫詩比興錯雜、假物以神變者也、難言不測之妙。感触突發、流動情思、故其氣柔厚、其声悠揚、其言切而不迫。故歌之心暢、而聞之者動也…(中略)…宋人主理、作理語、於是薄風雲月露、一切鏟去不為、又作詩話教人、人不復知詩矣。詩何嘗無理。若專作理語、何不作文而詩為耶。

詩は唐に至って古調がなくなった。しかし、自ら唐調があつてまだ歌うことができ、優れたものは音楽に合わせることもできた。宋代の人は理を主にして調を主にせず、ここに至って唐調も滅びてしまった…(中略)…およそ詩というのは、比と興が入り交じり、物に仮託して神秘的な変化を生じるものであり、その測りがたい妙境は説明できない。心が突然何かに触れて動き、情思を流動させる、だからその気は柔らかく豊かで、その声はのびやかであり、その言葉は切実だが迫らない。それで詩を歌えば心がのびのびとし、それを聞く人の心が動く…(中略)…宋人は理を主にして、理屈を語り、そのため風雲月露といったものを軽んじ、すべて削り去ってやめてしまった。また詩話を作って人に教えるので、人は詩がわからなくなってしまったのだ。詩に理がなかったことがあるのか。このように理屈ばかり語るなら、なぜ文章を作らず詩にするのだろうか。

これによると、李夢陽は詩についてどういうものであるかを自分なりに語りながら、唐詩には歌える調がまだあるが、宋詩は理屈を語ることを中心にして、調がなくなってしまったと批判している。即ち、宋代に至って詩は詩らしくない、文章のようなものになったというのである。このよ

¹⁴⁰ 『明史』286 卷、文苑二、「李夢陽」：弘治時、宰相李東陽主文柄、雄鷲翕然宗之、夢陽獨譏其萎弱、倡言文必秦漢、詩必盛唐、非是者、弗道與。

うな唐詩と宋詩への認識は、許筠の考えと一致するものであり、16世紀後半以降前後七子が朝鮮文壇に紹介され、許筠もそれに強く関心を持っていたことを考えると、その影響関係が窺える。

実際に許筠は前後七子の詩論に同調し、彼らの文集を読んでその作品も高く評価した。明代詩人の詩選集である『明詩刪補』と『明四家詩選』を編纂したのもその結果である。『明四家詩選』は前後七子の代表的人物である李夢陽・何景明・李攀龍・王世貞の作品を選抜して作ったものであり、序文で許筠はこの四人の作品を高く評価している。

＊ 卷4「明四家詩選」

之四鉅公、實天界之以才、使鳴我明之盛。其所制作、具參造化、足以耀後來而軼前人、夫豈與標榜竊襲者、並指而枚屈哉。仲默何之詩、暢而麗、雖病於蹈擬、而出入六朝李杜、藻葩可愛。獻吉李雄力押闔、雖專出少陵、而滔滔莽莽、氣自昌大。二君在唐、其亦開天間名家哉。于鱗峭拔清壯、論者以岷峨積雪方之、殆足當矣。古樂府、不免臨摸、而數千年来、人無敢效者、于鱗獨肖之、即其所言擬議以成變化者、為非誣矣。五言破的、真沈・宋之清勁者。至於元美、大海汪洋、蘊蓄至鉅、雖間或格墜近世、而包含万代、囊括百氏、俯取三家、以鞭弭驅役之、比之武事、其霸王之戰鉅鹿也歟。即此四家而觀之、則明之詩可以盡之。

この四人の偉大な方は、実に天から才能を与えられ、明の隆盛を鳴り響かせたのである。彼らの作った詩は、皆造化にあずかり、後世の人々に光を与え、前代の人々を越えるに足るもので、どうして盗作を標榜する者等と、同列に数えることができようか。何景明の詩は、のどかで麗しい。模倣をするのが短所だが、六朝の詩や李白・杜甫の影響を受け、その修辭は愛すべきものである。李夢陽は、力強く扉を開くようで、専ら杜甫の影響から出たものではあるが、滔滔莽莽として氣宇が自ら大きくなっている。この二人は唐にあっても、やはり開天(開元・天寶)年間の名家であっただろう。李攀龍は高くそびえ立ち、清らかで力強く、論ずる者が岷峨山の積雪にたと

えたのは、¹⁴¹ほとんどその通りといえるだろう。古楽府は模倣から免れることができず、数千年来、あえて模倣しようとする人がいなかったが、李攀龍ただ一人は古楽府に似ることができている。「擬議して以て変化を成す」といっているのは、嘘ではなかったのである。五言は法則にぴったり合って、沈佺期や宋之問の清らかで強い作風そのままである。王世貞に至っては、大きい海がうねるようで含蓄が非常に深く、時に近世の詩格に陥ることもあるが、多くの時代を包含し、さまざまな作者を総合して、俯しては三家(儒・佛・道のこと)を取り、鞭と弓で駆り立ててゆく。武事にたとえるなら、楚王[項羽]が鉅鹿で戦うようであろうか。この四家について見てゆけば、明の詩は尽くしたと言えるだろう。

前後七子に対する後代文人の評価は、彼らの作品は盛唐詩の字句を剽窃し模倣したものに過ぎないと批判するのが一般的であった。しかし許筠はこの四人について「耀後來而前人」「擬議以成変化者」と言い、「標榜竊襲者」とは分離している。さらにそれぞれの作品についてその長短所を分析し、彼らの限界と見られる部分を認めながらも、その長所に意義を見出そうとしている。

以上で考察したように、許筠は基本的に前後七子の詩論と彼らの作品に肯定的な態度を取り、盛唐詩を中心にした復古的詩論を展開し、前後七子の作品には、前代の伝統を受け継ぎながらも変化を成したと意義付けている。しかしその反面、許筠は前後七子と全く異なる性格も持ち、彼らの詩論に無条件には同調しない姿も見せている。それについては後節で具体的に扱うことにする。

2) 宋詩の価値認定

前節でも窺ったように、許筠は基本的に前後七子と同じく唐詩を優位

¹⁴¹ 王世貞『弇州四部稿』巻148「藝苑卮言」巻5：李于鱗如峨眉積雪、閩風蒸霞、高華氣色、罕見其比。

に置き、宋詩については詩道から遠ざかったと批判的な考えを持っていた。ところが前後七子の場合、宋代詩文を厳格に排斥し、その価値を全く認めない態度を取っているが、許筠の場合、宋詩が唐詩には及ばないことを認めながらも、宋詩には宋詩なりの価値があると主張している点で、前後七子の詩論とは大きな違いを見せている。

許筠が編纂した詩文選集を見ると、『宋五家詩鈔』と『歐蘇文略』・『荊公二体詩鈔』・『蘇文抄』など多様な宋代詩文選集がある。それは、たとえば李攀龍が『古今詩刪』に宋元代の詩を入れなかったことと比べて、大きく異なる点である。¹⁴²これらの中で詩選集は、王安石・蘇軾・黃庭堅・陳師道・陳與義の詩を集めて編纂した『宋五家詩鈔』と王安石の七言絶句と律詩を選んで編纂した『荊公二体詩鈔』がある。各詩選集の編纂時期を見ると、『宋五家詩鈔』は彼が『古詩選』を始めとして歴代の中国詩選集を編纂した時期に作ったもののようで、¹⁴³『荊公二体詩鈔』は1617年、即ち彼が死ぬ1年前に編纂されたものである。¹⁴⁴ではここでまず『宋五家詩鈔』を中心に宋詩に関する許筠の態度について考察することにする。

* 卷4「宋五家詩鈔序」

余嘗取宋人諸家閱之、哀其用功之勤而去道之遠。亦不敢以己見、廢古人劇心役智者、卑而恕之。歲月既久、並自家所作、亦漸流於西江、不自覺其舍古就近、信乎卑汚之染人也、如是其捷矣。姑以酬應之便敏、為當於意、聊不決棄。

私はかつて宋人諸家の作品を見て、彼らが勤勉に努力しながらも詩道から遠ざかっていることを悲しんでいた。また古人が心をつく

¹⁴² 『古今詩刪』は古逸・漢魏南北朝・唐代・明代の作品のみ選ばれて、宋元代の作品は取られていない。

¹⁴³ 許筠の中国や朝鮮詩選集編纂作業は、1606～9年前後七子の作品を熟読した直後に行われたようである。それは年代順に配列されている彼の文集からも窺えることであり、また朝鮮漢詩選集『国朝詩刪』が1611年に編纂されたことからそう思われる。大体1609～11年に行われたと推測されるのである。

¹⁴⁴ 『荊公二体詩鈔』は最近発見されたものであり、許筠の晩年における詩論が窺える大事な資料である。それについて詳しいことは「ブユソブ(2004b)」参照。

し知恵を絞ったものを、私見によって捨てることはできず、劣ると思いながらも残しておいた。時間が長く経って、私が自ら作るものも、次第に江西詩派の方へ流れてしまっていて、古を捨て近に寄っていることに自分でも気づかなかった。まことに、卑しく汚れたものが人を染めるのは、かくも早いのだ。さしあたり応酬の利便を目的と考えて、しばらく捨て去ることができなかつた。

ここで注目されることは、許筠は基本的に宋詩が詩道から遠ざかって残念だとしながらも、一方では宋代詩人の作詩への努力を認めなければならないと考えていることである。許筠は昔の人が心と知恵を労して作ったものを捨てることはできないと言っている。ここには、許筠が宋詩に対してかなりの愛着を持っていることが窺える。それは確かに、宋詩を厳しく批判するばかりだった李夢陽や李攀龍などとは違う態度であった。

では、許筠はどのようにこのように宋詩に対して寛大な態度を持つようになったのだろうか。それを考察するためには「自家所作、亦漸流於西江」という句節に注意する必要がある。ここで「西江」と言うのは、この詩選集に載せられた詩の作者である王安石・蘇軾・黄庭堅・陳師道・陳與義らが中心となる宋代の詩派「江西詩派」のことである。許筠がこのように江西詩派の詩選集を編纂し、自分もそれに流れてしまったと述べる背景には、前代から続いてきた朝鮮詩壇の伝統がある。

朝鮮の漢詩壇では 15 世紀後半から 16 世紀にかけて江西詩派が大いに流行し、彼らの詩を尊重し、その作詩方法を模倣する「海東江西詩派」とも呼ばれる一群が登場した。それは許筠が活動した時代まで朝鮮詩壇でその影響力を発揮したのである。¹⁴⁵そして引用文に窺えるように、許筠も自分が江西詩派からかなりの影響を受けていることを認めている。このように前代朝鮮詩壇の伝統の中で、許筠は宋詩を学ぶ機会を持ち、またそのような文学的背景によって宋詩を簡単に捨てることができなかつたのである。このような宋詩に対する寛大な姿勢は、やがてさらに進んで、宋詩の

¹⁴⁵ 海東江西詩派の中国江西詩派受容と作品の特徴については「李鍾默(1995)」参照。

価値を探ろうとする方向にもむかう。その態度は次の引用文に最も明確に窺える。

＊ 卷4「宋五家詩序」

或詰曰、許子既能古詩。其詩自足名世詔後、奚宋為耶。余曰、否否。難言也。古詩猶瓊彝玉瓚、只可施諸廊廟、而用之於里社宴集、則不如土簋瓷尊之為便利、吾不遺宋詩、亦猶是矣。吾以酬世務而已、何詩道之足傷也。況介甫之精核、子瞻之凌蹕、魯直之淵倔、無己之沈簡、去非之婉亮、置之唐人之列、亦可名家、又豈以宋人而盡廢之耶。詰者曰、然。因以其語、弁之首焉。

ある者が私を責めて言った。「あなたは既に古詩が作れて、その詩は一世に名高く後世まで伝えられるものであるのに、どうして宋詩を作るのか。」私は言った。「それは違います。言い難いことです。古詩は瓊彝・玉瓚のようなものです。それは廊廟に設けることができるだけで、町の社や宴会に使おうとすると、土簋や瓷尊の便利さにかないません。私が宋詩を捨てないのも、またこのようなものです。私は宋詩を以て世間の仕事に対応しているだけですから、どうして詩道を損なうことになりましょうか。まして王安石の精密で正確なこと、蘇軾の遙かに超越していること、黄庭堅の深く力強いこと、陳師道の落ち着いた簡明なこと、陳與義の美しく明らかなことは、唐人の列に置いても名家になれるのに、どうして宋人だからといって全部捨てられるのでしょうか。」私を責めた者が言った。「その通りです。」そこでその言葉を以て、話の始めとしたい。

引用文で、許筠は大前提として古詩が宋詩より優れるものである、ということも認めているが、その中でも自分が宋詩のようなものを作ることについて熱心に弁護している。確かに、許筠は宋詩が古詩の水準には及ばない、それぞれの詩には水準の差があるという考えを持ち、一つの評価基準を以て詩の水準を判断する態度を見せている。けれども一方では、宋詩がたとえ祭祀で使われる「瓊彝玉瓚」のような古詩の品格を持っていない

でも、日常生活で便利に使える「土簋瓷尊」のような役目を果たす、それなりの価値があることを主張している。即ち、一つの評価基準によって序列を付けながらも、同時にそれぞれの詩の価値も見出そうとし、多様な基準を立ててその価値を探っている。そのような両方の評価を同時に行っていることこそが、許筠詩論の最も特徴的な点であるかもしれない。

特に、多様な価値を見出そうとすることは、それぞれの個性を見つけようとすることにも進み、作者一人一人の個性を探ることにまでつながる。即ち、「介甫[王安石]の精核、子瞻[蘇軾]の凌蹕、魯直[黃庭堅]の淵倔、無己[陳師道]の沈簡、去非[陳與義]の婉亮」と述べて各詩人の特長を把握し、それは唐人に比べても劣らないと評価している。「宋代詩文は見る必要がない」という前後七子の詩論では無視された宋詩人たちの長所が、別の基準で作品を評価すれば、それぞれの価値として発見されるのである。

以上のような姿勢は詩だけでなく、散文を評価する時にも同じように見られる。次は、宋代の文章家である歐陽脩と蘇軾の文選集に付けた序文である。

* 卷13「歐蘇文略跋」

歐陽子・蘇長公之文、為宋大家。歐之風神遵麗、情思感慨婉切者、前無古人。長公之弄出機抑、變化無窮、人不測其妙者、亦千年以來絶調。而近世宗先秦西京者、乃薄不為之、此甚無謂也。文章各有其味、人有嘗内厨禁嚮豹胎熊踏、自以為盡天下之味、遂癡黍稷膾炙而不之食、如此則不餓死者幾希矣。此奚異宗先秦盛漢而薄歐・蘇之人耶。元美晚年喜讀長公文、茅鹿門坤平生推永叔為過昌黎、此二子非欺人者也。

歐陽脩と蘇軾の文章は、宋代の大家である。歐陽脩の作品の、風致が強くて美しく、思いがこもっていて切実なさまは、古人にもそのようなものがない。蘇軾の作品の、工夫をこらして変化が尽きず、人にはその妙趣を知り尽くせないようなものは、また千年以来の絶唱である。しかし、近世の先秦と西京[前漢]を尊重する人々は、それを軽んじて学ばない。これは実に不当なことである。文章には各々

その味がある。宮廷厨房の牛肉や豹胎、熊踏などを味わった人が、自ら天下の味を知り尽くしたと思えば、黍稷や膾炙を棄てて食べなかったとしたら、それでは誰もが飢え死にしてしまうだろう。先秦と盛漢を尊重し欧陽脩や蘇軾を軽んじる人は、これとどこが違うだろうか。王世貞は晩年に蘇軾の文章を好んで読み、鹿門茅坤は日頃から欧陽脩を韓愈よりすぐれると言っていたが、この二人は人を欺く者ではないのだ。

ここでまず窺えることは、「近世宗先秦西京者」という句節があるように、宋代の文章と比較する対象として先秦兩漢の文章が挙げられていることである。当時朝鮮の文壇では、秦漢の文章を典範とする動きが広まっていたが、それは盛唐詩が流行したのと同じく、「文必秦漢」を叫んだ前後七子の散文理論からの影響であった。よく知られているように、前後七子は秦漢古文を尊重して、唐宋、特に宋代の散文を軽視したのである。そのような前後七子文章論の影響を受け、16世紀後半以降、朝鮮文壇では秦漢古文を尊重し、唐宋古文に対しては理に偏った卑陋な文章だと言って批判する態度が強かったのである。¹⁴⁶

しかしここで許筠は、宋代の代表的な文章家である蘇軾と欧陽脩の文章について、それぞれの長所を高く評価する姿を見せている。無論許筠は彼らの長所を評価しながらも、秦漢の文章を天下の珍しい食べ物に喩え、唐宋の文章を日常の平凡な食べ物に喩えて、秦漢古文が優位であると認識している。文章の評価においても、基本的にはこのような復古的観点を持っていることがわかる。しかしこのように秦漢古文の優越性を認めながらも、宋代文章の価値をも発見しようとする態度は、やはり前後七子の一般的文学論と区別される場所であった。

許筠がこのように宋代文章の長所と価値を認めるようになったのは、まず、欧陽脩、蘇軾など唐宋文章家たちの作品が文章学習の教科書として使われていた朝鮮文壇の伝統を背景としている。初期から朝鮮では韓愈・

¹⁴⁶ この時期朝鮮文壇において秦漢古文を尊重した文章家たちの散文批評理論については「姜明官(2002)」参照。

蘇軾・歐陽脩など唐宋諸家の議論文を重点的に選抜した『古文真宝』や『文章軌範』が文章学習書として広く用いられていた。¹⁴⁷許筠もそのような伝統から離れてはおらず、蘇軾と歐陽脩の文章に肯定的な態度を見せるようになったと考えられるのである。

しかしまた一方では、許筠は明代文人の王世貞と茅坤の影響を受けて、歐陽脩や蘇軾の文章を認めている。それは引用文の最後の句節から窺える。ここで許筠は、王世貞と茅坤が「人を欺く者ではない」と言い、王世貞と茅坤がそれぞれ蘇軾と歐陽脩の文章を高く評価したことを、自分が彼らの文集を編纂することの根拠にしている。王世貞は前後七子の一人であり、許筠が生涯熱心に追いつけた人物である。王世貞は秦漢古文を尊重した前後七子に属しながらも、晩年に至っては宋代詩文の長所を認める柔軟な態度を見せし、中でも特に蘇軾の詩文を好んで、いつも蘇軾の文集を読んでいたと言われている。¹⁴⁸許筠が蘇軾の文集を作る根拠として、王世貞のこのような姿勢に言及したのは、まだ前後七子からの影響の下にあったとも言える。

しかしもう一つ、ここで茅坤が歐陽脩を高く評価していることが歐陽脩の文集を作る根拠になっていることにも注目する必要がある。茅坤は王愼中(1509～1559)・唐順之(1507～1560)を中心とし、唐宋古文を尊重した「唐宋派」に属する人物である。彼は秦漢古文を尊重する前後七子の文学論に反対し、その主唱者である李夢陽を「草莽偏陲」と非難し、文章の手本とすべきは唐宋古文だと主張して、『唐宋八家文抄』を編纂、唐宋古文の普及に力を入れた。¹⁴⁹即ち、王世貞とは反対の文派に属した人物である。

¹⁴⁷ 『古文真宝』と『文章軌範』の朝鮮での刊行及び流布については、「沈慶昊(1999)」(148～157頁)及び「金学主(2000)」(111～122頁)参照。

¹⁴⁸ 王世貞が晩年になって宋詩に柔軟な態度を見せたことは慎蒙が編纂した『宋詩選』(1580)に付けた序文「宋詩選序」(王世貞『弇州山人続稿』巻41)参照。また、彼が蘇軾の長所を認め、晩年には蘇軾の文集を最も楽しんだということについては、「蘇長公外紀序」(『弇州山人続稿』巻42)と鄭利華の『王世貞年譜(1993)』(347頁)参照。

¹⁴⁹ 茅坤『茅鹿門先生文集』「唐宋八大家文鈔序」巻14：昌黎韓愈首出而振之、柳柳州又從而和之、於是始知非六經不以讀、非先秦兩漢之書不以觀。其所著書論敘記碑銘頌辯諸什、故多所獨開門戶、然大較並尋六藝之遺略、相上下而羽翼

ところが許筠は王世貞に同調しながらも、一方で彼と反対側に立つ茅坤の文学論をも受容する態度を見せている。ここで確認できることは、許筠が明代文人の文学論を受容する際にも、一方に偏らず、それぞれの理論が持つ価値を十全に受け止めようと努力していることである。

以上で考察したように、許筠は盛唐詩と秦漢古文を詩文評価の典範としながらも、宋代詩文にもそれなりの価値があると認識し、その個性と長所を探ろうとしている。そのような姿勢は、朝鮮漢詩文に対する彼の評価にも帰結すると考えられ、注目に値する。それぞれの作品が持つ価値を探り、それを認めようとする姿勢の先に、漢文学の辺縁にある朝鮮の詩文にもその固有の性格と価値を認める余地が生まれるからである。許筠が宋代詩文の価値を認めたことは、突きつめれば、このように朝鮮詩文の価値を探索することの基盤ともなつたと考えられる。

以後許筠は朝鮮の漢詩文を整理する作業に熱中するようになるが、彼がその作業の必要性を感じたことは、文学はそれぞれ固有の価値を持っているというこのような認識に基づいていたと言える。このことについては三部でさらに詳しく扱うことにしたい。

之者。貞元以後、唐且中墜、沿及五代、兵戈之際、天下寥寥矣。宋興百年、文運天啓。於是歐陽公修、從隋州故家覆瓿中、偶得韓愈書、手讀而好之、而天下之士、始知通經博古為高、而一時文人學士、彬彬然附離而起。蘇氏父子兄弟、及曾鞏王安石之徒、其間材旨小大、音響緩亟、雖屬不同、而要之於孔子所刪六藝之遺、則共為家習而戶曉之者也…(中略)…我明弘治正徳間、李夢陽崛起北地、豪雋輻輳、已振詩聲、復揭文軌、而曰、吾左吾史與漢矣、已而又曰、吾黃初建安矣。以予觀之、特所謂詞林之雄耳、其於古六藝之遺、豈不湛淫滌濫、而互相剽裂己乎。

第二章．明代唐詩選集の批判的受容—唐詩選集編纂方式を中心に

* 始めに

15世紀後半以降明文壇に「詩必盛唐」を叫ぶ前後七子の詩論が登場し、盛唐詩を尊崇する動きが現れたのにしたがって、盛唐詩中心の唐詩選集が活発に編纂されたのは、自然な流れであった。前後七子の文学論は、その発生地である明文壇だけではなく、17世紀前半朝鮮文壇、18世紀江戸文壇にも伝わり、各国の文壇で大きな影響力を發揮した。それとともに、前後七子の詩論が受容され、各文壇でも盛唐詩の流行、唐詩選集の活発な編纂作業が行われた。このように、前後七子詩論の流行、盛唐詩の尊崇、唐詩選集編纂というのは、時間差をおいて見られた、東アジア三国に共通する文学現象の一つだったと言える。

では、朝鮮と江戸文壇で前後七子文学論が受容され流行したのは、一方的な中国の影響とのみ言えるものだったのだろうか。中国が漢文学の本場であるという観点に立って、従来の研究は中国文壇を伝播者、朝鮮と江戸文壇を受容者として、その一方的影響関係にのみ注目し、考察してきた。しかし本稿ではその観点を換え、受容者の立場を中心に、この文学現象を改めて考察しようとしたのである。朝鮮と江戸文壇は明文壇の何を、どのように受容したのか。これら各文壇の選択とその受容の方式に注目し、同時に、それが成り立つようになった文学的背景も検討しようとした。すなわち、何かを「選択」することによって行われる「受容の能動性」を考察しようとしたのである。

その具体的な方法として、本稿では「書籍の編纂と流通」に注目した。当時各文壇では盛唐詩尊崇の復古派詩論が流行し、唐詩選集が多数編纂された。特に朝鮮と江戸文壇は、それぞれ明文壇で出版された唐詩選集を輸入し、それを独自に再編纂するという態度を取った。しかもその編纂には、それぞれの文壇の状況に応じて異なる方式が見られる。本稿では朝鮮と江戸文壇における中国の唐詩選集輸入、再編纂方式の相異点を分析すること

で、一つの書籍が各国の文学的環境で持つ特殊な意義について検討しようとした。このような作業を通じて、各文壇の特徴はより明らかになると期待できる。

1. 16世紀明文壇：復古派詩論と盛唐詩中心の唐詩選集編纂

まず17世紀前半の朝鮮文壇および18世紀江戸文壇に影響を与えた、16世紀明文壇の動向を簡単に整理することにする。明代は唐詩学が出版・理論・美学など多方面で総合的に発展した時期である。その一つの指標として歴代唐詩選集の編纂状況を見ると、明代以前に刊行された唐詩選集が80余種類であるのに対し、明代には200種を超えるなど、圧倒的に多くの唐詩選集が刊行されている。¹⁵⁰明代の唐詩学及び唐詩選集編纂については近年活発な研究が行われている。¹⁵¹それを参照して、ここでは復古派詩論の形成と唐詩選集の性格変化について考察したい。即ち、盛唐詩を尊崇する詩論の形成にしたがって編纂された唐詩選集の変化を見てゆくことにする。そして復古派の支持を得た唐詩選集の中で、楊士弘(元)が編纂した『唐音』、高棟(1350～1423)が編纂した『唐詩品彙』(1393)と『唐詩正聲』、そして後七子の一人である李攀龍(1514～1570)が編纂した『唐詩選』を中心に、それら三つの詩選集の変化に注目し、各詩選集が復古派詩論とどのように結びついているかについて検討したい。¹⁵²

まず明文壇の唐詩選集流通状況について考察すると、¹⁵³明初から正徳年間(1506～1521)に至るまでは、明文人が編纂した唐詩選集より、宋元代文人が編纂した唐詩選集、すなわち『三体唐詩』(南宋、周伯弼)、『唐詩鼓吹』(金、元好問)、『唐音』(元、楊士弘)などが主要なものだった。中で

¹⁵⁰ 「孫琴安(2005)」、「孫春青(2006)」(2～3頁)参照。

¹⁵¹ 「陳国球(1990)」、「陳伯海(2004)」、「孫春青(2006)」、「査清華(2006)」、「金生奎(2007)」などの論が代表的研究である。

¹⁵² 「陳国球(1990)」(217～291頁)「唐詩選本与復古詩論」では、『唐音』・『唐詩品彙』・『唐詩正聲』・『古今詩刪』・『唐詩選』と復古派詩論の関係について詳らかに論じており、良い参考になる。

¹⁵³ 以下明初の唐詩選集流行については、「孫春青(2006)」(13～22頁)参照。

も楊士弘の編纂した『唐音』は明代に入り、批点本・注釈本などの形態で何回も刊行されるなど、明初の唐詩流行に最大の影響を与えた詩選集である。

唐詩選集の歴史で、『唐音』の出現は重要な分岐点になっている。まず体制の面で画期的な特徴を持っていた。『唐音』以前の唐詩選集は作家別に編纂されるか、主題別、あるいは律詩・絶句など特定の詩体を選んで集めたものが主流であった。それが『唐音』に至り、初めて作家を網羅し、すべての詩体を具備した総合的な唐詩選集が出現したと言われる。また全体を「始音」・「正音」・「遺響」と分類し、「正音」に初唐、盛唐期の作品を多数収したのも、以前の唐詩選集が中晩唐期の作品を中心にしてしたことと比べると、大きな変化であった。¹⁵⁴

しかし『唐音』の場合、まだ中晩唐詩人の作品が半分以上を占めていたこと、李白や杜甫のような盛唐の代表的詩人の作品が収録されなかったこと、そして分類体制で一貫性が不足していたことなどが問題点として指摘されていた。そこで高棟(1350～1423)は作家と詩体を総網羅した『唐詩品彙』(1393)を編纂することになる。次の序文を通じて、高棟が『唐詩品彙』を編纂した意図について見ておきたい。

* 高棟『唐詩品彙』「唐詩品彙総序」

載観諸家選本、詳略不侔。英華以類見拘、樂府為題所界、是皆略于盛唐、而詳于晚唐。他如朝英・国秀・篋中・丹陽・英靈・閨氣・極玄・又玄・詩府・詩統・三体・衆妙等集、立意造論、各該一端、唯近代襄城楊伯謙氏唐音集、類能別体制之始終、審音律之正變、可謂得唐人之三尺矣。然而李杜大家不録、岑劉古調微存、張籍・王建・許渾・李商隱律詩、載諸正音、渤海高適・江寧王昌令五言、稍見遺響。每一披讀、未嘗不歎息于斯。

諸家の編纂した選集を見ると、詳細なところと簡略なところが一樣ではない。『文苑英華』は分類にこだわり、『樂府詩集』は題名に

¹⁵⁴ 「陳国球(1990)」(217～232頁)参照。

制限され、どれも盛唐を簡略にして、晩唐が詳細である。他の『朝英集』・『国秀集』・『篋中集』・『丹陽集』・『河岳英靈集』・『中興間氣集』・『極玄集』・『又玄集』・『詩府』・『詩統』・『三体詩』・『衆妙集』などの選集は、意図や理論が、それぞれ一つにかたよっている。ただ近世襄城の楊士弘が編んだ『唐音』のみが、その分類は詩体の全体を区別し、音律の正変を判断できていて、唐人の法道を得たと言える。しかし、李白と杜甫など大家の作品を採録せず、岑参・劉長卿の古調をほとんど残さず、張籍・王建・許渾・李商隱の律詩を「正音(『唐音』の一部)」に載せていて、渤海の高適と江寧の王昌令の五言は「遺響(『唐音』の一部)」に少し見えるだけである。本を開いて読むたびに、これに歎息しないことはなかった。

高棟は既存の詩選集が一貫された体制を持たず、盛唐の作品を粗略にして中晩唐に偏っていることを批判しながら、新しい唐詩選集を編纂する必要性を述べている。特に彼が高く評価した『唐音』でさえ、盛唐の代表的詩人である李白や杜甫の作品を採録せず、また作品の分類にも問題があると言っている。すなわち『唐詩品彙』は、唐詩を網羅することを追求すると同時に、特に盛唐詩を補うという意図から編纂されたものだと考えられる。後に高棟は『唐詩品彙』の中で声律が純正な作品を集め、『唐詩正聲』という詩選集をあらためて編纂することにする。『唐詩正聲』ではさらに盛唐詩人の比重が高く、¹⁵⁵盛唐詩を規範とする高棟の意図をよく示している。要するに、『唐音』・『唐詩品彙』・『唐詩正聲』の順に、盛唐詩への傾倒が高まってゆく様子が窺えるのである。

『唐詩品彙』と『唐詩正聲』は編纂された後も、しばらくは詩壇の注目を引くことができなかった。この詩選集が注目されるようになったのは、嘉靖年間(1522～1566)に入り、復古派詩論が登場してからのことである。

¹⁵⁵ 「陳国球(1990)」(251～253頁)によると、『唐詩品彙』では初盛唐作品の収録比率が46.4%であるのに、『唐詩正聲』では60%に至っていることが分かる。

¹⁵⁶既に知られているように、復古派、特に前後七子の詩論は「詩必盛唐」と要約されるほど、盛唐詩へ極度に偏向した態度を持っていた。そのような状況から、盛唐詩の比重が高い高棟の詩選集が再評価されることになったのである。復古派文人の『唐詩品彙』や『唐詩正聲』に関する評価は、明末の復古派詩論家であり、『詩薮』の編纂者である胡応麟(1551～1602)の次の言及によく表れている。

＊ 胡応麟『詩薮』「外編」四

唐至宋元、選詩殆数十家。英靈・国秀・間氣・極玄。但輯一時之詩、荊公百家、缺略初盛。章泉唐絶、僅取晚中。至周弼三体、牽合支離。好問鼓吹、薰籠錯雜。数百余年未有得其要領者。独楊伯謙唐音頗具隻眼。然遺杜李、詳晚唐、尚未盡善。至明高廷礼品彙而始備、正聲而始精。習唐詩者必熟二書、始無他之惑。

唐代から宋元に至るまで、詩選集を編纂した人が数十家にもものぼった。『河岳英靈集』・『国秀集』・『中興間氣集』・『極玄集』は一時代の作品を編んだのみであり、王安石の『唐百家詩選』には初盛唐の作品が十分ではない。章泉の『唐絶』は中晩唐の作品を取っただけである。周弼の『三体詩』にいたっては、強引に寄せ集めてめちゃくちゃになっている。元好問の『唐詩鼓吹』は佳作と駄作が入り交じっている。数百年以来その要領を得た人がいない。ただ楊士弘の『唐音』だけが、かなり鑑識眼を備えたものである。しかし李白と杜甫を落として晩唐を詳しく載せたのは、やはり十分に良いとは言えない。それが明の高棟の『唐詩品彙』に至って始めて完備され、『唐詩正聲』が出てやっと精美になったのである。唐詩を学ぶ人々はこの二つの書物を熟読してはじめて、他の惑いなくなるのだ。

ここで胡応麟は歴代の詩選集を評価する基準の一つとして、盛唐詩の選抜の様相をみている。その結果『唐詩品彙』は最も完備された詩選集で

¹⁵⁶ 「陳国球(1990)」(233～239面)参照。

あり、『唐詩正聲』は精美な作品を選んで作ったものだと評価している。

以上の盛唐詩を典範にした復古派詩論を背景にし、15世紀後半からは唐詩選集が大量に刊行されるようになった。この時期に編纂された唐詩選集の特徴は、全時代の唐詩を対象にする総集の刊行が増加し、李白・杜甫を含めて初盛唐の作品選集が主になっていることである。嘉靖年間以前には中晩唐詩人たちの詩集がかなり刊行されたことと比べると、かなりの変化であった。またこの時期編纂された唐詩選集は、大部分が高棟の詩選集に基づいたものであり、『唐詩品彙』や『唐詩正聲』に批点を付けたり、それらを縮約したりした書物が多くを占めている。¹⁵⁷そして遂に『唐詩品彙』が詩壇の中心になったことが確認されるのである。

このような文壇の流れの中で、徹底的な盛唐詩重視の姿勢を示して現れた詩選集が、即ち李攀龍の『古今詩刪』と『唐詩選』であった。『唐詩選』は『四庫全書総目提要』で李攀龍が直接編纂したものではないと主張されて以来、¹⁵⁸その真偽が疑われていた。¹⁵⁹しかし本稿では、『唐詩選』に載せられた作品の大部分が『古今詩刪』の「唐詩」部分にあり、¹⁶⁰『唐詩選』は李攀龍の詩選観を十分に反映していると考えられること、また後代の文人たちも『唐詩選』を李攀龍の詩選集と認識し受容していたことから、¹⁶¹李攀龍と『唐詩選』をあわせて議論することにする。

¹⁵⁷ 「孫春青(2006)」(103～122頁)参照。

¹⁵⁸ 『四庫全書総目提要』: 流俗所行有攀龍唐詩選、攀龍實無是書、乃明末坊賈、割出詩刪中唐詩、加以評註、別立斯名、以其流伝久。今亦存其目、而不録其書焉。

¹⁵⁹ 「平野彦次郎(1974)」(23～56頁)参照。

¹⁶⁰ 「平野彦次郎(1974)」(33～43頁)では『唐詩選』と『古今詩刪』の唐詩部分を詳しく対照している。これによると、『唐詩選』は計465首、『古今詩刪』は742首の作品が収録されていて、『古今詩刪』の分量がもっと多い。また、『唐詩選』に載せられたものは19首を除いて、全てが『古今詩刪』に収録されている作品であることを確認した。

¹⁶¹ 「平野彦次郎(1974)」(25～26頁)によると、明文人の記録には『唐詩選』を偽書だと言った記録が見つからない、また唐汝詢が編纂した『唐詩解』(1615)には、829種に至る「援引書目」に「于鱗唐詩選」のみあり、「古今詩刪」という題名が見えない。したがって当時の文人たちには『古今詩刪』より『唐詩選』の方がよく知られていたと推測できる。

李攀龍は前後七子の中でも特に復古的文学論を持っていたと言われる。その態度は、『古今詩刪』の編纂にもよく表れている。『古今詩刪』は中国歴代の詩を時代順・詩体別に選抜した詩選集である。しかし、古代から漢・魏・南北朝、続いて唐代の作品を載せた後は、宋元をおいて、すぐに明代の作品を収録している。宋元の詩を認めないという態度がここによく見られる。基本的に前後七子は「詩必盛唐」という盛唐詩尊崇の詩論を主張していたが、中でも李攀龍は特に厳密にそれを主張したと言われている。¹⁶²ここでは、彼が唐詩を選んだ際に作ったといわれる序文を通じて、唐詩に関する彼の認識について考察することにする。

* 李攀龍『滄溟集』卷15「選唐詩序」

唐無五言古詩、而有其古詩。陳子昂以其古詩為古詩、弗取也。七言古詩唯杜子美、不失初唐氣格、而縱橫有之。太白縱橫、往往彊弩之末、間雜長語、英雄欺人耳。至如五七言絕句、實唐三百年一人。蓋以不用意得之、即太白亦不自知其所至、而工者顧失焉。五言律排律、諸家概多佳句。七言律體、諸家所難、王維・李頎頗臻其妙、即子美篇什雖衆、隳焉自放矣。作者自苦、亦惟天稟生才不盡。後之君子、乃茲集以盡唐詩、而唐詩盡於此。

唐には五言古詩がないが、唐の古詩がある。陳子昂はその古詩を以て古詩としたが、取らなかった。七言古詩は、ただ杜甫のみ初唐の氣格を失わず、のびのびとしたところがある。李白ものびのびとしているが、往々にして勢いが続かなくなると、冗長な語句が混じり、英雄人を欺くといったものにすぎない。五七言絶句の如きに至っては、(李白は)実に唐三百年の一人である。おそらく意図せずにそれを得たのであり、李白自身もどうしてそこに行き着いたか知らないで、技巧のある者は、かえって失うのである。五言律詩や排

¹⁶² 『四庫全書総目提要』：臣等謹案古今詩刪三十四、明李攀龍編。攀龍有滄溟集、別著録是編、為所録歷代之詩、每代各自分體、始於古逸、次以漢魏南北朝、次以唐、唐之後繼以明、多録同時諸人之作、而不及宋元。蓋自李夢陽倡不讀唐以後書之説、前後七子率以此論相、攀龍是選猶是志也。

律は、諸々の詩人にも佳句が多い。七言律体は、諸家が難しいものとしているが、王維・李頎がよくその妙に至っている。杜甫の作品には(七言律体が)多いが、崩れて締まりがなくなっている。作者も自ら苦しんでおり、これはまことに天はすべての才能を与え尽くすことはないということだ。後の君子よ、この詩集で唐詩は尽くされ、唐詩はここに尽くされているのである。

ここでまず注意すべきことは、現在伝わる『唐詩選』はこの序文の内容をそのまま反映してはいないことである。例えば、序文では陳子昂の古詩を取っていないと言っているが、実際には選ばれている。¹⁶³また、内容について見ると、「唐無五言古詩」や「唐詩盡於此」という最後の句節が注目される。ここから窺えるのは、李攀龍が唐詩に対して既存文壇の評価に従わず独自の見解を持ち、それに強い確信を持っていたことである。そして復古派詩論が文壇を席卷していた時には、この詩選集も多くの支持を得て、29種に及ぶ多様な刊本が出版され、明中期以後の代表的唐詩選集の一つになったのである。¹⁶⁴

しかしこの序文及び李攀龍の『唐詩選』に対して、後代には批判も少なくなかった。多くの人々が李攀龍の選詩観について、一面に偏った、偏狭なものだと批判したのである。¹⁶⁵実際、李攀龍の『唐詩選』には中唐の有名な詩人である白居易や杜牧などの作品が載せられず、初盛唐の作品が七割以上を占めるなど、極度に偏向した詩選観が見られる。¹⁶⁶しかしこのような「偏向的」詩選観は、一方では詩選者の明確な主観が示されたものとして、この詩選集の特徴であったともいえる。そしてこの時の李攀龍の主観とは、言うまでもなく盛唐詩への強い執着であった。

以上で、16世紀明文壇の唐詩選集編纂の様相を簡単に確認してきた。この時期には前後七子を中心にした復古派詩論の登場によって、盛唐詩を

¹⁶³ 「陳国球(1990)」(257～260頁)参照。

¹⁶⁴ 『古今詩刪』と『唐詩選』の出版現況については、「金生奎(2007)」(103～108頁)参照。

¹⁶⁵ 「陳国球(1990)」(266～269頁)参照。

¹⁶⁶ 「陳国球(1990)」(255～257頁)参照。

詩の典範とする理論が登場し、それを背景にして、盛唐詩の収録比率が唐詩選集評価の重要な基準となったのである。この流れに沿って高棟の『唐詩品彙』と『唐詩正聲』も再評価されたのであり、ついには徹底して盛唐詩が中心となっている李攀龍の『古今詩刪』と『唐詩選』が登場することとなった。李攀龍の唐詩選集は、後になって極度に「偏狭な詩選観」を持つと批判されることにもなったが、編者の明確な主観を示したという点でそれなりの意義があるといえるだろう。

2. 17 世紀前半期朝鮮文壇：批評の対象として認識、朝鮮式唐詩選集編纂

次に、17 世紀前半朝鮮文壇での唐詩選集編纂の様相を考察することにする。まず朝鮮詩壇の全般的な流れについて考察する。朝鮮では、高麗中期に蘇軾を始めとする宋詩が受容されて以来、16 世紀に至るまで宋詩が詩壇を主導していた。特に 15 世紀から、蘇軾以外にも王安石・黄庭堅・陳師道などを中心とする「江西詩派」が流行し、彼らの作詩方法を真似て「海東江西詩派」と呼ばれた一群の詩人たちも登場し、朝鮮詩壇を支配した。¹⁶⁷つまり 16 世紀半ばまで、朝鮮の詩壇では宋詩がその中心となっていたのである。

しかし 16 世紀末から宋詩の気風に飽きて唐詩の詩風を追求する詩人たちが登場し、本格的に朝鮮文壇で唐詩が勢力をふるうようになった。初期は「三唐詩人」と呼ばれた崔慶昌・白光勳・李達を筆頭に晩唐詩が流行したが、16 世紀後半からは晩唐詩の柔弱でセンチメンタルな部分が批判され、強い勢いを誇る盛唐風の詩が詩壇を掌握するようになる。¹⁶⁸このように「蘇軾—江西詩派—晩唐詩—盛唐詩」と変化した詩壇の雰囲気の中で、中国からさまざまな唐詩選集が輸入されるようになったのは自然なことであっ

¹⁶⁷ 「李鍾黙(1995)」参照。

¹⁶⁸ 16 世紀後半以降の朝鮮文壇における唐風流行については「李鍾黙(2002)」(467～495 頁)、「鄭珉(1999)」(27～62 面)を参照。

た。¹⁶⁹朝鮮初期には『三体詩』・『唐詩鼓吹』・『続鼓吹』・『三体詩』・『唐音』・『唐賢詩』・『唐詩絶句』・『唐百家詩選』など、宋元代に編纂された唐詩選集が主に読まれた。中でも 16 世紀半ばまでは『唐音』が朝鮮文壇で最も広く読まれたものであった。それが 16 世紀後半に入り、盛唐詩が流行するに伴って、高棟の『唐詩品彙』が唐詩学習の手本として関心を引くようになったのである。

17 世紀前半中国の唐詩選集の受容と関わって最も注目されることは、中国から輸入された唐詩選集を参考にしながらも、朝鮮の文人たちが自分なりの基準で新たに唐詩選集を編纂したことである。その具体的例として本稿では、李睟光の『唐詩彙選』と許筠の『唐詩選』に注目することにする。彼らは当時明との外交に最も活躍した人物であり、明の文壇の動向にも常に関心を持っていた。そこで彼らが中国の唐詩選集を読み、それを自分なりの観点から新たに再編纂したということは、十分注目に値すると思われる。以下には、この二人が編纂した唐詩選集を中心に、17 世紀前半朝鮮文壇における中国唐詩選集の受容方式について具体的に考察することにする。

1) 李睟光の『唐詩彙選』編纂

李睟光(1523～1628)は高棟の『唐詩品彙』に基づいて、その中で優れた作品を新たに選び、『唐詩彙選』という唐詩選集を編纂した。李睟光は朝鮮最初の百科事典とも呼ばれる『芝峰類説』(20 卷 10 冊)の編者であり、博学を誇る人物であった。当然彼は中国の書籍についても豊かな知識を持ち、唐詩選集も唐代から明代までに編纂された書物を詳しく把握していたのである。¹⁷⁰

¹⁶⁹ 朝鮮時代中国詩選集の受容に関しては、「金学主(2000)」、「李鍾黙(2002)」(497～519 頁)参照。

¹⁷⁰ 李睟光『芝峰類説』「経書部」三「書籍」：唐詩之選、夥矣。如唐詩正音・品彙・正聲・鼓吹・三体詩・百家詩・唐詩類苑・十二家詩・唐詩紀之属、不可盡举。

ここでさまざまな唐詩選集について言及しているが、李攀龍の『古今詩刪』

* 李暉光『芝峰類説』卷7「經書部」三「書籍」

楊仲弘言、河嶽英靈及中興間氣等集、皆唐人所選、而多主晚唐。王介甫百家選、除高・岑・王・孟數家外、亦皆晚唐。他如洪容斎・趙紫芝諸選、多略於盛唐、而詳於晚唐云。時俗所如此、詩格之日卑、無足怪也。

楊仲弘が言うのに、『河嶽英靈集』と『中興間氣集』などは、皆唐人が選んだものであるが、多くのものが晩唐の作品を主にしている。王安石の『百家選』は、高適・岑參・王維・孟浩然などの大家を除き、また全て晩唐のものである。他に洪容斎・趙紫芝などの選集も、多くは盛唐のものは簡略にして、晩唐のものに詳しい、云々と。時代の風俗がこのようであったのだから、詩格が日に日に低くなったのも、怪しむに足らない。

ここで李暉光は、唐代以降編纂された唐詩選集の大部分が晩唐詩中心であることを指摘した楊仲弘の言及を引用し、このように晩唐詩の尊崇によって詩格がますます低くなっていることを述べている。李暉光が晩唐詩中心の唐詩選集に対してかなり不満を持っていたことが窺える。このような認識から、李暉光は明代の高棅が編纂した『唐詩品彙』に対してその分類方式を高く評価し、特に陳子昂・李白・杜甫などの盛唐詩人を重視したことについて、「大いに詩教に功あり」という明文人の評価に言及し、それに同意する態度も見せた。¹⁷¹しかし『唐詩品彙』は分量が多く唐詩を学ぶ人々に不便であると言い、『唐詩品彙』から改めて自分の基準で詩を選抜し、『唐詩彙選』を編纂することにしたのである。この書物は残念ながら現在伝わらず、実物は確認できないが、文集に残った序文からその編纂

と『唐詩選』は言及されていない。ここから、李暉光はまだ李攀龍の詩選集を手に入れていなかったと推測される。

¹⁷¹ 李暉光「芝峯類説」卷7「書部」三「書籍」：高棅撰唐詩品彙、以武徳以後為初唐、開元以後為盛唐、大曆以後為中唐、開成以後為晚唐。又以初唐為正始、盛唐為正宗大家名家羽翼、中唐為接武、晚唐為正變余響。其以陳子昂・李白為正宗、杜甫為大家者、最有斟酌。明人謂高廷礼唐詩品彙、大有功於詩教是矣。

意図は窺うことができる。¹⁷²

＊ 李暉光『芝峯先生集』卷21「唐詩彙選序」

余平生無所嗜、所嗜唯詩、而于唐最偏嗜焉。若聾者之嗜音聲、瞽者之嗜繪綵。人或笑而排之、有不恤也。夫詩道至唐大備、而數百年間、体式屢變、氣格漸下、故有始盛中晚之分。所謂晚唐則衆體雜出、疵病不掩。然論其品格、猶不失為唐。譬之於味、始盛之詩、其猶八珍膾炙、而晚唐之作、亦猶禁饈之余味。其可嗜一也。但世或有嗜晚唐、而不識始盛唐之為可嗜、惑矣。如正音・鼓吹・三体等編、亦多主晚唐、或失之太簡、而唯品彙之選、所取頗広、分門甚精、視諸家為勝、第編帙似夥、學者病之。余嘗挾其中尤雋永者為八卷、命曰唐詩彙選。私竊味之而已、不敢以示人。

私は平生好むというようなものもないが、ただ詩だけは好んでおり、特に唐詩を最も偏愛してきたのである。まるで聾者が音を好むよう、盲人が絵を好むようなことだ。それを笑って非難する人もいたが、自らは憂えることがなかった。そもそも詩道は唐代に至って完備され、それから数百年間、体式が何度も変わり、気格も徐々に落ちたので、それで初・盛・中・晩唐の区分ができた。いわゆる晩唐は、多くの詩体が入り混じって現れ、病弊は覆うことができなくなった。しかしその品格を論じれば、まだ唐代の品格を失っていない。これを味にたとえると、初盛唐の詩は八珍膾炙のようであり、晩唐の作品もなお珍味の余味のようなのであるので、好んで味わうことができるという点では同じだ。ただ世の中には晩唐の詩のみを好んで、初盛唐詩の味わいがわからない人がいるが、それは正当ではない。『正音』・『唐詩鼓吹』・『三体詩』などの選集も、やはり多くは晩唐の作品を主にしていたり、あまりにも簡略であったりする。

¹⁷² 序文によると、『唐詩彙選』は尹暉が出版しようとしたというが[尹公次野之視篆鷄林也、目は編而喜之、要取而壽諸梓]、現在実物が伝わらず確認されてない。ただここで確認できることは、李暉光がこの詩選集を編纂した意図には、「私竊味之而已、不敢以示人」と言ったように、人にみせるものではなく、自分一人のため作ったものであることである。

ただ『唐詩品彙』の選詩のみが、かなり幅広く取り、分類も非常に精密で、諸家のものより優れているようだ。ただ分量が多すぎるようで、学ぶ者はこれを不満に思っている。私はかつてその中で特にすぐれた作品を選んで八巻を作り、それを『唐詩彙選』と名付けたのである。密かに一人でそれを味わうのみで、敢て人に見せようとは思わない。

李晔光は『唐音』・『唐詩鼓吹』・『三体詩』・『唐詩品彙』などの唐詩選集を読み、その中で『唐詩品彙』に基づいて『唐詩彙選』を編纂したと言っている。序文で注目されることは、1)唐詩を偏愛していること、2)世の中の人々が初盛唐詩の価値を理解しないのが不満であること、3)晩唐の作品に偏らないという点で『唐詩品彙』を高く評価していること、である。すなわち李晔光が『唐詩品彙』を高く評価する理由の一つは、初盛唐の作品が多数選ばれていることなのである。このような態度は、初盛唐詩を晩唐詩、宋詩より優位に置いた李晔光の詩論を考えれば、当然のことであった。

ここで簡単に李晔光の詩論について見ると、李晔光は詩について、魏秦以降その格が落ち続けたのが唐代に至ってやっと回復し、盛唐時代に完成された。それが晩唐に至ってまた柔弱なものになり、剽竊などが多くなったと考えていた。¹⁷³このような考え方は明代復古派の詩論そのものである。実際に、李晔光は前後七子の詩論にかなり影響を受けている。『芝峰類説』「文章部」の詩文批評を見ると、詩論に関して嚴羽・楊慎・王世貞・李攀龍など明代復古派文人の著書をしばしば引用しながら、彼らの意見に積極的に同調する態度を見せている。中でも王世貞の著作は多く引用さ

¹⁷³ 李晔光『芝峯集』卷21「詩説」：夫詩自魏晉以降、陵夷至徐庾而靡麗極矣。及始唐、稍稍復振、以至盛唐諸人出、而詩道大成、蔑以加焉。逮晚唐則又變而雜體並興、詞氣萎弱、間或剽竊陳言、令人易厭。然比之於宋、体格亦自別矣。後之人、驟見其小疵、而概以唐為可薄、又徒知晚唐之為唐、而不知始盛之為唐、甚者守井管之見、肆雌黃之口、全昧聲律利病、而妄議工拙是非。至謂唐不可學、或謂唐不必學、靡靡焉惟宋之趨、纔屬文則曰足矣。不復求進、苟以悅時人之目而止、信乎言詩之難也。

れている。¹⁷⁴

ところがここで考えるべきことは、この時李睟光が批判する対象が、明代復古派の批判対象と異なっていることである。李睟光にとって、宋と晩唐の詩ばかりを追い求め、初盛唐の詩を理解しないというのは、明文壇のことではなく当時朝鮮文壇のことであったのである。

* 李睟光『芝峯類説』9「文章部」二「詩」

我東詩人、多尚蘇・黃、二百年間、皆襲一套。至近世崔慶昌・白光勳、始學唐、務為清苦之詞、号為崔白、一時頗效之、殆變向來之習。然其所尚者晚唐耳、不能進於盛唐、豈才有所局耶。

我が国の詩人たちは、多くは蘇軾と黄庭堅を尊び、二百年間、皆一つの形式を踏襲していた。近世に至って崔慶昌と白光勳が初めて唐詩を学び、清らかできびしい詞を作ろうと力をつくし、「崔白」と呼ばれた。当時の人々は多く彼らに倣い、従来を習慣をほとんど変化させた。しかし彼らが尊重したのは晩唐の作品のみであり、盛唐に進めなかったのは、まさか才能に限界があったのではあるまい。

既に述べたように、朝鮮詩壇は初期から蘇軾などの宋代詩人たちの詩が支配したが、16世紀後半から晩唐詩が流行し、詩風が宋風から唐風に変化した。このような詩壇の雰囲気の中で、李睟光は前後七子から影響を受け、盛唐詩を最も高く評価し、その作風を追求すべきことを主張したのである。

しかしその一方で、李睟光は明代復古派に対して批判的な観点も失っていなかった。王世貞に対し「兪州蓋以盛唐為則、而亦未至焉者也」とか、¹⁷⁵「王[王世貞]詩氣力固健、然句法未免矜持、恐不如李[李攀龍]之全完也」

¹⁷⁴ 「朴守川(1995a)」(93～101頁)によると、『芝峰類説』で王世貞の文集から直接引用した記事は、計60を超え、その頻度が他の書物からの引用に比べて非常に高いのである。

¹⁷⁵ 李睟光『芝峯類説』卷9「文章部」二「詩」：王兪州云盛唐之於詩也、其氣完、其聲鏗以平、其色麗以雅、其意融而無迹。今之操觚者、竊元和長慶之餘似而祖述之、氣則漓矣、意纖然露矣、歌之無声也、目之無色也、彼猶不自悟悔、

と言うように、¹⁷⁶王世貞の詩論には同調しつつも、その作品には限界があることを指摘する態度も見せている。

要するに、李睟光は宋詩と晩唐詩が支配している当時朝鮮詩壇の気風に飽き、初盛唐詩を追求する詩論を主張したのである。そして朝鮮詩壇に初盛唐詩を知らしめるための作業として、初盛唐詩が多数載せられている高棟の『唐詩品彙』に基づき、『唐詩彙選』を編纂した。李睟光は明代復古派詩論からの影響を受け、「盛唐詩尊崇」の詩論を繰り広げるのであるが、しかしそれでも、彼らを一方的に受容したのではなく、彼らの作品に対しては批判的な態度を持っていたことも確認できる。

このように明代復古派の詩論を受容しながらも、作品の批評に関しては独自の基準を持ち、既存の唐詩選集をそのままではなく、新しい唐詩選集に再編して受容する態度は、朝鮮文人たちの特徴とも言えるが、それは次の許筠の例を通じてさらに明確に見て取ることができる。

2) 許筠の『唐詩選』編纂

許筠は生来の才能と該博な知識を持ち、中国と朝鮮の文壇事情によく通じている人物であった。前章で考察したように、許筠は当時中国から輸入されていた書籍を熟読し、それを独自に再編することに熱意を傾けた。特に「唐詩」に関する詩選集を多く編纂したが、『唐詩選』・『四體盛唐』・『唐絶選刪』・『温李艶體』などがそれである。

許筠がこのような唐詩選集を編纂するために参考にした書籍は、主に『唐音』と『唐詩品彙』、それから李攀龍編纂の『古今詩刪』であった。『唐音』と『唐詩品彙』は、明と朝鮮前半において「唐詩学習の教科書」としての役割を果たしていたため、それが参考書として使われたのは当然であ

而且高举闊視曰、吾何以盛唐為哉。余謂此言正中時病、弇州蓋以盛唐為則、而亦未至焉者也。

¹⁷⁶ 李睟光『芝峯類說』9「文章部」二「詩評」：李攀龍詠新河一聯曰、春流無恙桃花水、秋色依然瓠子宮。王世貞極稱之為不可及。而世貞亦有詩曰、連山盡壓支祈鎖、逼漢疑穿織女機。堯山堂紀以為此聯在滄溟之上。余謂王詩氣力固健、然句法未免矜持、恐不如李之全完也。

ったといえる。しかし、それと比べて李攀龍の『古今詩刪』は少し違っていた。前節で考察した李睟光が、許筠と同じ時期に活動し、同様に唐詩選集を編纂したにもかかわらず、『古今詩刪』や『唐詩選』の存在を知らなかったことを考えると、許筠が『唐音』や『唐詩品彙』とあわせて『古今詩刪』を扱っていることには注目する必要がある。実際、朝鮮文壇で李攀龍の詩選集に「本格的」に注目した人物は、許筠がその最初だったのである。

ただし、文集に基づいてみると、許筠は『唐詩選』でなく『古今詩刪』を参照したようである。許筠が新しく編纂した『唐詩選』や『唐絶選刪』の序文によれば、許筠はこの選集を編纂するのに「李攀龍唐詩刪」、「滄溟詩刪」を参考にしたという。¹⁷⁷その時、「唐詩刪」とは『唐詩選』を意味するのではなく、『古今詩刪』の中の「唐詩」部分を限定して意味しているようである。それについては「明詩刪補跋」で、『古今詩刪』の中の「古詩」部分のみを指して、それを「古詩刪」と呼んでいることから確認できる。¹⁷⁸もし、許筠が『古今詩刪』以外に『唐詩選』を入手したのであれば、文集にもそれに関する記録があるはずだが、現在までの記録では『唐詩選』に関する記録はない。また「唐詩選」という名で呼ばず、全て「詩刪」と言っていることから、許筠もまだ『唐詩選』を入手できていなかったのではないかと推測できる。¹⁷⁹

前章で許筠の詩論について考察したところ、許筠は李睟光と同じく、「唐詩の流行」という 16 世紀後半の朝鮮詩壇の流れ、また前後七子詩論

¹⁷⁷ 許筠『惺所覆瓿稿』卷 4「唐詩選序」：曰李攀龍唐詩刪、此三書者出、而天下之選唐詩者、皆廢而不行、吁其盛哉。

「題唐絶選刪序」：余於暇日、取滄溟詩刪、徐子充百家選、楊伯謙唐音、高氏品彙等書、拔其絶句之妙者若干首、分爲十卷、弁曰唐絶選刪。

¹⁷⁸ 許筠、『惺所覆瓿稿』卷 13「明詩刪補跋」：李于鱗明詩若干首、附古詩刪後、其去就有不可測者、元美所謂英雄欺人、不可盡信者耶。

¹⁷⁹ 『唐詩選』の流入に関しては、1720 年に李宜顯(1669～1745)が北京への使行の際に購入した書籍目録が参照される(『陶谷集』卷 30「庚子燕行雜識下」)。当時李宜顯は文学に関する多くの書籍を買って帰ったが、その中には「唐詩選六卷」も含まれていた。一般的に李攀龍の『唐詩選』は全七巻であるが、巻数は少し異なりつつも、それは李攀龍の『唐詩選』であったと考えられる。

からの影響で、復古的詩論と盛唐詩尊重の詩論を展開していた。しかし彼はそれをそのまま受け取るのではなく、自分の評価基準を以て批判的に受容する態度を見せている。それは中国の唐詩選集に関する評価にもよく表れている。次は、楊伯謙が編纂し顧璘(1476～1545)が評点を付けた『批點唐音』に関して許筠がその長・短所を指摘しているところである。

＊ 許筠『惺所覆瓿稿』卷13「批點唐音跋」

然伯謙之分正音・遺響、已甚無稽、華玉又棄擲不批。是正音數編、足以盡唐人詩耶。如沈雲卿・王少伯・高達夫之作、互見於遺響、是數公之什、其不及於張・王・許・李乎。不然、顧則尤贖贖矣…(中略)…其批語或透窳處、或不通處、或明或晦、而去就頗不失體、其用功之不忘、概可見矣。

しかし、楊士弘の「正音」と「遺響」の区別は、非常にでたらめである上に、顧璘がまたそれを放置して批評していない。この「正音」数編で、唐人の詩を十分に尽くしているものか。沈佺期・王昌令・高適のような詩人の作品が、「遺響」のあちこちに見られるが、この人々の詩が張籍・王建・許渾・李商隱の作品に及ばないというのか。そうでなければ、顧璘は実に見識のない人である…(中略)…その批語は明快なところもあれば、通じないところもあり、明らかだったり分かりにくかったりする。しかし取捨選択はかなりその本質をつかんでおり、努力を怠っていない点は、おおむね見てとれる。

引用文に窺えるように、許筠は『唐音』の分類や顧璘の批評に関して、自分なりに判断し、その長短を論じている。それは『唐詩選』の編纂にも同じく見られることである。では、ここで「唐詩選序」を参考に、許筠の唐詩選集編纂に関する意識を考察してみたい。

＊ 許筠『惺所覆瓿稿』卷4「唐詩選序」

此三書者出、而天下之選唐詩者、皆廢而不行。吁其盛哉。余嘗取三氏所選而讀之、可異焉。楊氏雖務精、而正音・遺響之分、無甚蹊

逕。其聲俊古魯之音、亦或不採、使知者有遺珠之慨焉。廷禮所裒、雖極其富、而以代累人、以人累篇、俾妍蚩竝進、韶濩畢御、識者以魚目混璣誚之、似或近焉。至於于鱗氏所揀、只擇勁悍奇傑者、合於己度則登之、否則尺璧經寸之珠、棄擲之不惜、英雄欺人、不可盡信也。¹⁸⁰其遺篇逸韻、埋於衆作之間、歷千古不見賞者、于鱗氏能拔置上列、是固言外獨解、有非俗見所可測度也。余諷而研求、閱有年紀、恍然如有所悟。遂取高氏所彙、先芟其蕪、存十之五、而參之以楊氏、繼之以李氏、所湔拔者合爲一書。分以各體、而代以隸人、苟妙則雖晚亦詳、而或類或俗、則亦不以盛唐存之。凡爲卷六十、而篇凡二千六百有奇、唐詩盡於是矣。

この三つの書物[楊士弘の『唐音』・高棟の『唐詩品彙』・李攀龍の『唐詩選』]が出ると、天下の唐詩を選んだものは、全て廃れて流通しなくなった。ああ、さかんなことだ。私はかつて三人の選集を得て読み、これらの違いがわかった。楊士弘は努めて精密さを求めたが、しかしその「正音」と「遺響」の区別は、あまり隔たりがなく、その雄俊と古魯の音は、採択しないこともあって、知者には優れた作品が落とされているといううらみを感じさせるのである。高棟が集めたものは、豊かさを極めているとはいえ、各時代に詩人を多く連ね、各詩人に作品を多く連ねて、美しいものと醜いものが並び進み、雅と俗がともに収められ、識者は魚の目と美玉が混ざっていると咎めたが、それはほぼ当たっているようだ。李攀龍が選定したものに至っては、ただ力強く傑出したもののみ選び、自分の基準に合えば載せ、合わないで一尺の璧や径寸の玉のような優れた作品でも、投げ捨てて惜しまなかった。「英雄は人を欺くから、全て信じてはいけない」のである。ただしその「遺篇」と「逸韻」で、多くの作品の間に埋もれ、長年の間評価されなかったものを、李攀龍が抜き出して上列に配置しているが、これはもとより言葉では説明し

¹⁸⁰ 王世貞『弇州四部稿』卷150「藝苑卮言」七：始見于鱗選明詩、余謂如此、何以鼓吹・唐音、及見唐詩、謂何以衿裾古選、及見古選、謂何以箕裘風雅、乃至陳思贈白馬、杜陵・李白歌行、亦多弃擲、豈所謂英雄欺人、不可盡信耶。

がたい独自の解釈であり、俗人の目で測り知ることのできるものではない。私は口ずさんで研究し、何年も経てから、突然悟ることができたようであった。そこで高樞が集めたものを取り、まずその荒いものを刈って十のうち五を残し、楊士弘のものを参照し、李攀龍のものを継ぎ足して、その抜き出したものと合わせて一冊の書を作った。詩体を分けて、時代によって人を配列したのである。かりにもすぐれていれば晩唐のものであっても詳しく載せ、卑俗なものであれば、盛唐のものだからといって残すことはしなかった。あわせて六十巻、篇数は二千六百篇あまりである。唐詩はここに尽くされたのである。

引用文によると、許筠は『唐詩選』を編纂するにあたって、中国の唐詩選集を満遍なく参照すると同時に、独自の「唐詩観」を探りあてようと努力していたことが確認できる。特に、李攀龍の『唐詩刪』に対する許筠の態度には、大いに注目する必要がある。許筠は『唐詩刪』について、「只擇勁悍奇傑者、合於己度則登之、否則尺璧經寸之珠、棄擲之不惜」と言い、その偏狭な詩選観を批判している。しかし一方では、「其遺篇逸韻、埋於衆作之間、歴千古不見賞者、于鱗氏能拔置上列、是固言外獨解、有非俗見所可測度也」と言い、彼の高い鑑識眼を評価する面も見せるのである。また、「合於己度則登之、否則尺璧經寸之珠、棄擲之不惜」と言ってその偏狭な選詩の態度を批判しながらも、結局は許筠自身も「苟妙則雖晚亦詳、而或類或俗、則亦不盛唐存之」と言い、自分の基準に合わないを選ばない態度を見せている。徹底的に編纂者独自の基準で詩を選んだという点は、両者に共通していたとも言えるだろう。つまり、その内容は違うが、編纂者個人の明確な詩選観を重視したという点で、許筠の態度は李攀龍の態度と一致していたのである。残念ながら現在許筠が編纂した『唐詩選』は伝わらず、その具体的結果を確認することはできないが、しかし彼が自身の観点に基づいて新しい詩選集を作ったことは、それだけでも十分に意味があったといえる。

以上で考察したところ、17世紀朝鮮文壇では盛唐詩を追求した詩壇の

傾向から、中国の唐詩選集のうち『唐詩品彙』が基本的な教科書として受け取られていたことがわかる。その盛唐詩尊崇の背景には、前後七子の文学論受容が一つの要因としてあった。許筠は『唐詩選』の偏った詩選観を批判しつつも、一方では李攀龍の「独自の個性」を評価する態度を見せている。そして許筠自身も彼独自の基準で作品を選抜し、新しい『唐詩選』を編纂することになった。要するに、17世紀前半における朝鮮文壇では、中国の唐詩選集を参考にしつつ、新たに唐詩選集を再編纂するという姿勢が見られたことが一つの大きな特徴だったといえる。

また、ここでもう一つ考えるべきことは、李晔光と許筠の二人ともが、その唐詩選集を正式に出版することまでは考えなかったという事実である。¹⁸¹ そのため朝鮮時代にはこれらの詩選集は広く流通しなかったようであり、現在にも伝わっていないのである。それは何より、当時民間出版業が発達していなかった朝鮮の出版状況が一つの原因であった。しかしそれ以外にも、本来彼らが詩選集を編纂した目的が、それを出版し普及させることではなく、ただ自分の唐詩に関する理論を確立することであって、選詩集はその結果物として作られたものだったからでもある。この点で、彼らの唐詩選集の編纂は、言わば唐詩批評家としての立場で行われたことであつたといえる。それはこれから考察する江戸文壇の状況とかなり違っており、朝鮮文壇の特徴の一つだったと言えるだろう。

3. 18世紀江戸文壇：学習の対象として認識、教科書用唐詩選集出版

ここまで、17世紀前半朝鮮に中国の唐詩選集が輸入され、それを参考にし、朝鮮文人が新しく唐詩選集を編纂したことについて考察してきた。それを簡単に整理すると、盛唐詩を尊崇した前後七子の文学論が朝鮮文壇に入ってきたこと、それまでに朝鮮文壇で流行していた宋代江西詩派への

¹⁸¹ 許筠は「古詩選序」(巻4)で「非欲以傳世、聊表余所獨得、而時誦以取法焉」と述べているように、基本的に自分の作業を人に見せることは考えていないようであった。

反発、といったことから盛唐詩が詩の手本となり、盛唐詩中心の唐詩選集が作られたのである。そしてこのような流れは、江戸文壇でも同じく見られたことであった。既に知られているように、享保年間(1716-1735)以降18世紀において、江戸文壇では荻生徂徠(1666~1728)を中心にした古文辞派が文壇で力を持っていた。江戸文壇の古文辞派は前後七子の中でも後七子である李攀龍・王世貞の文学論を受容し、したがって秦漢の文章と盛唐の詩を理想とした文派である。¹⁸²

荻生徂徠が活動する以前から、江戸文壇では明代前後七子の書籍が輸入されて広く読まれていた。それが荻生徂徠を通じてさらに本格的に受容され、遂に「古文辞派」という文派も形成されるようになったのである。ここで注目すべきことは、当時荻生徂徠が乗り越えようとした対象は、即ち欧陽脩や蘇軾など宋代の文章を尊崇する江戸文壇の文風であったことである。徂徠は李攀龍と王世貞の文学論や作品によって、当時江戸文壇で流行していた宋風を乗り越え、古学を打ち立てようとした。特に徂徠は、日本の文人たちが直接秦漢の文章や盛唐の詩に学ぶことは無理であると考え、李攀龍と王世貞など前後七子の作品を階段として古文辞を学ぼうとする態度を持っていた。したがって、文選集では『四家雋』・『古文矩』、詩選集では『唐後詩』・『絶句解』・『絶句解拾遺』・『詩題苑』など、前後七子の詩文選集を出版し、これらを江戸文壇で普及させようとしたのである。

183

江戸文壇における古文辞派の唐詩選集編纂について考察するため、本稿では徂徠の弟子である服部南郭(1683~1759)が『唐詩選』和刻本を出版し、後ほどそれが江戸文壇で『唐詩選』の大流行をもたらしたことに着目した。服部南郭は前後七子の中で最も復古的文学論を主張した李攀龍の詩論に共鳴していた。そこで南郭は李攀龍の詩論にしたがい、唐詩、特に盛唐詩を鼓吹しようとしたのである。そして、李攀龍が編纂したと言われる

¹⁸² 18世紀江戸文壇における、明代前後七子文学論の受容と日本の古文辞派の成立については、「松下忠(1969)」、「日野龍夫(1975)」、「藍弘岳(2007)」などを参照したのである。

¹⁸³ 徂徠の明代古文辞派の詩文選集出版については、「藍弘岳(2007)」(56~58頁)参照。

『唐詩選』が唐詩選集の中で最高のものであると推奨し、自分の弟子に唐詩を教えるための教科書として使った。実際にこの『唐詩選』は江戸時代から明治・昭和時代に至るまで流行したが、それには南郭の役割が大きかったと言われている。南郭は生涯何回にもわたって『唐詩選』の和刻本を刊行した。そして彼の死後にはさまざまな形の『唐詩選』和刻本が登場するようになり、ついに江戸文壇で『唐詩選』ブームが起こることになったのである。¹⁸⁴

ここでは、まず『唐詩選』編纂における南郭の認識について考察することにする。以下は、南郭の死後、彼の弟子である林元圭が出版した『唐詩選國字解』に付けられた南郭の文章である。

* 服部南郭「唐詩選國字解附言」¹⁸⁵

一. 近體詩盡於唐。盡也者、盡善之謂。而莫善於滄溟選。蓋後世祖述唐人者、家選戶論。大抵宋人好自用其調、絕響大雅、即所選若論、漆桶掃帚、亦惟摸索而已。及南宋嚴滄浪、豁然眼目、全象始見。雖有來者、不能間然。然止論之、未遑選詩。明興高廷禮品彙・正聲出、而唐人諸家、玄黃不蔽。詩亦簡拔神駿、翼北遂空。滄溟繼興、蓋猶以廷禮爲、旁通多可、芟柞益嚴。掄選數百首、唐詩之粹森如。後有唐仲言解及士集、要其所出入、亦惟首鼠高・李間、不足列之選者。他若鍾氏詩歸、以沙投金。非再經淘汰、無見其眞。故唐詩莫善於滄溟選、又莫精於滄溟選。

一. 近体の詩、唐に尽く。「尽く」とは、「善を尽す」の謂ひなり。而して滄溟が選より善なるは莫し。蓋し後世、唐人を祖述する者、家に選し、戸に論ず。大抵宋人、好んで自ら其の調を用ひ、響を大雅に絶す。即ち選し若しくは論ずる所、漆桶掃帚、亦惟摸索するのみ。南宋の嚴滄浪に及んで、豁然たる眼目、全象始めて見る、來者

¹⁸⁴ 以降江戸時代の『唐詩選』受容様相については、「日野龍夫(1975)」(76～98頁)、「船津富彦(1993)」(64～84頁)参照。

¹⁸⁵ これの原文 1780年に刊行された「江戸書肆崇山房本」を参照し、また訓読は日野龍夫校注の『唐詩選國字解』(1982)(49～56頁)から引用したものである。

有りとは雖も、間然すること能はず。然れども止に之を論ずるのみ。未だ詩を選するに違あらず。明興って、高廷禮が『品彙』『正聲』出づ。而して唐人諸家、玄黄蔽はず。詩も亦神駿を簡抜して、翼北遂に空ず。滄溟繼いで興り、蓋し猶ほ廷禮を以て旁通多可なりと爲し、芟柞益ます嚴なり。數百首を掄選して、唐詩の粹、森如たり。後、唐仲言が『解』及び『十集』有り。其の出入する所を要するに、亦惟高・李の間に首鼠す。之を選者に列するに足らず。他、鍾氏が『詩歸』の若き、沙を以て金に投ず。再び淘汰を経るにあらざれば、其の眞を見ることなし。故に唐詩、滄溟が選より善なるは莫く、又、滄溟が選より精なるは莫し。

一．人或謂滄溟選過刻、然予則謂、後世諸家紛然、邪路旁徑、往往褰塞。初學進步一左、蹶然陷大澤。故取路之法明、爲之標而後、不容田夫欺。又譬諸入崑岡采玉、玉石磊砢、愚者奚別。非棄廡下、或襲燕石。必遇卞和氏、而後天下知連城。故學詩先擇其善者而從之、不必取其億。準繩一立、離明・輪工、無施不可。滄溟之刻、安知非嚴師友哉。

一．人或いは謂へらく、「滄溟が選、過刻なり」と。然れども予則ち謂へらく、「後世、諸家紛然、邪路旁徑、往往褰塞す。初學、歩を進むること一たび左すれば、蹶然として大澤に陥る。故に路を取るの法明らか、之が標を爲し、而して後、田夫の欺きを容れず。又、諸を崑岡に入りて玉を采るに譬ふ。玉石磊砢たらば、愚者奚ぞ別たん。廡下に棄つるにあらざれば、或いは燕石を襲す。必ず卞和氏に遇うて後に、天下、連城を知る。故に詩を学ぶことは、先ず其の善なる者を選んで、而して之に従ふ。必ずしも其の億に取らず。準繩一たび立って、離明・輪工、施して不可なることなし。滄溟が刻、安んぞ嚴師友にあらざることを知らんや」と。

最初から南郭は、詩は唐詩が最善であり、その唐詩の選集としては李攀龍が編纂した『唐詩選』が最善だと断言している。結論に至るまで、南

郭はさまざまな唐詩選集の長短を比較している。嚴羽の『滄浪詩話』、高棟の『唐詩品彙』、唐汝詢の『唐詩解』、鍾惺の『唐詩歸』に関する言及がそれである。それらを見ると南郭が李攀龍の『唐詩選』を選んだのは、偶然その詩選集を入手してからではなく、かなり深思熟考した上での結論であることがわかる。ここで南郭がなぜ『唐詩選』を高く評価しているのか、その理由について見ると、それは「滄溟繼興、蓋猶以廷禮爲、旁通多可、芟柞益嚴。掄選數百首、唐詩之粹森如。」というように、何よりも唐詩の粹が厳しく選ばれているからだと言う。

では南郭が言っている「選抜の厳しさ」についてもっと考えてみたい。一般的に李攀龍の『唐詩選』は、「詩選の偏狭さ」の点でよく批判される。引用文を参照すると、それについては南郭も既に認識していたようである。ところがここで南郭は、普通は批判の対象となる「偏狭さ」について、初学者にとっては長所になると言い替えているのが注目される。即ち、初心者が『唐詩選』から唐詩を学び始めれば、誤った道を歩く危険がないと言うのである。それは『唐詩選』が膨大な唐詩の中からよいもののみを抜き出していること、初学者に一定の基準を与えていることを評価しているからである。

そのように初心者の手引きとして『唐詩選』の価値を評価する南郭の観点は、朝鮮の文人許筠が『唐詩選』を評価するのに、「基準の独創性」を評価したことと大きな違いがある。許筠の場合、李攀龍が詩選集を編纂する際に示した、自己の基準に忠実な態度を見ならって、自身も新しく唐詩選集を編纂することにした。しかし南郭の場合、李攀龍の選詩を非常に信頼し、それを弟子たちに唐詩を教えるための教科書として受け取っていた。¹⁸⁶実際に、南郭が『唐詩選』を和刻本で刊行した最も重要な理由は、自分の弟子たちに唐詩、特に盛唐詩を教えるための教科書が必要だったことである。そこで南郭は『唐詩選』についても、「嚴師友」と呼んでいるのである。

では、南郭がなぜ『唐詩選』の選抜基準をそこまで信頼したのか、こ

¹⁸⁶ 「日野龍夫(1982)」(15～19頁)参照。

のことについてさらに考えてみたい。それはやはり、南郭が江戸文壇で古文辞派を主唱した荻生徂徠の弟子であり、彼自身も熱烈な古文辞派の追従者だったことがその答えとなろう。引用文の最初のところで、彼は巖羽の『滄浪詩話』を「豁然眼目、全象始見」と称賛している。そして引用文の次に、李攀龍の『唐詩選』を十分に勉強してから高棟の『唐詩品彙』や王世貞の『卮言』、胡應麟の『詩藪』などを参考にせよと言っている。¹⁸⁷これらは全て盛唐詩を尊崇した復古派文人の著書であり、このことから南郭の詩論が古文辞派にしたがうものであったことがわかる。とすれば、李攀龍の選詩観がいかに南郭に信頼を与えたかは、言うまでもない。『唐詩選』が唐詩選集の中で「最善」だという発言は、後七子である李攀龍への信頼が基になっているのである。

「教科書」として採択されるには、まずそのための正当な権威を持っていなければならない。その点で『唐詩選』の場合、古文辞派に影響を与えていた前後七子、中でも李攀龍が編纂したものだということから、当時の江戸文壇では何より確実な権威を保証されていたと言える。もう一つの条件は、より多くの人々に普及するために、唐詩の主要な部分が凝縮された、コンパクトなものであることである。この点でも、「偏狭」と言われるほど厳しく選抜され、わずかに七巻一冊の書物として刊行された『唐詩選』は理想的なものであった。この条件によって、唐詩の集大成といわれる高棟の『唐詩品彙』は『唐詩選』の背後に追いやられた。90巻に及ぶ『唐詩品彙』は、一般に普及するのが困難だったからである。以降、『唐詩選』は江戸文壇において、民間出版業の発達を背景に、多様な形態の和刻本が製作され、広い階層に普及するようになった。この点は朝鮮文壇の状況と比べると、非常に異なっている。既に指摘したように、朝鮮文人李睟光と許筠の唐詩選集の場合は、自分の詩論を確かめた結果物であって、それが

¹⁸⁷ 服部南郭「唐詩選國字解附言」：初學熟滄溟選、乃後稍就諸家讀焉、則左右取之、無不逢其原。諸家則滄浪詩話・品彙・正聲・兪州卮言・元瑞詩藪、此其傑然者、亦不可不讀焉。蔣氏所注二三評語、諸家已具讀之可、不讀亦可。仲言解備之掌故、則往往便于質訪。至其解詩意、謬妄居半、不必取也。且詩貴興象、祇謂擾心、胡喋喋解之爲。若夫誦三百篇、讀騷讀選、旁及歷代諸家、人人知之、不待具論。博文約禮、雖小伎亦然。

正式に刊行され朝鮮文壇で広く普及することもなく、現在も伝わっていない状況であるからである。

南郭が刊行した現存最古の和刻本『唐詩選』は、1724年(享保9)のものである。¹⁸⁸それが出版されると、江戸文壇での古文辞派の人気に連動して、享保年間の文壇に大きな影響を与えた。安永(1772-1780)・天明(1781-1788)年間に入ると、古文辞派の詩は剽窃や模倣の点で、また『唐詩選』も「偏狭な詩選観」の点で批判されるようになった。しかしそれでもなお、江戸文壇において『唐詩選』の人気は少しも下がらず、明治・昭和の時代に至るまで数十回も翻訳本・注釋本・絵本のようにさまざまな形態で刊行されながら、根強い人気を保ち続けたのであった。以下は『唐詩選』の和刻本出版について注目されるものを、南郭の死の前後に分けて注整理したものである。

「李攀龍『唐詩選』の和刻本刊行状況概括」¹⁸⁹

* 南郭の生前に出版された「服部南郭校訂」の『唐詩選』

- ・ 1724年(享保9)：服部南郭校訂『唐詩選』
- ・ 1745年(延享2)：返り点送り仮名が付けられたもの
- ・ 1743年：服部南郭校訂『唐詩選』再版本
- ・ 1753年：訓読が付けられていたもの

* 書道関連『唐詩選』

- ・ 1750年：『唐詩選三体』
- ・ 1752年：『行書唐詩選』
- ・ 1753年：『篆書唐詩選』(五絶)
- ・ 1756年：『篆書唐詩選』(七絶)

¹⁸⁸ 「船津富彦(1993)」(68頁)参照。

¹⁸⁹ 「日野龍夫(1975)」(14～15頁)、「船津富彦(1993)」(67～84頁)を参照して整理したものである。

* 1759年：服部南郭死亡

* 服部南郭死後出版されたもの

- ・ 1762年(寶歴2)：關源内書『行書唐詩選』
- ・ 1777年：『唐詩選唐音』、『草書唐詩選』
- ・ 1778年：『三体唐詩選』(五絶)
- ・ 1781年：『行書唐詩選』(五絶)
- ・ 1782年：『唐詩選画本』
- ・ 1783年(天明2)：高井蘭山譯、翠溪先生画『唐詩選画本』
- ・ 1783年(天明2)：南郭先生辨、林元圭録『唐詩選國字解』
- ・ 1798年：『五体唐詩選』
- ・ 1829年(文政9)：ふりがなが付けられた『唐詩選』

* 江戸末期：中国音が付けられた『唐詩選』出版一岡島冠山『華音唐詩選』など

* 明治年間：カタカナのみで作られた『唐詩選』

まず、南郭の生前に出版された版本について特徴的なことを考察する。1724年の版本は、南郭が最初に自分の名を入れて発行したものである。次は1745年(延享2)の版本が注目されるが、これは「送り仮名」が付けられていて、漢文を読めない人も易しく読めるようになっている。初版本が刊行されてから20年後のことである。また、1753年には訓読が付けられたものも刊行された。これらから、『唐詩選』の読者層が専門家のみではなく普通の人までに広がっていたことがわかる。以降も南郭が死去する直前の1758年まで何点も刊行されているが、そのことから、初版後わずか30年間に数次にわたって出版されるほど、『唐詩選』に対して多くの需要があったことが確認できる。

和刻本『唐詩選』出版に関して最も注目される作業は、1783年(天明2)、南郭の死後に、彼の弟子である林元圭が、『唐詩選』に南郭の解説を付し

た注釈書『唐詩選国字解』を出版したことである。¹⁹⁰この本は以降『唐詩選』の解説書としての役割を果たし、唐詩教科書としての『唐詩選』の地位を補強するのに大きな力を持ったのである。その後も『唐詩選』はさまざまな形で絶え間なく刊行され、90年にわたって30回以上も印刷された。それは江戸時代に和刻本として刊行された他の中国書籍と比べると、圧倒的に多い回数であった。¹⁹¹

続いて南郭の死後に刊行された版本の中で注目されるものは次の通りである。まず1829年(文政9)には、全巻にわたって振り仮名が付けられたものが出版された。それによって、仮名と訓読の読み方さえわかれば、漢文の初心者であっても『唐詩選』を読めるようになった。続いて、明治年間には漢文でなく片仮名のみで書かれたものも登場した。それによって、漢字がわからなくても読むことができるようになった。それ以外にも、江戸末期には『唐詩選』に中国音を付けたものが刊行された。『華音唐詩選』・『唐詩選唐音』・『唐詩選正聲唐音七絶』などがそれである。

また『唐詩選』の版本で注目されるのは、絵や書など他のジャンルと交渉したものが現れたことである。1783年に刊行された『唐詩選画本』がその一例である。この書籍には、詩の理解を助けるために各詩の場面を描いた挿絵が付けられている。挿絵とともに、詩の原文の隣に振り仮名と翻訳まで付けられ、初めて読む者にもすぐわかるようになっている。もう一つの形態の書物は、『唐詩選』を用いて書道の練習ができるようにしたものがある。『行書唐詩選』(1762)、『篆書唐詩選』(1763)、『草書唐詩選』(1777)などがそれである。このように江戸後期に至ると『唐詩選』は盛唐詩を学ぶ教科書という役割に止まらず、文人的教養を身につけるための学習書としての役割も果たすようになったのである。

以上で、日本の『唐詩選』受容の特徴、学習書として受け取られたこと、さまざまな形態の和刻本『唐詩選』が出版されたことについて考察し

¹⁹⁰ 「日野龍夫(1982)」(19~23頁)ではこの書籍について、南郭の名を借りて出版されただけで実際には南郭と関係がないという主張も提起されている。しかし、一部の内容は後代文人たちによって作られたかも知れないが、大体のところは南郭の講義に基づくと見る意見も強い。

¹⁹¹ 「船津富彦(1993)」(72~75頁)参照。

てみた。このような受容が行われた背景については、これからさらに詳しく考察する必要があるが、ここで簡単に纏めれば江戸後期における町人文化の発達、民間出版業の盛行、盛唐詩学習の熱気などの基盤があったと考えられる。

南郭が『唐詩選』を教科書として受け取ったのは、盛唐詩を尊重した18世紀江戸文壇の雰囲気と、前後七子の一人である李攀龍の選抜ということから来る信頼感によるものであった。即ち、彼自身の鑑識眼によるものではない。このような態度は、前節の朝鮮文人許筠が李攀龍の『唐詩選』に対してその偏狭さを厳しく批判し、独自の選詩観を以て新たな唐詩選集を編纂した態度とはかなり違っている。ここには編者としての独自の選詩基準がないと批判できる面もあるだろう。

しかし、南郭が『唐詩選』を必要とした理由が、自分の弟子たちに盛唐詩を教える教科書として使うためであったことを考えると、編纂者独自の基準がないと批判するのは不当なことである。南郭が『唐詩選』の日本版を出版したのは、自己の個性的な詩観を主張するためよりも、万人が認める「普遍的価値」を持つ書物を求めたためであった。実際に『唐詩選』が教科書として適当であったかということは別にして、このように「教科書」として『唐詩選』を受容したところが18世紀江戸文壇の特徴だったのである。¹⁹²

また以上のような性格から、当時の江戸文壇の出版業発達に伴って、さまざまな形態の唐詩学習書としての『唐詩選』が出版された。特に訓点・訓読・片仮名が付けられた『唐詩選』の出版は、江戸時期における『唐詩選』の普及が漢文をそのまま読めない一般庶民にまで広がっていたことを窺わせる。それは知識人階層のみを対象に唐詩選集が流通していた朝鮮文壇の状況に比べ、大きな相異点であったと考えられる。

¹⁹² 「船津富彦(1993)」(76~77頁)によると、中国から流入した書籍が江戸文壇で多様な形の和刻本として出版されたのは、『唐詩選』に限ることはなかった。その現象は江戸文壇の出版文化発達に伴って見られたことであり、『論語』・『孟子』のような経書をはじめ『三国志』のような小説に至るまで、他の中国書籍でも同様にこなされたという。

* 結びに

以上明・朝鮮・江戸文壇における唐詩選集の編纂・刊行について考察してきた。当然のことであるが、朝鮮と日本では明文壇で編纂された唐詩選集の受容について、全く違う形の展開が見られた。朝鮮の文人たちにとって、中国の唐詩選集は自分の詩論を整理するための参考書であった。彼らはそれをを用いて独自に唐詩選集を再編纂し、それにより各自の詩論を展開する基盤を作ろうとした。それに対し、江戸の知識人は『唐詩選』を以て、唐詩を学ぶための一つの通路にしようとしたのである。つまり彼らには、『唐詩選』が学習書として受け取られたのである。その上、江戸時代の出版業発達と町民文化の成長を背景に、さまざまな形の和刻本『唐詩選』が刊行され、それが一般人にまで普及するようになった。朝鮮と江戸文壇の間にこのような差が表れたのは、中国文化を受容する通路、それを享有する階層、出版文化の発達の程度など、文学外的な基盤の違いが一つの原因である。次の課題はそのような背景についてさらに具体的に考察することである。

第三部. 朝鮮漢詩の明伝播及び漢詩史的位相の再発見

第一章. 朝鮮漢詩の中国伝播と朝鮮文壇の態度

* 始めに

第三部では明との文学交流と、明文学の批判的受容が朝鮮漢詩に与えた影響について考察することにする。それには二つの方向があり、まず朝鮮漢詩が明文壇に紹介されたこと、また朝鮮文壇において朝鮮漢詩の整理事業が行われたことがある。ここではまず朝鮮漢詩の中国への伝播と、それに関する朝鮮文壇の反応について考察することにする。

当時両国の間に行われた活発な文学交流活動によって、明文壇に朝鮮漢詩が多数紹介された。その中でも本稿では、1598年に戦争が終わってから、明将らの主導で朝鮮漢詩選集が何回も編纂された事実注目することにする。¹⁹³その時期に中国文壇に紹介された詩文は、『皇華集』とともに明文壇に朝鮮漢詩が知られるのに重要な役目を果たした。このことを通じて、両国の文化交流過程では中国の文学が一方的に入って来たのではなく、朝鮮の詩文も中国に活発に紹介されたことが窺えるのである。

特にこの時期に明文壇に知られた朝鮮漢詩は、明将らが直接朝鮮に入って朝鮮文人の協力を得て集めたものであり、朝鮮漢詩の生きた姿を示しているのが大きな特徴である。以前、朝鮮漢詩を明文壇に知らしめるのに大きな役目を果たした『皇華集』の場合は、明使臣を接待する中で作られたものであり、遠接使が別のすぐれた文人に「代作」させることもたびたび行われたし、外交的問題になることを恐れ、本音を隠して明使の詩に合わせるものが多かった。したがって大部分の詩は華麗な典故や故事を用いて修飾するなど形式的な側面に集中していたのである。このような点で、早くから『皇華集』の文学性に対しては厳しい批判の声もあった。¹⁹⁴

¹⁹³ これについては、「朴現圭(1998)」、「祇慶富(2002)」、「李鍾默(2007)」、「李鍾默(2009)」を参照。

¹⁹⁴ 「申太永(2005)」(249～284頁)参照。

しかし戦時中に明将が編纂した詩選集は、公式に編纂されたものではなく個人的に作ったものであった。そのため詩を集める過程で制限がなく、また朝鮮漢詩を明文壇に紹介したいという朝鮮文人たちの強い意志によって、すぐれていると評価された作品が多く収録されるようになった。その意味では、この明将が採集した朝鮮漢詩を通じて、初めて朝鮮漢詩の真の姿が明文壇に伝えられたとも言える。その時期に朝鮮を訪問した明将、明使らが、熱心に朝鮮漢詩を求めた理由もそこにあるだろう。

しかし突然の交流機会の拡大は、朝鮮文壇にとってよいことばかりではなかった。自分の文才を誇示しようとした朝鮮文人の態度は、詩文の流出過程で起こる明との外交的衝突を気づかう朝鮮政府の立場とぶつかり、しばしば問題を引き起こすこともあった。このことから、当時の交流が順調なものばかりではなかったことが窺える。本稿では、両国文人の交流を通じて朝鮮漢詩が明文壇に紹介された状況と、その過程で生じた朝鮮内部の葛藤について考察し、当時の文学交流の一面を考察することにする。

1. 明将・明使による朝鮮漢詩選集の編纂と伝承

この時期に朝鮮の漢詩文が関心を引くようになったのは、戦争をきっかけに両国文人たちの「直接」の交流通路が広がったことがその主な背景である。伝統的に、両国の文人たちが互いの文壇の事情を知ることのできる機会は使行と接伴のみだった。ところが、この時期には使臣交流以外にも明文人と交流できる経路がもう一つあった。すなわち明軍が朝鮮に派遣されたため、彼らの接待のため朝鮮文人が配置され、明軍の幕下で明将及びそれに従軍してきた明文人らと交流することができたのである。

1592年の日本の侵略を受け、明朝廷では同年12月に大規模な軍隊を朝鮮に派遣した。翌年日本との休戦交渉成立によって軍隊を撤収したが、1597年に日本の二度目の侵略が起こると、改めて大規模な軍隊を派遣することになった。この時明の派兵の規模を見ると、まず1592年に初めて派兵した兵力が3,319人、1593年には43,500人、その後追加で8,000人、1597年前後に派兵された兵力が142,700人、1599年以後朝鮮に滞在した

兵力が 24,000 人であり、総計 221,500 人に至るものだったと言われている。¹⁹⁵明と朝鮮の交流が始まって以来、このように多くの人々が長期にわたって朝鮮に滞留したのは初めてであった。

当時朝鮮に派遣された明将らは朝鮮にかなり関心を持ち、彼らが帰国すると、朝鮮戦争に関する記録が明文壇に数多く現れたりもした。朝鮮後期に韓致齋(1765～1814)が中国と日本の典籍 540 余冊から朝鮮関連記事を抜粋し編纂した『海東繹史』巻 45「芸文志」4の「経籍/中国書目/東国記事」の条目に基づき、当時の朝鮮戦争に関して書かれた中国書籍の目録を整理すると次のようである。

- ・ 『朝鮮図説』1巻：鄭若曾(崑山人)撰。
- ・ 『朝鮮復国経略』6巻：宋応昌撰、経略で参戦。
- ・ 『経略復国要編』14巻：宋応昌撰。
- ・ 『朝鮮征倭紀略』1巻：蕭応宮撰、海防使で朝鮮訪問。
- ・ 『万曆三大征攷』：茅瑞徽撰、「三大征」は(口+李)氏・関白・楊應龍のこと。
- ・ 『封貢記略』：王士琦撰、1598年禦倭西路監軍で朝鮮訪問。
- ・ 『両朝平壤録』5巻：諸葛元聲(会稽人)撰。
- ・ 『両浙兵制』4巻：侯継国(号龍泉、金山衛人、浙江巡撫)撰、第3巻「倭警始末」が壬辰乱に関するもの。
- ・ 『倭患考原』2巻：黄侯卿撰、下巻「恤援朝鮮」で宋応昌・楊鎬の東征記録。
- ・ 『馭倭録』9巻：王士驥(字罔伯、太倉人)撰、兵部主事の時に明代の倭寇に関する事蹟を採集したもの。
- ・ 『高麗世紀』1巻：呉明濟(字子魚、号玄圃山人、会稽人)編、1597年参戦。

¹⁹⁵ 申欽『象村稿』巻38「天朝先後出兵来援志」：天兵来援者、壬辰初攻平壤、用三千三百十九人。癸巳攻破平壤、用四万三千五百、追到者八千人。丁酉以後先後來援者、十四万二千七百余人。己亥以後、留兵二万四千余人。通共二十一万一千五百餘人。糧十万余石、銀四万余両。

- ・ 『朝鮮詩選』：呉明済編。
- ・ 『朝鮮詩選』3巻：焦竑編。
- ・ 『朝鮮詩選』：藍芳威編、遊撃で参戦。

それ以前に明文人らが朝鮮体験について記録したものは、使臣たちの使行記録が主であり、それは現在までに10余種類が知られている。¹⁹⁶その記録が200年にわたる交流期間で10余種類に過ぎなかったのに比べ、10年足らずの短い期間に、上の目録のような書物が出たことを見ても、当時の明文人らが朝鮮に対してかなり大きな関心を持っていたことがわかる。

それは文学の方面でも同様であった。中でも注目される活動は、この時期に朝鮮に派遣された明将らが歴代の朝鮮漢詩を集め、詩選集を編纂したことである。上の目録でも、呉明済・焦竑・藍芳威の三人がそれぞれ朝鮮漢詩選集を編纂している。焦竑の詩選集は現在伝わらず、詳しい内容はわからない。しかし呉明済と藍芳威がそれぞれ編纂した『朝鮮詩選』は最近発見され、その具体的内容を見ることができる。

まず遊撃呉明済が編纂した『朝鮮詩選』について考察する。呉明済は1597年朝鮮に派遣されてから、熱心に朝鮮の詩文を収集した。そして1600年には集めた朝鮮漢詩を整理し、『朝鮮詩選』という書物を編纂した。『朝鮮詩選』は最近まで実物が確認できず、銭謙益の『列朝詩集』で一部を窺えるのみであったが、1999年北京図書館で発見されてその全貌が明らかになった。¹⁹⁷ただし、この書物も後代の記録と照合すると脱落がかなりあることから、原本ではなく後に縮約されたものと思われるところがある。¹⁹⁸

ここで北京図書館本に基づいて、『朝鮮詩選』の書誌情報を整理すると、

¹⁹⁶ 韓致齋の『海東繹史』巻45「芸文志」四4「経籍/中国書目/東国記事」を参照すると、朝鮮が建国されてから16世紀後半壬辰乱が起こる前までに明文人が書いた朝鮮関連記録は、倪謙の『朝鮮紀事』(1巻)・『遼海編』(4巻)、錢溥の『朝鮮雑誌』(3巻)、張寧の『奉使録』(2巻)、董越の『朝鮮賦』(1巻)・『使東日録』(1巻)・『朝鮮雑誌』(1巻)、龔用卿の『使朝鮮録』(3巻)、黄洪憲の『朝鮮国記』(1巻)、魏時亮の『遼東事宜』などがある。

¹⁹⁷ この資料に注釈を加えて、影印本を添付した『朝鮮詩選校註』(呉明済編・祁慶富校註、遼寧民族出版社、1999)が出版された。

¹⁹⁸ 「李鍾默(2007)」参照。

この本は7巻2冊のもので、新羅から朝鮮中期までの朝鮮詩人112人の詩340篇が載せられている。巻頭に明文人韓初命が1600年に書いた「刻朝鮮詩選序」があり、序の末尾には「朝鮮梁慶遇書」とあって、序文の字を朝鮮の梁慶遇が書いたことが記されている。韓初命による序文の次に呉明済による「朝鮮詩選序」(1599)がある。引き続き本文が始まり、巻首題は「朝鮮詩選」であり、本文初章に会稽呉明済子魚甫選・薊門賈維鑰無局甫・東萊韓初命康・新都汪世鍾伯英甫全閱・校正と書かれている。続いて新羅崔致遠の「江南曲」を始めに、五言古詩から詩体別で作品が載せられている。巻末には許筠が作った「朝鮮詩選後序」(1600)がある。

呉明済の序文には朝鮮漢詩の収集から詩選集を編纂するまでの過程が詳細に書かれていて、当時の様子がよく窺える。¹⁹⁹それによると、この詩選集の編纂で最も大きな役割を果たしたのは朝鮮文人許筠であった。1597年朝鮮に派遣された呉明済は、上官の許しを得て許筠の家に泊まり、許筠やその兄弟たちと交遊したのである。その時呉明済は朝鮮最高の文章家の家柄として名高かった「許氏家門」の気風に触れ、彼らの文章力に深く感銘を受けたようである。中でも許筠のすぐれた記憶力と傑出した文才には称賛を惜しまなかった。当時朝鮮では、長年の戦争で多数の書籍が掠奪されたり焼失したりし、歴代の詩文を集めるのは容易ではなかった。そのため、歴代朝鮮の漢詩を数百編も暗誦していた許筠の記憶力は、呉明済の作業に絶大な役割を果たしたのである。許筠以外にも尹根寿(1537～1616)や李徳馨(1561～1613)など当時のすぐれた朝鮮文人たちの援助によって、呉明済は数百篇にのぼる朝鮮漢詩を集めることができたと述べている。

続いて藍芳威が編纂した『朝鮮詩選』について考察する。藍芳威は1598年前後に遊撃將軍として朝鮮に派遣されてから、朝鮮漢詩を集めて『朝鮮詩選』(「朝鮮古詩」ともいう)を出版したようである。この本も記録上で

¹⁹⁹ 呉明済『朝鮮詩選』「朝鮮詩選序」：及抵王京、聞多文学士、乃数四、請司馬公、願暫館于外、得與交尋、更入蓮花幕也。許之、済乃出館於許氏。許氏伯仲三人、曰筭、曰箴、曰筠、以文鳴東海。間筭・箴皆拳壯元、筠更敏甚、一覽不忘、能誦東詩数百篇。于是済所積日富、復得其妹氏詩二百篇。而尹判書根寿及諸文学、亦多搜殘篇、遂盈篋…済復征朝鮮、館於李氏。李氏、朝鮮議政徳馨也、雅善詩文。済益請搜諸名人集、前後所得、自新羅及今朝鮮共百余家。

のみ編纂事実が確認されていたが、最近中国の北京大学とアメリカのバークリー大学でそれぞれ違う刊本が発見され、その実物が確認できたのである。²⁰⁰それらを参照すると、バークリー本は北京本の二倍以上の分量で、バークリー本がより原本に近い形態である。

ここで簡単に藍芳威の『朝鮮詩選』の書誌情報を整理する。まず北京大学刊本を見ると、この本は不分巻1本(56張)に約250篇の作品が収録されている。巻首題は「朝鮮古詩」であるが、版心題は「朝鮮詩選」となっている。序跋文はなくすぐに本文が始まり、最初の頁に昌江藍芳威万里識選・匯東祝世祿無功閔・莆口吳知過更伯・東萊韓初命全校と書かれている。本文は箕子の「麦秀歌」に始まり五言詩から詩体別で作品が収録されている。

次にバークリー大学刊本を見ると、この書物は8巻2冊のもので、詩体別で分類され計585篇の作品が載せられている。先の北京大学刊本と比べると、ほとんど二倍に及ぶ分量である。特に、巻頭には吳知過が書いた序文「藍將軍選刻朝鮮詩序」(1604)と藍芳威が書いた「選刻朝鮮詩小引」が載せられている。ただし、前に見た吳明濟『朝鮮詩選』の序文には詩選集の編纂過程が詳しく紹介されているのに比べ、この序文は中華文明が朝鮮に伝わって盛んであるといった儀礼的内容で、編纂の経緯に関する具体的記述がない。²⁰¹各巻の巻頭には「朝鮮詩選全集」という題名と昌江藍芳威万里識選・匯東祝世祿無功閔・莆口吳知過更伯・東萊韓初命全校と書かれている。

以上の書誌事項を見ると、吳明濟の『朝鮮詩選』を校正した人物に韓初命と汪世鍾がいるが、韓初命は藍芳威の『朝鮮詩選』の校正も行ってい

²⁰⁰ 藍芳威の『朝鮮詩選』については、朴現圭が北京で資料を発見し、影印したもの(「朴現圭(1998)」)と、最近李鍾默がバークリー大学で新しい刊本を見つけ、発表した論文(「李鍾默(2007)」)を参照。

²⁰¹ 「李鍾默(2007)」によれば、この本は吳明濟の『朝鮮詩選』より分量が多いが、吳明濟の間違いをそのまま踏襲していること、序文に編纂経緯を全く書いていないこと、また錢謙益の『列朝詩選』編纂で言及されていないことなどから、吳明濟の『朝鮮詩選』を底本として編纂されたとも考えられるという。またこのような点で、現在残っている吳明濟の『朝鮮詩選』は原本ではなく、後に一部だけ筆写されて伝わったのではないかと主張している。

る。また汪世鍾の場合、『許門世稿』（権鞞編）に収録された許蘭雪軒の詩「湘絃謠」について、汪世鍾が「明以後の人々が至るところではない」と評価したことが注釈で書かれている。それをみると、汪世鍾と権鞞・許筠などの間にはかなり親しい関係があったことがわかる。²⁰²このように、編者と校閲者、資料提供者が互いに重なっている点からも、当時朝鮮漢詩に関心を持つ明将らと、彼らに朝鮮漢詩を提供した朝鮮文人たちが限られた範囲で存在し、その間に親密な交流が成り立っていたことが窺える。ここでは明の呉明済・藍芳威・汪世鍾・韓初命などと、朝鮮の許筠との交遊がその一例である。他にも当時の文人たちの文集を参照すると、呉明済が当時の朝鮮屈指の詩人、趙緯韓・権鞞・李安訥・梁慶遇らと交遊していたことが確認できる。²⁰³

それ以後も、朝鮮を訪れた明将たちは朝鮮の詩文に関心を示し続けた。1601年には明将が朝鮮政府に対して歴代朝鮮漢詩選集の編纂を求め、その要請がきっかけになって、纂集庁が設置され『海東詩賦選』という詩選集が編纂されたこともあった。²⁰⁴後でさらに詳しく扱うことにするが、この時に編纂された『海東詩賦選』は諸々の問題があり、結局明側には伝わらなかったのである。ただし、このことから当時の明将たちが朝鮮漢詩に対して高い関心を持っていた事実だけは確認できる。続いて1614年にも遊撃丘坦が朝鮮の詩文を求め、朝鮮政府は1606年に柳根が明使朱之蕃のために作った詩選集を渡している。²⁰⁵

朝鮮漢詩に関心を持ったのは、将軍たちだけではなく。当時朝鮮を訪ねた明使らも同じく朝鮮の詩文に興味を見せていたのである。第一部で詳しく扱ったが、代表的人物として1606年に朝鮮を訪問した朱之蕃が

²⁰² 権鞞編「許門世稿」（許筠編『国朝詩刪』巻附）：新都汪世鍾云、此作非我明以後諸人所可及也、假使李・温操翰、亦未必遽過之。

²⁰³ 「鄭珉(1999)」(112～123頁)参照。

²⁰⁴ 『海東詩賦選』編纂に関して、『朝鮮王朝実録』の大部分は編纂のきっかけが「明将[天将]」の依頼だったとしているが、「先祖34年(1601)12月2日」の記録のみは、「明使[天使]」に与えるためだったと記している。

²⁰⁵ 『光海君日記』82巻「6年(1614)9月7日」記事：弘文館啓曰、丘遊撃求請東國詩文、戸曹判書臣柳根、曾爲大提學時、所抄東人詩文、只有亂草一件。依前例、令寫字官繕寫以給。從之。

挙げられる。朱之蕃は朝鮮に来る前から既に北京で『皇華集』を読んでおり、朝鮮に入ると自分の接待官であった許筠に李荇・鄭士龍・李珥の詩集を求めた。また許筠に朝鮮漢詩選集を作ってほしいと要請し、許筠は4巻2冊の詩選集を作って贈呈したのである。彼は引き続き朝鮮政府にも朝鮮漢詩選集の編纂を求めたので、遠接使柳根が急いで詩選集を作り、朱之蕃に贈ったこともあった。

また朱之蕃は北京に帰ってから、使行中自分が作った詩文を集めて『奉使朝鮮稿』という書物を刊行した。『奉使朝鮮稿』には朱之蕃の詩文以外に「東方和音」という部分があり、そこには朱之蕃と取り交わした朝鮮文人たちの作品が添付されている。この時に副使として来た梁有年も明に帰った後、使行日程を書いた記録と朝鮮文人たちと取り交わした漢詩を集めて『使東方録』という詩文集を編纂し、それを朝鮮に送ったことがあった。

このように当時明文壇に伝わった朝鮮漢詩は、明末以降中国文壇で歴代詩選集の編纂作業が行われた時、「朝鮮」部分の主要な資料として使われ、中国での朝鮮漢詩の伝承に大きな役目を果たしたのである。呉明済の『朝鮮詩選』の場合、1652年に編纂された銭謙益の『列朝詩集』で最も重要な資料として使われた。²⁰⁶『列朝詩集』には、呉明済の「朝鮮詩選序」と許筠の「後序」がほとんどそのまま収録され、大半の作品が呉明済の『朝鮮詩選』から選抜されている。また『列朝詩集』に見える誤謬は『朝鮮詩選』のものほとんど一致していることから、『列朝詩集』が『朝鮮詩選』をそのまま写したことが窺える。『列朝詩集』には、後の朝鮮文人たちによる考証・訂正作業によってかなりの誤謬が発見されている。²⁰⁷しかし明文壇で朝鮮漢詩が広く知られるために、これら詩選集の役割が絶対的に大きかったことは認めざるを得ないだろう。

17世紀初に明文壇にもたらされた朝鮮漢詩は、それ以降も中国文人たちの持続的な関心を引いて、清文壇でも様々な朝鮮漢詩に関する書物が作

²⁰⁶ 銭謙益『列朝詩集小伝』「閔謙」(上海:古典文学出版社、1957)

²⁰⁷ 1778年に李書九が『薑山筆笏』「列朝詩集十七則」で17条目にわたってその誤りを考証したことがある。

られるようになった。²⁰⁸代表的なものに 1678 年朝鮮を訪れた使臣孫致彌が朝鮮漢詩を集めて作った『朝鮮採風録』がある。²⁰⁹また 1705 年には朱彝尊が『明詩綜』を編纂し、最後の部分に朝鮮漢詩と『静志居詩話』という詩話を付し、朝鮮文人に関する簡単な紹介と批評を加えたこともあった。『明詩綜』は呉明済の『朝鮮詩集』と銭謙益の『列朝詩集』、孫致彌の『朝鮮採風録』など、中国文壇で編纂された既存の朝鮮漢詩選集を網羅して作ったものである。これらからも、明将らの編纂した朝鮮漢詩選集がきっかけになって、以後中国文壇で何度も朝鮮漢詩選集が編纂されたことが確認できる。

それでは、17 世紀初に明将と明使たちがこれほど朝鮮漢詩に関心を持った理由は何だったのだろうか。まず、この時期明将らが自ら集めた作品は、朝鮮漢詩の生き生きとした姿をそのまま表していた点が挙げられる。それは 16 世紀以前に『皇華集』などの公式的詩選集を通じて紹介された朝鮮漢詩が、儀礼的で形式的なものばかりであったのに比べると、大きな特徴である。特に明文人は朝鮮漢詩の水準が自分たちの予想以上に高いことを知り、それを「中華文明の伝播」という観点から理解しようとした。次は呉明済が『朝鮮詩選』に付けた序文である。

* 呉明済『朝鮮詩選』「朝鮮詩選序」

我中国雖婦人女子・三尺之童、莫不聞朝鮮礼義文学之盛。嗟呼。朝鮮有箕子、猶中国有堯舜也。中国言盛治者、莫外乎堯舜、朝鮮言盛治者、莫外乎箕子。今觀其聲、和平不迫、雅談不華、無放誕詭異之詞、無靡靡妖艷之曲、而雄健暢博之象、宛然其中。美哉…(中略)…昔者延陵季子氏聘于魯、聞列国之音而知其政。濟觀東国之聲、而揖箕子之遺風焉。盛矣哉、箕子其大聖人乎。後之覽者、必于是編而益贊其盛。

我が中国では、婦女子や子供でも、朝鮮で礼儀と文学が盛んであ

²⁰⁸ 詳しくは「李鍾默(2009)」参照。

²⁰⁹ この詩選集は現在伝わらないが、王士禎(1634~1711)の『池北偶談』にほぼ全文が紹介され、その内容を知ることができる。

ることを知らない者はない。ああ、朝鮮に箕子がいるのは、中国に堯舜がいるようなものである。中国で偉大な治者と言えば堯舜以外になく、朝鮮で偉大な治者と言えば箕子以外にない。今その声を聞けば、おだやかで迫らず、典雅な口調は華美にならず、でたらめで怪しげな言葉や、みだらで妖艶な曲がない。そして逞しく伸び広がる姿が、はっきりとその中に見えるかのようだ。美しいことだ…(中略)…昔延陵の季子(季札)は魯を訪れて、列国の音楽を聞いてその政治を知った。私は東国の音を聞き、箕子の遺風に感服するばかりである。何と盛んなことだろう。箕子はまことに大聖人であったのだ。後にこれを見る人々は、必ずやこの詩選集によって、ますますその盛んなる様を誉め讃えることだろう。

引用文にも表れているように、当時の明文人たちが朝鮮漢詩に見出したのは、周代に朝鮮に封ぜられた「箕子の遺風」であった。それを彼らは、中華文明が辺境に伝わって発達したものと認識したのである。また明文人らはそれまで話にだけ聞いていた朝鮮文化の実態を自分の目で確認し、その予想以上の水準に感嘆し、朝鮮漢詩の収集に力を入れるようになったが、そのことは呉明済の『朝鮮詩選』を校正した韓初命による序文にも同じく表れている。韓初命は『朝鮮詩選』を読んで「箕子の遺響」があると感嘆し、文献に記されず長年忘れられていたこの「箕子の遺響」が、呉明済を通じて中国に知られるようになったとたたえている。²¹⁰

特に当時明将、明使らと交流した朝鮮文人らは、当時の朝鮮で最高の文人たちであり、明側で手に入れた詩文は朝鮮文壇でも高く評価される作

²¹⁰ 韓初命「刻朝鮮詩選序」：余稽吳君訪余于白嶽之陽、出其所選朝鮮詩、余讀之忘倦焉。昔余濟鴨綠而望義城、嘆曰此其箕子之封疆乎。濟薩水而過樂浪之墟、嘆曰此其箕子之故都乎。比至白岳、見其君臣揖遜之雅、嘆曰、此其箕子之後王乎。又今于吳君而得箕子之遺響焉、抱恨於昔、快志於今、喜哉。朝鮮以禮義稱尚矣。然其歌舞、太史不載、傳紀不採、野史不及。箕子遺響、不聞於華夏幾千載。夫不聞於華夏、其稱不絕也幾希、今吳君披荊棘、發煨燼、剪其朽、拔其粹、類而書之、將布天下、使天下薦紳先生文學士見之、謂海天扶桑外以聖人之教繼麥秀歌、而作者若是其盛、其壤山川、其起色矣。

品ばかりであった。このことも明文人たちの朝鮮漢詩に対する評価をさらに高めたに違いない。こうした状況は、1613年に朱之蕃が許筠の頼みを受け、当時明文壇の領袖であった李廷機に許筠の文集への序文を求めた経緯にも確認できる。

＊ 李廷機「惺所覆瓿稿序」

蘭岫朱太史、持所謂覆瓿稿四部者一帙来諗余曰、僕銜命使東藩、藩之冠紳士、雅相周旋。最其中許氏一門、尤擅其長、此其季壯元之作也。其文紆餘婉亮、似弇州晚境、其詩鬯達瞻麗、有華泉雅致、僕竊喜之、求其全集。今歲、始以一部送于京、邸吏遞至留院。則其書勤懇、乞得海內大方家一語、侈其卷端。老師雖退在丘壑、主盟秬林、捨公而誰。幸備袞褒、以慰遠誠可乎。余曰、方今海内部署文事者、比肩而立、皆可赤幟西京、枹鼓開天也、独奈何厭家膳而嗜野鶩、斥疏越而耽禁佚、其見亦左矣。太史曰、否否。此是觀皇家大一統之盛哉。休明之化、洋溢域中而不足、散覃区外。朝鮮、箕子所封、故独先被其教。許門、大嶽之胤、故首能擅其秬。其兄姊之作、俱颯颯乎大雅矣。此集雖置在七子間、瑕不廁宗・梁之列。是誠朝暮遇之者哉。余嘉太史之憐才、仰皇風之暢遐、既卒業。

蘭岫の朱太史が『覆瓿稿四部』という書物一帙を持って来て、私に告げて言った。「私が使命を受けて朝鮮に行った時、朝鮮の冠紳士らと何かと付き合いがありました。その中でも許氏一家が、最も才能にすぐれていました。これはその末の息子である許壯元[許筠のこと]の文集です。彼の文はゆったりと美しく、まるで王世貞の晩年の作品のようで、彼の詩はのびのびと豊麗で、邊貢の雅趣があり、私は心中それを好み、その全集を求めていました。今年やっと一部を北京に送って、官吏がそれを伝えてくれました。その手紙に懇ろに求めますには、海内の大家の一言を得て、巻頭を飾りたいということです。先生は在野に退いておられるとはいえ、文壇を導く方、あなたをおいて誰がいるでしょう。文章を書いて、遠くからの真情を慰めてくださいますか。」

私は言った。「いま海内の文事に携わる人々は、肩を並べて立ち、皆漢代の文や盛唐の詩に太刀打ちできるほどであるのに、あなたはなぜ一人だけ自家の食膳を嫌って野の鴨を味わい、疏越[雅楽]を斥けて禁休[夷の音楽]に耽るのですか。その見識はやはり偏っていますよ。」太史は言った。「それは違います。これは皇家大一統の隆盛を示すことなのです。うるわしい教化が、域内に満ちあふれるだけでは足りず、域外まで及んだのです。朝鮮は箕子の封地であり、ゆえに真っ先にその教化を受けたのです。許氏一門は太嶽の後裔であり、ゆえに最初にその技芸に習熟したのです。彼の兄や姉の作品も、全て卓越して正統的な美を備えています。この文集はたとえ七子の間に置いても、宗臣や梁有譽の列に入らないはずはありません。これは誠に万世に一度という出会いなのです。」²¹¹私は太史の人才を愛する心をすばらしいと思い、また皇帝の威風が遠く達したことに敬服して、この仕事を終えた。

引用文に窺えるように、朱之蕃は許筠と許氏一門の作品を読み、朝鮮にこのようにすぐれた文人たちがいると強い印象を受け、高く評価している。また李廷機が域外の文学に関心を持つことに批判的な態度を見せると、朝鮮の漢詩は中国の文明が周辺へも広がったことをよく示す例だと言い、その水準は明文壇にも劣らないと反論している。

このように、戦乱をきっかけに朝鮮漢詩の実態にふれた明文人らは、「中華文明の延長」として朝鮮漢詩文を認識し、高く評価する態度を見せた。そして朝鮮の漢詩文を中華文明の一部と見なすこのような認識は、当時の朝鮮文人たちに自己の文化への自負心を抱かせる一因にもなったのである。このため朝鮮文人も自己の漢詩文を熱心に明文人たちに紹介するようになったが、それについては次節で考察することにする。

²¹¹『莊子』「斉物論」の「萬世之後而一遇大聖，知其解者，是旦暮遇之也」

2. 朝鮮漢詩伝播における朝鮮文壇の二重的態度

1) 許筠の朝鮮詩文紹介活動

当時明文人を接待した人々は朝鮮最高の文章家たちであった。彼らもともと自分の文章力にかなりの自信を持っていたので、それを明文人に誇示し、認められたいという思いが強かった。中国は漢文学の本場であり、明文人に認められるということは、すなわち漢文学の本場で認められることだと考えたからである。そこで漢詩文に自信のある朝鮮文人たちは、交遊の度に自作を明文人たちに示し、彼らの評価を得ようとしたのである。それに加えて、先に考察したように、この時期は明文人の側も朝鮮の漢詩文に強い関心を持った時期であった。そのため、文学交流は互いの必要に基づいて活発に行われたのである。

本節では許筠の活動を中心に、朝鮮漢詩を積極的に明文壇に紹介した朝鮮文人の姿を見てゆくことにする。許筠は若い時から、朝鮮漢詩を評価するのに明詩を一つの基準にしていた。1593年、彼が25才の時に作った詩話集『鶴山樵談』に次のようにある。

＊ 許筠 『鶴山樵談』

明人以詩鳴者、何大復景明・李崆峒夢陽、人比之李・杜。一時称能者、邊華泉貢・徐博士禎卿・孫太白一元・王檢討九思。何・李之長篇七律俱善。近古李于鱗・王元美、亦称二大家。而吳国倫・徐中行・張佳胤・王世懋・李世芳・謝榛・黎民表・張九一等、皆并驅爭先。我国金季暉・金悅卿・朴仲說・李擇之・金元沖・鄭雲卿・盧寡悔等、製作雖不及何・李・王・李、豈有媿於吳・徐以下人邪。然不能与七子周旋中原、是可恨也。

明人のうち詩で名高い人には、大復何景明と崆峒李夢陽がいて、人々は彼らを 杜甫と李白に比している。一時期に詩が巧みとして知られた人は、華泉邊貢と博士徐禎卿・太白孫一元・檢討王九思などがある。何景明と李夢陽の長編と七言律詩はともに優れていた。少

し前には李攀龍と王世貞もまた二大家と称され、呉国倫・徐中行・張佳胤・王世懋・李世芳・謝榛・黎民表・張九一なども、皆並んで才を競った。

我が国の金季昱・金悦卿・朴仲説・李擇之・金元沖・鄭雲卿・盧寡悔なども、その作は何景明・李夢陽・王世貞・李攀龍には及ばないとしても、呉国倫・徐中行以下の人々に引けをとるはずはない。しかし、この七人と一緒に中原を駆け巡ることができなかったのが、残念なことである。

ここに見られるように、許筠は朝鮮の文人たちが少なくとも明文人たちとは対等に渡り合うことのできる水準にあると考え、すぐれた詩人たちが狭い朝鮮で生まれたために、漢文学の本場である中国文壇でその才能を発揮することができず、そのまま消えてしまうのを残念だと思っていたのである。その思いは、賓貢科が廃止され、中国文人たちと才を競うことができなくなったのを惜しむ姿にも窺える。²¹²

しかしこの時、許筠は朝鮮詩文の優秀さのみを一面的に主張していたのではない。許筠は朝鮮文壇が持つ問題点について、厳しく批判してもいた。

* 許筠『鶴山樵談』

蓋明人績学攻苦、登文陸者、燃膏達曉、守螢牕者、暎雪窮年、故発為詩文、皆渾厚有氣力。我国則組織絺章、以占科第、及登科第、則棄書冊若仇讎。東方古称文献、今何泯泯如此邪。豈上之人不能獎率而成就之邪、抑亦世降俗末而人才不逮古邪。

思うに明人は刻苦して学を積み、文章で名を成す者は夜明けまで油を灯し、学問に励む者は雪あかりで年を終え、ゆえに詩文を作れ

²¹² 許筠『惺所覆瓿稿』卷22「惺翁識小録」上：我国貢士不得赴举於天朝者、以洪倫弑君、金義殺使之故也。在我朝固無干焉、若举此請之、則天朝無不從之理、我国人(齒+星)齷無奇節、不喜遠遊、故至今蒙此惡名、而不得齒於賓貢、可勝嘆哉。

ばどれも大きく深く、気力に満ちている。しかし我が国の人々は、飾った文句ばかり織り成して科挙の合格を狙い、合格してしまえば、たちまちまるで仇敵のように書物を捨ててしまう。朝鮮は古くから文献の国だと呼ばれていたが、今はどうしてこのように衰退してしまったのか。上の人が率先して成就させることができなかつたからであろうか。それともまた時代が下って風俗も衰え、人の才も昔の人に及ばないからであろうか。

引用文を見ると、許筠は当時朝鮮文人たちが真面目に努力もせず、飾った文句ばかり織り成し、科挙試験の準備ばかりしている姿を厳しく批判している。以上から考察すると、1593年に『鶴山樵談』を編纂した時点で、許筠は朝鮮の漢詩文に対して一方では自負心を持ちつつ、一方では明文壇と比べて不足を感じていたことがわかる。まだ朝鮮の漢詩文について確かな自信を持ち得ていなかったともいえる。

その中で、1598年に朝鮮に派兵された明将呉明済に出会い、彼の『朝鮮詩選』編纂作業に参加したことは、許筠に朝鮮漢詩を改めて評価する機会を与えたようである。当時許筠は『朝鮮詩選』の編纂に積極的に参加し、戦争で失われた多くの朝鮮詩文が彼の記憶によって復元された。また1600年に詩選集が完成すると「後序」を書いてその作業の意義を示した。

* 許筠『朝鮮詩選』「朝鮮詩選後序」

猗歟盛哉。言之粹者為文、文之精者為詩。三代之教、莫重于詩。自卿大夫至閭閻婦人・黄口小兒、皆因而治、觀化者亦因此而知。昔周官採詩三韓不與、夫子刪詩三韓不及、遠莫致乎。夫遺於千載前、而遇於千載後、小国之音、以先生始与成周治、豈非天耶、先生之功盛矣哉。

ああ偉大なことだ。言葉の精粹が文となり、文の精粹が詩となる。三代の教えで、詩より重要なものはない。卿大夫から村里の婦女、幼い子供に至るまで、皆詩によって治められ、教化を見る人もまた詩を通じてそれを知る。昔、周官が詩を採集した時に三韓のものは

入らず、孔子が詩を刪定する時にも三韓まで及ばなかったのは、遠くで手に入らなかったのだ。千年前に取り残されたものに、千年後にめぐり会った。小国の音が先生[呉明濟]を通じて、始めて周の治世に参加するようになった。これこそ天命ではないか。先生の功績はなんと偉大なことか。

引用文によると、許筠は朝鮮の漢詩文が周官と孔子の採詩、刪詩の対象にならなかったことを惜んでいる。このように朝鮮の漢詩文が中国で認められるように願う態度を、単純な中国への従属として批判することはできない。それは、漢文学の本場である中国で認められることによって、朝鮮の漢詩文も漢文学の正当な一員となるようにと願ったものであり、朝鮮詩文に対する自負心に根ざしている。そのため許筠は、呉明濟の『朝鮮詩選』編纂を通じて明文壇に朝鮮の漢詩が本格的に紹介されることを期待し、自らできる限りその作業に協力したのである。そしてその経験を通じて許筠は、中国文人たちに朝鮮の詩文を伝えることの価値をさらに認識したようである。したがってそれ以降、明使らとの交流でも朝鮮の文化を伝えることに意識的になったのである。

そして1606年に明使朱之蕃を接待する時には、さらに積極的に朝鮮の文化を知らしめようとした。第一部で考察したように、朱之蕃は朝鮮文化に深い関心を持ち、許筠はそれに応じて、彼に詩文だけでなく韓護の書や李楨の仏画など、朝鮮のすぐれた文物を熱心に紹介した。²¹³そして何より、許筠は自家の人々の詩文を明文人たちに積極的に紹介した。それは彼の一族の文才に対する自負心からのことであつた。一家の文集である『陽川世稿』を朱之蕃に示し、その序文を得たこともその一例である。²¹⁴当時許筠

²¹³ 許筠『惺所覆瓿稿』卷18「丙午紀行」：初五日…夕。書本国人詩自孤雲以下百二十四人詩八百三十篇為四卷。粧廣作兩件。呈于兩使…宿碧蹄。夕招余三人相見。因製陽川世稿序及亡姊詩引以給。見李楨仏帖愛之曰、茲画、中国亦罕矣。題數語于末簡以給。

²¹⁴ 朱之蕃『奉使朝鮮稿』「題陽川世稿」：蕃于役東藩、與一時名賢唱和、最衆許氏兄弟箴与筠、俱在列周旋既久、乃出其先世所著、曾高以来彙稿、將附以父唾兄箴及其妹氏遺稿、世彌遠、家彌昌、文名彌振、真稱吉祥善事哉。

の一家には彼の兄弟の許箴・許筠、また朝鮮最高の女流詩人ともいわれる姉の許蘭雪軒などが出て、朝鮮文壇でその詩才を認められていた。²¹⁵許筠の努力によって、許筠一家の才能はさらに明文人の間にも広く知られ、高く評価されるようになったのである。

特に許筠は自分の姉許蘭雪軒の詩集を熱心に明文人たちに紹介した。まず朱之蕃に『蘭雪軒集』を示し、序文を書いてもらっている。朱之蕃は序文で許蘭雪軒の詩才に対して「飄飄乎塵埃之外、秀而不靡、沖而有骨…断行殘墨、皆成珠玉、落在人間、永充玄賞」（朱之蕃『蘭雪軒集』「小引」）と絶賛し、詩集を明に持ち帰って広く紹介した。²¹⁶また副使梁有年にも同じく『蘭雪軒集』の序文を頼んでいるが、梁有年も許蘭雪軒の詩才を讃え、特に新羅真徳女王の「太平詩」が中国に伝えられた例を挙げて、許蘭雪軒の詩集も明文壇に伝えられるに違いないと言っている。²¹⁷許筠もこの故事が引用されたことに共感し、そこに意味を見出したようである。²¹⁸ここでもまた、許筠が許蘭雪軒の漢詩を中国に紹介することに、いかに価値を置いていたのかが確認される。

以上のような許筠の努力によって、『蘭雪軒集』は明文壇に広く紹介さ

²¹⁵ 許筠『惺所覆瓿稿』卷 24「惺翁識小録」下：我家先大夫文章学問節行、推重於士林、而伯兄傳經訓、文章亦簡重。仲兄博学、為文章甚高古、近代罕比。姊氏詩尤清壯峻麗、其高出於開元大曆、名播中州、薦紳士皆傳賞之。再從兄氏攻古文、詩甚高悍、賦則尤傑出、国朝以来、罕有其倫。雖不肖亦不墜家業、叨竊名於談芸之士、中国人亦頗稱之…當時文献之家、必以余門為最云、昔劉孝綽一家父子姊妹俱能文、嘗自訖以為許史富貴、王謝蟬冕、皆不及渠家文献也、不肖亦云。

²¹⁶ 錢謙益『列朝詩集』「閩集」：金陵朱状元奉使東国、得其集以歸、遂盛傳于中夏。

²¹⁷ 梁有年『蘭雪軒集』「蘭雪軒集題辭」：余使朝鮮、禮賓寺許副正出其世稿、索余言。而稿目中、有蘭雪集、則其故姊氏所著云。會趨程、未及錄示。余既歸朝、端甫寄余一帙、展誦回環、其瀾瀾乎古光、飄飄乎物外、誠匪人世間所恆有者。余于是益信東国山川之靈、孕毓有余。許氏家門之瑞、長發不匱、弗獨偉丈夫輩出之為烈者。唐永徽初、新羅王真徳織錦作太平詩以獻、載入唐音、至今膾炙相傳、謂為其先王真平之女。然則女中聲韻、在東方從來既遠、而蘭雪集、尤其趾美獨盛者哉。永以附諸皇明大雅、流傳万葉、厥史氏在矣。

²¹⁸ 許筠『惺所覆瓿稿』卷 20「上尹月汀」：我家姊詩一帙、呈上、希垂覽。朱・梁二絃孰優。梁引織錦詩似破的。台旨以為何如。

れ、1609年に朝鮮を訪問した明使らは、既に北京で許蘭雪軒に関する情報を聞き、許筠に『蘭雪軒集』を求めたのである。²¹⁹許筠が許蘭雪軒の詩文集を明文人たちに紹介しようとする努力はその後も続き、1614年に千秋使として明に行った時も、『蘭雪軒集』を熱心に明文人たちに贈った。そのため当時書状官として一緒に行った金中清から非難を受けることもあった。²²⁰明文壇での『蘭雪軒集』の人気はそれからも続き、1622年に朝鮮を訪ねた明使梁之垣も、接待官であった李廷龜に『蘭雪軒集』を求めたことがある。²²¹以後『蘭雪軒集』は中国で何度も刊行され、清朝に至るまで多様な詩選集に収録されながら、中国文壇で最も広く知られる朝鮮漢詩集になったのである。²²²

続いて許筠は1613年に、自ら編んだ自分の文集『惺所覆瓿稿』を北京の朱之蕃に送り、彼に頼んで当時明文壇の中心人物であった李廷機の序文を受けた。前節で既に見たように、その時朱之蕃は、域外の作品を軽視する李廷機に対し、許筠の家柄は朝鮮でも最高の文才を持ち、許筠の詩文は明の宗臣や梁有譽に比肩すると反論した。これらのことから、当時明と朝鮮の間に行われた文学交流は、自分の詩才を漢文学の本場に示そうとする朝鮮文人の積極的意志と、中華文明の周辺部への広がりに関心を持った明文人たちの好奇心が合わさって、活発になっていたことが確認できる。

しかし、このように明文壇に朝鮮詩文を積極的に紹介しようとした

²¹⁹ 許筠『惺所覆瓿稿』卷19「己西西行紀」：初十日。朝、劉使致禮、於使物及余二人。紵絲・香扇・書冊等物甚優。夕抵肅寧。徐明來言、在北京見陶庶子望齡、言曾見朱官諭之蕃、道東國有許某者、其姊氏詩、冠絕天下。你之彼、須求其集以來。都監乃斯人也。有集在否。余即出中一部以給…徐相公曰、蘭雪詩集、劉公亦欲得之、俺亦請一件也。余只餘一卷、出給之、令致于使其一件、該給徐者、約於京。田・楊亦請之、俱以京為期。

²²⁰ 金中清『朝天錄』：(六月)十五日丙申晴、留遼東。余抹去狀辭未安者、其詩卷非布政所求、渠自強通、而以彼先懇求為言。大是欺上、再三請改、可恨。八里催車、本定以宋應瑄、而使欲送康忠立。余不可。又以鄭夢台換定…余又力言其不可。使曰、應瑄當往呈姊集。余曰、呈冊、誰不可為。曰、自初出入者乃可往、終不聽…分受道布政按察、白養粹…午間、應瑄持冊往呈布政。

²²¹ 李廷龜『月沙集』卷34：蘭雪齋詩、果有之云、而家不曾貯。聞板本在遼郡、從當印來、以俟後便。

²²² 『蘭雪軒集』の中国伝播については、「金成南(2002)」(49～62頁)参照。

個々の文人の活動は、一方で、中国に無制限に情報が流出されることを憚った朝鮮政府の態度と衝突することになった。朝鮮の詩文が明文壇に伝わることに對して、当時の朝鮮文壇では立場によって異なる態度が見られたが、それについて次節でより具体的に考察することにする。

2) 李廷龜『朝天録』の中国出版をめぐる軋轢

この節では朝鮮漢詩が中国に伝わる過程で現れた、個人と政府の間の軋轢について考察することにする。その具体的な対象として、1620年明使行中に行われた李廷龜の『朝天録』の中国出版を巡る事件を扱うことにする。第一部でも考察したように、李廷龜は当時最高の文章家であり、外交官であった人物である。四回にわたる使行と七回にわたる接伴活動などを通じて、明との外交に誰よりも重要な役目を果たした。李廷龜は「文章というのは、専念してこそ巧みになる[文章一技也、而必專而後工]²²³と文学修練の必要性を主張し、文学の専門性を認める文学論を持っていた。それは、文学を一つの余技としか見なさなかった当時の多くの文人たちの認識とは区別されるものであった。このように、李廷龜は生涯官僚として生きていたのであるが、その奥には文学家としての面も強く持っていたといえる。²²⁴

このような文学家としての性格から、李廷龜は明文人との面識を頼って、自分の作品を熱心に明文壇に紹介した。その結果明使や明将から序文を受けることもしばしばあった。李廷龜が明文人に書いてもらった序文は計5篇であるが、全て明使行や接伴の過程で受けたものである。ここでこれらの序文を整理すると、次のようになる。

- ・ 1609年：明使熊化接待中、『淮陽詩帖』の序文(『月沙集』)

²²³ 李廷龜、『月沙集』卷39「習齋集序」：文章一技也、而必專而後工、盖非紛華富貴馳逐聲利者所能專也。故自古工於詩者、大率窮愁羈困、不遇於時、非工之能使窮、窮自能專而專自能工也。

²²⁴ 李廷龜の官僚文人としての立場と文章家としての面貌については「盧京姫(2002)」(307～314頁)参照。

卷 39「淮陽詩板重懸序」)

- ・ 1616 年：明使行中、遊撃丘坦から『朝天録』の序文(『月沙集』卷 34「附丘遊撃序稿」)
- ・ 1620 年：明使行中、翰林院修撰汪輝から『朝天録』の序文。
- ・ 1622 年：明使梁之垣接待中、詩文に関する序文。
- ・ 1626 年：明使姜曰廣接待中、詩文に関する序文。

中でも 1620 年の明使行は、李廷龜に特別な機会を与えた。この時李廷龜は、明の朝廷で翰林院修撰であった汪輝に、使行中に作った詩を集めた『朝天録』への序文を書いてもらうことになった。当時李廷龜は既に明文壇でも有名な人物であったので、汪輝は李廷龜が北京に来たことを聞いて、彼の詩文を読みたいと求めたのである。汪輝は当時明文壇でも大学者として名高かった人物であり、彼に序文を受けることは、一朝鮮文人である李廷龜には非常に光栄なことだった。葉世賢から汪輝が自分の詩文に関心を見せていると聞いた李廷龜は、葉世賢に汪輝から序文をもらえるよう尽力してくれと何度も頼んでいる。

* 李廷龜『月沙集』卷 34「寄葉署丞世賢/庚申朝天時」

向聞汪學士求見拙稿、不佞敢隱乎…(中略)…而自惟不佞官位已極、年迫六十、一朝溘然、同腐草木、則天下誰知有李生者。今者白首觀周、重覩斯文濟濟之美、聽於下風、竊自增氣。敢慕子長執鞭之義、思得顏淵附驥之榮、今以下里之音、就正於大雅。足下倘以是獻之老先生、清燕之暇、一賜流覽、或蒙弁之卷首、以爲不朽盛事、或蒙一言斤教、以爲千古華袞、則風流文彩、將見日月海東、而玄晏之賜、入地不忘。足下幸爲遠人重致意焉。

この間汪學士[汪輝]が拙稿を見たいとお求めになったと聞きましたが、私がどうして隠したりしましょうか…(中略)…自ら思うに、私は官職も終わりに近づき、年も六十に迫っています。ある日突然この世を去って、草木と一緒に朽ちてしまえば、李生という者がい

たことを天下の誰が知ってくれるでしょう。今白髪の身で中国に来て、文化のさかんで美しい様子をあらためて拝見し、風下で聞いていると、私もひそかに気力を増しました。司馬遷が晏子のためには御者になってもいいと言った義心を慕い、²²⁵顔淵が孔子という駿馬に付くことのできた光栄を思い、今この鄙俗な作品を示して、正統なる君子に教えを求めています。あなたがこれを老先生に献上し、お暇な折にでも目を通していただいて、巻頭に序文をいただけましたら、不朽の盛事としましょうし、一言教えを賜ったら、千古の榮譽といたしましょう。そうなったなら、その風流と文彩は海東に日月のように輝き、玄晏²²⁶の恩徳は地下でも忘れられることはないでしょう。あなたが遠い地の者のため、重ね重ねご配慮くださいますよう。

李廷龜は汪輝の序文を得ると、その序文によって自分の詩文が不朽になったと感激し、葉世賢に何度も謝礼の手紙を送ったりしている。²²⁷李廷龜がこれほど熱心に明文人の序文を受けようとしたのは、中国は漢文学の本場であり、明文人に認められることが自己の詩文の価値を証明することにもなるからであった。実際に汪輝も李廷龜の詩文に感心し、彼の作品が曹植・劉楨・李白・杜甫に劣らない水準を持つと絶賛している。

* 汪輝『月沙集』「月沙先生集序」

頃讀李君號月沙聖徵者之佳製、音韻宏亮、氣概超群、若綴之華重其新、既枯之葉復其潤、生意洋然、神理煥發。卓異曹劉、駕軼李杜、而上之陵漢魏、下之逾三唐者也。余仰嘆之、李君真人傑者乎。

先ごろ李君、号は月沙聖徵という人の佳品を読んだが、その響き

²²⁵ 『史記』卷62「管晏列傳」第二：假令晏子而在、余雖為之執鞭、所忻慕焉。

²²⁶ 玄晏は皇甫謐(晋)の號である。彼は左思の「三都賦」に序文を書いてくれて、その賦が世に知れられるようになったのである。ここでは汪輝のことを意味している。

²²⁷ 李廷龜、『月沙集』卷34、「寄葉署丞世賢」：非足下爲人謀忠、何以致此。容另謝外、先布區區。

は広くて明らかで、気概は群を抜いており、閉じた花が再び咲き、
枯れた葉がまた潤うように、生気が満ち溢れ、すぐれた^{ことわり}理がかが
やき現れている。曹植・劉楨から抜きん出て、李白・杜甫を追い越
している。上は漢魏のものを凌ぎ、下は三唐のものを超えている。
私は仰ぎ見て感嘆した、李君こそ誠に人傑ではないのか。

引用文を読むと、序文とはもともと相手を褒めるものだとしても、か
なり高く評価していることがわかる。このような賛辞はただの社交辞令に
止まらず、李廷龜の詩集は汪輝の紹介を得て中国で出版されることにまで
なったのである。朝鮮の使者として中国に来て、中国の大学者にその文章
力を認められ、中国で詩集を出版したのは李廷龜が始めてであった。それ
は文人李廷龜にとって、この上なく名誉なことであった。そこで彼は大変
感激し、「況余親遇知於上國之宗匠乎。則余詩雖可廢、此序不可無傳」と
いう序文を書くことになったのである²²⁸

汪輝の序文は李廷龜のみでなく、李廷龜の子孫たちにとっても大きな
名誉として受けとられたようである。それは、1688年に孫李翊相が李廷龜
の文集重刊本を編纂した時、汪輝の序文を文集の最初に配置したことから
も窺える。李廷龜の文集初刊本は、李廷龜の死後1636年に、息子明漢と
昭漢、弟子崔有海が著者の自編稿に基づいて公州で74冊の木版本として
刊行したものである。それには序文がなく目録からすぐ本文に入っている。
ところが1688年刊行された重刊本では、最初に明文人汪輝(1620)・姜曰
光(1626)・梁之垣(1622)、その後に朝鮮文人張維・宋時烈の順で序文が配
置されている。それを見ても李廷龜の子孫が汪輝の序文をいかに重視して
いたのかが窺える。²²⁹

²²⁸ 李廷龜『月沙集』卷39「朝天紀行録序」：昔司馬子長、以爲閭巷之人、非
附青雲之士、不能聲施後世、乃欲藏其書於名山、以求知於千載後所不知何人。
況余親遇知於上國之宗匠乎。則余詩雖可廢、此序不可無傳、遂謀諸梓、並記其
顛末云。萬曆庚申夏日。

²²⁹ 李廷龜の文集初刊本と重刊本は、ソウル大学奎章閣に所蔵されているもの
を参照した。これに関する書誌事項と編纂経緯については『奎章閣所蔵文集解
説』11(ソウル大学奎章閣、2005、29頁)の中の「月沙集」の部分参照。

当時中国で出版された刊本と思われるものが、現在日本天理大学の図書館に所蔵されている(請求記号：929.1-415)。表題は「月沙朝天録」と書かれ、巻頭題は「月沙別集」になっている。巻頭題の下には「朝鮮李廷龜聖徴著」と書かれている。最初に汪輝の序文があり、引き続き李廷龜の序文、本文の順に進んでいる。最初の頁に李廷龜の後孫である「李鳳朝」の蔵書印が押されていることから、後孫家に伝わった書物であることが分かる。²³⁰

ところが、当時朝鮮では使者が中国で詩集を出版するという前代未聞の出来事によって、大騒動が起こった。朝鮮政府は建国初期から保安上の理由で、中国側に朝鮮の情報が流出することに極めて敏感だった。それは書物の流出についても同じことだった。特に16世紀末に明軍が派遣されてからは、彼らによってしばしば朝鮮に関する情報収集が行われたので、それを厳しく警戒してもいた。『朝鮮王朝実録』の記録を見ると、この時期に中国人が朝鮮の書物にかなり関心を持っていたこと、それに対して朝鮮政府が書物の流出を厳しく制限していたことが確認される。

- ・ 1593年：明の將軍袁黄が『經国大典』を閲覽し、それを止めなかった金宇顛・沈思賢を問責したこと。(『宣祖実録』34卷、26年1月23日、1月24日、3月3日記事)
- ・ 1595年：經略宋應昌と提督李如松が『東国兵鑑』と『東國地誌』の閲覽を求めたことに対して、その書籍には明將軍が読むのに相応しくない内容があるため見せてはならないと命じたこと。(『宣祖実録』63卷、28年5月1日、5月3日記事)
- ・ 1598年：明使が朝鮮初期の事跡を読みたいと求め、その参考資料として『陽村集』を読ませようとした意見に対し、『陽村集』には明使が読むのに相応しくない内容が多く書かれている

²³⁰ 筆者はその本の実物を確認する機会があったが、それは中国紙(竹紙)に印刷され、表紙と装幀はかなり丁寧に作られたものだった。詳しい書誌情報は『海外典籍文化財調査目録：日本天理大学図書館所蔵韓国本』(国立文化財研究所編、ソウル：国立文化財研究所、2005)参照。

として反対したこと。（『宣祖実録』98巻、31年3月24日記事）

以上の例から、当時朝鮮政府では法典や兵法書、一般文集に至るまで、中国人の目に触れることに対し非常に慎重であったことが窺える。朝鮮政府が書籍流出をこのように厳しく管理したのは、何より中国人に「不穏な内容」が知られることを防ごうとしたからである。即ち、明との外交問題につながる内容が明側に知られないようにと気づいたのである。その一例として、『經国大典』を明将が閲覧した後、『大典』の内容で問題になりそうなものを選び、もし明政府がそれを問題にしてきたら何と答えるべきかを議論したこともある。²³¹

特に、17世紀初の朝鮮は後金(後の清)と明の間に挟まれ、困難な立場にあった。実際、1620年の李廷龜の使行も、朝鮮將軍姜弘立が後金に投降したことから明が朝鮮と後金の内通関係を疑ったので、それを弁明するために行ったのである。それほど朝鮮では中国との外交関係に敏感であったし、そのため情報の流出には特に慎重になり、明文人が朝鮮詩文を求めた時も政府で深思熟考して適当な詩文のみを選び、何回も検討してから贈るのが一般的であった。以上のようなことを考えると、官僚の李廷龜が使行

²³¹（『宣祖実録』36巻、26年(1593)3月3日） 仍教曰、尙問曰廟號乃天子事、非諸侯所敢稱。天朝既賜贈諡、而爾國又自上尊號、是何禮義。日本乃天朝逆虜、高皇所痛絶、通信交聘於日本、是何意。貨貝通行天下、有無相資、理之常也。爾國隱諱金銀、俾不得相通、至於立法而禁之、是何意。何以答之。此條件對答之意、措辭以啓。

それに対する備邊司の答弁がその次にある。「備邊司啓曰、伏觀備忌記下教之意。華人若如是爲問、則固難爲辭。但凡人之情、與人相對、其所短處、不敢強詰、中國之人、稟性忠厚。如我國頃年通信一事、已爲稔聞、而亦不究問、則將此三條、反覆相詰、於臣等愚意、恐無此理也。設或如此、則其所答之辭、大概不出於昨日陳達之意。而如問太祖以下廟號、使之歷數而對、則亦甚難處。然太祖・世祖廟號、已著於大典序文、則列聖廟號、恐不可終始抵諱也。大典有使隣國之文、我國交通日本、固不可諱。而今當答以、日本雖見絶於中朝、然歷代之待夷狄、視其叛服而爲進退。大典乃我國經世傳後之書、其於交隣一款、不可闕焉、故果有此條、而實非當行之事矣。通行貨貝、有無相資、雖曰貿遷之義、而我國全不產黃金與珠玉、係非土宜、在所當禁、白金雖云有產出之處、而我國不解吹鍊之法。且我國之人執之而貨貿者、唯五穀布帛而已、至於錢文、皆不行用、故金銀珠玉、皆有禁、豈有他意哉。大略、以此意答之。

中に自分の詩集を勝手に出版したということが、朝鮮政府にどれほどの衝撃を与えたかというまでもないだろう。

当時の政府の議論は、明朝廷がそれを口実にし、後に外交問題が起こる可能性があるとして、李廷龜に行動の責任を取らせようと主張した。汪輝の序文が李廷龜の詩を中国の優れた詩人である「曹植・劉楨・李白・杜甫」にも劣らないと褒めたこと、当時一緒に中国で文集を出版した柳汝恪の文章について、李廷龜が「汝恪之文、竝驅中原」と書いたことが、後ほど問題になる可能性があるとして指摘したのである。

＊ 『光海君日記』 158 卷 12 年(1620)11 月 10 日

司憲府啓曰：汪輝批廷龜之詩、有卓異曹劉、軼駕李杜、陵漢魏、逾三唐等語。廷龜不以拙詩見褒爲恥、而反自鍍梓銜醜。又於序汝恪文、有竝驅中原在於此等語、此則愚劣妄發之甚者也。(當此疑訝之時、中原之人見此、必有大駭執言者矣)凡天使之來(我國)、索見我國詩文、則館閣詳議、抄出若干篇、啓下、然後書贈者、其意有在。使臣之入京、自刊其詩文、此前古之所未有也。他日奸人託辭、印布私製、有所媒禍於中國之患、未必不由於此(也)、豈不大可懼哉。

司憲府が申し上げて言った。汪輝が李廷龜の詩を批評したのものには、「曹植・劉楨から抜きん出て、李白・杜甫を追い越している。漢魏を凌ぎ、三唐を超えている」などという言葉があります。李廷龜はつまらない詩をそのように誉められて恥ずかしいとも思わず、それどころか自分でそれを出版し、醜態を晒しています。また汝恪の文章に序を書いて、「ここに中原に並び馳せている」などと言っていますが、これは愚かで妄言も甚だしいものです。(今のように嫌疑のかかっている時に、中国人がこれを見れば、大いに驚いて取り沙汰する者がいるに違いありません)。およそ明使が我が国へ来て、我が国の詩文を求める時は、館閣でよく議論して若干の作品を選び出し、許可を得てから書いて贈っておりますが、これは理由があつてのことです。使臣が北京に行って、自らその詩文を刊行するなどということは、前代未聞のことです。後日悪意のある人物が、これを口実

に自作を印刷頒布し、それが中国との間に禍をもたらすことになってもなったら、それは今回のことと関係がないとは言えません。実に恐るべきことではではないでしょうか。

ただし、李廷龜が弾劾を受けたことには、これ以外の政治的意図も隠されていたことを考えなければならない。当時の朝鮮政府は北人が政權を握っており、李廷龜はその対立党派である西人に属していた。したがって李廷龜が弾劾されたことには、李廷龜を排除しようとした北人側の政治的意図があったともいえる。実際に 1620 年の使行直前にも、李廷龜は対立党派の弾劾を受けて郊外で待罪していたのである。²³²李廷龜を使者に選ぶことには反対意見も強かったが、彼の優れた文章力と外交力を絶対的に信頼していた国王の指示によって使者に抜擢された。このような政治的状況を考えると、李廷龜が中国で自分の詩集を出版したことは、彼の排除を狙っていた対立党派のよい口実になったとも言える。

しかし、そのような政治的事情をおいても、当時書物の流出に極めて慎重であった朝鮮政府の立場からは、李廷龜が使者の身分で国家の方針に従わず、勝手に自分の詩集を中国で出版したというだけで十分に批判の余地があった。それは一生官僚として、特に外交方面で活躍した李廷龜も熟知していたはずである。それにも関わらずそのような大胆なことを敢行したのは、やはり明文壇に自分の詩文を紹介し認められたいという、彼の「文章家」としての性格の表れであっただろう。

以上で見てきたように、17 世紀初の明文壇への朝鮮漢詩の伝播には、朝鮮文壇のさまざまな反応が伴っていた。一つは朝鮮漢詩が中国詩に劣らない水準を持つという自負心からそれを誇示しようとする態度であり、もう一つは中国政府が朝鮮詩の内容を口実に外交問題を起こすことを警戒する態度である。前者は個別文人の立場に見られた態度であり、後者は政府の立場に見られた態度であった。このような自己の詩才を誇示しようと

²³² 『光海君日記』145 卷、11 年(1619)10 月 3 日：以前知事李廷龜爲陳奏使。先是、廷龜以不參廢母廷請、臺諫方請遠竄、待命國門外。

する文人たちの態度と、詩文の無制限な流出を阻もうとする政府の態度は、しばしば衝突し軋轢を生んだのである。

それは朝鮮初期以来、安定的ではあるが一方で閉鎖的性格を持っていた朝鮮の文壇が、「戦争」という予想外の歴史的事件を受け、突然に広がった交流の場を迎えて、どのように対応したのかを示している事例である。以上の事例から、当時の戦争による「交流の拡大」が順調に行われただけではないことがわかる。しかしこのような両国文人間の活発な文学交流が、以後の両国文壇に大きな影響を与えたことは事実である。次の課題は、このような軋轢がどのように調整されていったのか、またこの時期に成り立った活発な交流が、これ以降両国文学の発達にどのような影響を与えたのかについて考察することである。

第二章. 朝鮮漢詩選集編纂と朝鮮漢詩の再発見

* 始めに

ここでは、明との文学交流が朝鮮漢詩の認識に与えた影響について考察することにする。17世紀初の朝鮮文壇では、朝鮮漢詩選集と詩話集編纂作業を通じて、朝鮮歴代の漢詩を整理しようとする動きが活発であった。本稿では、明との文学交流がこのような作業にどのように作用したのかについて扱うことにする。その具体例として、戦争後に政府の主導で編纂された『海東詩賦選』と、明との交流で誰よりも活発な活動を行った許筠の詩選集及び詩話集編纂に注目する。特に、それらの作業が行われる過程で朝鮮詩に対する新しい自覚が生まれ、朝鮮漢詩の価値があらためて評価されたことに注目する。

1. 政府の『海東詩賦選』編纂: 東詩への自覚

戦争後の朝鮮文壇で行われた歴代朝鮮漢詩選集の編纂作業の一つに、政府の主導による『海東詩賦選』の刊行がある。この作業は1601年冬から始まり、1605年8月に至ってようやく完成されるまで、4年にわたる長い時間をかけて行われた。その間に責任者も申欽・李好閔・柳根と三回も変わり、後半の作業には当時の有名な文章家たちが多数参加する大事業となった。その編纂過程については、最初の責任者である申欽の記録と『朝鮮王朝実録』(以下「実録」と呼ぶ)の記事が参照される。では、まず申欽の記録について見ることにする。

* 申欽『象村稿』卷52「漫稿」「晴窓軟談下」

万曆辛丑冬、余為玉堂。宣祖大王命抄東方人詩賦以進、余既彙集未脱稿、因事巧閑家居、遂歸之文衡。文衡乃五峯李公好閔也、亦久而遷延未就。乙巳春、五峯已遷文衡、而西垞柳公根代之。余又拜納言入銀台。宣祖大王復申命開局釐選、使五峯・西垞及余掌其事、而

海平尹公根寿・月沙李公廷龜・柳川韓公浚謙・晩翠吳公億齡・洪副学慶臣・鄭僉樞協・金正玄成与焉。秩凡四簡、西垞序之。

万歴辛丑年(1601)冬、私は弘文館に勤めていた。その時宣祖大王が朝鮮の詩賦を抄録して献上するように命じた。私は資料を集めたがまだ脱稿していない状態で、事情により辞職を願い出ることになり、そこでこの作業を文衡(大提学)に委ねた。文衡は即ち五峯李好閔であったが、また長い間遅延して完成しなかった。乙巳年(1605)春に、李好閔も文衡から退いて、西垞柳根が代った。私はまた納言に任命され承政院に入ることになった。宣祖大王はふたたび局を開いて詩の編集をするように命じ、李好閔・柳根と私にその作業を担当させ、尹根寿・李廷龜・韓浚謙・吳億齡・洪慶臣・鄭協・金玄成もこれに参加した。あわせて四簡を作り、柳根が序文を書いた。

申欽の記録によると、初めて国王宣祖が申欽に朝鮮の詩賦を抄録することを命じたのは、1601年冬のことであった。このことに関する『実録』の記事は次のようである。

* 『宣祖修訂実録』38年(1605)1月1日

初、天將求見東國詩文。時申欽爲藝文提學、上命欽刪定。及好閔爲大提學、欽以其抄録屬好閔成之。上亦命抄山人・閔秀所製、好閔重其事、而累辭以爲、吟魂有知、想必冷笑於泉下。至是、根代好閔受命、將設局、請令吏曹別選撰集之官與之同事、上可之、且教曰、前朝之文、則自有東文選可抄、此外閭巷間膾炙篇翰、則人無不知。且須收聚私稿、可以就此役矣。

初めに、明將が我が国の詩文を見たいと求めた。当時申欽が芸文館提學であったので、国王は申欽に刪定を命じた。李好閔が大提学になってからは、申欽がその抄録したものを李好閔に託して完成させた。国王はまた僧侶と女性が作ったものも採るように命じたが、李好閔はその事を重くみて、言葉をつくして言った。「作者の魂が知ったら、必ず地下で嘲笑うでしょう。」そこで、柳根が李好閔の代わ

りに命を受け、担当の局を設置することになった。また吏曹に他の撰集官を選任させて一緒に働きたいと願い出ると、国王はそれを許可し、また仰せになった。「前朝の文はすでに『東文選』から採ることができる。この他に巷間に膾炙されている詩文は、知らない人はいない。ひとまず個人の原稿さえ集めれば、この仕事は完成するだろう。」

これによると、『海東詩賦選』は初め「天将[明将]」の依頼で編纂されるようになったことがわかる。前節で考察したように、当時朝鮮を訪れた明将らの間では、朝鮮文人たちの協力を得て朝鮮漢詩選集を編集することがしばしば行われていた。ここでは、それが個人の行為に止まらず、朝鮮政府に依頼するようにもなっていたことが確認される。

ところで、初めのきっかけは明将の依頼であったが、その事業が進む中で、国王はこれを機に戦乱中に失われた歴代朝鮮の詩賦を整理しようと熱意を持つようになったのである。

* 『宣祖実録』34年(1601)12月2日

以備忘記傳曰、弘文館適因天使贈給、東人詩文抄出矣。予欲見東人詩賦、天使贈給外、賦・長篇古詩・五言・七言近體、東文選所載及雖非東文選、近世善作、別爲精抄、作爲五六卷以入。文則有東文粹、姑勿竝抄事、言于弘文館。

備忘記に伝えられている。「弘文館で今ちょうど中国使臣に贈るために、我が国の詩文を選び出したところだ。私は我が国の詩賦を見たいので、使臣に贈るもの以外に、賦・長篇古詩・五言・七言近体の『東文選』に載せられたもの、また『東文選』に載せられなかったものでも、近世の良い作品があれば、別に精選して5、6巻を作って入れなさい。文は『東文粹』があるから、さしあたりもう一度抄出作業をする必要はないと弘文館に伝えよ。」

* 『宣祖実録』34年(1601)12月3日

以備忘記傳曰、昨日傳教、東人詩賦抄出事、古人選書、山人閨秀之文亦不廢。今亦依其例、無則已、有則亦可取。且雖當世時人、如有佳作、膾炙人口者、則亦可取。其取之、須善於鋪敘、寫出精神、雄健渾厚、或清絕艷麗、勿取其詭辭險譎、騁怪以爲奇者、務使至精。予偶閱、或不無印出之慮矣。此予管見主意、宜知而斟酌爲之。

備忘記に伝えられている。「昨日指示を伝えたが、我が国の詩賦を抄出することについて、昔の人が選んだ書物では、僧侶と女性の作品も廃していない。今度もその例によって、作品がなければしかたがないが、あればそれも取るようにしなさい。またたとえ当世の人でも、佳作があり、人口に膾炙されているようであれば、それも取るようにしなさい。取る場合には、叙述がすぐれており、精神が描き出され、たくましく力強いもの、あるいは清らかで美しいものを取り、人をあざむくような異様な言葉で、奇怪な効果を誇るようなものは選ばず、最も精なるものが選ばれるよう力をつくしなさい。私はたまたま見て、印刷を考えてもよいと思った。これは私個人の意見だが、理解してうまく処理してほしい。」

以上の『実録』の記録には、当時、国王宣祖がこの詩選集の編纂に大きな関心と期待を寄せ、責任者たちに具体的な事項まで直接指示していた様子が確認される。特に宣祖は前代の作品だけではなく、当代の詩文も入れ、僧侶や女性の詩文も落とさないようにと述べている。つまり時代や男女階層を超えて、朝鮮の詩文を総網羅したものを新たに整理しようと強い意欲を示している。無論それはどんな作品でもよいということではなく、「善於鋪敘、写出精神、雄健渾厚、或清絶艷麗」に限定して選抜すべきことが強調されている。

しかし、このように男女上下を問わず、全ての作品を漏れなく収録する方針に対しては、編者たちの反論もまた手強かった。一例を挙げると、責任者の一人である李好閔はその方針に強く反発し、ついにはこの事業から退きたいと申し出たこともあった。そこで国王は責任者を柳根に入れ替

えたが、そこまでしても自分の意志を曲げなかったのである。²³³では、当時宣祖が『海東詩賦選』の編纂にそれほど強い意欲を見せた理由は何であるのか。

＊ 『宣祖実録』38年(1605)1月15日

前因天將贈給、偶下東人詩賦抄選之命。蓋我國行文之體、似不足觀、惟詩賦流麗可愛。中朝之人、或以江左譏之、然未可盡輕之。數百年來、中間傑作何限、而兵火之餘、零落散失、豈非可惜。失今不抄、湮沒無存者矣。

前に明將に贈呈するために、たまたま我が国の詩賦の抄出を命じることになった。思うに我が国の学芸のありようには、見るべきものもないようだが、ただ詩賦だけは流麗で好ましい。中国の人は、東国の文だとして誇るかもしれないが、しかし全てを軽んじてよいものではない。数百年來、その中には傑作も限りなくあったが、戦争の影響で分散し失われてしまったのは、まことに惜しむべきことだ。今のうちに抄出しておかなければ、すべてなくなって何も残らないだろう。

引用文によると、宣祖が歴代朝鮮漢詩の整理作業に熱意を抱いたのは、「朝鮮の詩賦に対する自負心」と「戦乱でその作品が失われたことを惜しむ思い」が、その主な理由であった。宣祖は朝鮮の詩賦に対して、中国文人は辺方のものと無視するかもしれないが、朝鮮人としては軽く見ることはできないとして、それなりの価値を認めていたのである。したがって、7年にわたる戦争でその大量の作品が失われたことを悲しく思っていた。戦争後、朝鮮文壇で最も急を要する課題は、基本的な書籍を具備することとともに、失われた記録を捜し、整理することだったのである。中でも歴代詩文を整理する作業は、最も早く行わねばならないことと考えられたよ

²³³ 『宣祖実録』「38年(1605)1月15日」：前於經席、山人閻秀、亦可竝抄事、延陵承命、而經年之後、費辭讓于卿、似爲未穩、其慎重不敢輕易下手之意、至矣盡矣。

うである。

しかし当時この仕事は何年経ても完成せず、責任者であった大提学の李好閔と柳根が相次いで辞任しようとするなど、順調に進まなかった。そこで宣祖は、このままでは事業が未完に終わるのではないかと心配し、担当者を増やしてでも早く完成するように催促した。そこで当時最高の文章家であった李好閔・柳根・尹根壽・李廷龜・韓浚謙・吳億齡・洪慶臣・鄭協・金玄成などがこの作業に参加するようになり、纂集庁が開かれ、当番を決めて作業を急ぎ、ついに1605年8月、『海東詩賦選』という題名で完成したのである。²³⁴しかし残念ながら現在この『海東詩賦選』は伝わらず、その具体的内容を確認することはできない。

ところが、この時完成された『海東詩賦選』は、編纂の当初の目的通り明将や明使に贈られることはなかったようである。完成した次の年、1606年に皇太子の誕生を知らせるため、明使朱之蕃が朝鮮に派遣された。前章でも考察したように、朱之蕃は朝鮮詩文に強い関心を持っていた人物であった。当時彼は朝鮮政府に朝鮮詩選集を作ってほしいと要請し、²³⁵それを受けて朝鮮政府では緊急に朝鮮詩選集を編纂することになったが、それは当時の政府の議論において、前年度に完成した『海東詩賦選』をそのまま贈るのは無理だという意見が強かったからである。

* 『宣祖実録』39年(1604)4月15日

政院以大提學意啓曰、東方詩文、上下數千年間、非無大家、而乃以近世工於一二詩句者、竝議於一卷之中、天朝視之、必輕之。請令

²³⁴ 『宣祖実録』190巻38年(1605)8月8日：且曾有下教、令臣製進序文、拾遺一編、隨後抄選事、已爲啓下。今方收聚私藁、欲待抄完、然後製進、而今既罷本廳、未知何以爲之。冊名曾以海東詩賦選議定。若爲無妨、當書於卷面第一行、敢此并稟。

²³⁵ 『宣祖実録』198巻39年(1606)「4月19日」：弘文館啓曰、天使所求東人詩文、大提學柳根改抄、而往復議定之際、遲延日字。自十七日多聚能書之人、始書草冊、而所抄詩文、倍多於前抄、故今日始爲畢書、即送承文院、方書正本。而天使發行前、勢未及書呈云、極爲可慮。令承文院、一兩日內急急畢書、追送於中路何如。傳曰、允。

それ以外にも、「5月3日」・「5月5日」の記事が参照される。

改選表表大家詩文爲當、敢啓。傳曰、允、予見亦然。且李滉論程敏政事、勿論是非、皇朝人之事、書贈皇朝人、恐於體面不合。八駿圖觀其語勢、多引古帝王、亦近嫌逼、書贈詔使、亦恐未穩。并議施行。

政院が大提学の意を申し上げた。「我が国の詩文は、上下数千年間、大家がいないわけではありません。しかし近世の一二の詩句が巧みな人までを、一卷の中で同列に論じているので、中国人がこれを見たら、軽んじるに違いありません。堂々たる大家の詩文だけを改めて選びなおさせるべきでしょう。敢えて申し上げます。」

伝えて言った。「わかった。私の意見もそうである。また李滉が程敏政を論じたことは、是非はどうであれ、中国人に関わることから、中国人に書いて贈ると、おそらく体面の問題がある。「八駿図」はその書き方を見ると、中国の古帝王の故事を多く引用し、無礼にあたるかもしれないので、詔使に書いて贈るのは、やはりおそらく穏当ではない。あわせて議論して行うようにしなさい。」

以上からわかるように、明使に『海東詩賦選』をそのまま贈ることはできないとした理由は、まず詩人の水準が揃わず、「中国文人が朝鮮漢詩を見下すこと」を懸念したことである。『海東詩賦選』がこのようになったのは、男女上下の別を問わず作品を網羅するよう命じた宣祖の詩選観の結果として、当然だったかもしれない。しかし後にまた論議するが、このような性格は『海東詩賦選』の最も目立つ特徴でもある。

次の理由としては、詩の内容に「中国に伝わると困るものがあること」が挙げられている。その内容とは、朝鮮文人が中国文人を批判したこと、朝鮮王朝を誇るために中国皇帝の故事を引用したことである。このように明使に朝鮮漢詩を贈る時は、内容を何度も確認し、外交的問題を起こさないよう配慮するのが慣例だったのである。²³⁶

ここから、当時の朝鮮において、中国文人たちに伝えるための詩選集

²³⁶ それについては『光海君日記』158巻12年(1620)11月10日の記事が参照される：凡天使之來(我國)、索見我國詩文、則館閣詳議、抄出若干篇、啓下然後書贈者、其意有在。

と、自国の漢詩を整理するための詩選集の「編纂基準」がかなり違っていたことが窺える。『海東詩賦選』を編纂するようになった最初のきっかけは明将の要請であったが、仕事が進むにしたがって国王は計画を修正し、戦乱で失われた朝鮮漢詩の整理を要求するようになった。そして、性別や身分を問わず、広範な朝鮮詩の収録につとめるよう命じたのである。しかし明文人に伝えるための詩選集は、大家を中心にし、問題の起こらない作品のみを改めて選んで作るように指示した。それで当時の大提学柳根は、明使に贈るために新しく詩選集を編纂することを主張し、国王の許しを得ていた。これ以降も明使や明将が朝鮮漢詩選集を朝鮮政府に求めることはしばしばあったが、その際、柳根が編纂した詩選集が頻繁に使われたようである。一例として、1614年に明将丘坦が朝鮮漢詩選集を要求した時も、柳根が編纂した詩選集を写して贈るよう命じられていることがある。²³⁷

前章でも考察したように、明文人に贈るための詩選集を編纂する時は、内容面でさまざまに気を使う必要があったため、その作業が容易ではなかったのである。そこで朝鮮政府はそれをかなり負担に感じ、何とかその負担を避けようと考えたことも多かった。それは1595年に明使臣が朝鮮科挙の詩賦論作品を求めた時に、「我が国の人々の作品は中国人の眼目に満たないから、兵火のせいで手に入らないと言って、見せないようにしてもよい」と命じたことからよく窺えるのである。²³⁸

以上に考察した中で、『海東詩賦選』の編纂には一つ注目すべきことがある。朝鮮文壇の立場で朝鮮漢詩選集を選抜する時の選抜基準と、明文人に贈呈するために詩選集を編纂する時の基準が、互いにかなり異なっていたことがそれである。このことから、同じ「漢詩」の選集といっても、編

²³⁷ 『光海君日記』82巻6年(1614)9月7日：弘文館啓曰、丘遊撃求請東國詩文、戸曹判書臣柳根、曾爲大提學時所抄東人詩文、只有亂草一件。依前例、令寫字官繕寫以給。從之。

²³⁸ 『宣祖実録』64巻、28年(1595)6月7日：禮曹啓曰、天使求見我國科場詩賦論等作、本曹非但無書冊可考。自前如此之事、必經儒臣抄出、抄出定奪、送于本曹、本曹令承文院、繕寫粧(糸+黄)贈給、例也。今亦依此例、令弘文館、抄送詩賦論若干篇。上曰、依啓。東人之作、未滿於華人之眼。雖稱兵火難得、不示亦無所妨。參酌施行。

纂の目的によって評価基準が変わっていたことが窺える。『海東詩賦選』を編纂する時、宣祖は既存の詩選集編纂方式である「大家」中心の方式に従わず、僧侶や女性のように漢文学の伝統から疎外されていた人物の作品でも、価値があれば漏らさず収録することを命じている。このような編纂態度はこの事業を担当した臣下たちの反発をもたらし、また編纂された詩選集も明使には贈れないものになってしまった。

しかし、男性士大夫詩人の作品ばかりを選抜するならば、従来の規範に沿った作品が優位に立つしかない。ここで国王宣祖は、既存の漢詩評価基準によって高く評価された作品だけではなく、僧侶や女性の作品でも「写出精神，雄健渾厚，或清絶艷麗」であるなら取るように命じるなど、異なる基準を立てる態度を見せている。ここから確認できるのは、宣祖が中国の漢詩とは別に存在する、「朝鮮の漢詩」を選ぼうとする意志を持っていたことである。それは即ち、朝鮮漢詩を「東国漢詩」や「東詩」と呼びながら、そのように中国の漢詩と区別することによって、朝鮮漢詩の独自の性格を認知したのだとも言える。『海東詩賦選』編纂が持つ意義とは、このように中国漢詩の伝統とは異なる東国漢詩の伝統が自覚されたことではないだろうか。

以上で考察したように、戦乱以降、朝鮮では自国の漢詩選集の編纂を通じて、「東詩」の独自の性格が認識されていった。このように朝鮮漢詩の独自性に注目する態度は、次節で考察する許筠の朝鮮漢詩選集編纂にさらに明確に現れている。

2. 許筠の詩選集と詩話書編纂

1) 朝鮮漢詩の価値認識

第二部で朝鮮文壇における明文学の批判的受容について考察したが、そこでは許筠が中国の文学や歴史について、自分なりの観点を持って評価できるだけの知識を持っていたことを確認した。しかしその一方で、許筠はただ中国のことに関してのみ詳しくはなかったのではなく、朝鮮の文学と歴史

にも幅広い知識を持っていたのが注目される。それは家学の伝統に由来するもので、幼い時から許筠と彼の兄弟たちは父親許曄(1517～1580)の教えを受け、朝鮮の歴史に関しても深く学ぶ機会を持った。そのため彼らは明使を接待する時、朝鮮の歴史に関する豊富な知識を見せ、その能力を認められることもあったのである。

＊ 許筠『鶴山樵談』

先大夫嘗曰、我國人專功古史、不識本國事蹟、甚非務本之道。故二兄及僕、皆讀東國通鑑。少時以爲可讀之書甚多、奚必讀是。及聞黃詔使到太平館、問館伴鄭林塘相公以高麗及辛禡父子本末、相公舌呿不能對、仲兄入對之云、始知先大夫之高見出常人萬萬也。噫、才如林塘尚、且困於酬對、爲僨相者可不知本國之事乎。

亡父がかつて言った。「我が国の人々は古史の学習にばかり力を注いで、我が国の事跡を知らない。根本に努める道とはとてもいえない。」それで二人の兄たちと私は、皆『東国通鑑』を読んだ。若い時には、読むべき書物は非常に多いのに、どうしてこれを読まねばならないのかと思った。しかし黄詔使が太平館に至った時、館伴の鄭惟吉に高麗と辛禡父子の事跡について聞くと、鄭相公は口を開けたまま答えられず、仲兄[許筠]が割って入って答えたという。それを聞いて、初めて亡父の見識が普通の人よりずっと高かったことがわかったのである。ああ、鄭相公のようにすぐれた才能があっても、なお答えに苦しむことになるのだから、使臣の相手をする者は、自国のことを知らなくてよいものだろうか。

引用文から確認できることは、当時の朝鮮文人たちが歴史を学ぶ場合、中国の史籍を中心にして、朝鮮の史籍はあまり読まなかったことである。それは漢文学を基本の素養とした朝鮮士大夫の一般的な傾向でもあったのである。しかしそれに反して、許筠と彼の兄弟は朝鮮の史籍に関しても幅広い知識を身につけていた。それは文学方面でも例外ではなかった。もとより文学に愛着を持っていた許筠は、朝鮮の漢詩及び詩に関する逸話を

熱心に収集した。彼は数回にわたって朝鮮漢詩選集と詩話集を編纂しているが、ここで彼の作業を簡単に整理すると、次のようになる。

- ・ 1593年：詩話書『鶴山樵談』編纂
- ・ 1598年：呉明済との交流によって『朝鮮詩選』編纂作業に参加
- ・ 1606年：明使朱之蕃接待中「歴代朝鮮詩選集」編纂
- ・ 1607年：詩選集『国朝詩刪』（10巻）、詩話書（2巻）編纂
- ・ 1611年：詩話書『惺叟詩話』編纂

許筠の朝鮮漢詩整理作業には、二度の大きな契機があったのである。一回目は1592年から1598年まで起こった日本との戦争であり、二回目は1606年朝鮮を訪問した明使朱之蕃との出会いがそれである。

最初の詩話書である『鶴山樵談』の編纂時期を見ると、それは1593年、戦争が起こったすぐ次の年に、戦乱を避けて母親の実家である江陵に避難した時のことであった。『鶴山樵談』は許筠と同時代の詩人たちの作品を品評し、また彼らの作詩にまつわる逸話を集めたものである。許筠がこの詩話書を作ったのは、まず戦争で全国が混乱し、何もできない状況の中で、憂鬱を慰めるためであった。²³⁹

その後、1598年には明将呉明済の『朝鮮詩選』の編纂作業に参加するようになった。呉明済は1597年日本が朝鮮を再侵略した時に派兵されたのである。前章で考察したように、当時許筠はその作業が朝鮮漢詩を明文壇に紹介する機会だと思い、諳んじていた数百篇もの朝鮮漢詩を呉明済に教えるなど、編纂作業に積極的に参加したのである。そしてこの経験を通じて、許筠は明文人たちに朝鮮漢詩を伝えることの価値をさらに認識したようである。従ってこれ以降の明使らとの交流でも、許筠は朝鮮文化を積極的に紹介するようになったのである。

次の重要な契機は、1606年に朝鮮を訪問した明使朱之蕃との出会いである。第一部で考察したように、朱之蕃の朝鮮訪問は明と朝鮮の文化交流

²³⁹ 許筠「鶴山樵談」：今遭亂世、世念已灰、欲十年讀書、而嗟亦晚矣。作鶴山樵談一部。今天子即位之二十一載、歲在黑蛇陽月、燃燈後三日、蛟山子書。

史上で重要な意味を持っているが、許筠個人にも大きな影響を与えたものであった。当時許筠は数ヶ月にわたって朱之蕃を身近に接待しながら、明文壇に関するさまざまな情報を聞いたり、また朝鮮漢詩に関する朱之蕃の批評を聞いたりしたのである。当時明文壇で文名が高かった朱之蕃は、朝鮮の詩や書画に大きい関心を見せ、高い評価を下した。それは許筠に朝鮮文化を再評価する一つの客観的な基準を提供し、また漠然と意識していた朝鮮文化の優れた点を確認するきっかけにもなったのである。

＊ 許筠 『惺所覆瓿稿』 卷18「丙午紀行」

初六日、留開城。宴散、上使招余評本国人詩曰、孤雲詩似粗弱、李仁老洪侃最好矣。李崇仁嗚呼島、金宗直金剛日出、魚無跡流民歎最好。李達詩諸体、酷似大復、而家數不大也。盧守愼強力宏蕃、比兪州稍固執、而五律深得杜法。李穡諸詩、皆不逮浮碧樓作也。吾達夜燃燭看之、貴国詩大概響亮可貴矣。因高詠李達漫浪歌、擊節以賞。

二十九日、經嘉山抵定州。夕、兩使求石峯書。余適有玉樓文二件、分進之。上使曰、楷法甚妙、真卿上子敬下也。松雪・衡山、似不及焉。又欲得真本、不得已以長門賦進之。

6日、開城に泊まった。宴会が終わってから、上使が私を呼んで我が国の詩人の詩を評して言った。「崔致遠の詩は、粗くて力が弱いようだ。李仁老や洪侃の作品が最も良いね。李崇仁の「嗚呼島」、金宗直の「金剛日出」、魚無跡の「流民歎」も最も良かった。李達のいろいろな詩体の作品は、何景明ととても似ているが、風格が大きくない。盧守愼は力強く豊かで、王世貞に比べ少し固いが、五言律詩は杜甫の詩法を深く会得している。李穡の多くの詩は、皆「浮碧樓」に及ばない。私は一晩中火を灯してこれを読んだが、貴国の詩は概して響きがあきらかで、尊ぶべきものだ。」それから李達の「漫浪歌」を朗読し、拍子を取りながら誉めた。

29日、嘉山を経て定州に着いた。夕方に、兩使[朱之蕃・梁有年]が石峯の書道作品を求めた。私はたまたま「玉樓文」を二つ持っていたので、一つずつさしあげた。上使が言うに、「楷書がとてもすば

らしい。顔真卿の上、王献之の下である。趙孟頫と文徵明も及ばないようだ。」また真本を求められたので、しかたなく「長門賦」をさしあげた。

引用文に表れているように、歴代中国のすぐれた文人たちを比較対象にしてその優劣を判別する朱之蕃の評価は、許筠に朝鮮の詩や書画を評価するための一つの客観的基準を提供することになった。またこのように朝鮮の詩や書画を中国のものとは比べる姿を見て、許筠は朝鮮文化も中国文化の伝統の中でともに評価される資格を持つと認識するようになった。即ち、朝鮮の詩文が中国の詩文と同一線上で論じられる水準に達したこと、朝鮮の詩や書画も明のものと同様に、中国文化の伝統の中に位置しうることを確認したようである。

それに止まらず、朱之蕃と梁有年は朝鮮を単なる蛮夷国家と見なさず、文化面では中国の一部として認識する態度を見せているが、それも許筠にさらに文化的自信を植えつけることとなった。

* 許筠『惺所覆瓿稿』卷18「丙午紀行」

四月初一日、上使曰、道上館駅壁板、何無貴国作乎。余曰、詔使所經、不敢以陋詩塵覽、故例去之。上使笑曰、国雖分華夷、詩豈有内外。況今天下一家、四海皆兄弟。俺與君俱落地為天子臣庶、詎可以生於中国自誇乎。近見貴国士大夫、礼貌閑雅、文彩都秀、使入仕於天朝、則豈遽下於吾輩耶。

4月1日、上使が言われた。「道中の館駅の壁板に、どうして貴国の人で作った詩文がないのか。」私は言った。「詔使のお通りになるところで、拙い詩をお目につけないよう、いつも片付けております。」上使が笑って言うに、「国には華夷の区別があるが、詩にどうして内外があろうか。まして今は天下が一家であり、四海が皆兄弟である。僕も君も皆天子の民として生まれたのに、どうして中国で生まれたことを自ら誇れようか。このごろ貴国の士大夫を見ると、礼貌が閑雅であり、文章が皆優れていて、中国の朝廷で官吏にさせたら、私

たちに劣るはずもない。」

＊ 許筠『惺所覆瓿稿』卷13「使東方録跋」

黄門還朝、編其奉使所作、附以東人和章、題曰使東方録。因節使回致于弊邑、不佞亦得其一焉。以鄙俚之言、托此而伝耀於天下。使海内操談芸者、知海外有許筠端甫者、豈非至幸歟。其曰東方而不称朝鮮者、蓋親之至也。

梁有年が朝廷に帰ってから、使行中に作ったものを編纂し、朝鮮文人と酬唱したものを付け加えて、「使東方録」と題した。節使を通じて我が国に返して来られたので、私もその一冊を入手したのである。私の卑俗な作品が、この本によって天下に伝わり輝くようになった。海内[中国]の文章を作り文芸を語る文人たちに、海外に許筠という者がいると知らせたのは、無上の幸いではないか。「東方」と言い「朝鮮」と呼ばなかったのは、おそらく最高の親しみの表れだろう。

引用文によると、朱之蕃は地理的には「華」と「夷」という区別があっても、詩文にそのような区別はないと言って、朝鮮の漢詩文を高く評価している。また、梁有年も「朝鮮」を「東方」と呼び、「中国の一部」として認識する態度を見せている。前章でも考察したとおり、当時明文人たちは朝鮮に入って直接朝鮮漢詩の実態を目にし、予想以上に優れた詩文の存在に驚いて、しきりにそれを集めたりした。特に彼らは朝鮮の文化について、周代に朝鮮に封ぜられた「箕子の遺風」と言い、「中華文明の延長」としての朝鮮の文化を高く評価している。このような態度は当時、朝鮮文化に対する許筠の自負心に重要な根拠を提供することになった。

以上で考察したように、16世紀後半に起こった戦争と1606年の朱之蕃の朝鮮訪問は、許筠の文学活動にとって大きな転換点になった。特に朝鮮の漢詩文に強い関心を見せた明将や明使の要請で、何度も朝鮮詩選集編纂に参加するようになり、許筠は本格的に朝鮮漢詩選集の必要性を感じ始めたようである。それにはもう一つの理由として、戦乱以降大部分の朝鮮漢

詩が失われたため、それを集めて整理する必要性が生じたということもあった。そこでいよいよ朱之蕃と出会った翌年、1607年に、許筠は朝鮮初期から同時代に至るまでの漢詩を集め『国朝詩刪』という詩選集を編纂する。またそれとともに、朝鮮漢詩に関する逸話や批評などを集めた詩話集も編纂するようになる。では次節からは、この詩選集と詩話集が持つ意味について考察することにする。

2) 『国朝詩刪』と『惺叟詩話』編纂の意味

まず許筠が編纂した朝鮮漢詩選集である『国朝詩刪』の書誌情報を整理しておきたい。許筠は逆謀に問われ処刑されたので、朝鮮王朝の最後まで、彼の文集と彼が編纂した詩文選集は正式に出版できず、大部分が筆写本の形でのみ伝わることになった。しかし『国朝詩刪』だけは、許筠が死んでから80年後、1697年に廣州府尹朴泰淳によって木版本(9巻3冊)で出版され、その刊本が朝鮮文壇で広く流通したのである。またその最後には権輶が許筠一家の人物の詩を選んで編んだ「許門世藁」も付録されている。ただし、この書物は許筠が編纂した原本に基づくものではなく、朴泰淳の時代まで伝わった多くの写本を集めて考証・校訂し、さまざまな詩話書を参考に補充して作ったものであり、²⁴⁰許筠が実際に作ったものをそのまま反映しているとは言えない。

ところが、最近「蛟山」という許筠の蔵書印が押され、許筠の手摺本と推定される筆写本(9巻3冊)が梨花女子大学図書館で発見され、『国朝詩刪』原本の形態を窺うことができるようになった。²⁴¹この本には珍しく筆写者の情報まで書かれており、それによれば、筆写者は当時最高の宮廷写字官であった李海龍・宋孝南・李希哲・申汝擢・李景良・李裕生らであった。李海龍は1606年明使朱之蕃を接伴する時、許筠と同行した人物であ

²⁴⁰ 朴泰淳『国朝詩刪』『国朝詩刪序』：於是、広求諸本、頗加証定、又取諸家詩話、以類補綴、繕写為幾卷。

²⁴¹ これに関する詳しい書誌情報及び解説は「朴徹庠(2007)」参照。

り、許筠と個人的親交を結んでいた人物でもある。²⁴²

先の木版本とこの筆写本の大きな相異点は、詩体の配列順序が異なることである。『国朝詩刪』は詩体別に分類・配列されているが、木版本『国朝詩刪』では「絶句-律詩-排律-古詩-雑体詩」の順、筆写本では「古詩-雑体詩-律詩-排律-絶句」の順に収録されている。この違いは、許筠の時代と木版本刊行者朴泰淳の時代との詩選集スタイルの違いによるものと思われる。即ち許筠の時代には古詩を先、絶句を後にする形の詩選集が普通であったが、朴泰淳の時代には絶句が先で古詩が後に来るのが一般的だったのである。²⁴³他にも作家数・作品数・作者の表記などで相異点が見られ、今後の緻密な比較が必要だろうが、本稿ではまず配列順序の相異点だけに注目することにする。

では『国朝詩刪』の題文を中心に、この詩選集の編纂経緯について考察する。

＊ 許筠『惺所覆瓿稿』卷13「題詩刪後」

選東詩者六家、即前後風雅・文選及詩賦・選詩是已。諸公皆鉅公或多士、其哀集初亦費心。以余之薄識淺見、會衆説而去就之、宜其刪之勞也。雖然、有不合而棄之滄海、或歎其遺珠也。至於不合度而進之者、則無有焉、庶免魚目相混之誚也、刪之毋曰狹焉。為卷凡十、而篇凡千、足以盡之也。

東方の詩を選抜した者は6人いる。即ち、『青丘風雅』・『続青丘風雅』・『東文選』・『続東文選』・『詩賦』・『選詩』がそれである。選者たちは皆高官や賢士であるが、その収集の初めは骨を折っただろう。私のような浅見薄識を以て、さまざまな説をまとめ、それを取捨選択するのは、その刪定に苦勞するのは無理もなかった。そうであっても、法道に合わず海中に捨てたものもあり、珠玉を取り残

²⁴² 「朴徹庠(2007)」(20～22頁)は、このように当代最高の筆写者たちが多数参加し、またその名前まで残していることからみて、『国朝詩刪』は許筠個人の興味で作ったものではなく、当時の明文人との交遊に伴う朝鮮詩選集の需要に応じて作られた、公的な性格の詩選集であった可能性も高いと主張している。

²⁴³ 「朴徹庠(2007)」(22～27頁)参照。

してしまったと嘆くこともある。しかし、法道に合わないのに載せたというものはないので、魚目が混ざっているという謗りは免れたものだ。選び方が狭いとは言わないでほしい。巻数は十巻、篇数は千篇になり、ここに尽くしたと言うに足るのである。

引用文によると、『国朝詩刪』は許筠以前に編纂された朝鮮の漢詩選集である『青丘風雅』・『続青丘風雅』・『東文選』・『続東文選』・『詩賦』・『選詩』²⁴⁴を参考にし、その中で許筠の詩文評価基準に合致するものを選出して作ったものである。特に、「国朝」と言う題名から窺えるように、自分の王朝である朝鮮の作品のみを対象にしていることが大きな特徴である。それは『青丘風雅』と『東文選』が新羅時代から朝鮮時代までの作品を網羅している点とも対比される。

ここでまず許筠が参照した歴代朝鮮詩選集について見ておく。²⁴⁵『青丘風雅』は1475年に、金宗直(1431～1492)が新羅の崔致遠から編者と同時代の作者まで、朝鮮文人の作品517篇を厳選して作った詩選集である。詩体別に分類され、「五言古詩-七言古詩-五言律詩-五言排律-七言律詩-七言排律-五言絶句-七言絶句」の順に作品が収録されている。この詩選集は特に孔子の「刪詩」精神に基づいて、儒家的世界観に忠実な人物の作品を中心に選別したと言われている。

次に『続青丘風雅』は17世紀初め柳根(1549～1627)が編纂したもので、7巻1冊の分量であり、題名に示されるように金宗直の『青丘風雅』以後、柳根の時代に至るまでの作品を選んで作ったものである。文学史で名高い詩人たちの作品が多く選ばれているのが特徴である。作品は「五言絶句-七言絶句-五言律詩-五言排律-七言律詩-五言古詩-七言古詩」の順で収録されている。

²⁴⁴ ここで『詩賦』・『選詩』が何を意味しているのかは、まだ確実な資料がない。

²⁴⁵ 歴代朝鮮漢詩選集に関する概括は『東文選』・『続東文選』『青丘風雅』の場合、「黄渭周(1997)」を、『続青丘風雅』・『海東詩賦選』・『国朝詩刪』は「李鍾黙(1997)」が参照される。また以上の詩選集の刊本は、本稿では『韓国漢詩選集』(亜細亜文化史、1983)に収録された刊本を基本テキストにしたのである。

続いて、『東文選』は 1478 年徐居正(1420～1488)が王命を受けて編纂した官撰詩文選集である。130 卷 45 冊に至る膨大な分量をもち、辞賦と詩選集、文選集から成り立っている。巻 4～22 までが詩選集であり、「五言古詩-七言古詩-五言律詩-五言排律-七言律詩-七言排律-五言絶句-七言絶句-六言詩」の順に作品が収録されている。『続東文選』も 1518 年申用漑と金詮が同じく王命を受けて作ったもので、題名に示されるように『東文選』の続編として作られたものである。計 23 卷 11 冊で、巻 3～10 までが詩選集である。『東文選』と同じく「古詩-律詩-排律-絶句」の順に作品を収録している。

上の詩選集に対する後代文人の評価は、1688 年に南龍翼が朝鮮詩選集『箕雅』を編纂した際の序文で、「『東文選』は幅広いが精密でなく、『続東文選』は載せた作品が少なく、『青丘風雅』は精密だが広くなく、『続青丘風雅』は何を取ったのか明確でない。近代の『国朝詩刪』は非常に詳細に見えるが、国初から宣祖までに終わったから、首尾がやはり完備されていないのである[東文選博而不精、続則所載無多、青丘風雅精而不博、続則所取不明。近代国朝詩刪頗似詳採、而起自国初、于宣廟朝、首尾亦欠完備]」と評価したことが最もそれぞれの特徴をよく現わしている。

以上で見たように、上の詩選集は許筠の時代まで伝わっていた代表的な官刻・私刻の詩選集である。許筠は前時代の詩選集を全て検討した上で、『国朝詩刪』を編纂した。ここで許筠が特に力を入れた作業は、詩の「選抜」にあった。第二部で許筠の中国漢詩選集編纂について考察した時、『国朝詩刪』という題の「詩刪」の意味について触れたことがある。そこで指摘したように、許筠は「選」と「刪」の意味を区別し、その基準は「尺度之長短」、即ち「法度の有無」にあると言っている。²⁴⁶許筠の関心は多くの作品を集めることではなく、既に良いと評価されている作品の中で「法度」に合うものを改めて選ぶことにあった。許筠はある作品を「選択」とすると

²⁴⁶ 許筠『惺所覆瓿藁』卷 13「題詩刪後」：詩刪者、非敢選也、乃刪諸家選也。許子任刪者、非主選者也。選者之功甚鉅而顧易、刪者則心甚勞焉。蓋採取諸家、不問尺度之長短、悉掇其華者、選者之易也。合諸選而校其長短厚薄、不問其華色、必令粹然合乎度、然後乃登諸策者、刪者之勞也。

いう行為を通じて、文学作品を自分なりの基準で「評価」しようとしている。

そして「題文」にも窺えるように、許筠は「至於不合度而進之者、則無有焉。庶免魚目相混之誚也」と言い、自己の選抜に対して非常に自信を持っていた。実際に『国朝詩刪』に対する後代の評価も、上の南龍翼の引用文や『国朝詩刪』の木版本を刊行した朴泰淳の「東人詩選、既未多有、而此為稱最、則其不可不伝也」という言及に窺えるように、他の詩選集と比べて、その「選抜の優越」を高く認めていたのである。

今まで見てきたように、許筠は当時の朝鮮文壇において中国文学に関する最高の専門家であった。彼は中国の歴代詩文を整理し研究しながら、詩に対する自分なりの明確な基準を立て、それに基づいて中国の詩文選集の再編纂も行ったのである。それに止まらず、この章では、許筠がその基準を持って、さらに朝鮮の漢詩も評価するようになったことがわかる。つまり詩選集の編纂作業を通じて、若い時に漠然と認識していた朝鮮漢詩の優秀性を、より「客観的」基準によって評価したのだと考えられる。そしてその過程で、朝鮮が少なくとも文化の面においては、中国、特に明代の文化と比べられる水準に至ったと確信するようになったのである。即ち『国朝詩刪』の編纂は、前節で論じた許筠の朝鮮漢詩に関する自負心から生まれたことだと言えるのである。

それに関わって、許筠が李攀龍の『古今詩刪』から大きな影響を受けたことに注目する必要がある。前章でも考察したように、許筠は李攀龍を含めた前後七子の詩論にかなり影響を受けており、彼の中国詩選集編纂作業には李攀龍の『古今詩刪』が重要な参照資料として使われていた。『古今詩刪』は李攀龍が歴代中国漢詩を自分なりの基準によって編纂した詩選集で、古代から漢・魏・南北朝、唐詩、そして宋元を省いて明代の詩を選抜したものである。既に見てきたように、許筠は朝鮮の漢詩が周官や孔子の採詩作業の対象にならなかったことを常に惜しんでいた。そのことを考えると、許筠の『国朝詩刪』編纂には、『古今詩刪』の最後である「明詩刪」の次に「朝鮮詩刪」を加え、『古今詩刪』を増補したいという思いも強くあったのではないか。即ち、朝鮮の漢詩を中国歴代の詩の伝統に位置

づけようという意志も、彼の『国朝詩刪』編纂の大きな動機の一つではなかったかと思われる。

そのような姿勢は 1611 年編纂した詩話書『惺叟詩話』にもよく窺える。1607 年の『国朝詩刪』の編纂に続いて、許筠は戦争中に朝鮮文人の詩文に関する記録が失われたことを惜しみ、残っている朝鮮詩文の批評、詩文創作の逸話などを集めて詩話書を編纂することにした。しかし編纂した書物が一度失われてしまい、それを基に 1611 年に改めて詩話集『惺叟詩話』を編纂することになる。次はこの詩話書の編纂経緯について書いたものである。

＊ 許筠『惺所覆瓿稿』巻 25 「惺叟詩話引」

我国自唐末以至今日、操觚為詩者殆數千家、而世遠代邈、堙沒不伝者、亦過其半。況經兵燹、載籍略盡、為後學者何從考其遺跡乎、深可慨已。不佞少習聞兄師之言、稍長任以文事、于今三十年矣。其所記覽、不可謂不富、而亦嘗妄有涇渭乎中。丁未歲、刪東詩訖、又著詩評。其於東人稍以詩見於伝記者、及所嘗耳聞目見者、悉博採并羅、無不雌黃而評驚之、凡二卷。其所品藻或乖大雅、而搜訪之殷、足備一代文献也。

我が国は唐末から今日に至るまで、筆を握って詩を作った人々は数千人もいるが、時代が遠ざかるにつれて、消え去って伝わらないものが、その半ばを超えている。その上戦乱を経てから、書籍がほとんどなくなってしまい、後学の者は何によってその跡をたどればいいのか、深く嘆くばかりである。私は幼くして兄や師の言葉を聞き習い、長じてからは文学に携わり、いまや 30 年になった。目を通し記憶してきたものは、多くないわけではないが、しかし中にはよいものも悪いものも区別がなかった。1607 年に東詩の刪定を終えて、さらに詩評を書いた。その東人の中で、詩によっていささか伝記の知られている者と、かつて直接見たり聞いたりした者を、ことごとく広く取って網羅し、校訂して評価を定めたものが、あわせて二巻になった。その品評は正しい規範に外れているかも知れない

が、収集の豊かさということでは、一代の文献を備えるに足りるだろう。

『惺叟詩話』の序文を参考に、許筠が朝鮮の詩選集と詩話集を編纂するようになった経緯を見ると、二つの目的が窺える。一つは戦争中に書籍が多く燃えたり掠奪されたりし、長年の歴史を持つ朝鮮の詩文が正しく伝わらなくなった状況を悲しみ、歴代朝鮮の漢詩を整理しようとしたことである。もう一つは自分の眼識で朝鮮詩文を評価し、朝鮮漢詩の水準を測定しようとしたことである。以上のような歴代朝鮮漢詩に対する「整理」と「評価」が、許筠の朝鮮漢詩選集と詩話集編纂の重要な目的になっている。

『惺叟詩話』は1593年に編纂された許筠の一番目の詩話集『鶴山樵談』の後、18年ぶりに編纂されたものである。その18年間、許筠は戦争を経験したり、明使行に参加したり、明使を接伴したり、さまざまな経験を経たので、『鶴山樵談』を作った25歳の時とはかなり文学観も変化したと思われる。実際に『惺叟詩話』には、それがよく表れている。『鶴山樵談』と『惺叟詩話』で最も目立つ相異点といえば、『鶴山樵談』で扱っている詩人は主に許筠当代の詩人であるのに対し、『惺叟詩話』では新羅時代から許筠の時代に至るまでの歴代朝鮮詩人たちを網羅し、朝鮮漢詩の歴史的流れを検討しようとしているところである。

また「批評の方式」においても大きな相異点がみられる。²⁴⁷『鶴山樵談』の場合、詩の風格や雰囲気を中心に許筠の主観的印象を語るなど、印象批評の性格が強いのである。それに比べて『惺叟詩話』の場合、作品の水準を論議するのに中国詩人の作品を引用するなど、より客観的な評価基準によって作品の優劣を論議しようとする態度が目立っている。以下は同じ作品に関する各詩選集の批評である。これらを通じてその相異をもっと具体的に考察してみたい。

²⁴⁷ 「朴守川(1995b)」がこの二つの詩話集の批評の様相を比較している。それによると『鶴山樵談』は素材と内容中心の逸話的詩話が大部分を占めているのに、「惺叟詩話」はより批評的性格が強化され、詩史の流れを考え、唐詩を批評準拠として使うなど、品評類詩話の比重が高くなっている点が特徴であると言う。

＊ 許筠『鶴山樵談』

長吟亭羅公湜、雄文直節、彪炳千載。孤舟宜早泊、風浪夜應多之句、前輩固已稱道之。其題画猿詩二絶、蓀谷推之、以為画中有画。詩曰、山猿擁馬乳、脚踏長長枝、收拾落來顆、誰分雄与雌。又曰、老猿失其群、落日枯查上、兀坐首不回、想聽千峰響。下詩尤奇。

羅湜は力強い文章とまっすぐな節操で、千年に輝いている。「孤舟よ早く泊まりなさい、夜には風浪が増すだろうから」という詩句は、前代の人々が既に誉めていたものである。彼の「題画猿」絶句二首は、李達が誉めて「画の中に画がある」とした。その詩に言う。

- ・ 山猿は葡萄を抱き、足で長い長い枝を踏む。

落ちてくる実を拾う時、誰にその雌雄がわかろうか。

また言うに、

- ・ 老猿はその群を失い、夕暮に枯れ枝の上にいる。

じっと座って振り向きもせず、千峰の響を聞こうとしている。

後者の詩が実に見事である。

＊ 許筠『惺所覆瓿稿』卷25「惺叟詩話」

羅長吟湜有詩趣、往往逼盛唐。申・鄭諸老會于人家、方詠葡萄画簇、沈吟未就。長吟乘醉而至、奪筆欲書簇上。主人欲止之、湖老曰、置之。長吟作二絶。其一曰、老猿失其群、落日枯查上。兀坐首不回、想聽千峯響。湖老大加稱賞、因閣筆不賦。蓀谷亦云此盛唐伊州歌法、所謂截一句、不得成篇者也。

羅湜には詩趣があり、しばしば盛唐に近づいている。申光漢・鄭士龍など老大家たちが、ある人の家に集まり、葡萄が描かれた掛け軸を詠むことになって、思いにふけり口ずさみながらまだできあがらなかった。そこに羅湜が酔った勢いで入ってきて、筆を奪って掛け軸に書こうとした。主人はそれを止めようとしたが、鄭士龍が「そのまま書かせなさい」と言った。羅湜は絶句二首を作った。その一つに、

老猿はその群を失い、夕暮に枯れ枝の上にいる。

じっと座って振り向きもせず、千峰の響を聞こうとしている。

と言う。鄭士龍は大いに誉めて、それで筆をおいて詩を作るのをやめた。李達もまた言った。これは盛唐の伊州歌の詩法である。いわゆる、一句を切り取ったら、全篇が成り立たないというものだ。

引用文は二つとも羅滄と彼の作品「題画猿」を評している。まず『鶴山樵談』では、羅滄について「雄文直節」と言い、また作品については「尤奇」と評価し、その特徴を直接的に敘述するに止まっている。それに対して『惺叟詩話』では、羅滄について「その詩趣が盛唐に近い」と言い、詩についても「盛唐の伊州歌詩法である」と李達の発言を引用するなど、「盛唐」という具体的比較対象を用いてその価値を説明している。より客観的基準で作品を評価しようとする態度がよく表れているのである。

『惺叟詩話』では「唐人の情趣がある」、「杜舍人[杜牧]の詩のようである」²⁴⁸「蘇軾のようである」「中唐の雅韻がある」、²⁴⁹「盛唐の風格がある」、「王維と孟浩然の詩に近い」²⁵⁰など、朝鮮の詩を評価するのに中国詩を比較対象として、その価値を明確にしようとする態度がよく見られる。この場合、特に「唐詩」がその主な評価基準になっているが、それはやはり唐詩を詩の典範と見なす許筠の復古的詩論によるものだと言える。

『鶴山樵談』と『惺叟詩話』にこのような相異が現れた理由としては、何よりこの 18 年間に、許筠の文学に関する知識が大きく向上したことが挙げられる。もとより許筠は読書を好み、中国文学について古代から明代

²⁴⁸ 許筠『惺所覆瓿稿』卷 25「惺叟詩話」：国初之業、鄭郊隱李双梅最善。鄭之二月将闌三月来、一年春色夢中回、千金尚未買佳節、酒熟誰家花正開之作、不減唐人情趣…双梅聞鸚詩曰、三十六宮春樹深、蛾眉夢覺午窓陰、玲瓏百轉凝愁聽、盡是香閨望幸心、酷似杜舍人。

²⁴⁹ 許筠『惺所覆瓿稿』卷 25「惺叟詩話」：曹梅溪俞播溪、一時俱有盛名、不若鄭淳夫。其渾沌酒歌甚好、酷似長公。如片月照心臨故国、殘星隨夢落边城之句、極神逸。而客裏偶逢寒食雨、夢中猶憶故園春、有中唐雅韻。

²⁵⁰ 許筠『惺所覆瓿稿』卷 25「惺叟詩話」：李忘軒冑詩最沈著、有盛唐風格…其通州詩曰、通州天下勝、樓觀出雲霄、市積金陵貨、江通楊子潮、寒煙秋落渚、独鶴暮歸遼、鞍馬身千里、登臨故国遥、亦咄咄逼王孟也。

に至るまで幅広い知識を持っていた。それに加えて頻繁な使行や接伴を通じて、当時の明文壇の情報も早く手に入れることができた。許筠はそれらの知識によって自分なりの文学評価基準を準備することができ、それを以て朝鮮漢詩も客観的に評価できるようになったのである。『惺叟詩話』で朝鮮漢詩を評価するのに、中国漢詩が一つの基準になっているのは、このような事情によるものである。

また、ここでさらに注目すべきことは、許筠がこのように中国漢詩と朝鮮漢詩を比較する中で、朝鮮漢詩がかなり高い水準に達していることを認識し始めたことである。

* 許筠『惺所覆瓿稿』巻25「惺叟詩話」

我朝詩、至中廟朝大成、以容齋相倡始、而朴訥齋祥・申企齋光漢・金冲庵淨・鄭湖陰士龍、竝生一世、炳烺鏗鏘、足稱千古也。我朝詩、至宣廟朝大備。盧蘇齋得杜法、而黃芝川代興、崔・白法唐而李益之闡其流。吾亡兄歌行似太白、姊氏詩恰入盛唐。其後權汝章晚出、力追前賢、可與容齋相肩隨之。猗歟盛哉。

我が国の詩は、中宗時代(1506～1544)に大成し、李荇を始めとして、朴祥・申光漢・金淨・鄭士龍がともに一代に生きて、その輝かしく鳴り響くさまは、千古に称えられるに足るものであった。私の時代の詩は、宣祖(1567～1608)の時に至って大いに備えられた。盧蘇齋が杜甫の詩法を得て、黄芝川がそれに継いで現れ、崔慶昌と白光勳が唐詩を規範とし、李益之がその流派を開いた。私の亡兄[許筠]の歌行は李白のようであり、姉[許蘭雪軒]の詩はまるで盛唐に入るようであった。その後に権汝章が出て、力を尽くして先達を追い、李荇相公と互いに肩を並べるようになった。ああ、すばらしいことだ。

引用文によると、許筠は唐詩を基準において朝鮮漢詩の水準がどこに達しているかを評価している。中国文学史の流れの中で朝鮮漢詩の位置を確認し、その結果、朝鮮漢詩が唐詩の比較対象になりうるだけの水準に至

ったと自信を得られたのである。そしてそのような認識に基づいて、中国の詩文だけではなく朝鮮の漢詩も本格的な「批評の対象」として認識することができたのである。

このように朝鮮漢詩の価値を模索する態度は、朝鮮文壇の流れで注目すべきものである。今までの研究によると、許筠が活動した17世紀初は、「朝鮮漢詩の独自性」という認識がまだ本格的に登場していない時期だったと言われている。朝鮮の漢詩における「朝鮮的」特徴の追求は、17世紀後半に至ってやっとその兆しが現れ、18世紀に頂点を迎えたとされる。16世紀末から17世紀初に至る時期は、むしろ最も活発に中国文学の受容が行われた時期と言われる。特にこの時期は前後七子の文学論が朝鮮文壇でも流行し、その影響で盛唐詩や秦漢古文を模擬、剽窃する傾向が強かったと批判されるのである。

しかし今まで許筠の例を通じて考察したところでは、当時明との文学交流を通じて中国文学を受容したことが、一方では朝鮮漢詩に対する関心を触発し、そこから朝鮮漢詩の価値を再確認するきっかけとして作用したことが窺えるのである。このような観点から見ると、後の17世紀後半になって朝鮮漢詩の独自の個性が追求されるようになった背景には、以上のように朝鮮の漢詩文を中国漢詩文と対等に比較して位置づけ、その価値を探った許筠の先駆的作業があったとも言えるだろう。朝鮮文壇において17世紀初明との文学交流と明文学受容が持つ窮極的な意味は、このような朝鮮漢詩の再発見、再評価であったとも言えるだろう。

* 結びに

本論文は 17 世紀前半における明と朝鮮の文学交流活動を考察し、その活動が以後朝鮮漢文学の発達に及ぼした影響について考察することを目的にしたものである。特にその方法において三つのことを考慮した。まず当時使者として活動した人物たちの「外交」と「文学交流」の活動を共に分析することで、それらの具体的関係についてうかがうことにした。続いては両国文人たちが相手の国の詩文選集を求め、その上詩選集編纂作業を行ったことについて考察し、文学交流と受容の具体的な様相を確認した。最後に 18 世紀江戸文壇の中国文学受容の様相と朝鮮の状況を比べ、両国の共通点と差異を分析しながら、東アジア文学史全体の構図の中で三国の文化交流現象が持つ意味を探ろうとしたのである。

その結果、この時期の明と朝鮮との文学交流が一方的な文化の伝播と受容ではなく、互いの文学に対する関心に基づいて進行した「双方向的」交流であったことを確認した。また朝鮮文壇の明文学受容も無条件的な受容ではなく、既存の朝鮮文壇の伝統に合わせて批判的かつ独自の方式で行われたものであることを明らかにしたのである。最終的には、以上の交流と受容によって朝鮮文人が朝鮮の漢詩を振り返り、その価値を改めて認識するようになったことを論じた。

以上のようなことを目指しながら、この論文では次のような順番で議論を進めた。まず全体を大きく分けると、第一部で 17 世紀前半に行われた明・朝鮮間の文学交流の具体的様相について、第二部で朝鮮文壇における明文学の批判的受容方式について、第三部で、それに基づいて現れた朝鮮漢詩に関する認識の変化について考察した。

さらに詳しく言うと、第一部では明と朝鮮の文人交遊と文学交流活動を主な対象として、当時の両国の文学交流活動の実態を考察することにした。第一章では、明文人らの朝鮮訪問によって朝鮮文人が彼らとの交遊の機会を得た接伴活動について考察した。使臣接伴活動については、17 世紀に入ってから 1602・1606・1609 年の三回にわたって明の文官出身使臣が派遣された歴史的事実に注目し、彼らの接伴中に行われた両国文人の交遊

と情報交換について考察した。それを通じて両国の交流が一方的な文化伝播や受容ではなく、相互の関心に基づいて双方向的に成り立っていたことを確認したのである。また接伴をきっかけに行われた両国文人たちの交流が、一回に止まらず、その後も数十年にわたって継続的に行われていたことを明らかにした。

次に第二章では、17世紀前半の朝鮮文人たちの明使行について考察し、中でも当代最高の文章家として認められていた李廷龜・許筠の明使行を扱った。まず、当時明との外交活動で最もその能力が認められていた李廷龜の使行について考察した。李廷龜の事例を通じて、文学活動と外交活動がどのように連動していたのかを考察することができた。続いて許筠の1614・1615年の二度にわたる使行を取り上げ、彼が数千巻に及ぶ明の新刊書籍を購入したことについて見た。それを通じて、情報の流通に直結する書籍の輸入が、明使行と不可分の関係にあったことを確認したのである。

引き続き第二部では、以上の交流活動を通じて朝鮮文壇に入って来た明文学がどのような方式で受容されたのかについて検討した。具体的な方法としては、詩文選集の批判的理解と再編纂作業、文学論の受容に関わる事例を選んで、文学史の流れの中でその事例が持つ意味を探った。また必要に応じて18世紀江戸文壇の状況と対比し、両国の明文学受容状況の差異を視野に入れようとした。それにより、各国の文壇状況に応じて明文学受容がそれぞれ異なる様相を見せていたことを、さらに明確に捉えることができたのである。

まず、第一章では許筠の漢詩批評作業を中心に、明代詩論、特に前後七子の詩論が朝鮮文人たちにどのように受容されたのかについて考察した。許筠は当時明文壇で流行していた前後七子の文学理論を涉獵する中で、ある程度はその影響を受けながらも、同時に朝鮮文壇の伝統を受け継いで明の文学理論から一定の距離を置いていた。また漢詩批評においても、自分なりの基準を持つことの大切さを非常に強調していた。このような許筠の事例を通じて、当時の朝鮮文人たちの明代文学論に対する批判的受容態度をうかがうことができた。

第二章では、17世紀前半の朝鮮文壇で中国の唐詩選集が流行し、つい

には朝鮮文人による独自の唐詩選集まで編纂された状況に注目し、中国の詩文選集が朝鮮にどのように受容されたのかについて考察した。ここでは許筠と李睟光の唐詩選集編纂作業を中心に、明代前後七子の盛唐詩尊崇の詩論に影響を受けながらも、朝鮮独自の唐詩評価基準が模索されていたことに注目したのである。このように批判的かつ独自の受容態度は、同じく前後七子の影響圏にあった江戸文人服部南郭が唐詩の学習書として李攀龍の『唐詩選』を選択し、以後 18 世紀江戸文壇で多様な形態の『唐詩選』和刻本が出版された事情と非常に対照的である。このような両国文壇における中国の唐詩選集受容、再編纂方式の相異点を分析することで、同一の書籍が各国の文学的環境において持つ特殊な意義について考察したのである。

最後に第三部では、第一部、第二部で考察した明との文学交流と明文学の批判的受容が、結果的に朝鮮漢詩への認識にどのような影響を与えたのかについて考察しようとした。それについては、まず朝鮮漢詩が明文壇に多数紹介されたこと、また朝鮮文壇で朝鮮漢詩整理作業が行われたことに注目した。

当時両国の活発な文学交流によって、明文壇に朝鮮漢詩が多数紹介された。この時期明文壇に紹介された朝鮮漢詩は、以後明清の詩選集編纂作業において「朝鮮」部分の重要な参考資料とされ、朝鮮漢詩を明文壇に知らしめる大きな役割を果たしたのである。本論文では許筠の朝鮮詩文紹介活動に注目して、自分の詩才を漢文学の本場に示そうとする朝鮮文人の積極性と、中華文明の周辺部への広がりに関心を持った明文人たちの好奇心があいまって、両国の文学交流が活発になっていたことを確認したのである。

ところが、朝鮮文人たちの積極的な詩文紹介活動は、その過程で明との外交的衝突が起きることを懸念した朝鮮政府により、制限を加えられることもあった。その一例として本論文では、1620 年に李廷龜が北京に行き、当地で自分の詩集を出版したために、朝鮮の朝廷内で騒動が巻き起こった事件に注目した。このように明との交流の過程で起きた朝鮮政府との軋轢を通じて、当時の文化交流が順調に進んだだけではなかったという状況も

確認できたのである。

次に、このような交流活動を通じて、17世紀前半の朝鮮文壇で漢詩評価に関する独自の基準が用意され、それに基づいて朝鮮漢詩を再評価しつつ、朝鮮漢詩選集と詩話集編纂作業が積極的に進められていった状況を考察した。それは明との文学交流が最終的に朝鮮漢詩の発達に与えた影響を論じることでもある。そしてこれによって明文壇との文学交流が、結局は朝鮮漢詩の再発見を生み出したという結論に至ったのである。

その具体的な事例として、戦乱後に政府事業として編纂された『海東詩賦選』、許筠が個人的に編纂した詩選集『国朝詩刪』と詩話集編纂の経緯について考察した。これらの作業の過程で、朝鮮漢詩に対する新しい自覚が生み出され、朝鮮漢詩の価値が再認識されていったことに注目したのである。すなわち、中国の詩論を批判的に受容する中で朝鮮文人なりの独自の漢詩評価基準が形成され、それに基づいて朝鮮漢詩を評価した時、その水準が漢詩の長い伝統の中でも堂々たる一員の資格をもつという自負心を抱くようになった。そしてそのような認識に基づいて、中国の詩文だけではなく朝鮮の漢詩も本格的な「批評の対象」とされるようになったということである。

要約すると、本論文は16世紀末の戦争をきっかけに活発化した明と朝鮮の文学交流の実態を具体的に考察し、以降明文学が朝鮮文壇で批判的に受容された方式を分析し、そのような交流と受容を通じて朝鮮漢詩への認識が変化した過程を追跡しようとしたものである。それは一見個別の事件のように見える文化現象が、相互に緊密な関連をもっていることを明らかにしたものであり、外来文化の受容と朝鮮独自の伝統がどのように影響しあって、以後の文壇に新しいものを生み出していったのかを検証したものである。これはまた17世紀後半以降の朝鮮文壇に現れた個性追求の動きに、前時代の明文学受容、朝鮮漢詩の再発見が密接に関連していることを明らかにしたものであり、17世紀前半と17世紀後半以後の詩壇を相反するものとして捉える先行研究の態度に対し、新しい観点を提示するものである。

「引用文獻目錄」

1. 原典資料

1) 韓國

- 金尚憲『清陰集』、『韓國文集叢刊』77、民族文化推進黨。
- 金中清「朝天錄」、『燕行錄全集』卷11、東國大學校出版部、2001年。
- 金昌協『農巖集』、『韓國文集叢刊』161-2、民族文化推進黨。
- 南龍翼「壺谷詩話」、『詩話叢林』卷4、亞細亞文化社、1973年。
- 柳根『西垞集』、『韓國文集叢刊』57、民族文化推進黨。
- 李書九「蘆山筆彙」、奎章閣所藏本(一簣古 920. 051-Y63g)
- 李晬光『芝峯集』、『韓國文集叢刊』66、民族文化推進黨。
- 李晬光『芝峰類說』、乙酉文化社、1994年。
- 李植『澤堂集』、『韓國文集叢刊』88、民族文化推進黨。
- 李宜顯『陶谷集』、『韓國文集叢刊』180-1、民族文化推進黨。
- 李廷龜『月沙集』、『韓國文集叢刊』69-70、民族文化推進黨。
- 李廷龜『月沙集』、景文社、1982年。
- 李廷龜『月沙集』 初刊本、奎章閣所藏本(奎 4673)
- 李廷龜『月沙集』 重刊本、奎章閣所藏本(「奎 5318」)
- 李廷龜『東槎集』、奎章閣所藏本(「古 3441-25 v. 1-2」)
- 申欽『象村稿』、『韓國文集叢刊』71-72、民族文化推進黨。
- 張維『谿谷集』、『韓國文集叢刊』92、民族文化推進黨。
- 許筠「閑情錄」、『許筠全集』、成均館大學校大東文化研究院、1972。
- 許筠、「鶴山樵談」、『許筠全集』、成均館大學校大東文化研究院、1972。
- 許筠、『許筠全集』、成均館大學校大東文化研究院、1972。
- 許筠、『惺所覆瓿藁』、『韓國文集叢刊』74、民族文化推進黨。
- 許筠、「乙丙朝天錄」、國立中央圖書館所藏本(「韓古朝63-38」)。
- 許筠著·崔康賢譯、『國譯乙丙朝天錄』、國立中央圖書館、2005。
- 許蘭雪軒『蘭雪軒集』、『韓國文集叢刊』67、民族文化推進黨。

姜哲中外譯、『朝鮮時代の漢詩[國朝詩刪]』、文獻と解釋社、1999。
許筠『國朝詩刪』筆寫本、梨花女子大學校圖書館所藏本。
許筠『國朝詩刪』木版本、奎章閣所藏本(「想白古 811.5-H41g-v.1-3」)
許穆『記言』、『韓國文集叢刊』98-99、民族文化推進會。
尹國馨「甲辰漫錄」、『大東野乘』、民族文化推進會、1971-75
李裕元『林下筆記』、民族文化推進會、1999-
韓致齋『海東釋史』、民族文化推進會、1996-
國立文化財研究所編、『海外典籍文化財調査目録:日本天理大學天理圖書館所藏韓國本』、國立文化財研究所、2005。
『韓國漢詩選集』、亞細亞文化社、1980。
『奎章閣所藏文集解説』、ソウル大學校奎章閣、2005。
『皇華集』、奎章閣所藏本。
『朝鮮王朝實錄』CD-ROM、ソウルシステム、1997。

2) 日本及び中國

司馬遷『史記』、中華書局、1992。
楊士弘『唐音』、影印文淵閣四庫全書本。
高棅『唐詩品彙』、影印文淵閣四庫全書本。
胡應麟『詩藪』
李夢陽『空同集』、影印文淵閣四庫全書本。
王世貞『弇州四部稿』、影印文淵閣四庫全書本。
王世貞『弇州山人續稿』、影印文淵閣四庫全書本。
李攀龍『古今詩刪』、影印文淵閣四庫全書本。
李攀龍『唐詩選』
茅坤『茅鹿門先生文集』、影印文淵閣四庫全書本。
錢謙益『列朝詩集小伝』、上海:古典文學出版社、1957。
朱之蕃「奉使朝鮮稿」、『使朝鮮錄』(殷夢霞・于浩選編、北京圖書館出版社、2003)
殷夢霞・于浩選編『使朝鮮錄』、北京:北京圖書館出版社、2003。

伍袁萃『林居漫錄』、『統修四庫全書』1172冊、上海：上海古籍出版社、1995。

服部南郭・日野龍夫校註、『唐詩選國字解』総三冊、東京：平凡社、1982。

服部南郭辨・林元圭閱、『唐詩選國字解』、江戸書肆崇山房本。

吳明濟編・祁慶富校註、『朝鮮詩選校註』、遼寧民族出版社、1999。

林基中・夫馬進編『燕行録全集日本所蔵編』、ソウル：東國大學校韓国文學研究所、2001。

『明代文論選』、中國：人民文學出版社、1993。

『明使』、中華書局

『文淵閣四庫全書-電子版』CD-ROM、北京書同文數字化技術有限公司。

2. 研究論著

1) 韓國

姜明官(1995)：「16世紀末17世紀初擬古文派의受容과秦漢古文派의成立」、
『韓國漢文學研究』18、韓國漢文學會

(『안쪽과바깥쪽[內側と外側]』(2007)、9～26頁再収録)

姜明官(1998)：「許筠과明代文學」、『民族文學史研究』13、民族文學史學會
(『안쪽과바깥쪽[內側と外側]』(2007)、65～96頁再収録)

姜明官(2002)：「16世紀末17世紀初秦漢古文派의散文批評論」、『大東文化研究』41、大東文化研究院
(『안쪽과바깥쪽[內側と外側]』(2007)、27～64頁再収録)

姜明官(2003)：「澤堂李植漢文批評의再檢討」、『漢文學報』38(『안쪽과바깥쪽[內側と外側]』(2007)、135～166頁再収録)

姜明官(2005)：「許筠「文說」의새로운解釋」(『韓國漢文學研究의새地坪』、소명出版
(『안쪽과바깥쪽[內側と外側]』(2007)、97～132頁再収録)

姜明官(2007)：『안쪽과바깥쪽[內側と外側]』、太學社、総324頁。

姜哲中外譯(1999)：「許筠과『國朝詩刪』」、『朝鮮時代の漢詩』卷1、文獻과解釋社、9～24頁。

- 啓スンバン(2008)：「恭嬪追崇過程斗光海君의母后問題」、『民族文化研究』48、民族文化研究院、373～406頁。
- 高ヨンジン(1994)：「16世紀後半～17世紀前半서울枕流臺學士의活動斗그意義」、『ソウル学研究』3、ソウル學研究所、137～161頁。
- 祇慶富(2002)：「『朝鮮詩選』이中韓文化交流에미친影響」、『亞細亞文化研究』6、亞細亞文化研究所、67～84頁。
- 金暻綠(2000)：「朝鮮初期對明外交斗外交節次」、『韓國史論』44、1～54頁。
- 金暻綠(2004)：「朝鮮時代使臣接待斗迎接都監」、『韓國學報』117、73～120頁。
- 金暻綠(2006)：「朝鮮時代使行斗使行記錄」、『韓國文化』138、193～230頁。
- 金成南(2002)：『許蘭雪軒詩研究』、太學社、總271頁。
- 金榮眞(2005)：「朝鮮後期中國使行斗書冊文化」、『燕行의社會史』、京畿文化財團、237～290頁。
- 金學主(2000)：『朝鮮時代刊行中國文學關係書研究』、ソウル大出版部、總298頁。
- 金弘大(2004)：「朱之蕃의丙午使行斗그의書画研究」、『温知論叢』11、温知學會、257～304頁。
- 盧京姬(2002)：「月沙李廷龜漢詩研究」、『韓國漢詩作家研究』8、韓國漢詩學會、307～314頁。
- 朴守川(1995a)：「『芝峰類說』「文章部」의批評様相研究」、太學社、總267頁。
- 朴守川(1995b)：「許筠의詩話批評研究：「鶴山樵談」斗「惺叟詩話」의比較」、『韓國漢詩研究』3、韓國漢詩學會、231～252頁。
- 朴撤庠(2002)：「壬辰倭亂斗藏書印의普及」、『文獻斗解釋』、文獻斗解釋社、41～52頁。
- 朴撤庠(2007)：「許筠手定稿本『國朝詩刪』의出現斗그價值」、『韓國文化研究』12、梨花女大韓國文化研究院、7～40頁。
- 朴現圭(1998)：『中國明末清初人朝鮮詩選集研究』、太學社、總206頁。

- 朴現圭(2005)：「許筠이導入한李贄의著書」、『中國語文學』46、嶺南中國語文學會、303～322頁。
- 朴現圭(2006)：「千秋使行時期許筠의文獻關聯活動」、『東方學誌』134、延世大國學研究院、261～268頁。
- ブユサブ(2004a)：「許筠이 뽑은中國詩(1)『唐絶選刪』」、『文献과 해석』27、文献과 해석社、243～268頁。
- ブユサブ(2004b)：「許筠이 뽑은中國詩(2)『荊公二體詩鈔』」、『文献과 해석』28、文献과 해석社、239～256頁。
- 辛承云(1989)：「閑情録解題」、『國譯惺所覆瓿藁』5、民族文化推進會、1～13頁。
- 申太永(2005)：『皇華集研究』、다운샘、總308頁。
- 沈慶昊(1999)：『朝鮮時代漢文學과詩經論』、一志社、總668頁。
- 安ナミ(2007)：「月沙李廷龜의燕行詩一考察」、『漢文學報』17、ウリ漢文学会、359～389頁。
- 安大會(1999)：『18世紀韓國漢詩史研究』、소명出版、總397頁。
- 楊雨蕾(2007)：「李廷龜의詩文을 통해서 본明代中韓文化交流」、『東方學誌』、延世大國學研究院、315～346頁。
- 柳ミナ(2005)：「朝鮮中期吳派画風の伝來—『千古最盛帖』을中心으로」、『美術史學研究』245、韓國美術史学会、73～116頁。
- 李サンベ(2006)：「朝鮮前期外國使臣接待와明使의遊觀研究」、『燕行録研究叢書』7、學古房、413～428頁。
- 李迎春(1998)：「朝鮮後期王位繼承研究」、集文堂、128～131頁。
- 李元淳(1983)：「赴京使行의文化史的意義」、『史學研究』36、135～155頁。
- 李存熙(1980)：「朝鮮前期의對明書冊貿易-輸入面을中心으로」、『震檀學報』44、震檀學會、53～78頁。
- 李鍾默(1995)：『海東江西詩派研究』、太學社、總418頁。
- 李鍾默(1997)：「朝鮮中期의漢詩選集」、『精神文化研究』68、藏書閣、62～89頁。
- 李鍾默(2002)：『韓國漢詩의傳統과文藝美』、太學社、總556頁。

- 李鍾默(2007) : 「バクレイ大学本藍芳威의 『朝鮮詩選全集』에 대하여」、
『文獻과解釋』 39、文獻과解釋社、201~239頁。
- 李鍾默(2009) : 「17~8世紀中国에 전해진朝鮮漢詩」、『韓國文化』 45、
15~49頁。
- 李喜中(1996) : 「朝鮮中期西人系文章家의活動과古文論의展開」、
『韓國史論』 35、ソウル大國史學科、71~132頁。
- 林基中(2002) : 『燕行錄研究』、一志社、総436頁。
- 全海宗(1970) : 『韓中關係史研究』、一潮閣、総268頁。
- 鄭 珉(1999) : 『穆陵文壇과石洲權輶』、太學社、総776頁。
- 曹永録(1990) : 「鮮初의朝鮮出身明使考」、『国史觀論叢』 14、国史編纂
委員会、108~111頁。
- 崔完秀外(1998) : 『眞景時代』 卷1、돌베개。
- 韓明基(1997) : 「17世紀初明使의서울訪問研究」、『ソウル學研究』 8、33
~55頁。
- 韓明基(1999) : 『壬辰倭亂과韓中關係』、歴史批評社、総449頁。
- 黄渭周(1998) : 「朝鮮前期의漢詩選集」、『精神文化研究』 68、藏書閣、
35~68頁。

2) 日本及び中國

- 郭紹虞(1988) : 『中國文學批評史』、台北：文史哲出版社、611~671頁。
- 袁震宇・劉明今(1991) : 『明代文學批評史』、上海：上海古籍出版社、総
320頁。
- 鄭利華(2002) : 『王世貞研究』、中國：學林出版社、148~165頁。
- 鄭利華(1993) : 『王世貞年譜』、上海：復旦大學出版部、総2354頁。
- 孫琴安(2005) : 『唐詩選本提要』、上海：上海書店出版社、総514頁。
- 孫春青(2006) : 『明代唐詩學』、上海：上海古籍出版社、総296頁。
- 陳國球(1990) : 『唐詩的傳承—明代復古詩論研究』、台灣：臺灣學生書局、
総357頁。
- 陳伯海(2004) : 『唐詩學史稿』、中國：河北人民出版社、総829頁。

- 查清華(2006)：『明代唐詩接受史』、上海：上海古籍出版社、総332頁。
- 金生奎(2007)：『明代唐詩選本研究』、合肥工業大學出版社、228頁。
- 廖可斌(1994)：『明代文学復古運動研究』、上海：上海古籍出版社、総431頁。
- 松浦章(2002)：『明清時代中國與朝鮮的交流』、臺北：樂學書局、総327頁。
- 張徳信(2002)：「朝天録史證」、『明清時代中國與朝鮮的交流(松浦章編)』、臺北：樂學書局、171～308頁。
- 平野彦次郎(1974)：『唐詩選研究』、東京：明德出版社、総601頁。
- 日野龍夫(1975)：『古文辭派-儒学から文学へ』、東京：筑摩書房、総223頁。
- 日野龍夫(1982)：「解説」、『唐詩選國字解』 1、東京：平凡社、1～32頁。
- 船津富彦(1993)：『明清文學論』、東京：汲古選書、総307頁。
- 藍弘岳(2007)：「徳川前期における明代古文辭派の受容と荻生徂徠の古文辭学」、『日本漢文學研究』3、東京：二松学舎大学21世紀COEプログラム、47～82頁。
- 夫馬進(2008)：『燕行使と通信使』ソウル：新書苑、総528頁。
- 松下忠(1969)：『江戸時代の詩風詩論：明清の詩論とその摂取』、東京：明治書院、総1146頁

韓國文要約

본 研究는 17세기 전반의 明과 朝鮮의 문학교류 활동을 구체적으로 살피고, 그 활동이 이후 조선 한문학의 발달에 끼친 영향을 고찰하는 것을 목적으로 하였다. 본고에서는 특히 이 세 가지 사항이 서로 유기적으로 연결되고 있음에 주목하여, 그 관계성을 밝히는데 집중하였다. 그 결과 이 시기 韓中 문학교류가 한 국가의 일방적인 문화 전달과 수용이 아닌, 서로의 문학에 관심을 갖고 진행된 쌍방적인 교류임을 확인하였으며, 조선문단의 명문학 수용 또한 무조건적인 수용이 아닌 기존의 조선문단의 전통과 맞물려 비판적이고 독자적인 방식으로 이루어졌음을 밝히었다. 궁극적으로는 이상의 교류와 수용을 통하여 조선문인들이 조선의 한시를 다시 돌아보고, 그 가치를 재평가하게 된 결과로 이어졌음을 논의하였다.

이때 그러한 결론을 도출하기 위한 방법으로 먼저 양국 간의 문학교류와 관련한 문인교유 활동 및 교류의 경로 등 문학 주변부의 사항에 주목하여, 당시 한중 문화 교류의 구체적 실상을 파악하고자 하였다. 또한 명문학 수용과 관련하여 서적의 유입과 번각, 재판찬 과정을 추적하여 명문학이 조선문단에서 비판적 관점으로 취사선택이 이루어지는 모습과 조선한시가 새롭게 인식되는 모습을 살피었다.

본고는 다음과 같은 순서로 논의를 진행하였다. 먼저 1부에서는 使行과 接伴 활동을 중심으로 17세기 전반기 명과 조선 문인 간의 교유와 그를 통해 이루어진 문학교류의 구체적인 경로와 활동을 살피었다.

1장에서는 명나라 문인들이 조선을 방문하여 조선 문인들과 교유할 기회를 제공하였던 明使 접반 활동을 고찰하였다. 특히 17세기초에 들어와 1602년·1606년·1609년 세 차례에 걸쳐 문관 출신 사신들이 파견된 사실에 주목하여, 이들의 접반 활동 중에 일어난 양국 문인의 교유와 정보 교환 활동 등을 살피었다. 다음으로 2장에서는 당시 최고의 문장가로 인정받고 있던 李廷龜과 許筠의 활동을 중심으로 17세기초 조선문인들의 明使行에 대해 살피었다. 이정구의 사례를

통해서 문학교류활동과 외교활동이 서로 어떻게 영향을 끼치고 있는지 살피었으며, 허균의 사행을 통해서도 정보의 유통과 직결되는 서적의 수입이 使行과 불가분의 관계에 있음을 확인할 수 있었다.

이어 2부에서는 이상의 교류 활동을 통해 조선 문단에 들어온 명대 문학이 어떤 방식으로 수용되었는지에 대해 주목하였다. 특히 그 수용 방식에 있어 조선 문단의 비판적이고 독자적인 태도에 주목하여 그 의미를 고찰하였다. 시문선집의 비평적 이해와 재판찬 작업, 詩文論의 수용과 관련한 사례들을 뽑아 그 구체적 양상을 살피고, 전체 문학사의 구도에서 이러한 개별 사례들이 지니는 의미를 찾고자 하였다.

먼저 1장에서는 허균의 역대 중국시선집 재판찬 작업을 중심으로 중국의 시선집이 조선에 수용된 방식을 살피었다. 이를 통해 당시 조선문인들의 중국 서적에 대한 비판적 독서 태도의 일면을 살필 수 있었다. 2장에서는 17세기 전반 조선문단에서 중국의 唐詩選集이 널리 읽히고 조선문인들의 독자적 唐詩選集이 편찬된 상황에 주목하여, 명대 詩論이 조선에 수용된 양상의 일면을 살피었다. 이는 특히 18세기 에도 문단의 상황과 비교하여, 양국의 명대 문학 수용 양상의 특징을 함께 보이고자 하였다.

마지막으로 3부에서는 1부와 2부에서 고찰한 명과의 문학교류와 명문학의 비판적 수용이 조선한시에 대한 인식에 어떠한 영향을 끼쳤는지에 대해 살피었다. 이를 위해 조선한시가 명문단에 대거 소개된 일과, 조선문단에서 조선한시 정리 작업이 이루어진 일에 주목하였다.

당시 양국 간의 활발한 교류를 통해 명문단에 조선한시가 대거 소개되었다. 이 시기 소개된 조선한시는 이후 明清의 詩選集 편찬 작업에서 「朝鮮」 부분의 중요한 참고자료로 쓰이는 등, 중국 문단에 조선한시를 알리는데 큰 역할을 하였다. 본고에서는 특히 허균의 조선한시 소개 활동에 주목하여, 양국 문인 간의 활발한 문학교류 활동에 대해 살필 수 있었다.

그러나 갑작스러운 교류 활동의 확대로 인해 조선문단 내부에서 갈등이 일어나기도 하였다. 자신의 文才를 과시하고자 한 조선문인들의

적극적인 소개 활동은 詩文 流出 과정에서 明과의 외교적인 충돌이 일어날 것을 염려한 조선 정부의 교류 제한 방침과 충돌하면서 문제가 발생하였다. 본고에서는 李廷龜가 북경에서 자신의 詩集을 편찬한 일로 발생한 조선 문단 내부의 갈등을 한 예로 살피어 당시 문화교류가 순조롭게 이루어진 것만은 아닌 상황을 확인하였다.

다음으로는 이상의 교류활동의 결과, 17세기 초반 조선 문단에서 조선 한시를 재평가 하고, 조선 한시선집과 시화집 편찬 작업을 통해 조선 역대 한시를 정리하고자 하는 움직임이 나타났던 사례를 살피었다. 이를 통해 중국 문단과의 교류가 궁극적으로는 조선 한시의 재발견에 이르게 되었다는 결론을 이끌었다. 그리고 이는 더 나아가 조선 한시에 대한 자부심을 갖게 된 계기로 작용하였고, 이로써 조선문단의 개성을 추구하게 되면서 17세기 후반 ‘朝鮮風’이라고 일컬어지는 조선의 독자적인 문화가 발현될 수 있는 기반을 세울 수 있었음을 추론하였다.

이상에서 살핀 바, 본고는 한중 문학 교류, 명문학의 수용, 조선 한문학의 재평가로 이어지는 과정을 추적하여, 명과의 문학교류가 궁극적으로 조선문학의 재발견에 이르렀음을 밝히고자 하였다. 이는 일견 개별 사건으로 보이는 문학 활동들이 서로 유기적으로 연결되어 작용하고 있음을 규명하고자 한 것으로, 외래 문명의 수용과 조선의 독자적인 문학 전통이 어떤 방식으로 맞물려, 서로 영향을 주고받으며 이후 문단의 새로운 흐름을 도출해 내었는지를 검증한 것이다. 이는 다시 17세기 후반 이후 조선문단에서 일어난 조선 한시의 독자성 추구의 움직임의 기반에, 이전 시대의 명문학 수용, 조선한시의 재발견이 밀접하게 연관되어 있음을 밝힘으로써, 기존의 연구에 새로운 관점을 제시하고자 한 것이라 볼 수 있다.